

県土幹線軸道路整備工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
緊急地方道路整備工事(3,3,2臨港線)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

金沢市
金石本町遺跡

2009

石川県教育委員会
(財) 石川県埋蔵文化財センター

金沢市
かな いわ ほん まち
金石本町遺跡

2009

石川県教育委員会
(財) 石川県埋蔵文化財センター



遺跡遠景（航空写真、南東から）



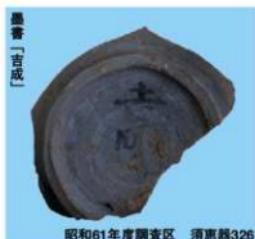
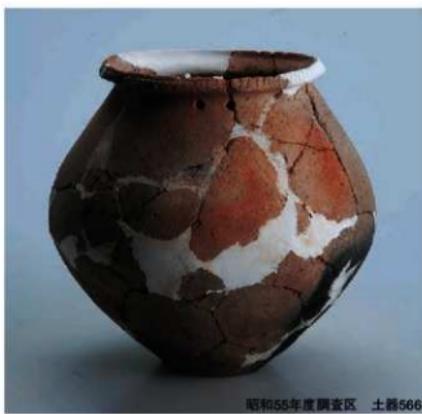
昭和55年度調査区（南から）

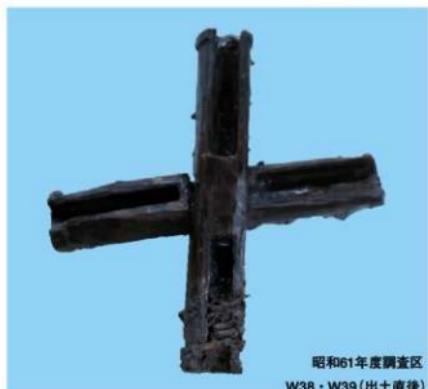


昭和61年度調査区（Ⅱ区、南東から）



昭和63年度調査区（北から）





例　言

- 1 本編は金石本町遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 遺跡の所在地は石川県金沢市金石東地内、金石本町地内である。
- 3 調査原因是県土幹線軸道路整備工事であり、同事業を所管する石川県土木部都市計画課が、石川県教育委員会に発掘調査を依頼したものである。
- 4 発掘調査は石川県教育委員会が昭和55(1980)年度から平成20(2008)年度にかけて実施した。業務内容は現地調査、出土品整理、報告書刊行である。
- 5 調査に係る費用は石川県土木部都市計画課が負担した。
- 6 現地調査は昭和55・61(1986)・63(1988)年度に石川県立埋蔵文化財センターが依頼を受けて実施した。期間・面積・担当者は下記のとおりである。

年　度	昭和55(1980)	昭和61(1986)	昭和63(1988)
期　間	昭和55年 7月10日～11月12日	昭和61年 9月1日～12月23日	昭和63年 10月20日～11月22日
面　積	1500m ²	2000m ²	630m ²
担当者	浅田耕治（主事） 中島俊一（主査）	田嶋明人（調査研究専門員） 中島俊一（主査）	西野秀和（主査） 岡本恭一（主事）

- 7 出土品整理は平成5(1993)・6(1994)年度に実施し、石川県教育委員会が社団法人石川県埋蔵文化財保存協会に委託した。
- 8 報告書の作成・刊行は平成19(2007)・20(2008)年度に実施し、石川県教育委員会が財団法人石川県埋蔵文化財センターに委託した。執筆分担は下記のとおりである。編集は安 英樹（調査部専門員、職名は平成20年度）が行った。
 - 第1章・第3章 安 英樹
 - 第2章・第5章 西野秀和（企画部専門員）
 - 第4章 大西 顕（調査部主任主査）
 - 挿図作成・写真図版作成 田嶋明人（参考）、藤田邦雄（調査部グループリーダー）
岩瀬由美（調査部係主査）
- 9 調査には下記の機関、個人の協力を得た。
石川県土木部都市計画課、石川県県央土木総合事務所（旧金沢土木事務所）、金沢市教育委員会、金沢市埋蔵文化財センター、金沢市文化財保護課、金沢市都市計画課、楠 正勝、小西昌志、出越茂和、向井裕知、山田昌久（個人名は五十音順、敬称略）
- 10 調査に関する記録と出土品は石川県埋蔵文化財センターで保管している。
- 11 発掘調査内容については、すでに複数の文献で紹介されているが、本書が最終報告であり、内容が異なる部分は本書が正しいものとする。
- 12 本編についての凡例は下記のとおりである。
 - (1) 方位は第5章のみ磁北、その他は座標北である。(2) 水平基準は海拔高であり、T. P.（東京湾平均海面標高）による。(3) 遺構平面図・断面図の縮尺は1/30・1/60を基本とした。(4) 遺物実測図の縮尺は1/3を基本とした。(5) 挿図番号・表番号・遺構番号・遺物番号は章ごとに振っている。(6) 遺物番号は土製（1～）、石製（S 1～）、金属製（M 1～）、木製（W 1～）と素材別に振っており、挿図と写真で対応する。(7) 参考文献は章末に付けた。

目 次

第1章 経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 現地調査	1
第3節 出土品整理・報告書作成	2
第2章 位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	5
第3章 昭和55年度調査	8
第1節 調査の概要	8
第2節 層序と微地形	8
第3節 遺構	15
第4節 遺物	32
第5節 小結	98
第4章 昭和61年度調査	102
第1節 調査の概要	102
第2節 遺構	102
第3節 遺物	113
第4節 小結	146
第5章 昭和63年度調査	
第1節 調査の概要	148
第2節 遺構	151
第3節 遺物	159
第4節 小結	175
写真図版	
写真図版1～35 昭和55年度調査	
写真図版36～52 昭和61年度調査	
写真図版53～60 昭和63年度調査	

挿図目次

第1章			
第1図 金石本町遺跡発掘調査区位置(S=1/2,500)	2	第32図 弥生・古墳時代の土器実測図12 (S=1/3)	46
第2章		第33図 弥生・古墳時代の土器実測図13 (S=1/3)	47
第1図 金石本町遺跡の位置	3	第34図 弥生・古墳時代の土器実測図14 (S=1/3)	48
第2図 周辺の遺跡(S=1/25,000)	4	第35図 弥生・古墳時代の土器実測図15 (S=1/3)	49
第3章		第36図 弥生・古墳時代の土器実測図16 (S=1/3)	50
第1図 調査区位置図(S=1/1,000)	9	第37図 弥生・古墳時代の土器実測図17 (S=1/3)	51
第2図 調査区全体図(S=1/300)	10	第38図 弥生・古墳時代の土器実測図18 (S=1/3)	52
第3図 調査区土層図1 (S=1/60)	11	第39図 弥生・古墳時代の土器実測図19 (S=1/3)	53
第4図 調査区土層図2 (S=1/60)	12	第40図 弥生・古墳時代の土器実測図20 (S=1/3)	54
第5図 調査区土層図3 (S=1/60)	13	第41図 弥生・古墳時代の土器実測図21 (S=1/3)	55
第6図 断面案内図(S=1/500)	13	第42図 弥生・古墳時代の土器実測図22 (S=1/3)	56
第7図 調査区土層図4 (S=1/60)	14	第43図 弥生・古墳時代の土器実測図23 (S=1/3)	57
第8図 1・3号溝実測図(S=1/30・1/60)	19	第44図 弥生・古墳時代の土器実測図24 (S=1/3)	58
第9図 溝・土坑実測図1 (S=1/30)	20	第45図 弥生・古墳時代の土器実測図25 (S=1/3)	59
第10図 溝・土坑実測図2 (S=1/30・1/60)	21	第46図 弥生・古墳時代の土器実測図26 (S=1/3)	60
第11図 溝・土坑実測図3 (S=1/30)	22	第47図 弥生・古墳時代の土器実測図27 (S=1/3)	61
第12図 溝・土坑実測図4 (S=1/30・1/60)	23	第48図 弥生・古墳時代の土器実測図28 (S=1/3)	62
第13図 溝・土坑実測図5 (S=1/30)	24	第49図 弥生・古墳時代の土器実測図29 (S=1/3)	63
第14図 溝・土坑実測図6 (S=1/30)	25	第50図 弥生・古墳時代の土器実測図30 (S=1/3)	64
第15図 溝・土坑実測図7 (S=1/30)	26	第51図 弥生・古墳時代の土器実測図31 (S=1/3)	65
第16図 土坑・布掘建物実測図(S=1/30・1/60)	27	第52図 弥生・古墳時代の土器実測図32 (S=1/3)	66
第17図 掘立柱建物実測図(S=1/60)	28	第53図 弥生・古墳時代の土器実測図33 (S=1/3)	67
第18図 1号井戸実測図(S=1/30)	29	第54図 弥生・古墳時代の土器実測図34 (S=1/3)	68
第19図 2・3号井戸実測図(S=1/30)	30	第55図 弥生・古墳時代の土器実測図35 (S=1/3)	69
第20図 土器の分類と表現(S=1/5)	32	第56図 弥生・古墳時代の土器実測図36 (S=1/3)	70
第21図 弥生・古墳時代の土器実測図1 (S=1/3)	35	第57図 弥生・古墳時代の土器実測図37 (S=1/3)	71
第22図 弥生・古墳時代の土器実測図2 (S=1/3)	36	第58図 弥生・古墳時代の土器実測図38 (S=1/3)	72
第23図 弥生・古墳時代の土器実測図3 (S=1/3)	37	第59図 古代以降の土器・陶磁器実測図 (S=1/3)	73
第24図 弥生・古墳時代の土器実測図4 (S=1/3)	38	第60図 木製品実測図1 (S=1/8)	90
第25図 弥生・古墳時代の土器実測図5 (S=1/3)	39	第61図 木製品実測図2 (S=1/8)	91
第26図 弥生・古墳時代の土器実測図6 (S=1/3)	40	第62図 木製品実測図3 (S=1/8)	92
第27図 弥生・古墳時代の土器実測図7 (S=1/3)	41	第63図 木製品実測図4 (S=1/6・1/8)	93
第28図 弥生・古墳時代の土器実測図8 (S=1/3)	42	第64図 石製品・金属製品実測図1 (S=1/3)	94
第29図 弥生・古墳時代の土器実測図9 (S=1/3)	43	第65図 石製品・金属製品実測図2 (S=1/3)	95
第30図 弥生・古墳時代の土器実測図10 (S=1/3)	44	第66図 石製品・金属製品実測図3 (S=1/3)	96
第31図 弥生・古墳時代の土器実測図11 (S=1/3)	45	第67図 石製品・金属製品実測図4 (S=1/1)	97
		第68図 弥生・古墳時代集落の主要遺構配置 (S=1/500)	99

第69図	金石本町遺跡・寺中B遺跡(S=1/5,000)	第23図	木製品実測図2(S=1/3) ······	129
	····· 100	第24図	木製品実測図3(S=1/3) ······	130
第4章		第25図	木製品実測図4(S=1/3・1/6) ······	131
第1図	調査区位置図(S=1/1,000) ······	第26図	木製品実測図5(S=1/3) ······	132
第2図	金石本町遺跡 南半部全体図(S=1/1,000) ······	第27図	木製品実測図6(S=1/3) ······	133
第3図	II区全体図(S=1/250) ······	第28図	木製品実測図7(S=1/3) ······	134
第4図	II区・III区大溝はか土層断面図(S=1/100) ······	第29図	木製品実測図8(S=1/3) ······	135
第5図	1号井戸・ピット48・1号掘立柱建物(S=1/60)	第30図	木製品実測図9(S=1/3) ······	136
	····· 108	第31図	諏訪湖の小型四ツ手網 ······	147
第6図	2・3号掘立柱建物、1～4号土坑(S=1/60)	第32図	諏訪湖の大型四ツ手網部品 ······	147
	····· 110	第5章		
第7図	III区全体図(S=1/250) ······	第1図	グリッド配置図(S=1/200) ······	150
第8図	III区 上層・下層遺構分類図(S=1/250) ······	第2図	遺構配置図(S=1/200) ······	150
第9図	土器・陶磁器・土製品実測図1(S=1/3) ······	第3図	第1・2号掘立柱建物、横列2実測図(S=1/60) ······	152
第10図	土器・陶磁器・土製品実測図2(S=1/3) ······	第4図	第3号掘立柱建物、横列1実測図(S=1/60) ······	153
第11図	土器・陶磁器・土製品実測図3(S=1/3) ······	第5図	第4・5号掘立柱建物実測図(S=1/60) ······	154
第12図	土器・陶磁器・土製品実測図4(S=1/3) ······	第6図	横列1実測図(S=1/60) ······	155
第13図	土器・陶磁器・土製品実測図5(S=1/3) ······	第7図	掘立柱建物等の規模計測(S=1/100) ······	158
第14図	土器・陶磁器・土製品実測図6(S=1/3) ······	第8図	遺構内出土遺物(1)(1/3) ······	160
第15図	土器・陶磁器・土製品実測図7(S=1/3) ······	第9図	遺構内出土遺物(2)(1/3) ······	161
第16図	土器・陶磁器・土製品実測図8(S=1/3) ······	第10図	遺構内出土遺物(3)(1/3) ······	163
第17図	土器・陶磁器・土製品実測図9(S=1/3) ······	第11図	包含層出土遺物(1)(1/3) ······	164
第18図	土器・陶磁器・土製品実測図10(S=1/3) ······	第12図	包含層出土遺物(2)(1/3) ······	165
第19図	土器・陶磁器・土製品実測図11(S=1/3) ······	第13図	包含層出土遺物(3)(1/3) ······	167
第20図	土器・陶磁器・土製品実測図12(S=1/3) ······	第14図	出土土器(1)(1/6) ······	173
第21図	土器・陶磁器・石製品実測図(S=1/3) ······	第15図	出土土器(2)(1/6) ······	174
第22図	木製品実測図1(S=1/3) ······			

表 目 次

第1章				
第1表	金石本町遺跡の発掘調査一覧表 ······	2	第5表 石製品観察表 ······	97
第2章			第6表 金属製品観察表 ······	97
第1表	周辺の遺跡地名表 ······	5	第7表 寺中遺跡・寺中B遺跡の発掘調査一覧表	100
第3章				
第1表	小穴一覧表 ······	31	第4章	
第2表	弥生・古墳時代の土器観察表 ······	74	第1表 土器・陶磁器観察表 ······	137
第3表	古代以降の土器・陶磁器観察表 ······	88	第2表 石製品・木製品観察表 ······	145
第4表	木製品観察表 ······	93	第5章	
			第1表 金石本町土器観察表 ······	170

第1章 経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

本書で報告する金石本町遺跡の発掘調査は県土幹線軸道路整備工事を原因とする。遺跡の周辺は金沢市街地の武藏ヶ辻と金石港を直線的に結ぶ金石往還が東西方向に走り、それに併行する位置に木曳川が流れ、遺跡の東南端あたりに大野瀬神社が鎮座するという田園地帯であった。しかし、昭和後半代からは金沢市の都市的発展から市街地化が進み、慢性化している国道8号線の渋滞を緩和するバイパス機能として県道松任宇ノ気線の改良工事が計画され、新設された金沢港へもつながる幅員25mの規模となる都市計画道路、通称臨港線の建設が策定された。

臨港線に關係する埋蔵文化財の分布調査については、昭和53年（1978）に県金沢土木事務所から県教育委員会文化財保護課に依頼があった。文化財保護課は同年11月に金沢市金石東1丁目から無量寺町地内の分布調査を実施し、古墳時代から中世までの遺跡が確認された結果と、事業実施前の発掘調査が必要である旨を回答している。昭和60（1985）年11月には金石本町地内、昭和63（1988）年5月には金石東1丁目から桂町地内の分布調査を県立埋蔵文化財センターが実施し、それぞれ古墳・平安時代・弥生時代の遺跡を確認している。以上の分布調査により、金石本町遺跡の発掘調査範囲が確定した。

第2節 現地調査

昭和55年（1980）には県金沢土木事務所から発掘調査依頼があり、金石往還と交差する北側の1,500m²の範囲で県立埋蔵文化財センターが調査を実施した。調査期間は7月10日から11月12日までである。弥生中期～古墳前期の土坑、溝、井戸などと共に多量の遺物が発見された。なお、当時は金石往還から北側は「金石東遺跡」で、その南側は「金石本町遺跡」として捉えられていたが、南側地区での調査が進展していくなかで、前者も金石本町遺跡に取り込まれる形で認識されるようになった。

昭和61年（1986）には県金沢土木事務所から発掘調査依頼があり、金石往還の南側地区、木曳川に臨む2,000m²の範囲で県立埋蔵文化財センターが調査を実施した。調査期間は9月1日から12月23日までである。古代に所産した掘立柱建物跡、竪状遺構、河道跡などが検出された。河道跡からは古代の木製品が多数出土し、本遺跡の性格を考える上で重要な手掛かりが得られた。

昭和63年（1988）には県金沢土木事務所から発掘調査依頼があり、南側地区630m²の範囲で県立埋蔵文化財センターが調査を実施した。調査地点は昭和61年度調査区の北側にあたる。調査期間は10月20日から11月22日までである。なお、この後、緊急地方道路整備工事（3.3.2臨港線）を原因とする北側地区130m²の発掘調査に移行している。

なお、金沢市教育委員会が後に年次を整理しており、昭和55年度調査は2次、昭和61年度調査は3次、昭和63年度調査（緊急地方道路整備工事に係る調査を含む）は4次調査に相当するものである（第1図・第1表）。

第3節 出土品整理・報告書作成

出土品整理は平成5（1993）・6（1994）年度に実施し、県教育委員会が社団法人石川県埋蔵文化財保存協会に委託した。内容は出土品の記名・分類・接合・実測・トレース、遺構図トレースである。

報告書の作成・刊行は平成19（2007）・20（2008）年度に実施し、県教育委員会が財団法人石川県埋蔵文化財センターに委託した。内容は原稿執筆、挿図・図版作成、編集、刊行である。



第1図 金石本町遺跡の発掘調査区位置 (S=1/2,500)

第1表 金石本町遺跡の発掘調査一覧表 (アミカケは本書報告)

次数	調査年度	調査面積	文献
1	昭和54(1979)	50m ²	金沢市教育委員会1980『昭和54年度 金沢市埋蔵文化財調査年報』
2	昭和55(1980)	1,500m ²	本書
3	昭和61(1986)	2,000m ²	本書
4	昭和63(1988)	630m ²	本書
		130m ²	本書(別編)
5	平成5(1993)	1,000m ²	金沢市教育委員会1996『金石本町遺跡Ⅰ』
6	平成6(1994)	1,100m ²	金沢市教育委員会1996『金石本町遺跡Ⅱ』
7	平成6(1994)	2,000m ²	金沢市教育委員会1996『金石本町遺跡Ⅲ』
8	平成7(1995)	1,300m ²	石川県立埋蔵文化財センター1997『金石本町遺跡』
9	平成8(1996)	100m ²	金沢市教育委員会1999『扇台遺跡・金石本町遺跡・矢木ジワリ遺跡・夕日寺遺跡』

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

金石本町遺跡は石川県金沢市の北西平野部、金石本町・金石東地内に所在する弥生時代末・古墳時代前葉と奈良・平安時代を盛期とする複合遺跡で、北側で弥生時代が、南側では古代が主体となる分布状況で把握されている。

石川県は日本列島のほぼ中央に位置し、日本海に突出する能登半島とその基部に相当する白山連峰（標高2,702m）に特徴付けられる。北東方向に傾いて、南北に狭長な県域は、南北長約99km、東西幅約100kmを測るもの、富山県と日本海に挟まれた口能登地域では幅わずかに約8kmにすぎないという地勢が特色である。また、加賀地域の海岸砂丘地形とは一変して岩礁からなる海岸が展開する能登半島は、能登島を浮かべる七尾湾を抱える事から、海岸線の延長が600kmを超えるという複雑な地形も特色として挙げられる。口能登地域では宝達山（標高637m）が最も高く、奥能登地域では宝立山・鉢伏山（469m・544m）と比較的低い山で、標高約2~300mの丘陵が波打つように連なる地形を形成する。奥能登地域の平地は丘陵の間を小河川が開拓した複雑・小さな谷平地に限られ、河口付近の沖積地とそれにつながる海が奥能登の歴史と文化を規定する大きな要素と見られる。

加賀は岐阜県と福井県との境界に立つ白山を頂点として三角形を呈する地形の中にあり、北方向に富山県・岐阜県との境となる白山連峰の大門山（1,571m）、医王山などが聳え立ち、砺波丘陵を越えて口能登の宝達山へと連なる。南側は福井県との境となる加越山系が東西方向に延びている。これらの山系から流れ出る中小河川は、おおむね日本海をめざして東から西に流れ、海岸線は日本海の荒波にもまれた砂によって日本有数の海岸砂丘を発達させる。砂丘の背後に低湿地帯と潟が連なり、北には河北潟、南には今江潟、木場潟、柴山潟の加賀三湖が作られる。北加賀には県下最長の河川である手取川（全長77km）が作り上げた扇径約15kmの手取扇状地が広がり、県下有数の沃野をなす。

金沢市は石川県の南側に位置する城下町で、東の富山県小矢部市、南砺市との境界には、白山山系とその延長である砺波丘陵が連なり、山地が市域の半ばを占める。西部は手取扇状地の扇端部と沖積平野が広がり、北側は河北郡津幡町、内灘町が河北潟を頂点とする形で接し、南側は地形的には大きな変化を持たずに石川郡野々市町、白山市と境界をなし、山地では白山市河内、吉野に接し、市域全体としては東・南側が高く北西方向に低くなる地形である。市域を流れる河川は、県境の白山山系の稜線を分水嶺として南東から北西に走り、河北潟にそそぐ浅野川・金腐川・森下川は北部を貫流し、潟の放水路である大野川となって日本海に至る。南部は安原川・十人川・伏見川などが沖積平野を潤して日本海に注ぐ。

金沢市は市街地を並行して流れる犀川と浅野川に挟まれた丘陵の小立野台の西端に位置する金沢城を中心として形成さ



第1図 金石本町遺跡の位置



第2図 周辺の遺跡 (1/25,000)

(国土地理院発行の2万5千分の1地形図(金石)を使用)

れ、犀川を越えた南の寺町台と北の卯辰山の間に、城下町の面影を曲りくねった狭い路地と武家屋敷の土塀の連なり、細かく配置された用水路などで窺うことができる。

本遺跡は金石往還の終点近くに立地している。金石往還は藩政期から市場街として栄えていた武蔵ヶ辻を起点とし、金石港（宮腰湊）までの直線道路である。本遺跡は犀川に合流する木曳川の河岸段丘上を占地しているもので、遺構検出面での標高は約1.5mであった。犀川の流路は上流域で河岸段丘を形成して流れ、市街地では近世以降の河川改修により直線的に変更されているようだが、下流域では洪水ごとに流路が移動し蛇行した痕跡が推測できる。本遺跡は犀川右岸の氾濫原を望む位置にある段丘上に立地している。段丘裾部に水上運送に利用された木曳川が西に流れ、犀川に合流する。

第1表 周辺の遺跡地名表

番号	遺跡番号	遺跡名	所在地	種別	時代	出土品
1	1282	戸木C遺跡	金沢市戸木町・御供田町	集落跡	縄文～中世	縄文土器・弥生土器・須恵器・土師器
2	1281	無量寺金沢港遺跡	金沢市無量寺	散布地	縄文～古墳	縄文土器・弥生土器・土師器
3	1277	金石北遺跡	金沢市金石北	散布地	不詳	土師器
4	1280	無量寺遺跡	金沢市無量寺	散布地	古墳・中世	土師器・石臼・越前焼・漆器椀
5	1279	無量寺B遺跡	金沢市無量寺	集落跡	古墳	銅鏡・双頭龍文鏡
6	1278	桂遺跡	金沢市桂町	散布地	弥生・古墳・中世	青磁・砥石・珠洲焼・土師器
7	1276	戸木オモテ遺跡	金沢市戸木町	散布地	奈良・平安	土師器・須恵器
8	1275	戸木D遺跡	金沢市戸木町	散布地	奈良・平安	
9	1266	戸田・無量寺遺跡	金沢市戸田・無量寺町	集落跡	弥生・奈良・平安	石罐・弥生土器・須恵器
10	1267	戸田ナベタ遺跡	金沢市戸田	集落跡	奈良・平安	斎串・土師器・須恵器
11	1265	戸田C遺跡	金沢市戸田	散布地	弥生～平安	石鐵・扁平片刃石斧・弥生土器
12	1263	戸田B遺跡	金沢市戸田	散布地	弥生～平安	石鐵・弥生土器・土師器
13	1261	戸田遺跡	金沢市戸田	集落跡	縄文晩期～平安	石鐵・凹石・縄文土器・土師器
14	1262	戸田大徳川遺跡	金沢市戸田	散布地	奈良～室町	下駄・中世陶器・須恵器
15	1260	戸田・寺中遺跡	金沢市戸田西・寺中町	散布地	古墳～中世	土師器・須恵器
16	1259	寺中B遺跡	金沢市寺中町	集落跡	縄文晩期～平安	打製石斧・石罐・弥生土器
17	1258	寺中遺跡	金沢市寺中町	散布地	弥生中期・後期	石鐵・砥石・勾玉・管玉未製品
18	1256	金石本町遺跡	金沢市金石本町	集落跡	弥生～平安	墨書き土器・須恵器・土師器
19	1257	寺中御台場遺跡	金沢市寺中町	堡跡	江戸	
20	1274	戸木B遺跡	金沢市戸木町	散布地	弥生・平安	砥石・炭化米・土師器・須恵器
21	1264	戸田御台場遺跡	金沢市戸田	堡跡	江戸	
22	1255	普正寺高畠遺跡	金沢市普正寺町	集落跡	古墳後期・中世～近世	鉄鎌・漆器・土製支脚・須恵器
23	1254	普正寺遺跡	金沢市普正寺町	墓地	難倉・室町	常滑焼・五輪塔・越前焼・珠洲焼
24	1253	普正寺番屋移丘遺跡	金沢市普正寺町	散布地	縄文・奈良・平安	石斧・石劍・須恵器
25	1272	藤江C遺跡	金沢市藤江	集落跡	弥生～中世	土師器・須恵器・木器
26	1271	松村寺の前遺跡	金沢市松村	墳墓	室町	五輪塔
27	1269	松村西の城遺跡	金沢市松村	散布地	古墳・平安	土師器・須恵器
28	1270	松村平田遺跡	金沢市松村	散布地	弥生中期	弥生土器・石斧・石鐵
29	1268	観音堂遺跡	金沢市観音堂町	散布地	不詳	
30	1102	藤江B遺跡	金沢市藤江	集落跡	弥生～平安	打製石斧・弥生土器・木器・須恵器
31	1096	松村A遺跡	金沢市松村	散布地	縄文・古墳・中世	縄文土器・打製石斧・磨製石斧・桃核子
32	1094	佐奇森遺跡	金沢市佐奇森町	集落跡	弥生・平安～近世	弥生土器・土師器・須恵器
33	1038	専光寺海岸遺跡	金沢市専光寺町	散布地	奈良・平安	土師器
34	1097	松村B遺跡	金沢市松村	散布地	縄文・弥生・江戸	縄文土器・石斧・石鐵・弥生土器

第2節 歴史的環境

遺跡周辺は市内においても遺跡の集中する地域で、近年の発掘調査成果から縄文時代後・晩期から中世にかけての各時代の遺跡が間断なく形成され続けてきた考古学的成果が明らかとなってきた。金沢市郊外は昭和40年代の高度成長期を迎えるまでは、一面の水田地帯が広がる牧歌的景観のなかにあったが、北陸高速自動車道の建設を契機として金沢バイパス建設、金沢港建設などの大型事業が

次々と進められ、併せて都市計画道路建設、区画整理、学校整備などが実施され、新たな遺跡の発見が相次ぐ状況が常態化していた。

縄文時代の遺跡は市街地を流れる浅野川、犀川の上・中流域の河岸段丘に立地する遺跡に止まらず、手取扇状地と複合する下流域の沖積平野でも次々に遺跡の発見・発掘が報じられている。丘陵内には早期の天池遺跡、前期の中戸遺跡、中期の笠舞遺跡などが挙げられる。沖積平野部では中期の北塚遺跡、後・晩期の新保本町チカモリ遺跡などが古くから知られ、開発に係る調査から中屋サワ遺跡・藤江C遺跡などで成果が上げられている。

弥生時代での周辺地形は犀川が形成した自然堤防とその背後の低地帯が広がる地勢で、水田耕作に好適な地域として開発が進捗したと想定されている。前期から中期にかけては、遠賀川系土器を出土した戸水C遺跡が嘴矢で、柴山出村式の出土した二ツ屋町遺跡や冬季には日本海の波濤によって遺物包含層が洗われる下安原海岸遺跡、土坑墓群を検出した寺中遺跡などがある。弥生中期後半から遺跡数が増加し、後期末葉段階には爆發的とも言える状況で増大し、古墳時代前期段階からでは一転して激減する様相を示す。畿内第Ⅲ様式期に併行する土器は、本遺跡の東方の畠田遺跡や同方の西念・南新保遺跡などで出土しているが、居住痕跡などの検出は今後の課題である。中期末葉の標識遺跡でもある戸水B遺跡は、本遺跡の東方約2kmに位置している。昭和50年に行われた第1次調査で凹線文系土器がまとまる形で出土し、比較的短期間での消長が推測できる遺跡と捉えられた。その後の道路建設・区画整理事業などで周溝を伴う建物跡や土坑・溝等が検出されているが、それぞれが小規模な調査である事から遺跡構造を把握するのには資料不足で、短期間での遺跡廃絶は後続する後期段階では見られない在り方である。後期での遺跡は枚挙の暇がないほどに増大し、数多くの発掘事例が挙げられる。東方に隣接する寺中B遺跡では平地式建物・掘立柱建物や溝などが確認され、東方に隣接する畠田遺跡では掘立柱建物・井戸などが検出され、良好な土器資料に加えて鍬・鋤・エブリ・弓・弧文板などの木製品やト骨が出土している。また、東北方の近岡ナカシマ遺跡では掘立柱建物・方形周溝墓などが検出され、鍬をはじめとする木製品の出土がある。後期の中核的集落は、本遺跡から東方約4kmに立地する南新保遺跡群が想定され、大規模な溝から良好な木製品が出土している。

古墳時代初めの遺跡は、東方に隣接する畠田・寺中遺跡が挙げられる。古府クルビ式期の方形周溝墓、土坑墓が検出され、周辺に集落域の所在が想定されている。また、北東方の戸水C遺跡は古代を盛期とする大遺跡であるが、墳丘が削平され周溝のみとなった前方後方墳3基を含む30基近い方墳を主体とする古墳群が検出され、東方に位置する藤江C遺跡の平成2年度からの調査でも方墳・前方後方墳が発見された。近年の面的調査からでも北塚古墳群・野々市町御経塚古墳群などの発見と調査が相次ぎ、近世以降の開田によって削平された古墳群が沖積地で数多く展開していた事が発掘により確認され、今後も増加していく事が予測できる。

古代の遺跡は本遺跡をはじめとして、弥生後期に劣らない量の調査例が報告されている。本遺跡の南東約2.5kmの藤江B遺跡では、4間×6間で両庇付きの掘立柱建物跡が検出され、「石田庄」「石田」などの墨書き土器が出土している。さらに、藤江C遺跡では7棟以上の掘立柱建物跡が確認され、戸水C遺跡は平安時代前葉を盛期とする大遺跡で、縁軸・灰軸・獸脚付円面鏡・漆紙文書などの特殊遺物や墨書き土器多数が出土している。墨書きには「津」と書かれたものがあり、大型掘立柱建物跡の他に多数の掘立柱建物跡や大型井戸跡などの検出から、郡津あるいは国津級の湊に関連する官衙的遺跡との想定が提起されている。さらに、本遺跡についても第5～7次調査を担当した金沢市教育委員会の小西昌志により、大野川に依存する戸水C遺跡・戸水大西遺跡の集団とは区別される犀川流域に挺る官衙級の地域集団が関わる流通基地との性格付けが提起されている。区画整理および海側幹線道路

建設による畠田・寺中遺跡群の発掘調査で、広大な地域に古代を中心とする遺構が展開しているのが確認された。金沢北西地区が県下でも最も考古学的成果が集積されている地域であり、通史的に平野部の開発が記述される地域として注目される。

中世では、本遺跡の西方、犀川河口近くの砂丘に立地する普正寺遺跡が古くに調査され著名である。1965年に石川考古学研究会によって調査され、五輪塔・宝塔群が検出された。調査報告書では出土遺物の報告、検討だけでなく、石造美術や文献史学からの地域史への研究が行われ、学際的研究の調査成果と高く評価されている。

第3章 昭和55年度調査

第1節 調査の概要

1. 調査の方法

調査区は金石往還の北東側に取り付く幅約25m・延長約60mの道路予定地であり、金石往還沿いは交差点隅切り部分を含めるため、幅約40mに広がっている。調査はグリッド法による全面発掘調査である。グリッドは道路の主軸方向を基準とした任意座標の5m格子であり、道路の主軸方向は座標北から46° 東へ振る（第1図）。北西から南東に向かってA～H、北東から南西に向かって1～12の番号を振って「A-1」のように組み合わせて杭名とし、東の杭名をグリッド名としている。ただし、この設定では調査区の西端および北端の列にはグリッド名を付けることができなくなっている。

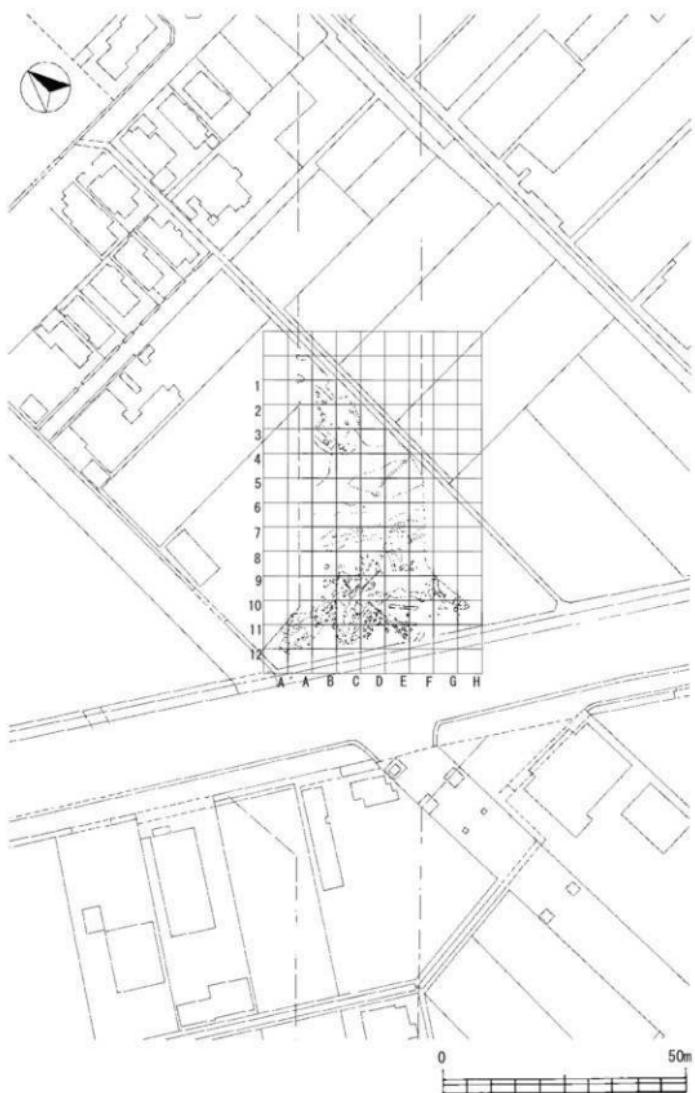
2. 遺構と遺物

調査では溝約50条、土坑約50基、小穴多数、掘立柱建物3棟、井戸3基等の遺構が検出され、土器・陶磁器、土製品、木製品、石製品、金属製品等の遺物が出土した。遺構は調査区中央部に大型の流路（1～3号溝）が位置し、その南西側では遺構密度が高く、北東側では低い。遺物は弥生・古墳時代の土器が圧倒的に多く、主に流路及びその南西側から出土している。また、管玉の成品・未成品や、主に井戸跡から出土した大型木製品などは、少量ではあるが注目すべき遺物である。なお、現地調査当時の遺跡名は金石東遺跡であり、記録資料各種の遺跡名は大半が金石東遺跡となっている。

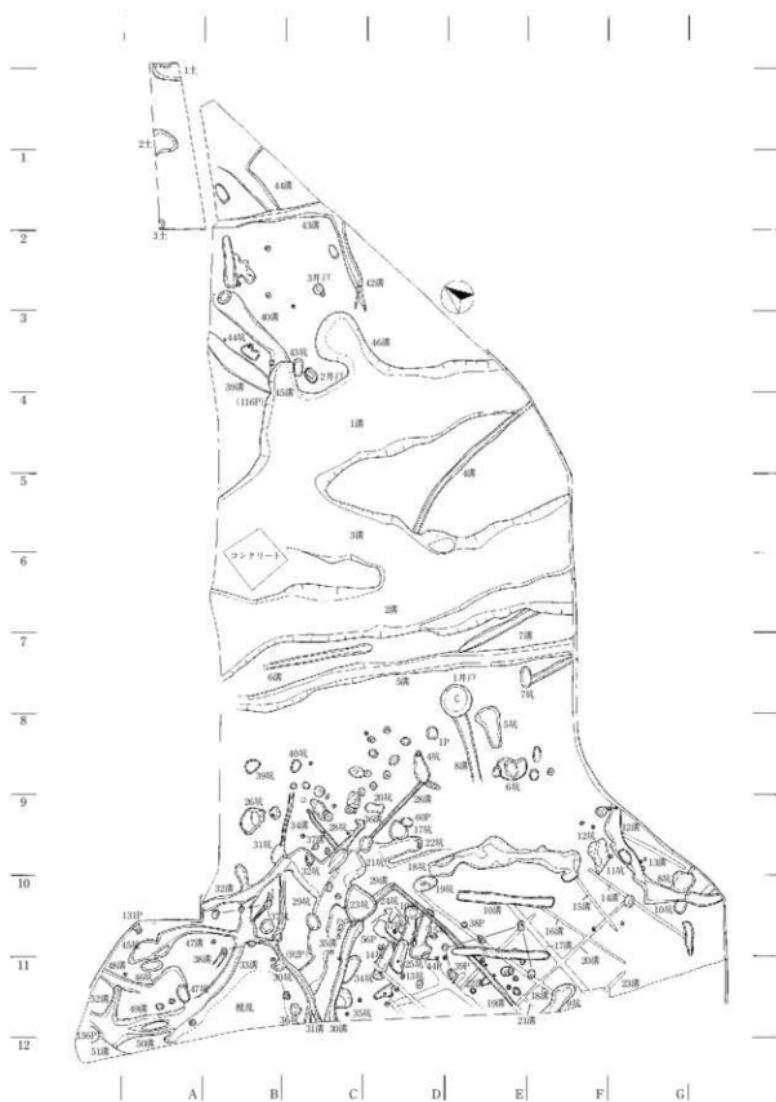
第2節 層序と微地形

現地調査ではグリッドに沿った方向の土層断面図が比較的多く実測されており（第6図）、堆積層序をある程度把握することができた（第3図～第7図）。基本層序は①盛土・耕作土、②遺物包含層、③地山と理解できる。標高は地表面で2m前後、遺構検出面で1.1～1.2mを測る。地表面からの深さは0.8～0.9mということになる。堆積土の大半は①が占め、②は薄いうえに断続する。土質は②が黒褐色粘質土か暗灰色粘質土（第4図⑥層1、第7図⑪層2など）、③は記録がなく不明である。

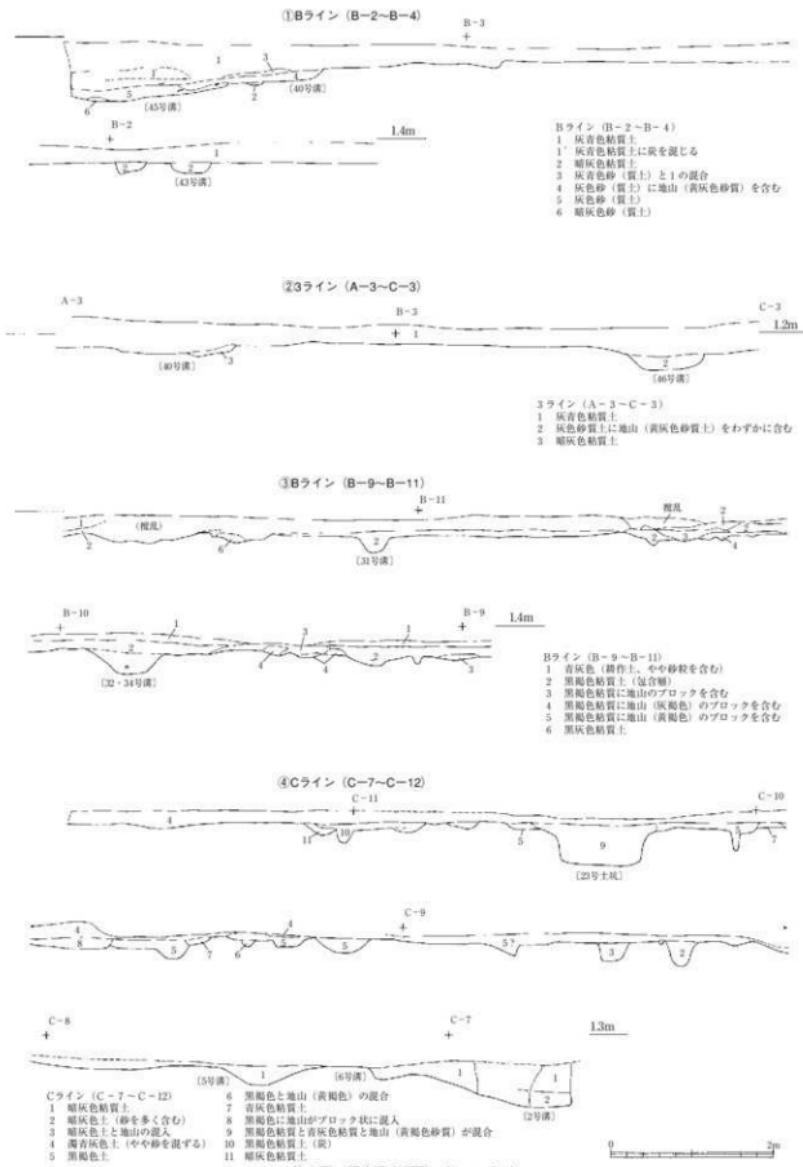
遺構検出面での標高は1.1～1.2mで前後しており、調査区内は概ね平坦といえる。流路の縁周辺でやや下降する以外は明確な起伏を確認できなかった。きわめて小規模で浅い窪みを数箇所確認したが、軟弱地盤でもあるため、微地形としては積極的には評価できない。



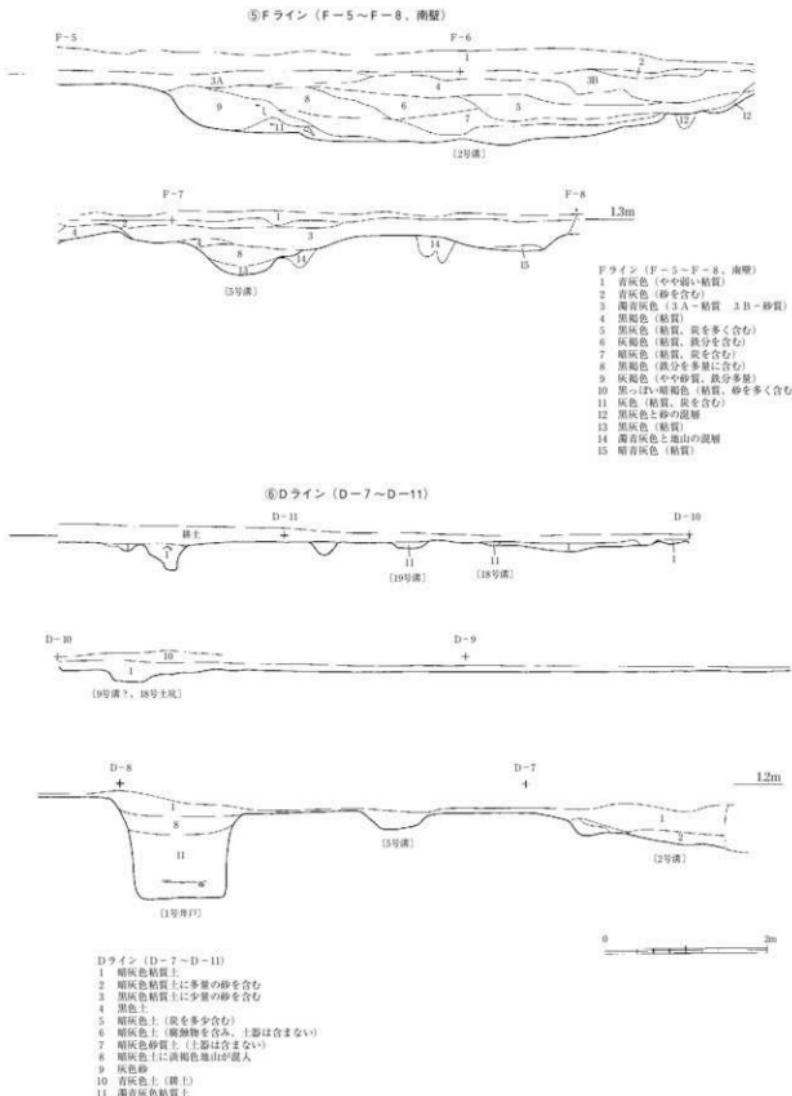
第1図 調査区位置図 ($S=1/1,000$)



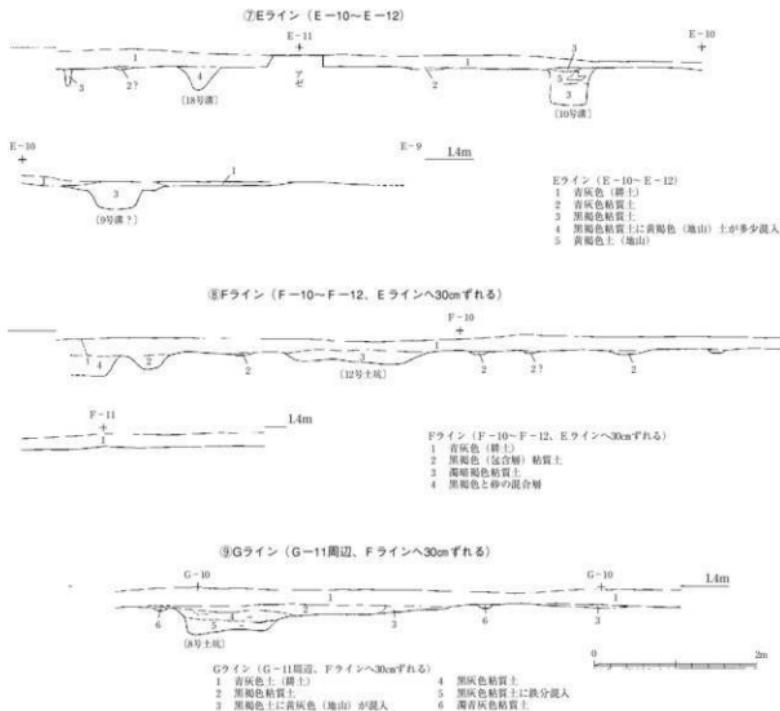
第2図 調査区全体図 ($S=1/300$)



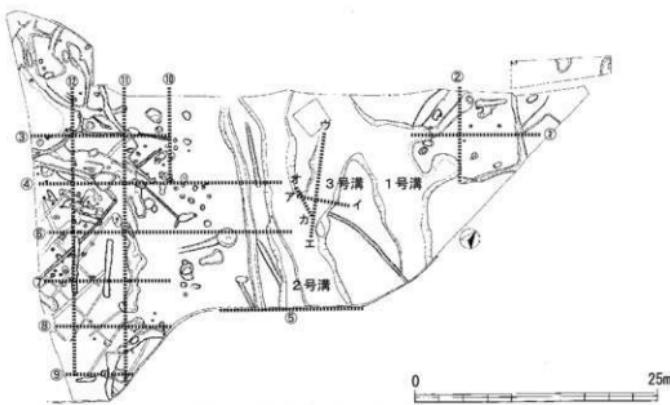
第3図 調査区土層図1 (S=1/60)

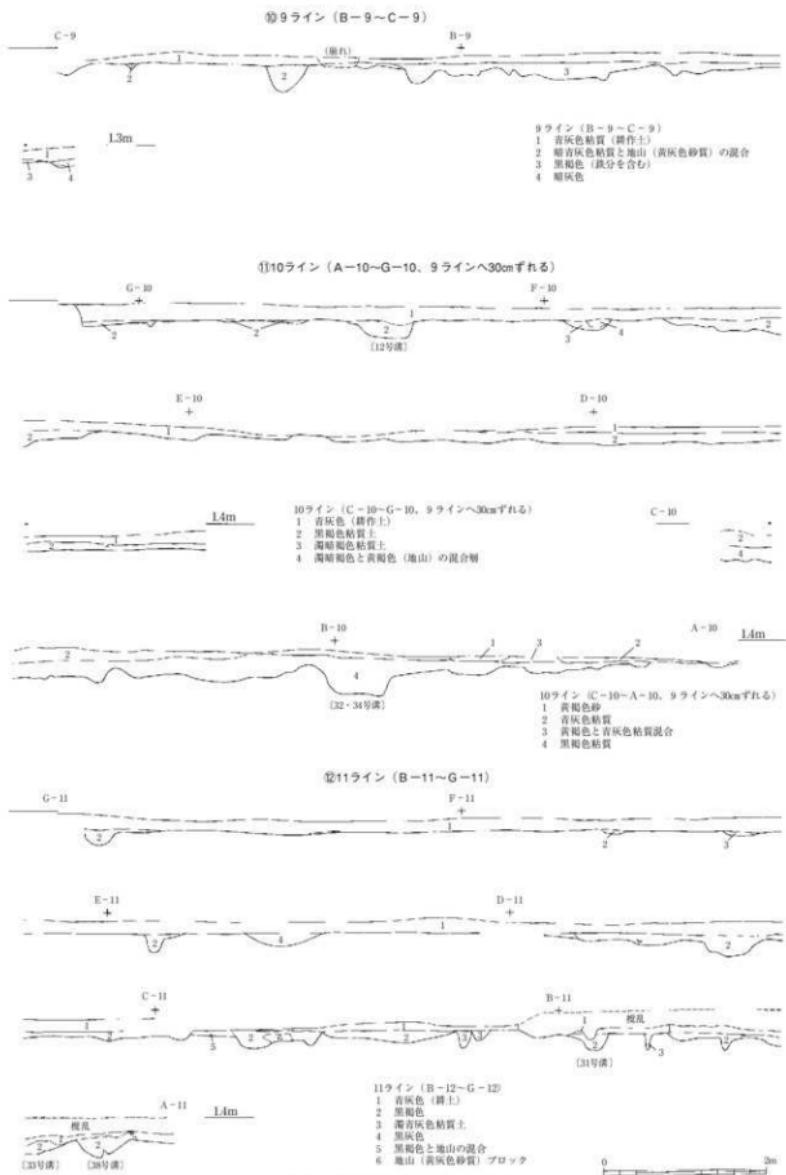


第4図 調査区土層図2 (S=1/60)



第5図 調査区土層図3 (S=1/60)





第3節 遺構

1. 溝

はじめに 溝は近接した位置にあり、規模・形状が似たものをまとめて解説する。10号溝については布掘建物の一部であり、別項でとりあげる。11・24・41号溝等は位置不明である。

1～3・45・46号溝（第8図） 調査区中央部に位置する規模の大きい溝群である。1号溝は概ね東西方向に伸び、幅4～5m、深さ0.7～0.8mを測る。溝底は高低差がほとんどない。2号溝は1号溝の南西側で概ね平行しており、幅3～4m、深さ0.4～0.6mを測る。溝底はやや西側に下降する。3号溝は1号溝と2号溝の間で概ね南北方向に伸び、両端は1号溝と2号溝に重なる。幅3～4m、深さ0.7～0.9mを測る。溝底では南端の2号溝との境で、溝に直交する方向に打ち込まれた板列が検出されている。堰の可能性があり、堰状遺構と表現しておく。1号溝と3号溝の堆積土には砂層と腐食土層が観察され、流水、滯水、退水を繰り返した流路と推定される。2号溝については土層の記録がないが、規模・形状から同様に推定しておく。45・46号溝は1号溝北岸の張り出した部分である。45号溝は幅1.6m、深さ0.1m、46号溝は幅3m、深さ0.7mを測る。各溝の前後関係は不明である。遺物は1～3号溝から大量に出土しており、弥生・古墳時代の土器が大半を占める。取り上げは上層、下層に区分されているが、土層との対応関係は不明である。

4～8号溝 調査区中央部に位置する幅の狭い溝群である。4号溝は1～3号溝の間に位置し、概ね東西方向で、幅0.4～0.5m、深さ0.1mを測る。5～7号溝は2号溝の北岸に位置し、方向は2号溝とほぼ並行する。5号溝は幅1m、深さ0.1～0.3m、6号溝と7号溝は幅0.5m、深さ0.1mを測る。8号溝は北東～南西方向で、幅0.5～0.8m、深さ0.05～0.1mを測る。1号井戸と重複するが前後関係は不明である。遺物は弥生・古墳時代の土器の他、石製品が出土している。

9号溝（第12図） 弥生・古墳時代の土器、石製品など一定量の遺物が出土しているが、遺構を特定できない。ここでは遺物の出土グリッドをもとにして、調査区南部に位置する南東～北西方向の不整形な溝をその可能性が高い遺構として示しておく。延長9m、深さ0.1～0.2mを測る。遺物の取り上げは上層が区別されている。

12号溝（第10図） 調査区南東端に位置する不整形な弧状の溝である。深さ0.1～0.2mを測る。10・11号土坑と重複するが前後関係は不明である。遺物は弥生・古墳時代の土器が出土している。

14～18・20～23・25・26号溝 調査区南端～南東端に位置する直線的で幅の狭い溝群である。幅は概ね0.2～0.4m、深さ0.05～0.1mを測る。14～18・21・25・26号溝は南北方向、20・22・23号溝は東西方向で交差している。遺物は弥生・古墳時代の土器、古代の土師器・須恵器が出土している。出土遺物や、暗青灰色と記録されている覆土から考えると、他遺構より後出する可能性が高い。

19・29・30号溝 19号溝は調査区南端に位置する南北方向の溝、29・30号溝は東西方向の溝で、L字状につながる。幅0.5～0.9m、深さ0.1～0.2mを測る。29・30号溝は23号土坑により分断されているが一連の遺構と考えたい。重複する土坑や布掘建物との前後関係は不明であるが、実測図の表現に従えば34・35号土坑は先行し、布掘建物や23号土坑は後出する。遺物は弥生・古墳時代の土器の他、石製品が出土している。

28・36～38号溝 調査区南部に位置する直線的で幅の狭い溝群である。幅は概ね0.2～0.5m、深さ0.05～0.1mを測る。37号溝は南北方向、28・36・38号溝は東西方向であり、36・37号溝は交差している。重複する土坑や溝との前後関係は不明であるが、実測図の表現に従えば36号溝→37号溝、28号溝

→ 4・21号土坑となる。図化された出土遺物はない。

31・34・47号溝 31・47号溝は調査区南西端に位置する弧状の溝が33号溝・38号土坑で分断されたものと考えたい。31号溝は調査区際で分岐しており、33号溝・38号土坑近くでも34号溝が分岐しているような配置となる。幅0.3~0.4m、深さ0.1~0.2mを測る。重複する土坑や溝との前後関係は不明である。遺物は弥生・古墳時代の土器の他、石製品が出土している。

32・35号溝 調査区南西部に位置する断片的な溝である。32号溝は東西方向で、やや弧状をなす。幅0.5m、深さ0.2mを測る。35号溝は土坑・溝の重複が激しいため、形状をうまく把握できない。幅1~1.6m、深さ0.1~0.2mを測る。遺物は弥生・古墳時代の土器の他、石製品が出土している。

33・49・50号溝 調査区南西端に位置する弧状の溝であり、49・50号溝は二叉に分岐した部分を指す。幅0.4~0.7m、深さ0.05~0.1mを測る。重複する土坑や溝との前後関係は不明であるが、実測図の表現に従えば51号溝は後出する。遺物は弥生・古墳時代の土器が出土している。

39・40・42~44号溝 調査区北部に位置する溝群である。39・40号溝は南北方向で並行し、幅1m、深さ0.05mを測る。42号溝は北東~南西方向、43号溝は北西~南東方向で交差する。幅0.4~0.9m、深さ0.05~0.1mを測る。44号溝は南北方向で北端は不明確になる。幅1m、深さ0.05mを測る。重複する遺構との前後関係は不明であるが、実測図の表現に従えば44号溝→43号溝、39・40号溝→45号溝となる。図化された出土遺物はない。

48・51・52号溝 調査区南西端に位置する断片的な溝である。48号溝はやや弧状をなし、幅0.7~0.9m、深さ0.05~0.1mを測る。51号溝は片岸のみの検出で、深さ0.05~0.1mを測る。52号溝は幅0.5m、深さ0.05mを測る。重複する遺構との前後関係は不明であるが、実測図の表現に従えば48号溝→52号溝、33・49・50号溝→51号溝となる。図化された出土遺物はない。

2. 土 坑

はじめに 土坑は近接した位置にあるものをまとめて解説する。全体的には不整形なプランで浅いものが多い。27・42号土坑等は位置不明である。

1~3号土坑（第9図） 調査区北端のA-1~A-2区に位置する。いずれも部分掘であるが、0.2m程度の深さを確認している。遺物は弥生・古墳時代の土器が出土している。

4~7号土坑（第9図・第10図） 1号井戸周辺の土坑群である。4号土坑はD-9区に位置し、長軸1.9m、短軸0.8m、深さ0.2mを測る。遺物は南端底から細長い木材が出土している。5号土坑は主にE-9に位置し、長軸2.6m、短軸1.5m、深さ0.15mを測る。6号土坑はE-9区に位置し、浅い竪み内の穴を指す。長軸1.2m、短軸0.9m、深さ0.15mを測る。7号土坑はE-8・F-8区境に位置し長軸1.4m、短軸0.7m、深さ0.5mを測る。南西端が深く、覆土は炭が多く含まれ、一部で層状をなす。5~7号土坑では弥生・古墳時代の土器が出土している。

8~12号土坑（第10図・第11図） 12号溝周辺の土坑群であるが、9号土坑のみ西へ5m以上離れる。8号土坑はG-11・H-11区境に位置し、長軸1.5m、短軸1.3m、深さ0.3mを測る。9号土坑はF-12区に位置し、短軸1m、深さ0.1mを部分掘した。10・11号土坑は12号溝内に位置するが、前後関係は不明である。10号土坑はG-11区に位置し、長軸1.5m、短軸1m、深さ0.2mを測る。11号土坑はG-10区に位置し、プランを把握しにくいが10号土坑とはほぼ同規模が予想され、深さ0.3mを測る。12号土坑は主にF-10区に位置し、長軸1.8m、短軸1m、深さ0.1mを測る。8~11号土坑では弥生・古墳時代の土器が出土している。

13~16・24・25号土坑（第12図） 調査区南部に密集する細長い土坑群である。グリッドではD-11~D-12区に位置する。16号土坑を除けば長方形に近いプランが多く、長辺2m前後、短辺0.7m前後、深さは0.1m前後を測る。13号土坑がやや深い。重複する遺構との前後関係は不明であるが、実測図の表現に従えば13号土坑→14号土坑→26号溝、13・16号溝→24号土坑、15・16号溝→19号溝となる。遺物は弥生・古墳時代の土器の他、石製品が出土している。

17~23号土坑（第12図・第13図） 調査区南部に位置する土坑群である。17・22号土坑はD-10区に位置し、重複している。17号土坑は円形に近いプランで径1.1~1.2m、深さ0.1mを測る。22号土坑は細長い長方形プランで、東端はテラス状をなすが、西端は不明確になる。短辺1m、深さ0.1mを測る。遺構の前後関係は不明であるが、実測図の表現に従えば17号土坑→P60であり、P60から古代の土師器が出土している様相と整合する。18号土坑はD-10・E-10区境の9号溝？内に位置する。長軸1.2m、短軸0.4m、深さ0.15~0.3mを測る。19号土坑はD-11区に位置する。長軸1.4m、短軸0.9m、深さ0.2mを測る。20号土坑はD-10区に位置する。ひょうたん状のプランで長軸1.1m、短軸0.4m、深さ0.1mを測る。21号土坑はC-10・D-10区境に位置し、長軸0.9m、短軸0.6m、深さ0.2mを測る。重複する遺構との前後関係は不明であるが、実測図の表現に従えば28号溝→21号土坑となる。23号土坑はC-11・D-11区境に位置する。比較的大型の土坑で長軸2.4m、短軸1.8m、深さ0.5mを測る。重複する遺構との前後関係は不明であるが、実測図の表現に従えば29・30号溝→23号土坑となる。遺物は22号土坑から弥生・古墳時代の土器が出土している。

26・28~41号土坑（第13図～第15図） 調査区南西部に位置する土坑群である。26号土坑はB-10区に位置し、長軸1.7m、短軸1.4m、深さ0.2mを測る。28号土坑はC-10区に位置し、長軸1.5m、短軸0.6m、深さ0.1mを測る。重複する遺構との前後関係は不明であるが、実測図の表現に従えば28号土坑→P72・73となる。29号土坑はC-10・C-11区境に位置する。遺構の重複が激しく、プランを把握できない。30号土坑はB-12区で31号溝と重複して位置する。前後関係は不明。深さは0.1~0.2mを測る。31号土坑はB-10区で32・34号溝と重複して位置する。前後関係は不明。32号土坑はC-10区で29号土坑内に位置し、長軸1.1m、短軸0.7m、深さ0.1mを測る。33号土坑はC-11区で35号溝と重複して位置する。前後関係は不明であるが、実測図の表現では35号溝→33号土坑となる。長軸1m、短軸0.9m、深さ0.3mを測る。34・35号土坑はC-12区で30号溝と重複して位置する。前後関係は不明であるが、実測図の表現では30号溝が後出する。深さは0.05~0.1mを測る。36号土坑はB-12区に位置し、長軸0.7m、短軸0.6m、深さ0.1mを測る。37号土坑はB-11区に位置する。円形プランに近く、径0.8m、深さ0.15mを測る。38号土坑はB-11区で31・33号溝と重複して位置する。前後関係は不明。長軸1.4m、短軸1.1m、深さ0.1mを測る。39号土坑はB-9区に位置し、長軸1m、短軸0.8m、深さ0.1mを測る。40号土坑はC-9区に位置し、長軸0.9m、短軸0.6m、深さ0.15mを測る。41号土坑はC-9区に位置し、長軸1m、短軸0.7m、深さ0.2mを測る。遺物は26・29・31・32・34・35・38・39号土坑から弥生・古墳時代の土器、31号土坑から石製品が出土している。

43・44号土坑（第15図） 調査区北部に位置する。43号土坑はC-4区で45号溝と重複して位置する。前後関係は不明である。長軸1m、短軸0.6m、深さ0.2mを測る。44号土坑はB-4区に位置し、長軸1.1m、短軸0.5m、深さ0.05mを測る。遺物は43号土坑から弥生・古墳時代の土器が出土している。

45~47号土坑（第15図・第16図） 調査区南西端に位置する土坑群である。45号土坑はA-11・A-12区境で47号溝と重複して位置する。前後関係は不明。長軸2.2m、短軸1.4m、深さ0.2mを測る。46号土坑はA-12区に位置し、長軸1.4m、短軸0.6m、深さ0.15mを測る。47号土坑はA-12区に

位置し、長軸1.2m、短軸0.7m、深さ0.15mを測る。遺物は弥生・古墳時代の土器が出土している。

3. 建物跡

はじめに現地調査の時点では建物跡と認識されていた遺構はなく、整理作業の過程で掘立柱建物を3棟復元している。ただし、検討から漏れた小穴や遺構が錯綜して復元が難しい地点が存在することから、棟数はもっと多くの可能性がある。また、近年の研究成果では、検出されている溝に堅穴建物ないし平地建物の周溝が含まれる可能性も指摘できる。この点については別項でふれたい。

1号掘立柱建物（第17図） 調査区南西端に位置し、グリッドはB-11区におさまる。1間（2.3m）×2間（3.5m）の側柱を認識したものであり、整理過程ではさらに北東へ伸びると想定したようであるが、弥生・古墳時代の時期であれば、この規模でも完結しうる。長軸方向はN-57°-Wを指す。図化された出土遺物はない。

2号掘立柱建物（第17図） 調査区南端に位置する。1間（1.65～2.9m）×2間（5m）の側柱を認識したものであるが、柱穴の間隔が揃わないことから問題が残る。むしろ9号溝？等に対応する堅穴建物ないし平地建物の柱穴となる可能性もある。長軸方向はN-61°-Wを指す。遺物は弥生・古墳時代の土器が出土している。

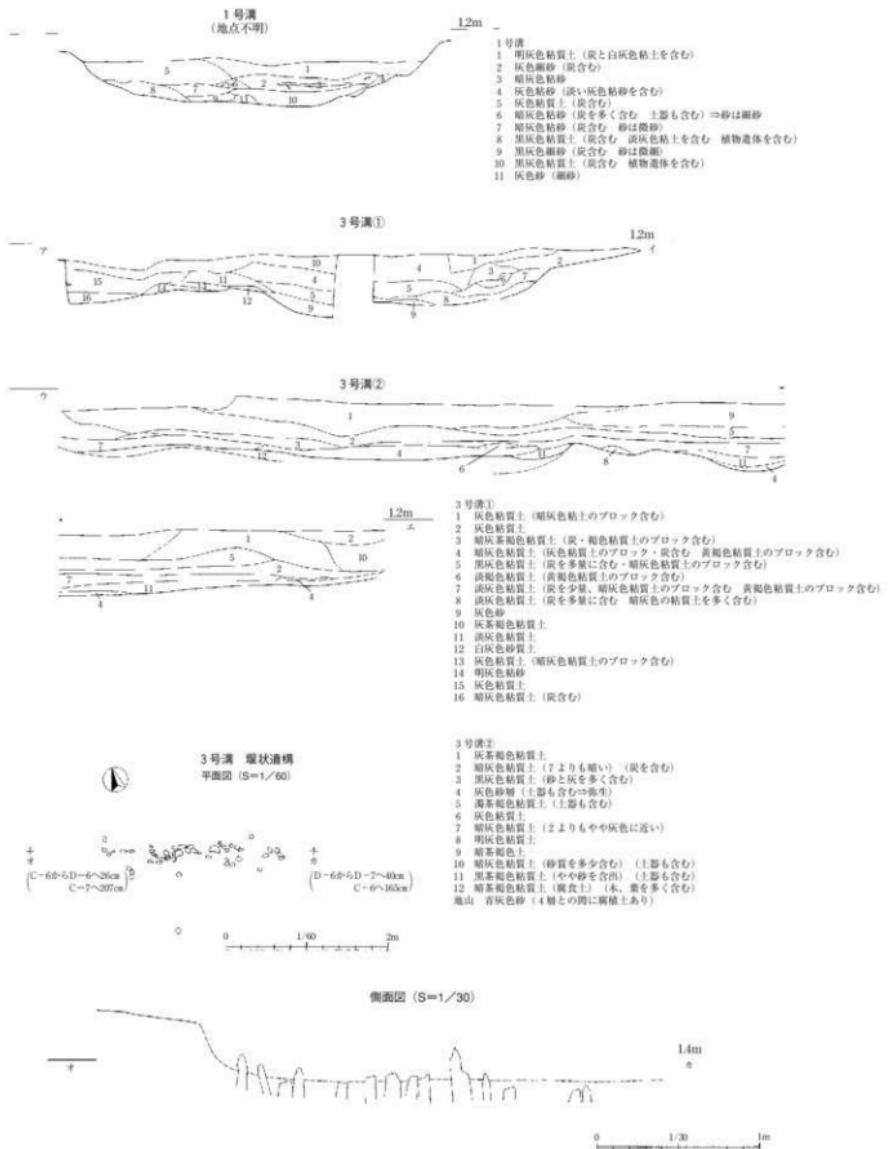
布掘建物（第16図） 調査区南端に位置する。布掘溝の一つは10号溝と認識していた遺構である。もう一方の布掘溝は上層に有機質土、下層に地山質土の堆積が確認でき（写真図版16）、底ではほぼ等間隔に木材が出土しており、礎板と推定される。布掘溝の規模は長さ6m、幅0.5m、深さ0.3～0.5mを測り、礎板の位置から1間（3.3m）×3間（5.4m）の側柱配置が復元できる。長軸方向はN-38°-Wを指す。遺物は弥生・古墳時代の土器が出土している。

4. 井戸

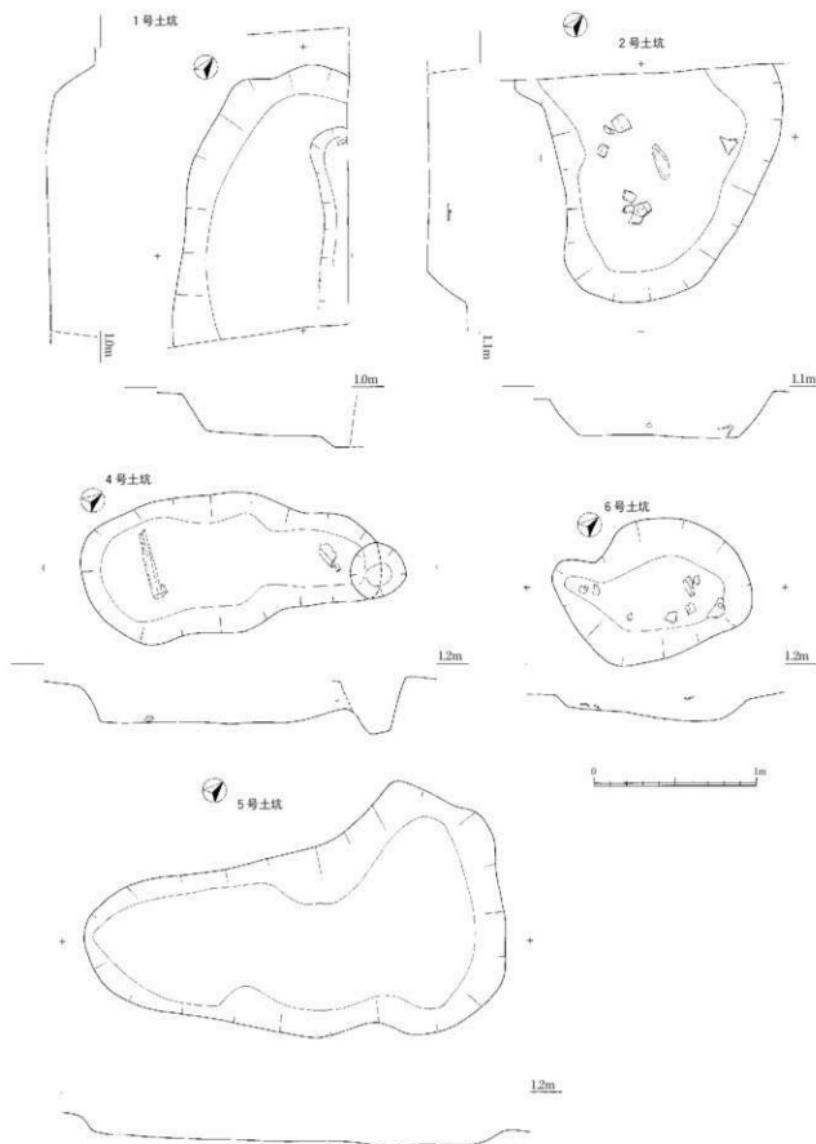
1号井戸（第18図） 主にE-8区に位置する。重複する8号溝との関係は不明であるが、実測図の表現では本遺構が後出する。掘方は円筒形で径1.2m、深さ1.1mを測り、底面には板と丸木が井桁状に敷かれて礎板となり、その上に桶形の木製容器が据えられて井戸側となっている。礎板の板は共通した質感と臍孔が見られることから、転用・分割材と推定できる。井戸側は縦に割れた木製容器が組み合わされて検出されている。木製容器も底板がないことから転用品であり、対をなす貫通した臍孔の存在から補修結合されていたものが転用されたことが伺える。遺物は弥生・古墳時代の土器が出土しており、取り上げは上層が区別されている。

2号井戸（第19図） C-4区に位置する。掘方は梢円筒形で長径0.9m、短径0.8m、深さ0.5mを測り、内部に桶形の木製容器が据えられて井戸側となっている。木製容器には底板がなく、転用品である。遺物は弥生・古墳時代の土器が出土している。

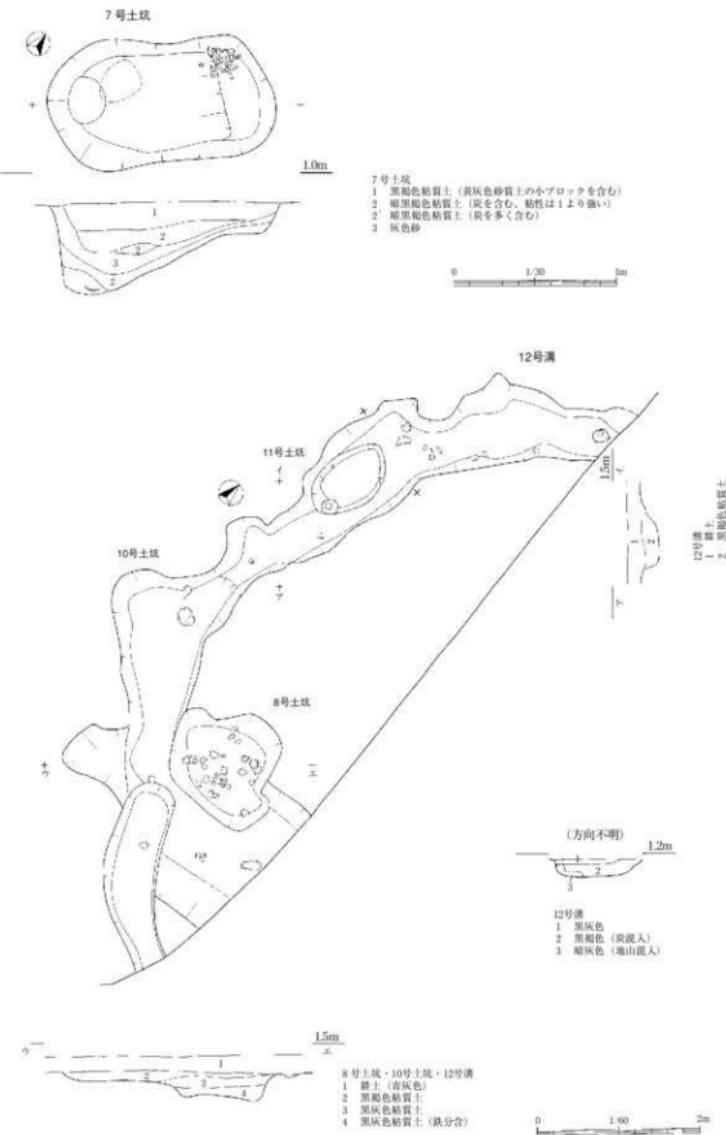
3号井戸（第19図） C-3区に位置する。重複する小穴との関係は不明であるが、実測図の表現では本遺構が先行する。掘方は円筒形で長径0.6m、深さ0.9mを測り、内部では2点の刎抜材が組み合わされて井戸側となっている。類例は大友西遺跡S E 16にあるが、それと比較すると、掘方はもっと深いかもしれない。遺物は弥生・古墳時代の土器が出土している。

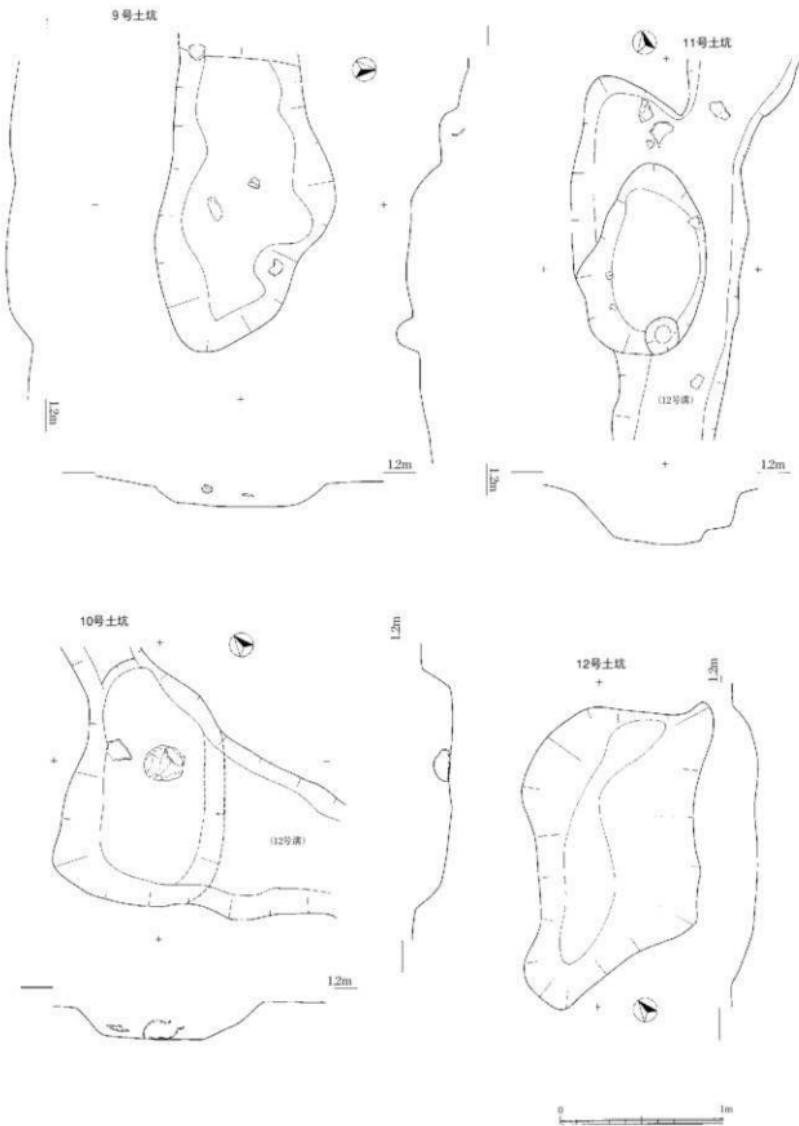


第8図 1・3号溝実測図 (S=1/30・1/60)

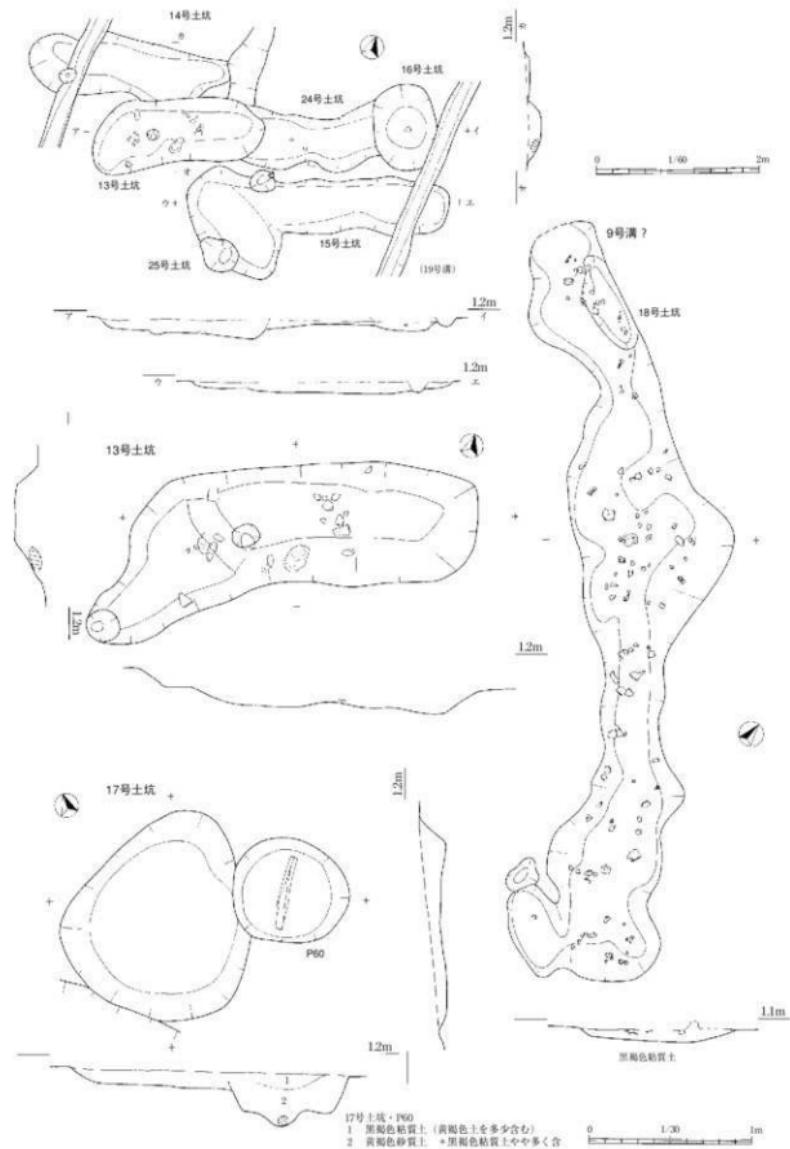


第9図 溝・土坑実測図1 ($S=1/30$)

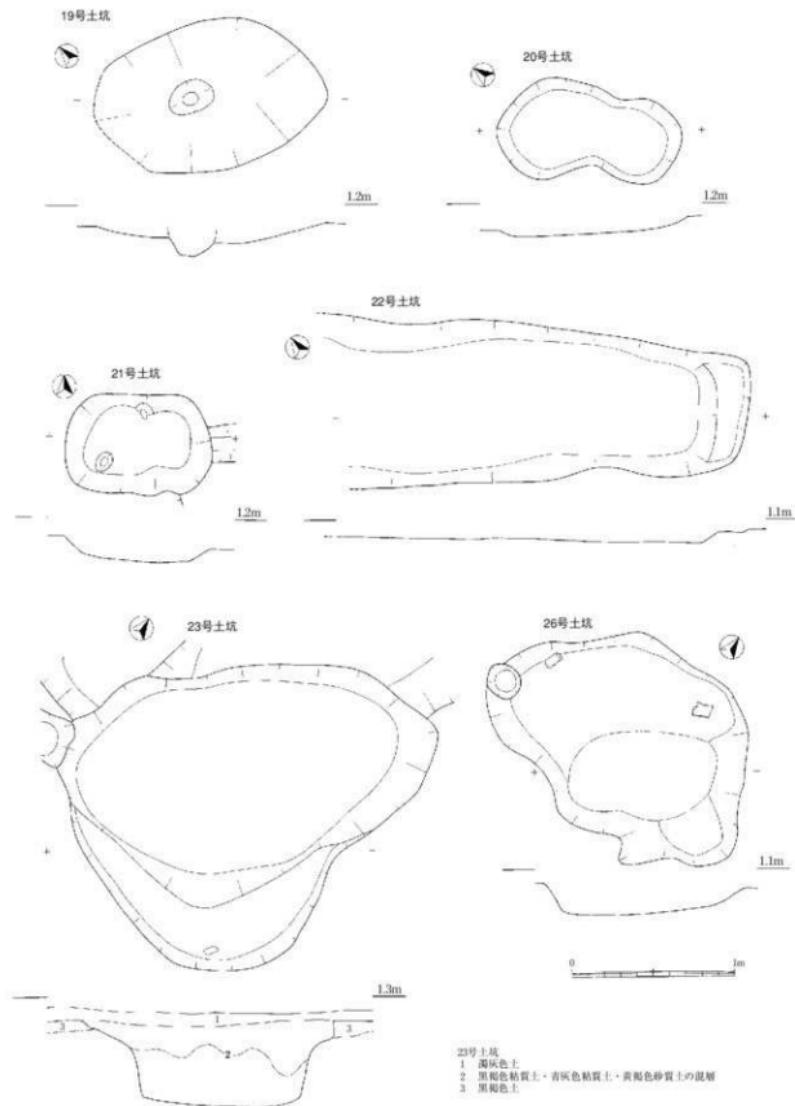
第10図 溝・土坑実測図2 ($S=1/30 \cdot 1/60$)



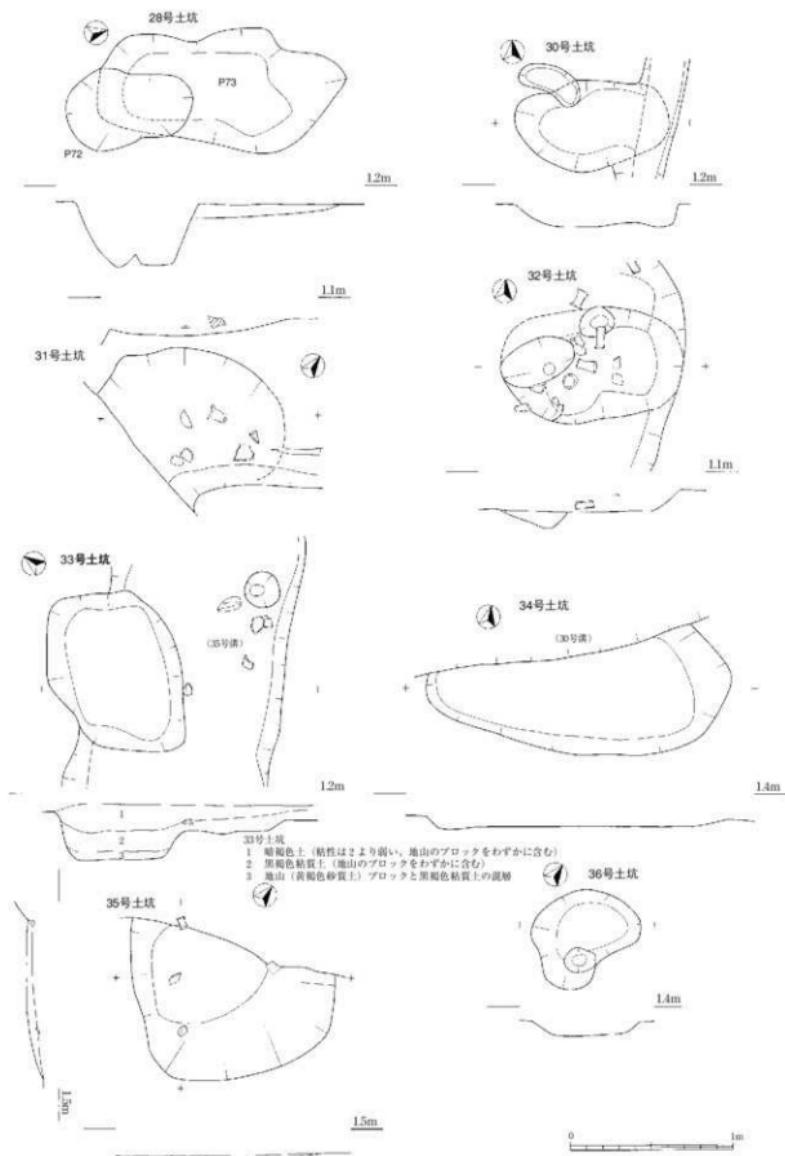
第11図 溝・土坑実測図3 ($S=1/30$)



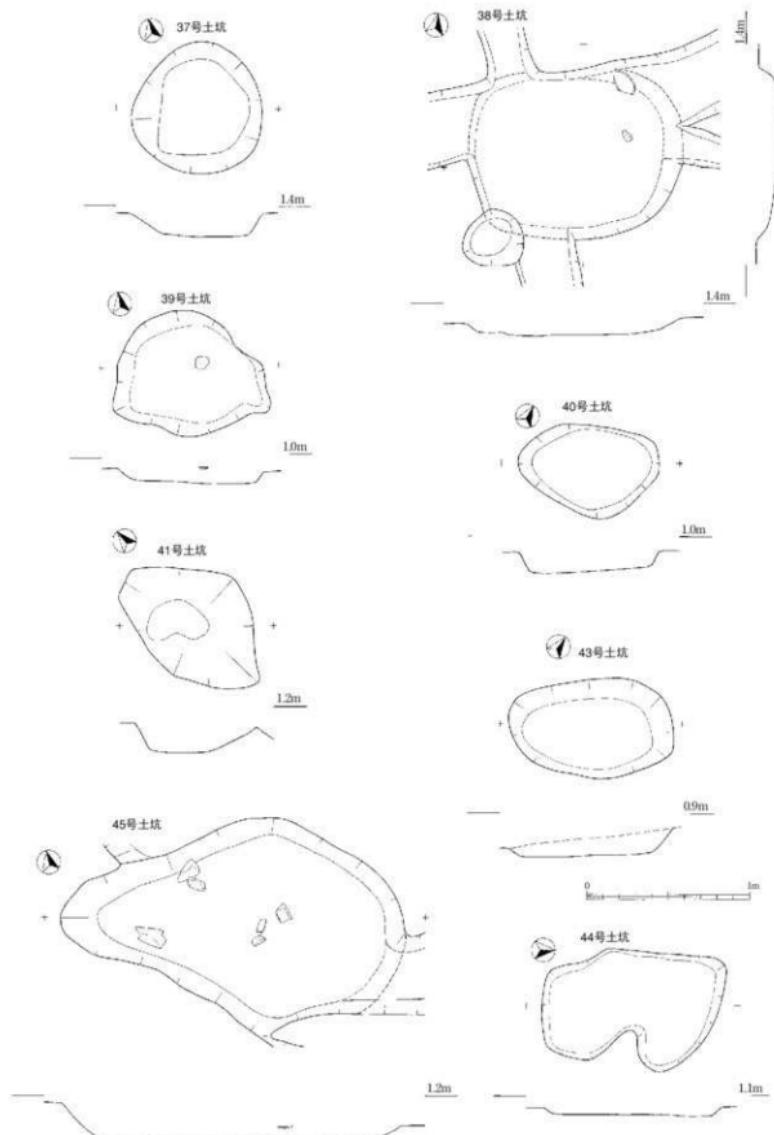
第12図 溝・土坑実測図4 (S=1/30・1/60)



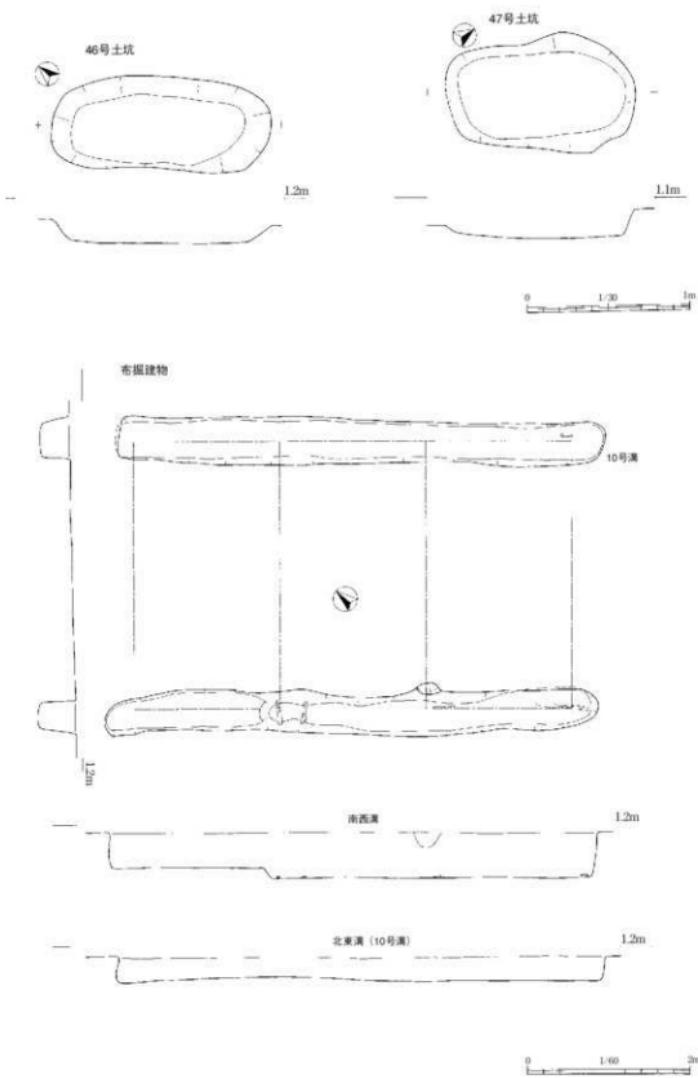
第13図 溝・土坑実測図5 (S=1/30)



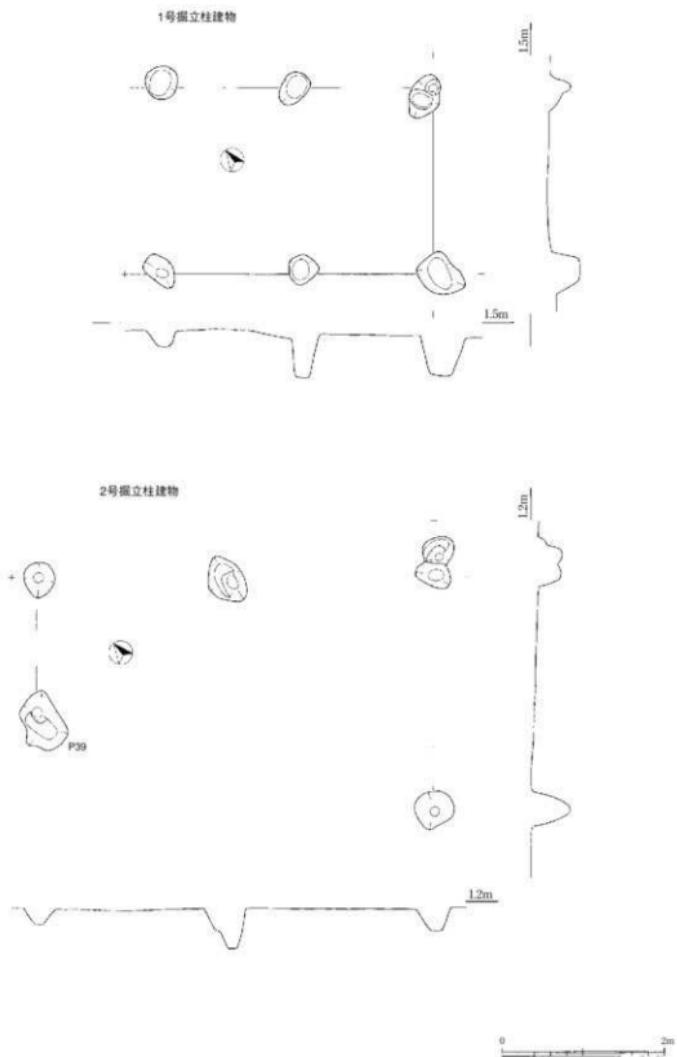
第14図 溝・土坑実測図6 (S=1/30)



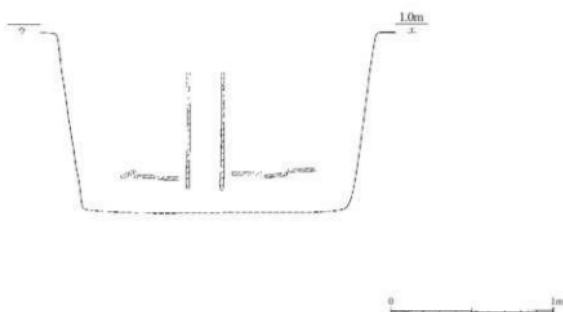
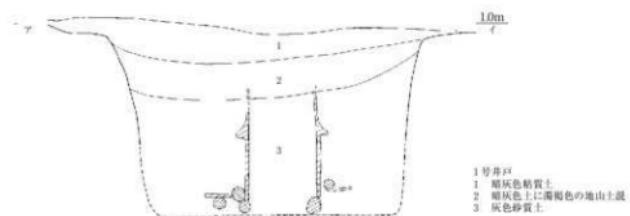
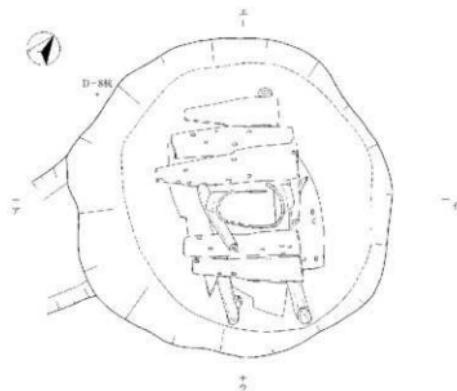
第15図 溝・土坑実測図7 (S=1/30)



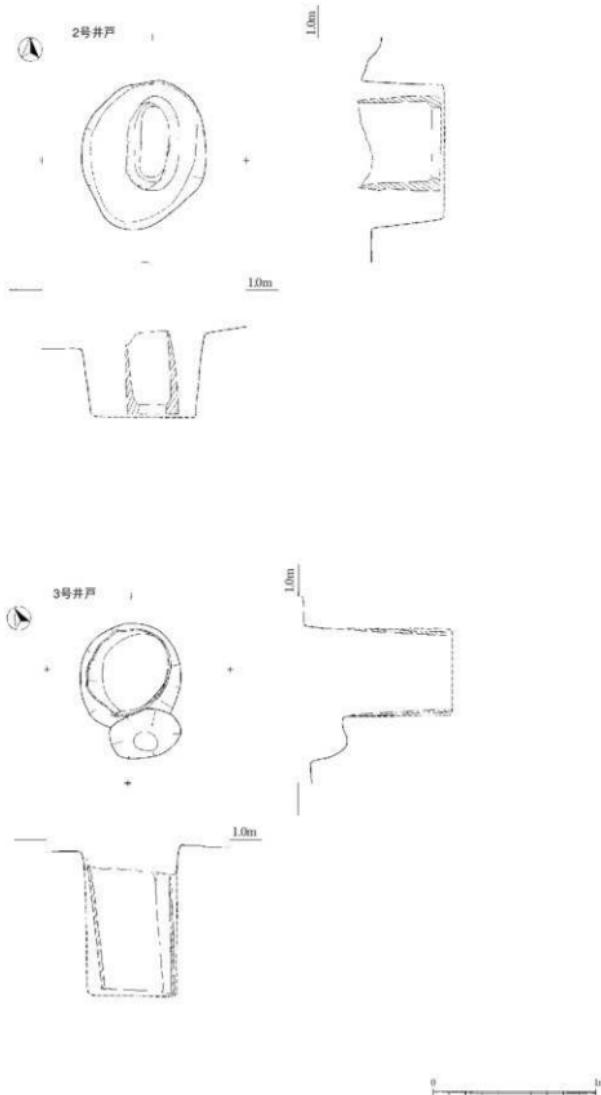
第16図 土坑・布掘建物実測図 ($S=1/30 \cdot 1/60$)



第17図 振立柱建物実測図 ($S=1/60$)



第18図 1号井戸実測図 (S=1/30)



第19図 2・3号井戸実測図 ($S=1/30$)

第1表 小穴一覧表

遺構名	位置	出土遺物・備考	遺構名	位置	出土遺物・備考	遺構名	位置	出土遺物・備考
P001	D-9	623~625 S20	P051	D-12		P101	B-11	
P002	D-9		P052	D-12		P102	B-11	
P003	D-9		P053	D-12		P103	B-12	
P004	D-9		P054	D-12		P104	B-11	
P005	D-9		P055	D-12		P105	C-12	
P006	C-9 D-9の塊		P056	D-11	628(付近)	P106	C-12	
P007	D-9		P057	D-11	S13(付近)	P107	C-12	
P008	D-9		P058	D-11		P108	C-12	
P009	C-9 D-9の塊		P059	D-9		P109	C-12	
P010	D-9		P060	D-10	708	P110	C-12	
P011	G-10		P061	D-11		P111	C-12	
P012	G-10		P062	E-9		P112	C-12	
P013	G-10		P063	E-12		P113	B-10	
P014	G-10		P064	C-9 F-9	黒巻	P114	C-9	
P015	G-10		P065	C-9 F-9	黒巻	P115	C-11	
P016	G-10		P066	C-9 C-10の塊 F-9	黒巻	P116	B-4 B-5の塊	631
P017	G-10		P067	B-10		P117	B-4	
P018	G-11		P068	C-10		P118	B-4	
P019	G-10		P069	C-10		P119	B-4	
P020	G-10		P070	C-9 C-10の塊		P120	B-3	
P021	F-11		P071	C-10		P121	B-3	
P022	G-11		P072	C-10		P122	C-3	
P023	F-12		P073	C-10		P123	B-3	
P024	F-11		P074	C-9 C-10の塊		P124	C-2	
P025	E-12		P075	C-9 C-10の塊		P125	C-2	
P026	E-12		P076	C-10		P126	C-3	
P027	E-12		P077	C-10		P127	不明	
P028	E-12		P078	C-10		P128	不明	
P029	E-12		P079	C-10		P129	不明	
P030	E-11		P080	C-10		P130	A-12	
P031	E-11		P081	C-10		P131	A-11	632
P032	E-11		P082	C-11 D-11の塊		P132	A-12	
P033	E-12		P083	C-11 D-11の塊		P133	A-12	
P034	E-12		P084	C-11		P134	A-12	
P035	E-12		P085	C-11		P135	A-12	
P036	E-12		P086	C-11		P136	A-12	
P037	E-11		P087	C-11		P137	A-12	
P038	E-11	626	P088	C-11		P138	A-13	
P039	E-12	627	P089	C-11				
P040	E-12		P090	C-11				
P041	D-12 E-12の塊		P091	C-11				
P042	D-12		P092	C-11	629~630			
P043	D-12		P093	A-11				
P044	D-11 D-12の塊	711	P094	A-11				
P045	D-11 E-11の塊		P095	A-12				
P046	D-11		P096	A-12				
P047	D-11		P097	B-11				
P048	D-11		P098	B-11				
P049	D-12		P099	B-11				
P050	D-12		P100	B-11				

5. その他の

小穴（P）は1~138までの番号を確認できる。なお、P39については2号掘立柱建物の柱穴に数えられている。一覧表（第1表）で位置を示し、遺物が出土し図化されているものの全体図（第2図）に遺構名を記した。遺物は弥生・古墳時代の土器、古代の土師器、石製品が出土している。

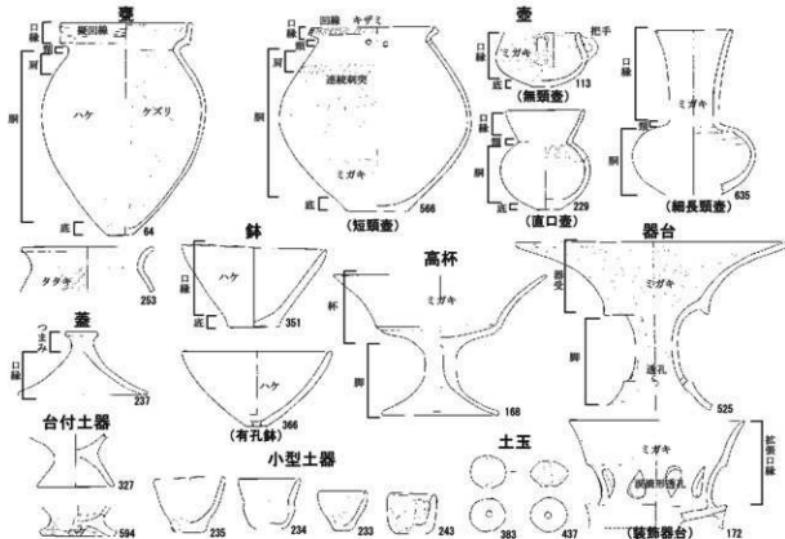
第4節 遺物

1. 土器・土製品

a. 弥生・古墳時代の土器

はじめに、弥生・古墳時代の土器は約700点が図化されている。この項では主に組成の特徴、特記遺物、時期を示し、その他の情報は観察表（第2表）に譲るものとする。時期については、本遺跡に比較的近接し、時間幅をほぼ網羅している金沢市西念・南新保遺跡の土器編年観と時期区分（楠1996）を主に使用したい。これ以降は「西念〇期」のように表現する。なお、挿図（第21図～第58図）と写真図版（17～31）には、古代以降の土器・土製品（189・239・435・439・634・641・642・651・652・660・662・678・683・684・687・688・701・702）も一部含まれている。

1号溝（第21図～第26図）下層（1～62等）は壺の形態が多様な点が特徴である。壺には線刻文様（31）、木葉文底（32・33）が見られる。高杯（41・42）は3号溝下層と接合関係をもつ。上層（63～76）は下層より出土量は少ないが、ほぼ完形品の壺（64）を含む。層不明（77～112）では壺（83）に粉状圧痕が見られる。時期的には壺（78）は西念1～2期、壺（79）は1期に遡るが、全体的には3期～5期前半におさまる資料である。壺（64）は4期前半でも古い特徴をもつ好資料である。



第20図 土器の分類と表現 (S=1/5)

2号溝（第27図～第33図） 下層（113～189等）は甕に月影式の系統が多い。高杯ないし器台脚部に渦文のスタンプ文が2点確認され、D類Z I形式（173）とD類Z III形式A 2（182）である（柄本1987、以下同じ）。上層は出土量が少なく、國化されていない。層不明（190～243）の中では甕が目につく。土製品（238）は注口の可能性がある。時期的には甕（114）が西念1期の他は、3期～5期前半におさまる資料である。壺（229）は5期前半の中でも新しく位置付けられ、下限を示す資料である。土鍤（189・239）については古代以降の時期であり、混入であろう。

3号溝（第34図～第40図） 下層（244～337等）は弥生中期の土器（244～247・251・279・283・296～298など）を明確に含む。壺（261）は口縁端に粘土帯を形成する異質な土器である。上層は出土量が少なく、國化されていない。層不明（338～361）も弥生中期の土器（338・339・355など）が目につく。時期的には、前述した中期の土器が西念1期、他は3期～5期前半におさまる資料である。また、甕（250）・壺（356）・鉢（331）などは位置付けが難しいが、2期の可能性がある。

その他溝（第41図～第49図） 5号溝（369～385）は土玉（383）が伴う。9号溝（397～423）は比較的多くの土器が出土している。甕（397）については「E-9区8～9？」と注記されたもので、6号土坑出土破片と接合している。そのうち上層（411～422）では弥生中期のタキ調整甕（413）を含む。10号溝（424～427）は弥生中期と後期の土器が混在し、11号溝（428・429）と12号溝（430～433）では弥生中期の土器でまとまる。19号溝（436～438）では土器片を転用した円盤（436）、土玉（437）が出土している。31号溝（445～450）の高杯（449）は遺存が悪いので判断できないが、口縁部がもっと伸びるかもしれない。32号溝（455～461）も土玉（461）が伴う。33号溝（462～469・528・529）は複数の精製鉢ないし精製甕（467・468・529）を含む。その一つ（467）については脚部（469）と色調が似るが、同一個体かどうかは判断できない。34号溝（451～454）の甕（453）については小破片であるが実測図よりも大径で、器種も壺の可能性がある。35号溝（470～483）は甕に対して高杯などの精製品・赤彩品が多いことが特徴的である。47号溝（499～506）では脚部（503）に渦文のスタンプ文が確認できるが、遺存が悪く、詳細を観察できない。その他（511～527）は接合等で複数の構造に帰属する資料であり、1～3号溝に関係するものが多い。壺（520）は有段の口縁帶に渦文が連結した大型浮文を貼り付ける。スタンプ文ではD類S III形式A 1に相当する。

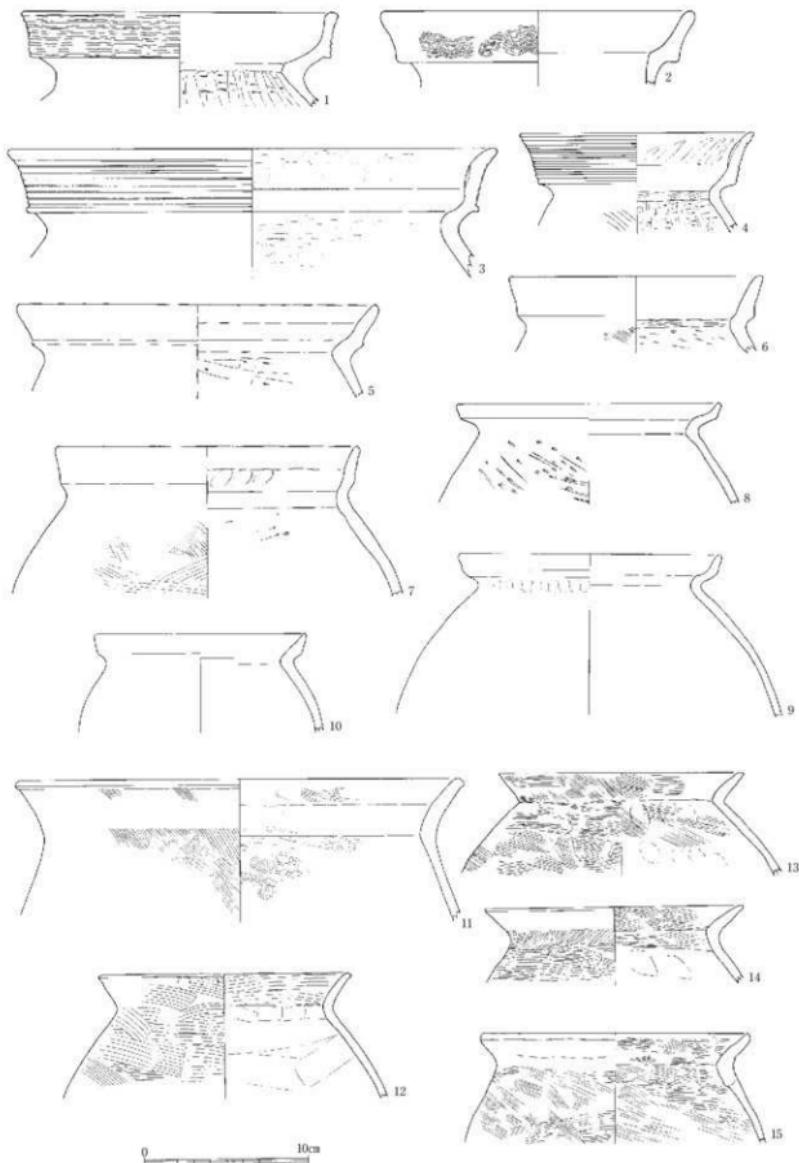
各溝出土土器の時期は、一定量が出土している溝では4号溝（362～368）が西念4期～5期前半、5号溝が3期～5期前半、8号溝（391～396）は3期、9号溝上層が1期の甕（413）を除けば3期～5期前半、9号溝（上層除く）は2期の壺（398）を除けば4期、10号溝が1期と3期、12号溝が1期、31号溝が4期、32号溝が3期～4期、33号溝が4期、34号溝が3期～4期あるいは4期前半でまとまるかもしれない。35号溝は3期～4期、45号溝（485～494）は5期前半、46号溝（495～498）は3期と5期前半、47号溝は3期である。出土量が少ない溝では6号溝（386・387）と7号溝（388～390）が3期～4期、11号溝が1期、25号溝（441・442）が1期を廻る可能性がある。30号溝（443・444）は4期、50号溝（507・508）は1期と4期である。土器が1点しか國化されていない溝では、14号溝の甕（434）は1期か2期か特定できない、19号溝の甕（438）は4期であるが、土製円盤（436）は1期で、土玉（437）は特定できない。29号溝の壺（440）は3期～5期で特定できない。36号溝の甕（530）は3期である。41号溝の壺（484）は3期～4期で特定できない。49号溝の壺（509）は1期であるが、土玉（510）は別時期の可能性がある。

土坑（第50図～第54図） 2号土坑（533～542）は比較的多くの土器が出土している。壺に「く」字形口縁が多いことが特徴である。タタキ調整壺（535）、煮炊による外面の煤と内面の炭化物が多く遺存する壺（534）が含まれる。5号土坑（544～547）は把手付きの無頸壺（544）が注目される。6号土坑（548・549）は高杯（549）が「8～9？」注記の破片と接合しており、注記はグリッドの8～9区を示す可能性がある。7号土坑では壺（550）が遺構北隅からまとめて出土しているが、口縁部と胴部が接合せず、別個体の可能性もある。8号土坑（551～562）は比較的多くの土器が出土している。弥生中期の土器でまとめており、壺主体の組成に四線文系の大型壺（559）を含む。10号土坑では遺構底から壺（566）が横倒しの状態で出土している。四線文系の短頸壺で、ほぼ完形の優品である。32号土坑（590～594）は組成に壺を含まない。39号土坑では胴部外面に粗状圧痕をもつ壺（589）が出土している。45号土坑（606・609～611）では高杯（610）の口縁部端にスタンプ文が確認される。渦文か同心円文であるが、遺存が悪くて詳細を観察できない。

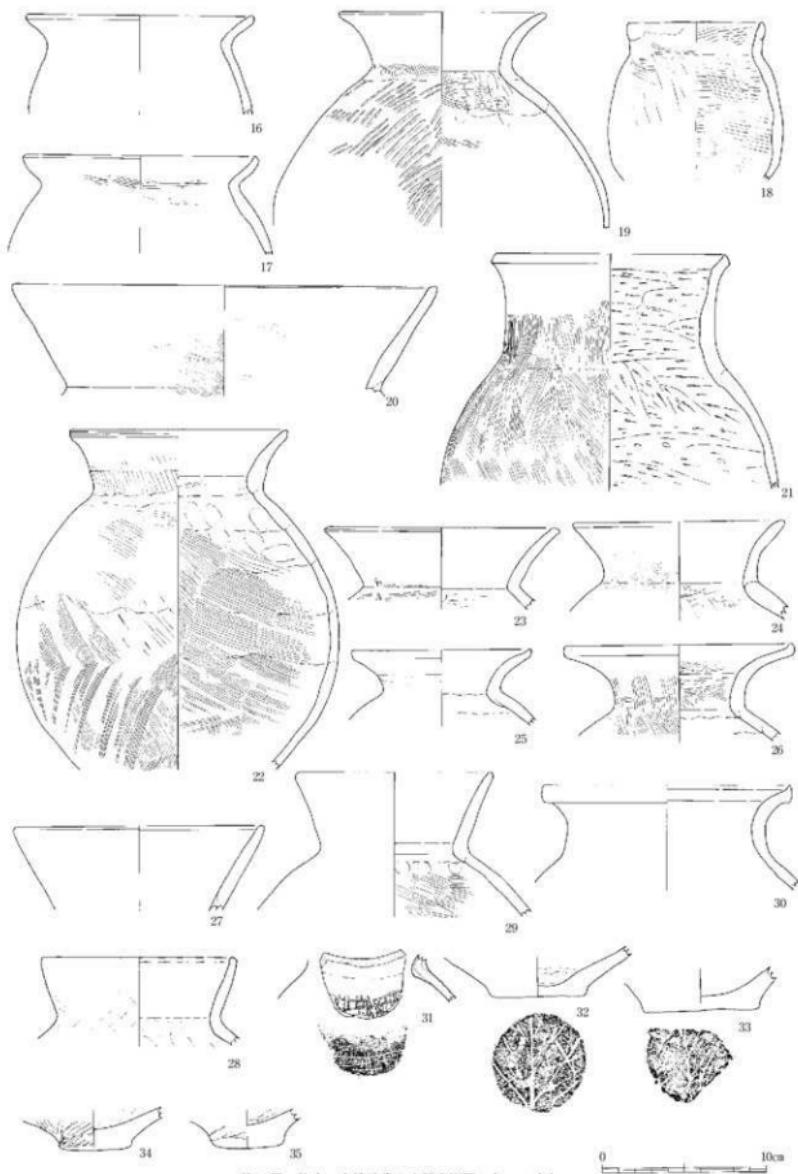
各土坑出土土器の時期は、一定量が出土している土坑では2号土坑が5期、5号土坑が3期、8号土坑が1期である。13号土坑（567～571）は1期・3期～5期の幅がある。24号土坑（573～578）は底部（578）が古くなる可能性があるが、他は3期である。26号土坑（579～582）と32号土坑も3期、35号土坑（595～599）は4期、38号土坑（600～603）は3期～4期、45号土坑は3期である。出土量が少ない土坑では1号土坑（531・532）が4期と5期、6号土坑が9号溝の壺（397）も含めて4期前半、29号土坑（583～585）が3期である。31号土坑（586・587）は特定できないが、2期の可能性が高い。43号土坑（607・608）は5期前半である。土器が1点しか図化されていない土坑では3号土坑の壺（543）は5期、7号土坑の壺は1期、9号土坑の底部（563）は1期、10号土坑の壺も1期、11号土坑の底部（564）は特定できない。15号土坑の壺（565）は特定できないが、2期の可能性が高い。22号土坑の壺（572）は3期～5期で特定できない。34号土坑の壺（588）は4期か5期前半、39号土坑の壺（589）は1期の可能性が高い。46号土坑の壺（604）は3期である。47号土坑の高杯（605）は3期～4期で特定できない。

その他遺構（第55図） 1号井戸（612～619）は口縁部のみであるが壺の出土が多い。上層では近江系壺（616）が出土している。時期は西念3期におさまる。2号井戸（620・621）は出土量が少ないが、時期は西念4期である。3号井戸は壺（622）が図化されているのみである。時期は西念5期以降を推定しておく。小穴（623～632）では壺（627）が2号掘立柱建物の柱穴から出土している。時期は西念4期を推定しておく。

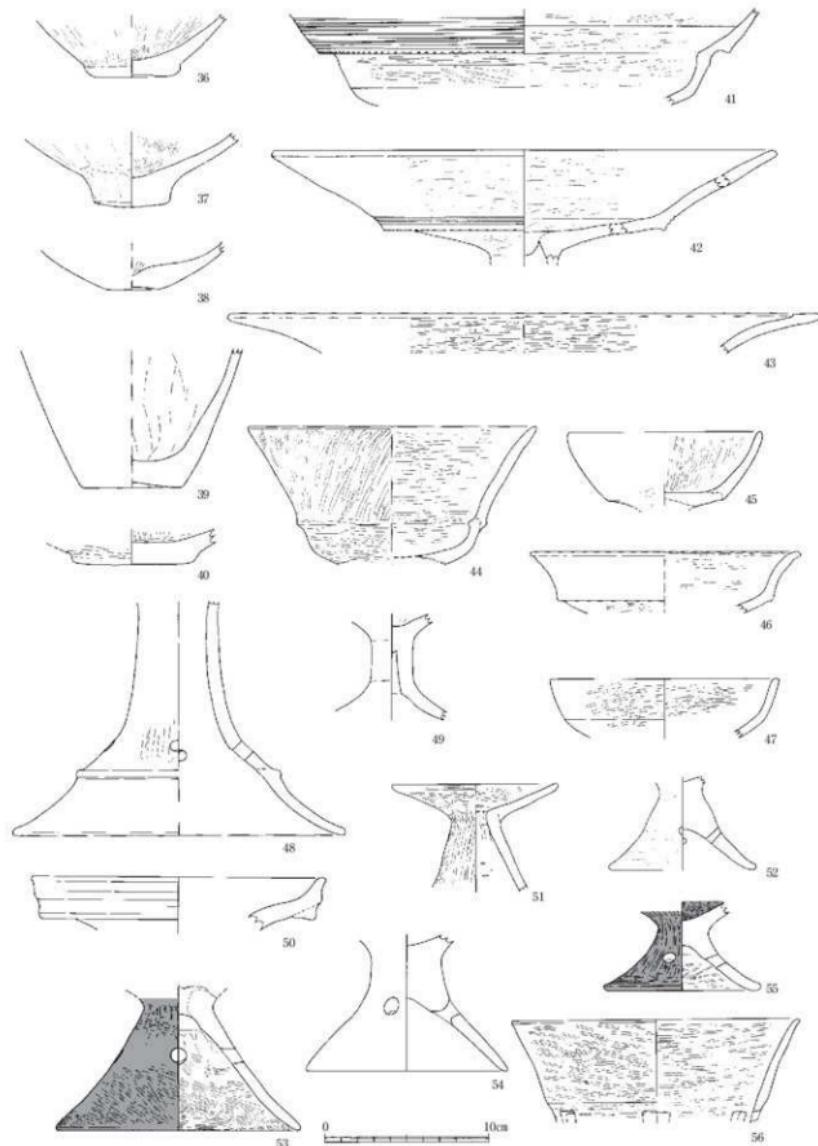
遺構外（第56図～第58図） 遺構出土土器と同じく西念1期～5期前半の時間幅をもつ。ただし鉢（643）については弥生前期以前に遡る可能性を指摘しておく。出土土器の時期とグリッドから、西念1期の9号土坑に壺（685）、12号溝か8号土坑に鉢（689）・底部（690）が、3期の45・47号溝か46号土坑に壺（633・635）・器台（639）・壺（653）が、26号土坑に高杯（648）が、4期の33・49・50号溝に壺（638・655）・壺（654）・高杯（647）・器台（636・649）が、5期以降の3号井戸に壺（691）が、時間幅のある9号溝？に脚部（676）・壺（677）・壺（680・681）・高杯（682）が、それぞれ伴う可能性が高い。スタンプ文は4点の土器で確認されている。器台受部（639）では連結した渦文、高杯口縁部（648）では渦文が確認されるが、遺存が悪く、詳細は観察できない。器台脚部（692）はD類ZⅡ形式AないしZⅢ形式AⅠであるが、渦の中心が摩耗しており、確定できない。細長頸壺（699）は口縁部しか遺存していないが、優品である。口縁帯のスタンプ文はD類ZⅢ形式AⅠである。また、大型壺（698）は口縁部内面に回転軸をもつ扇形文を施す。西念1期の四線文系土器と推定しておく。



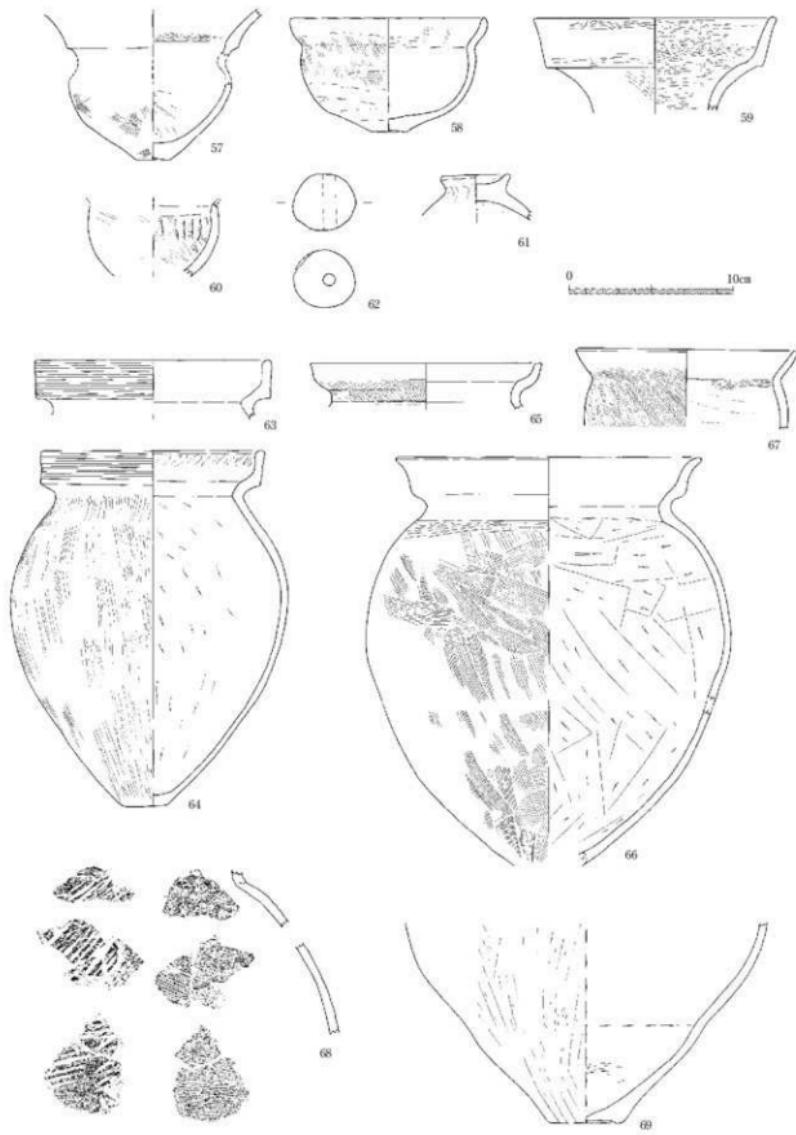
第21図 弥生・古墳時代の土器実測図1 (S=1/3)



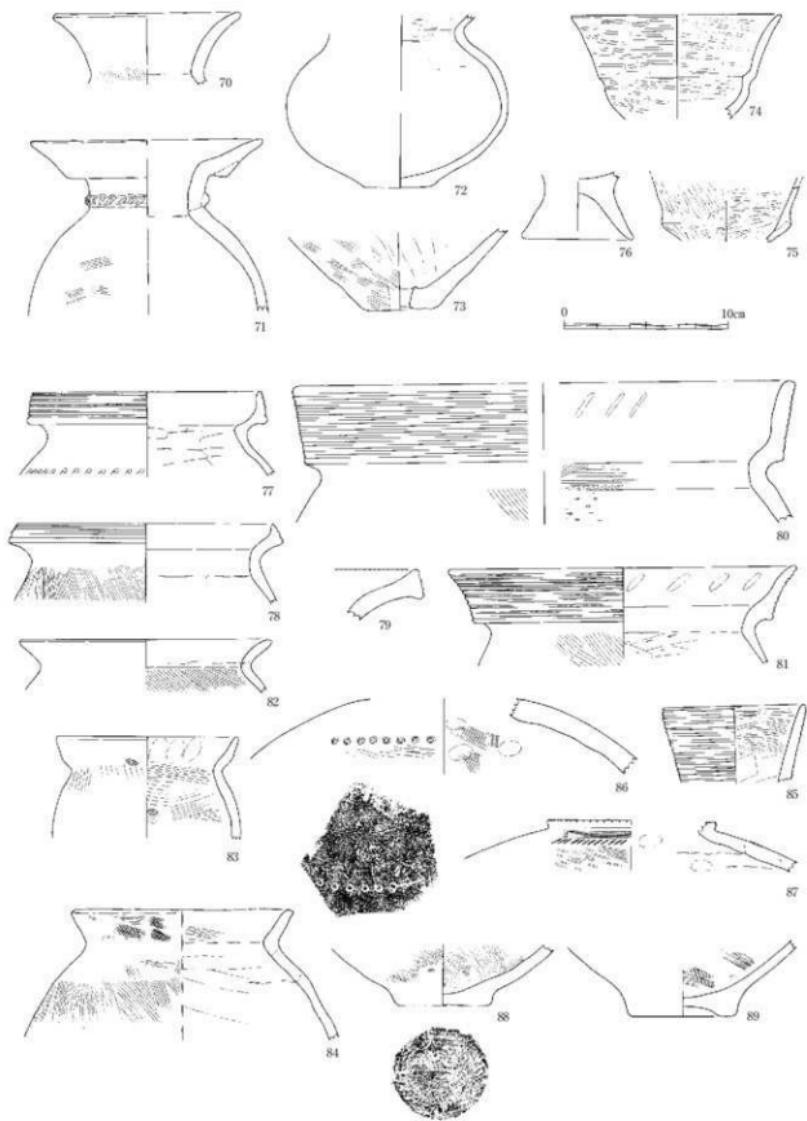
第22図 弥生・古墳時代の土器実測図2 (S=1/3)



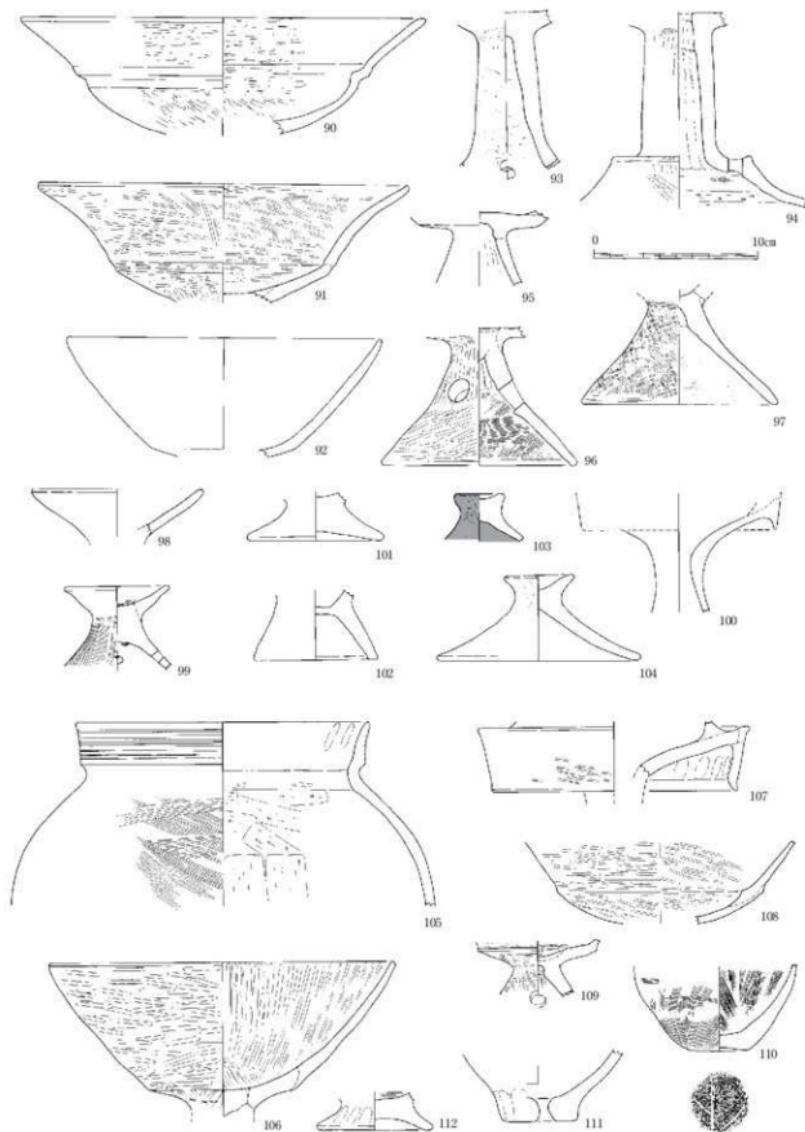
第23図 弥生・古墳時代の土器実測図3 (S=1/3)



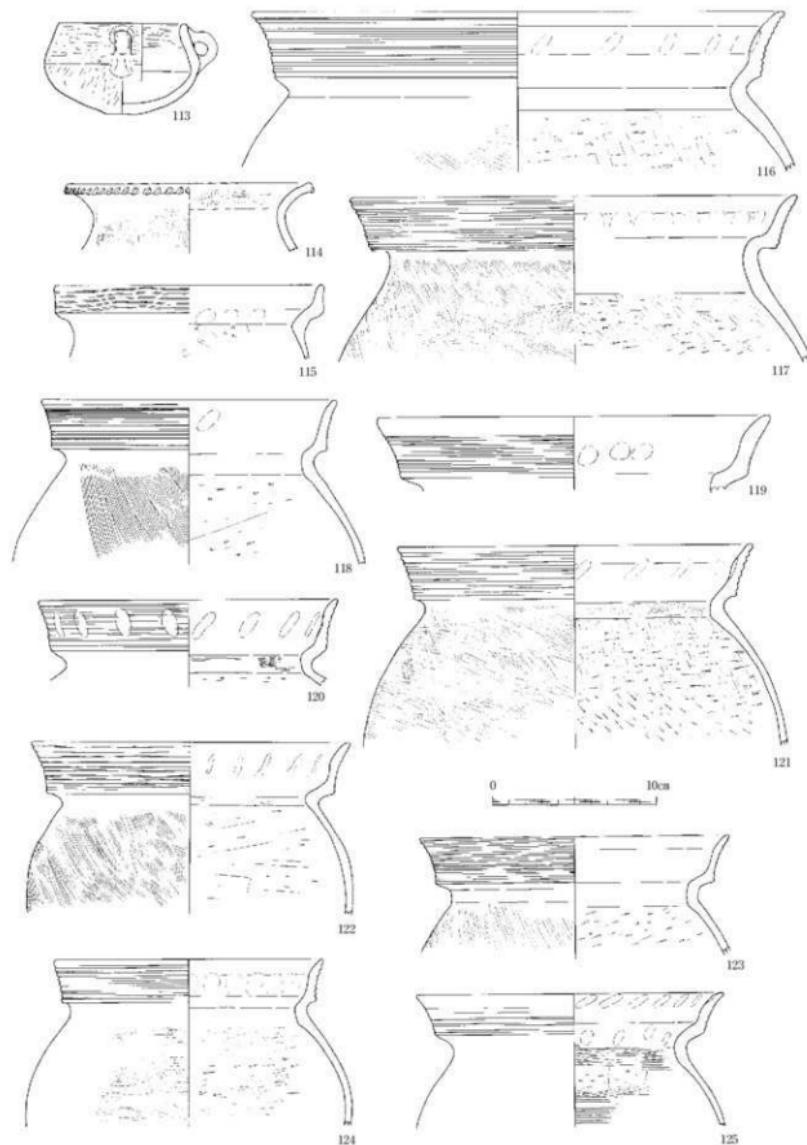
第24図 弥生・古墳時代の土器実測図4 (S=1/3)



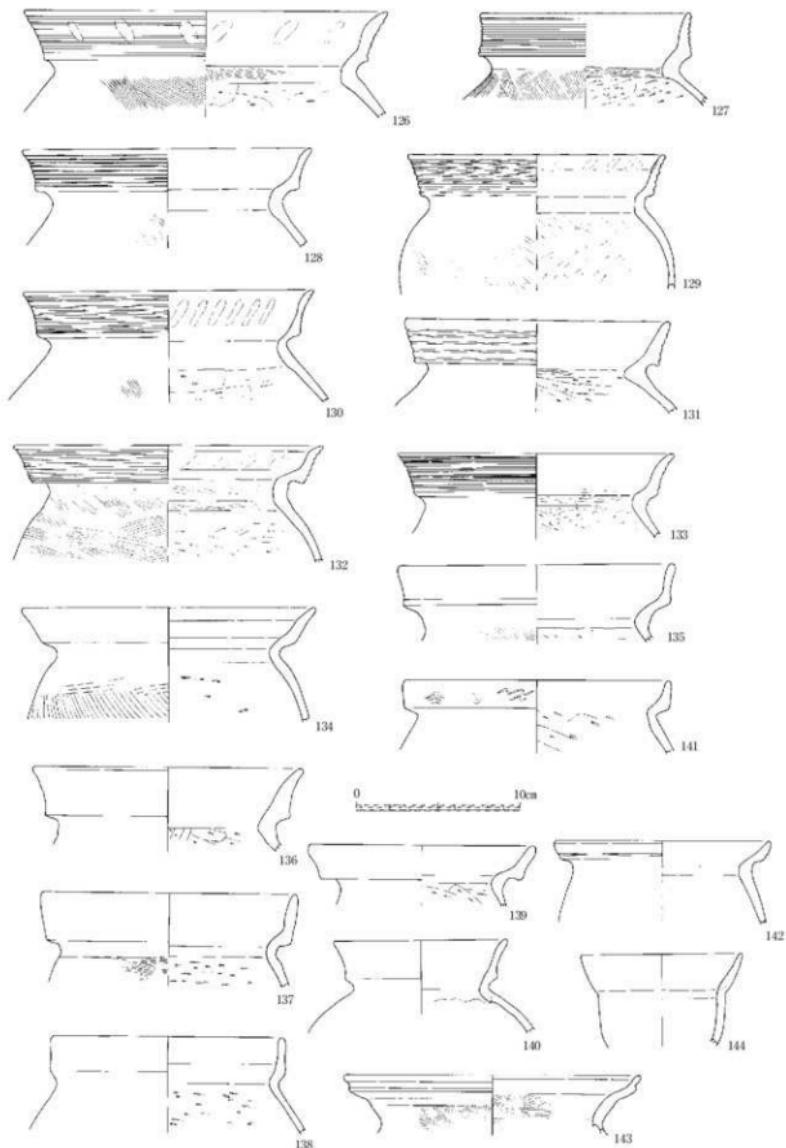
第25図 弥生・古墳時代の土器実測図5 (S=1/3)



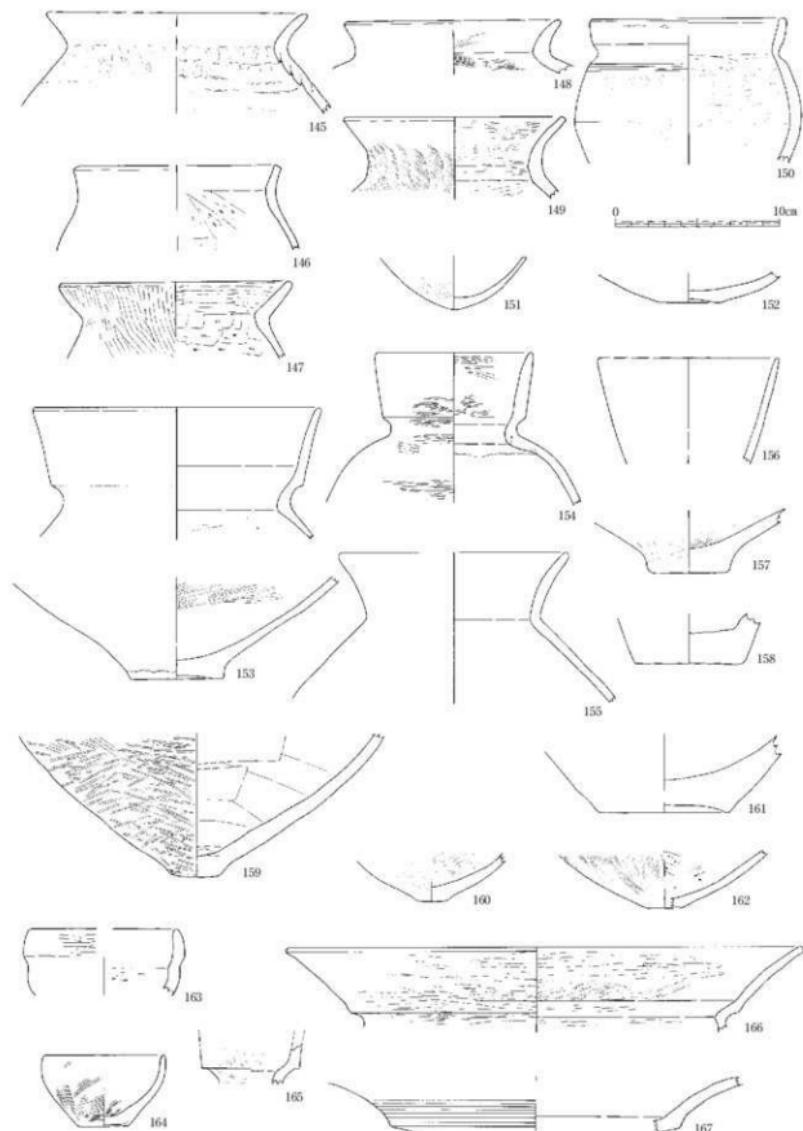
第26図 弥生・古墳時代の土器実測図6 (S=1/3)



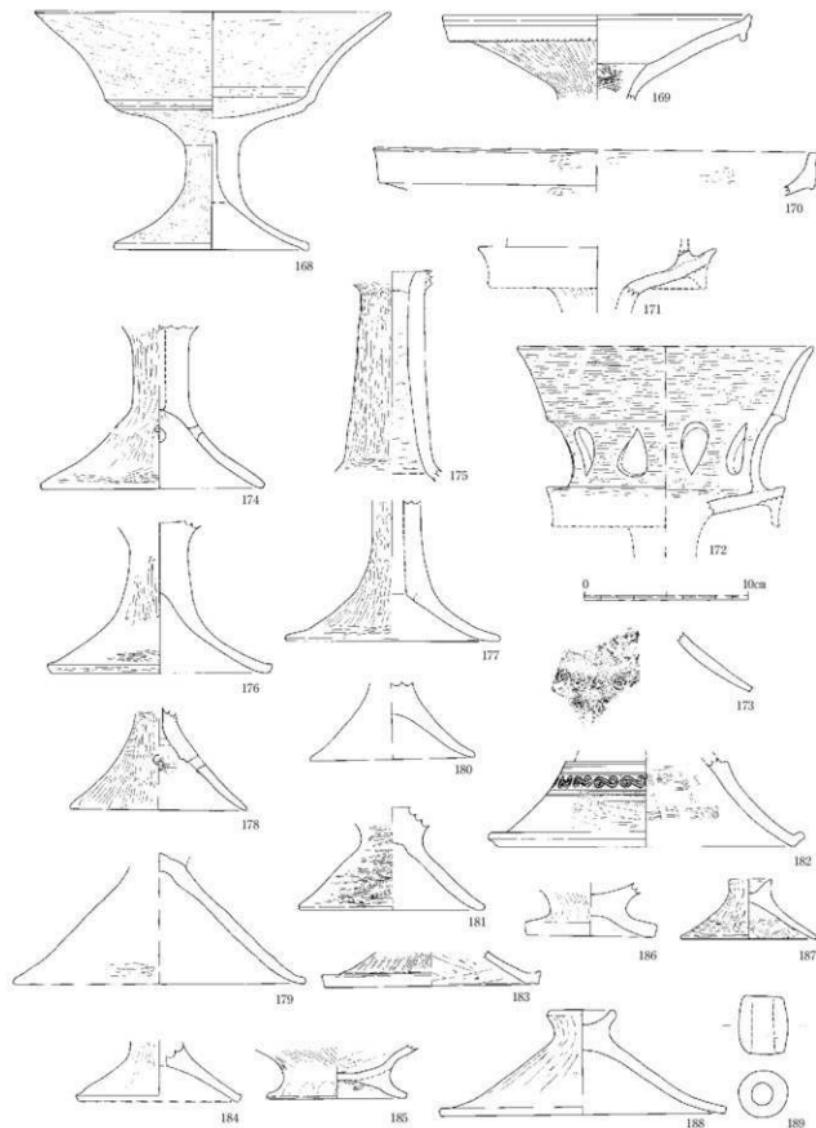
第27図 弥生・古墳時代の土器実測図7 (S=1/3)



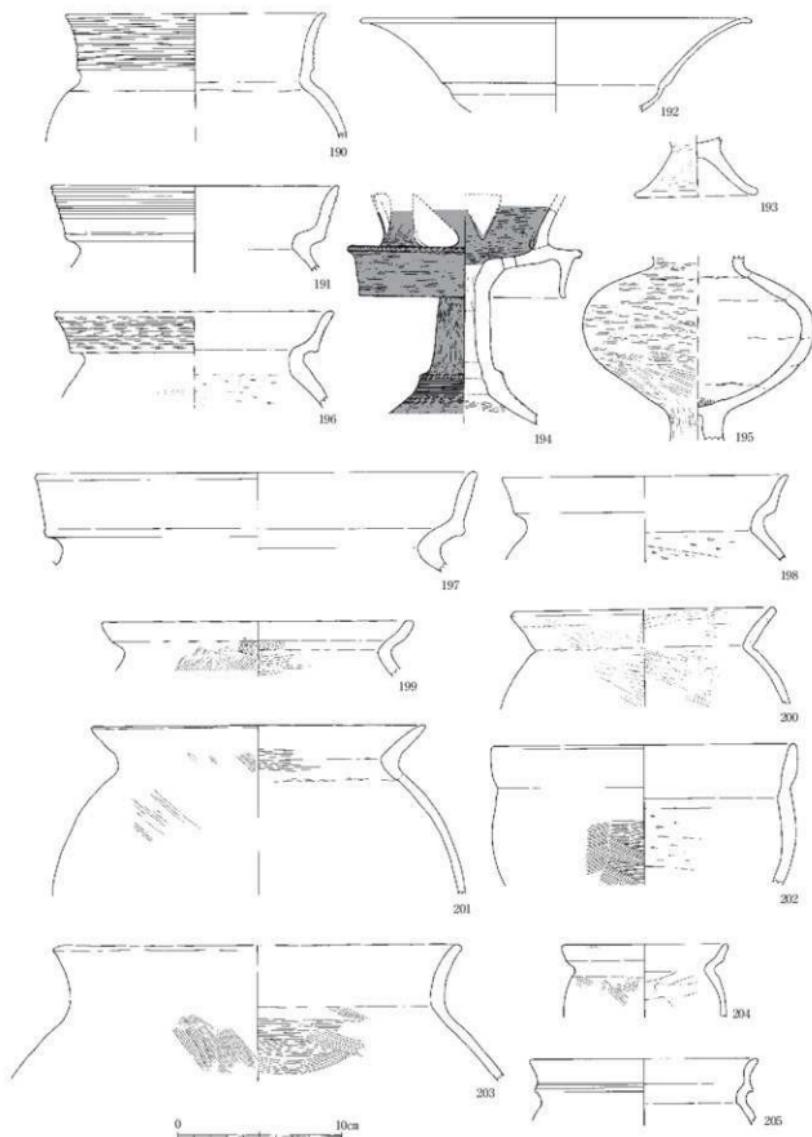
第28図 弥生・古墳時代の土器実測図8 (S=1/3)



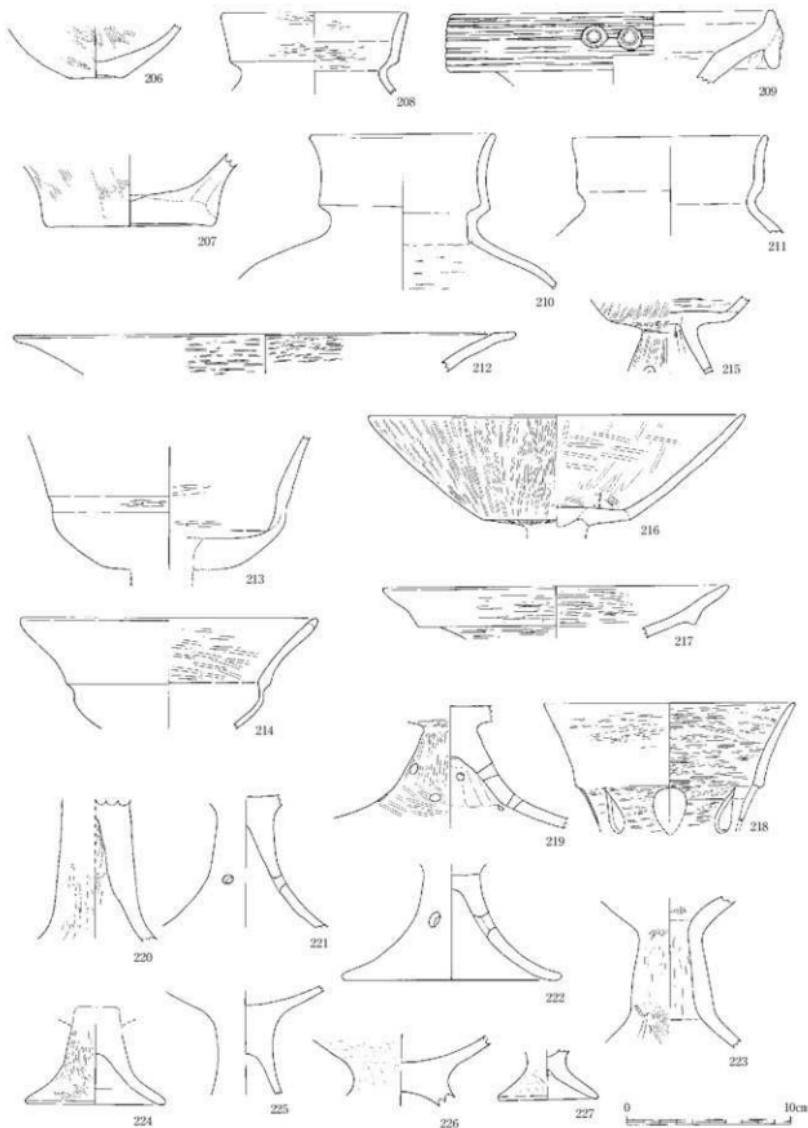
第29図 弥生・古墳時代の土器実測図9 (S=1/3)



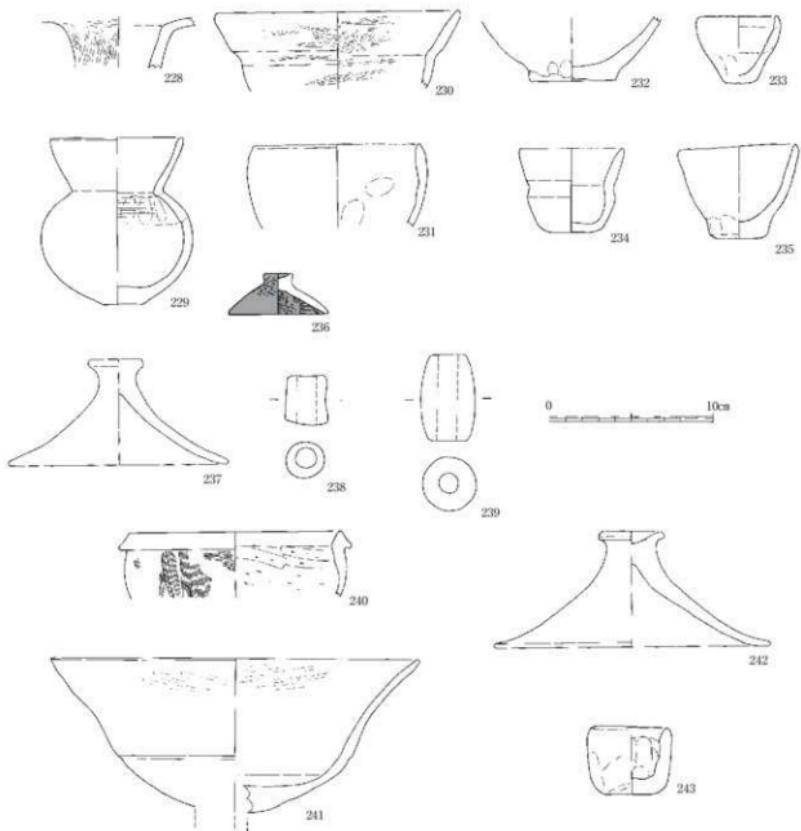
第30図 弥生・古墳時代の土器実測図10 (S=1/3)



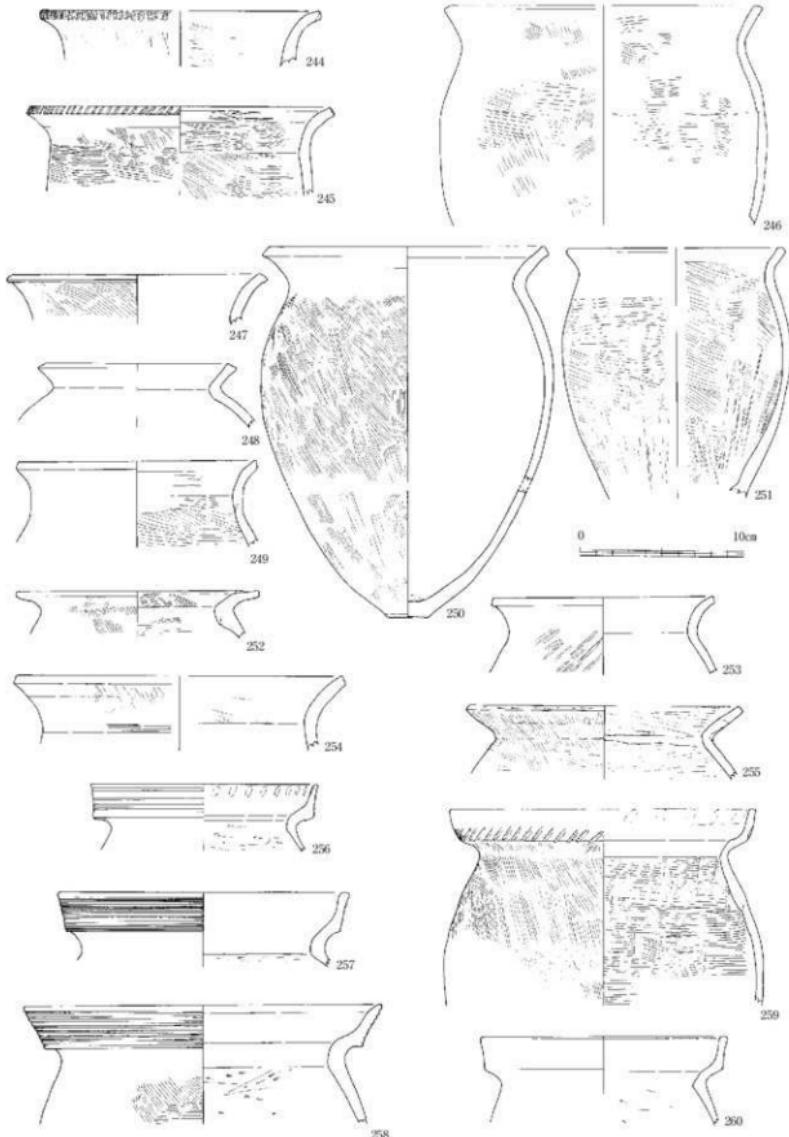
第31図 弥生・古墳時代の土器実測図11 (S=1/3)



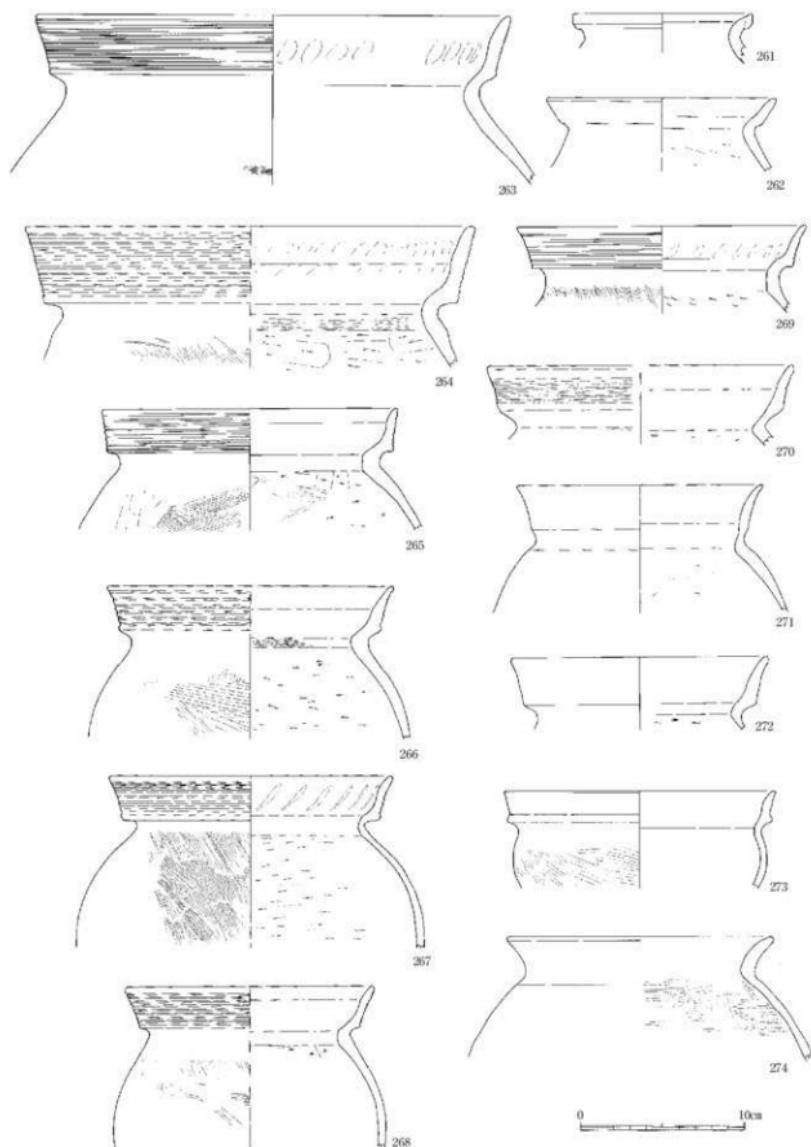
第32図 弥生・古墳時代の土器実測図12 (S=1/3)



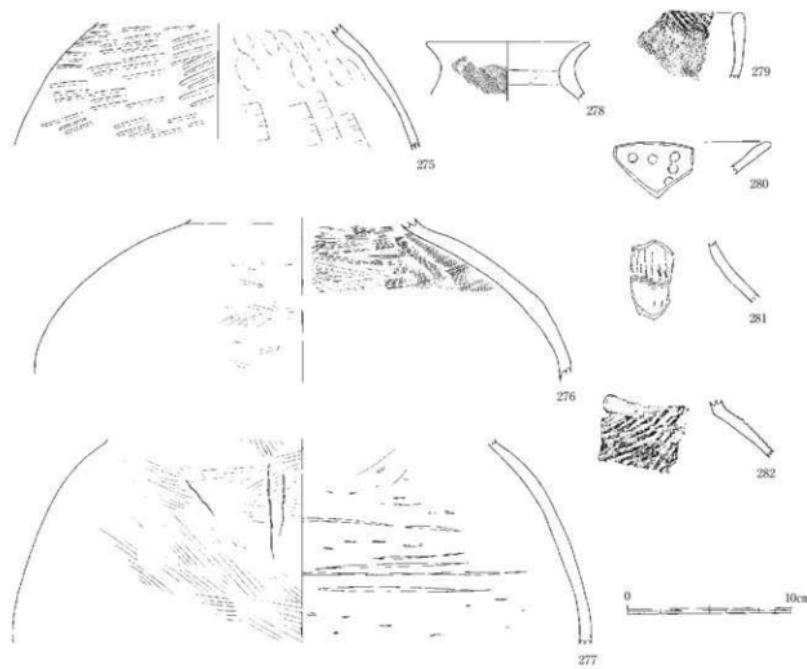
第33図 弥生・古墳時代の土器実測図13 (S=1/3)



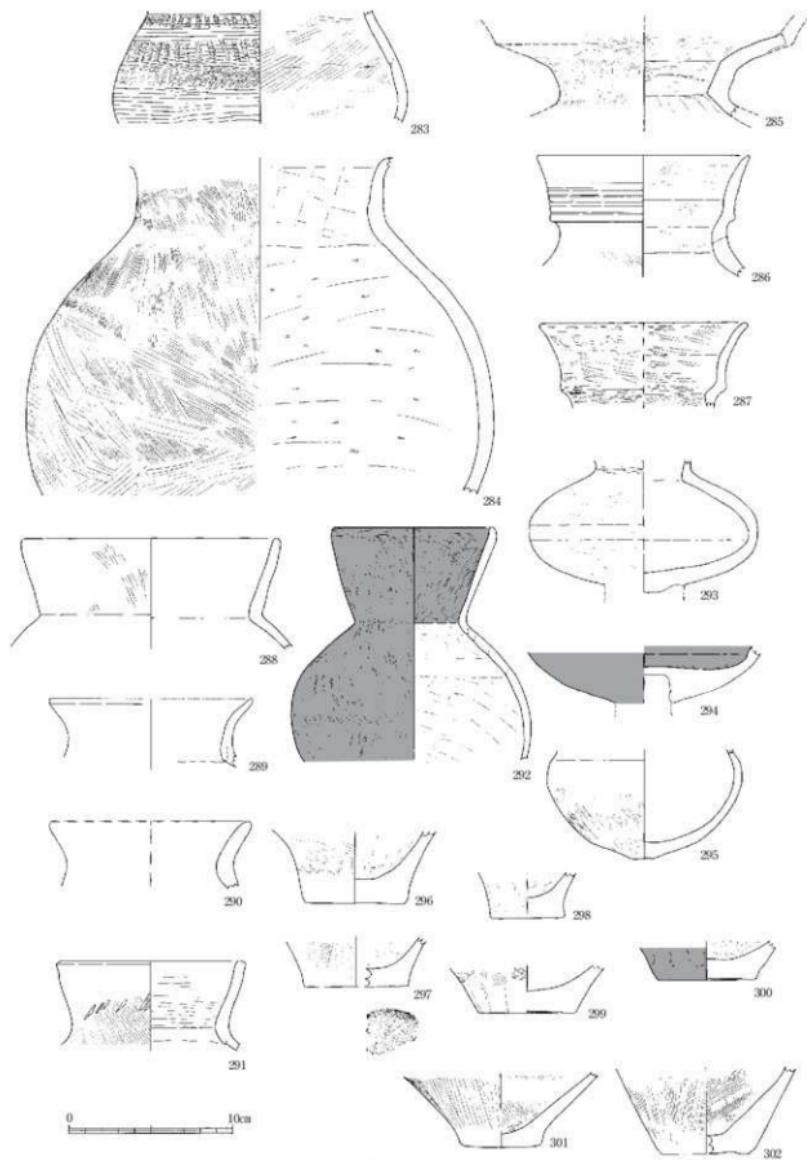
第34図 弥生・古墳時代の土器実測図14 (S=1/3)



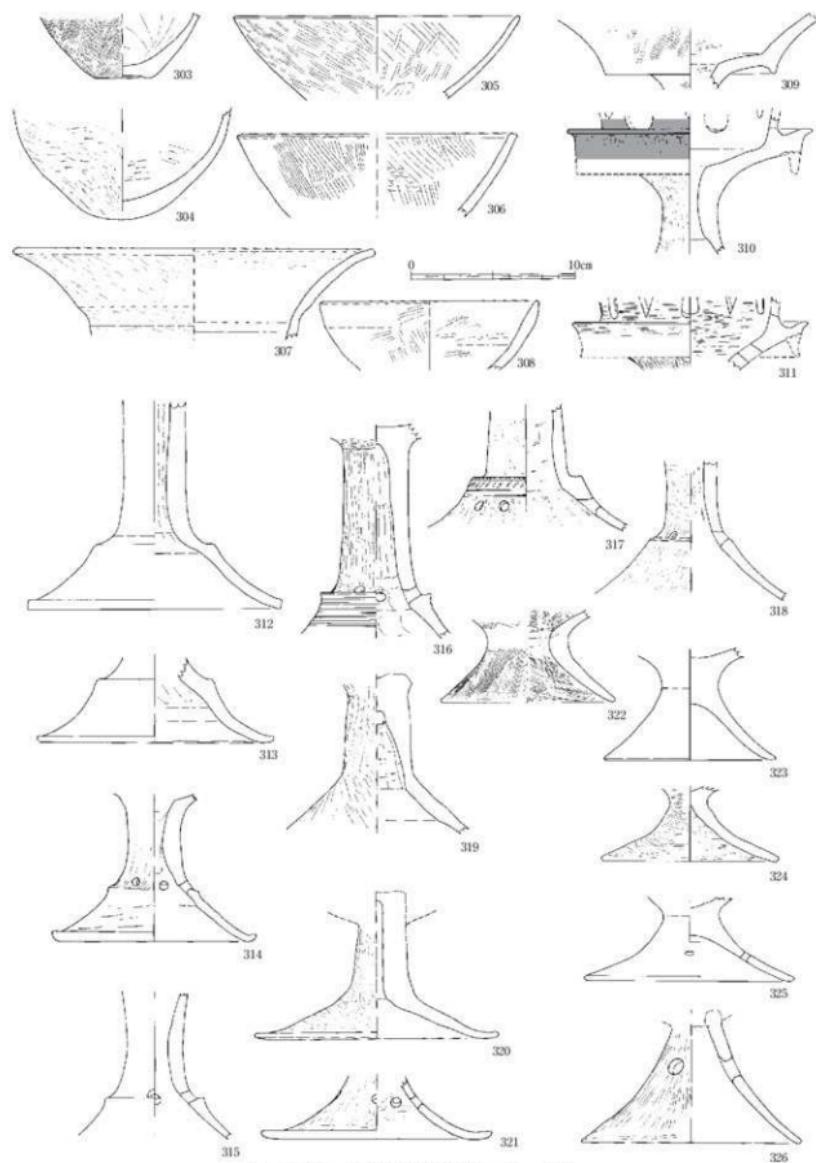
第35図 弥生・古墳時代の土器実測図15 (S=1/3)



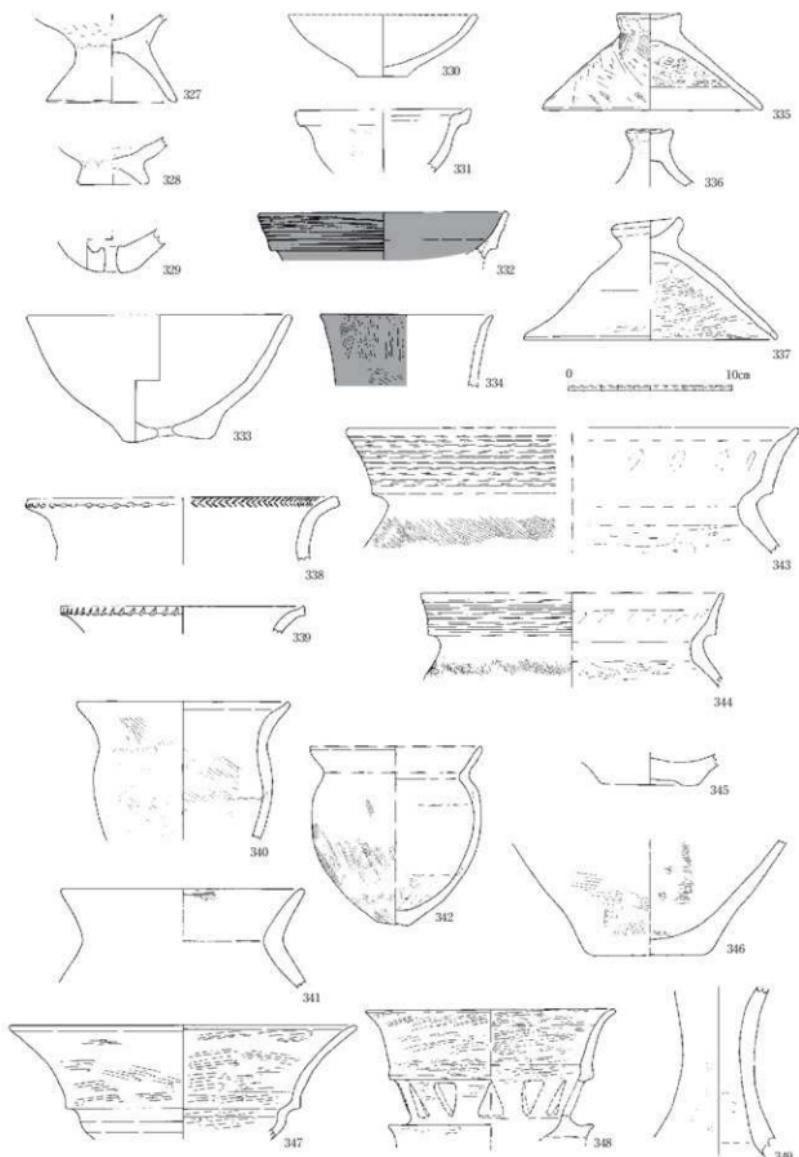
第36図 弥生・古墳時代の土器実測図16 (S=1/3)



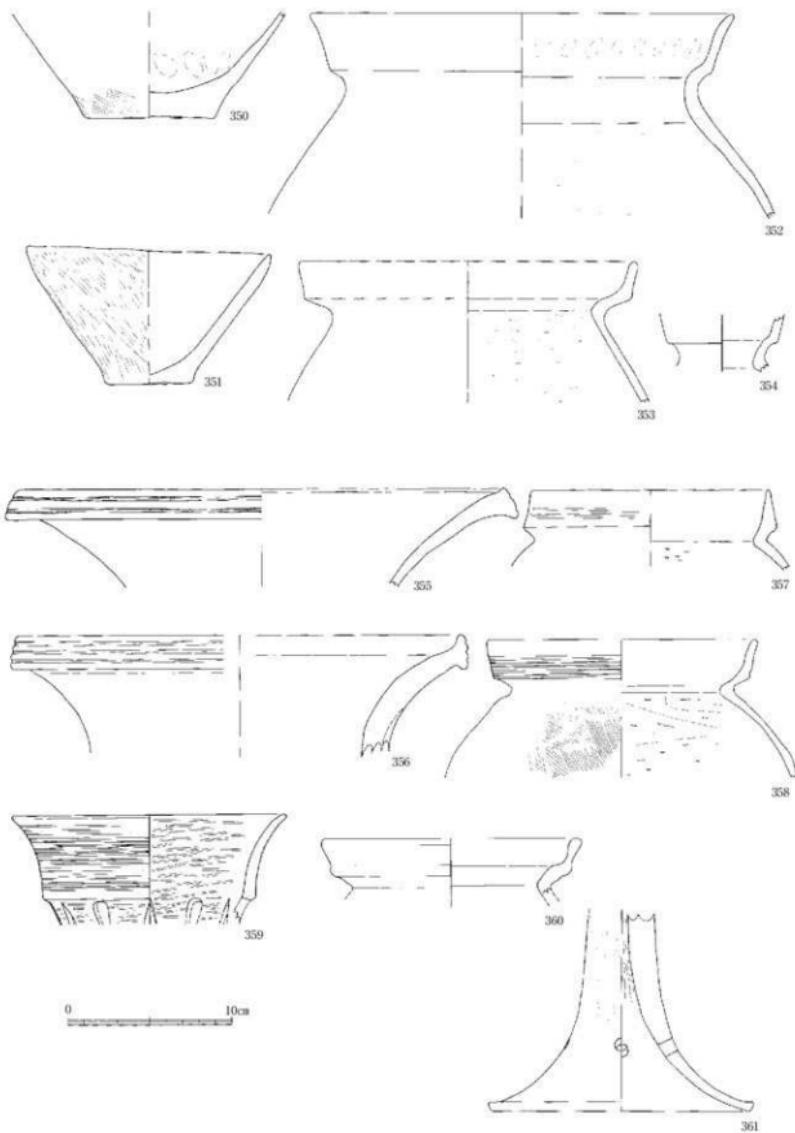
第37図 弥生・古墳時代の土器実測図17 (S=1/3)



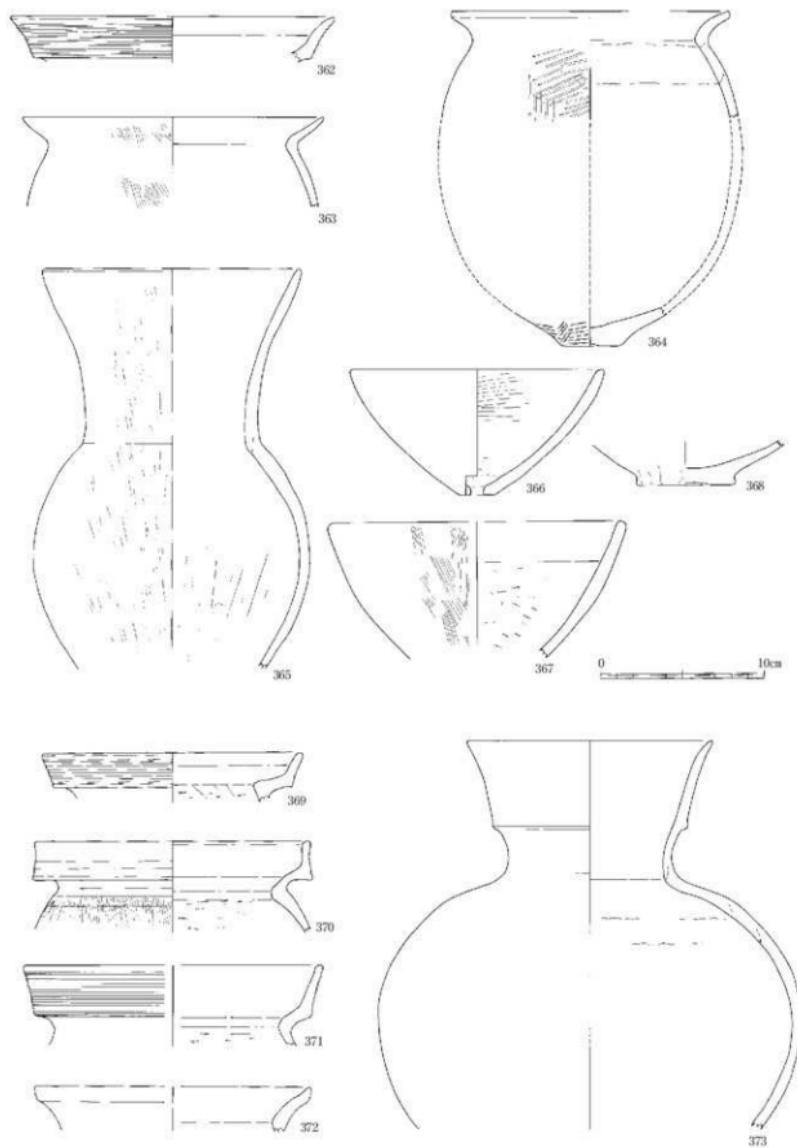
第38図 弥生・古墳時代の土器実測図18 (S=1/3)



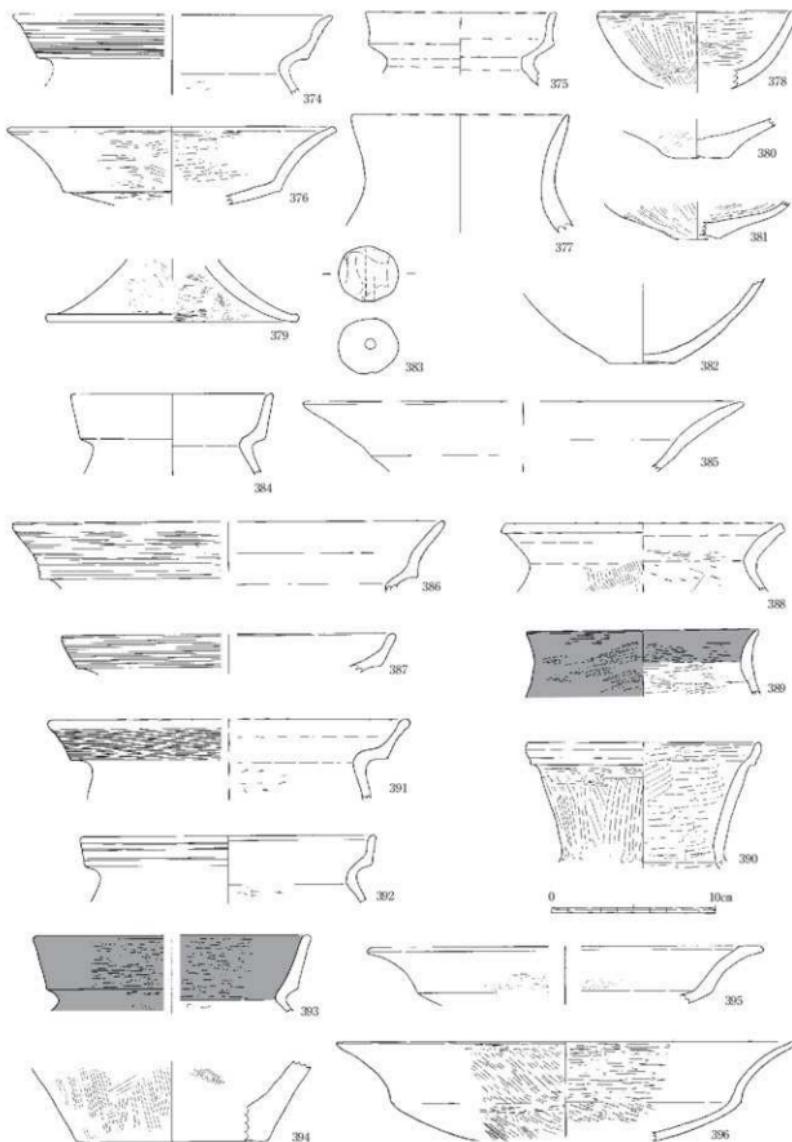
第39図 弥生・古墳時代の土器実測図19 (S=1/3)



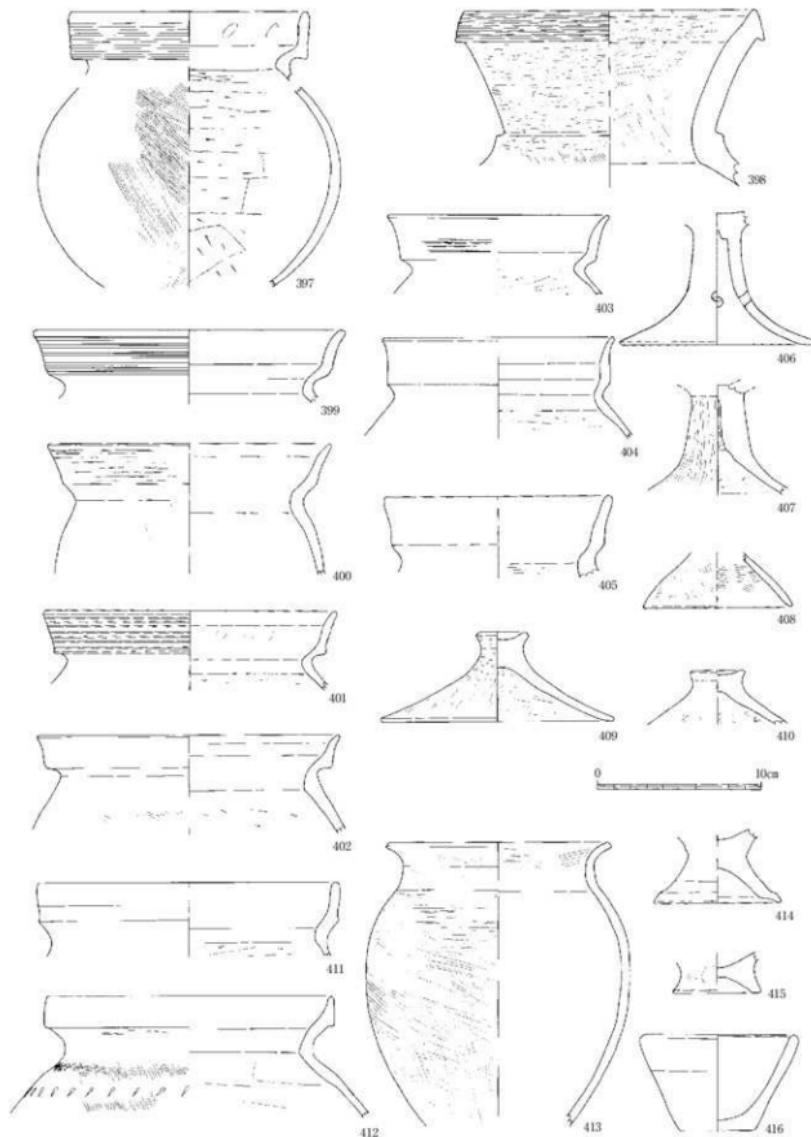
第40図 弥生・古墳時代の土器実測図20 (S=1/3)



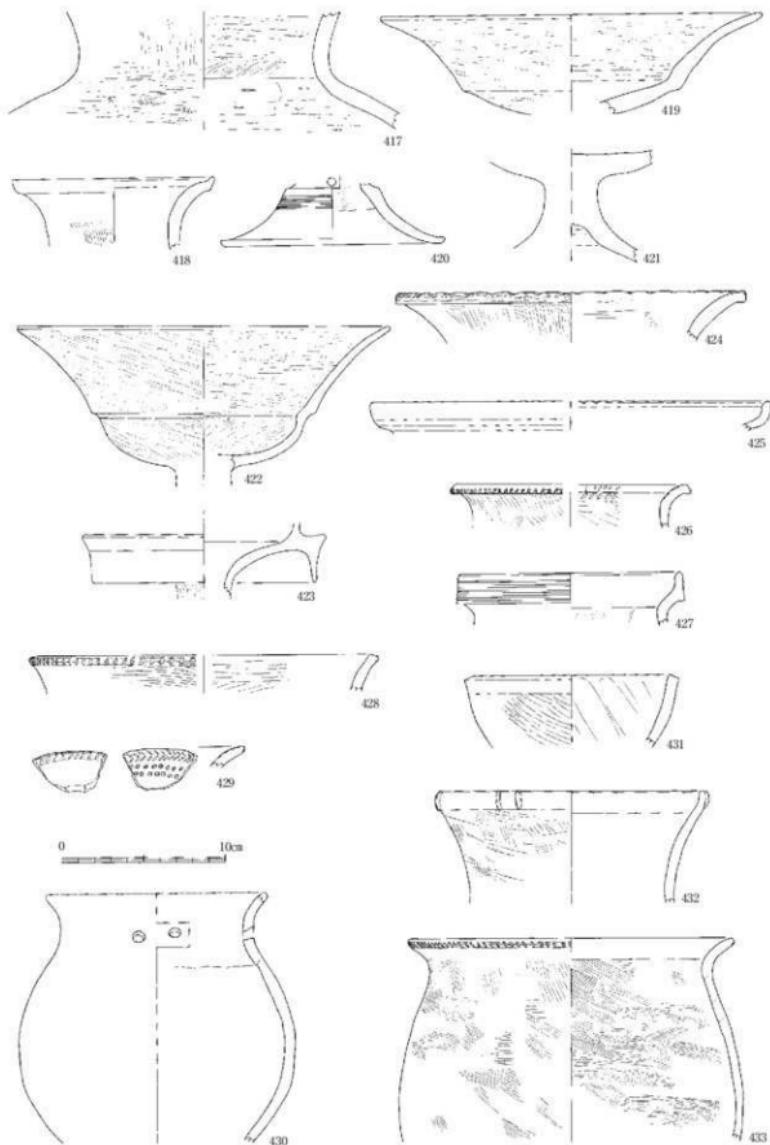
第41図 弥生・古墳時代の土器実測図21 (S=1/3)



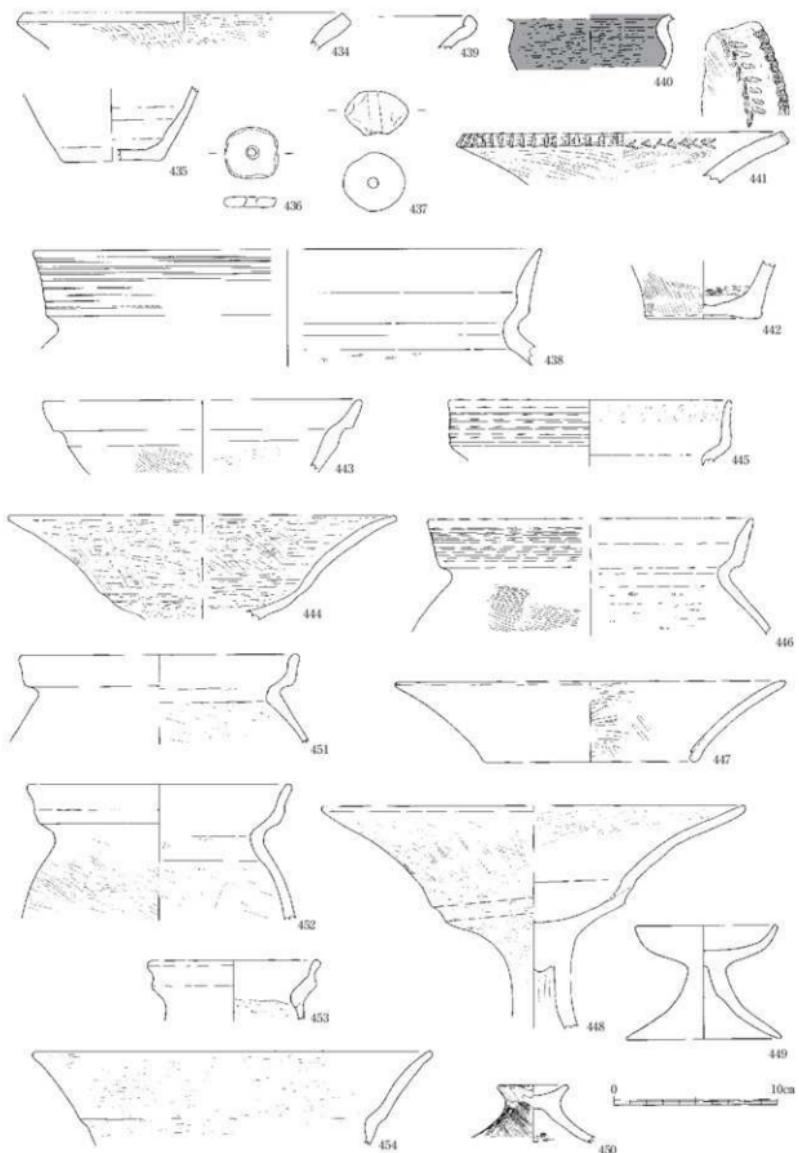
第42図 弥生・古墳時代の土器実測図22 (S=1/3)



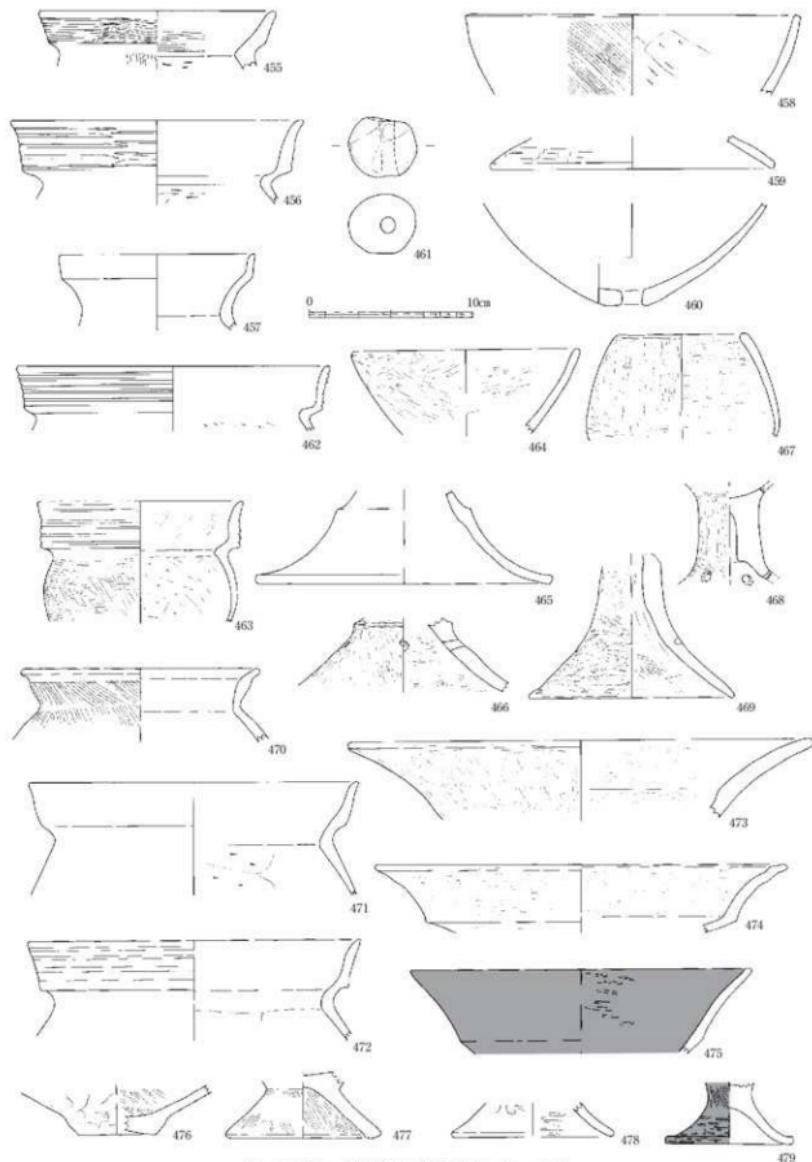
第43図 弥生・古墳時代の土器実測図23 (S=1/3)



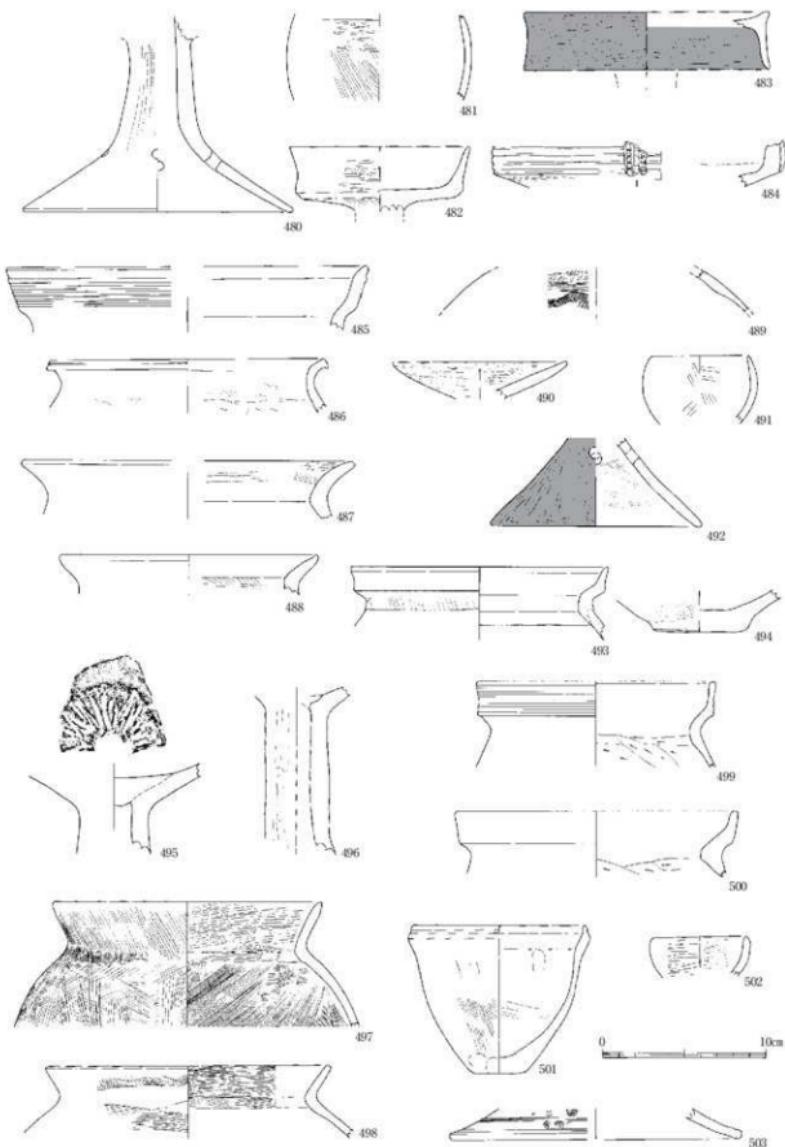
第44図 弥生・古墳時代の土器実測図24 (S=1/3)



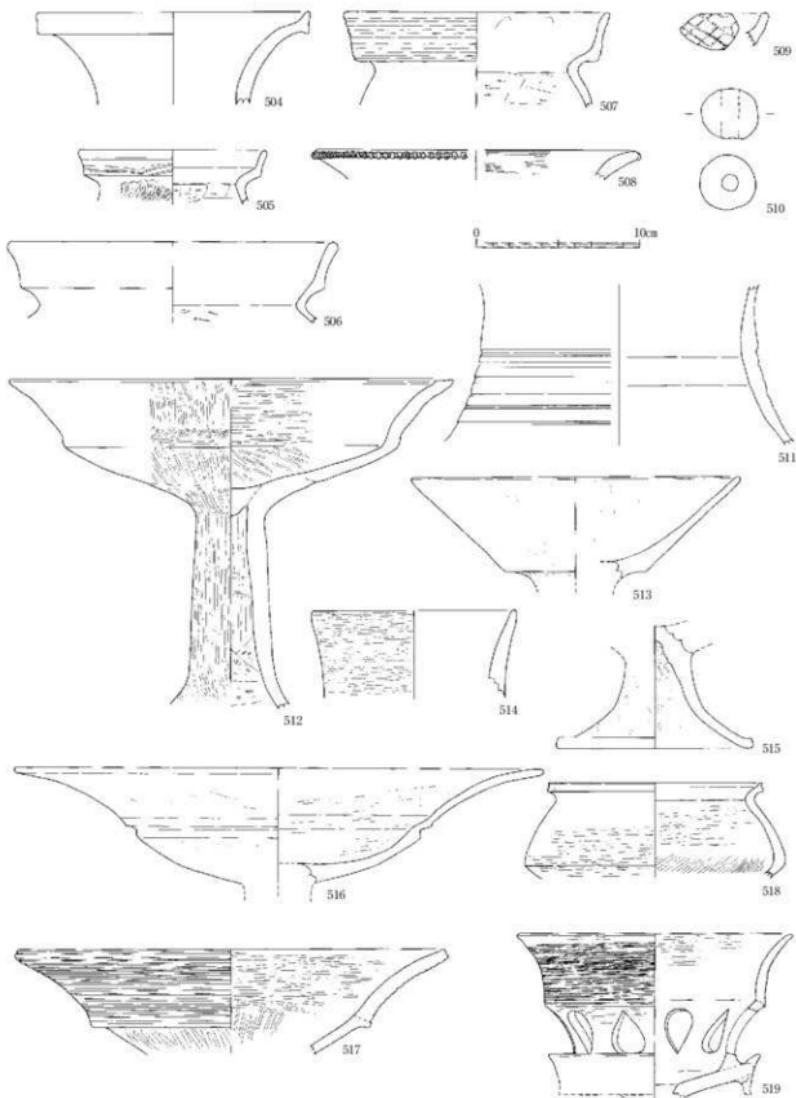
第45図 弥生・古墳時代の土器実測図25 (S=1/3)



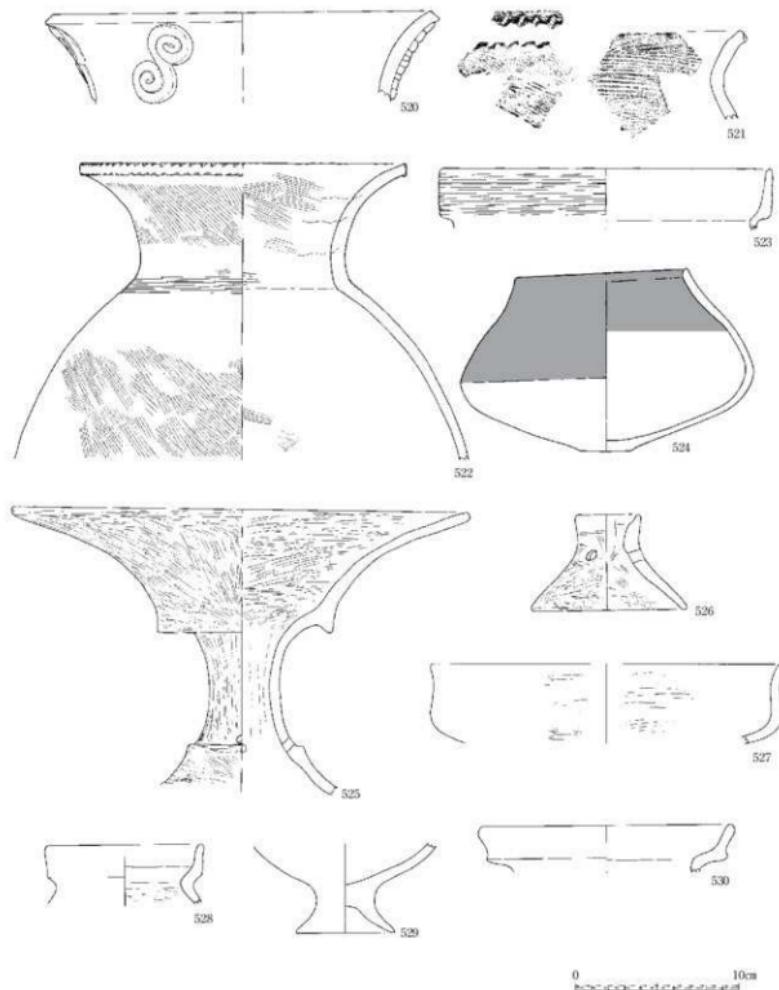
第46図 弥生・古墳時代の土器実測図26 (S=1/3)



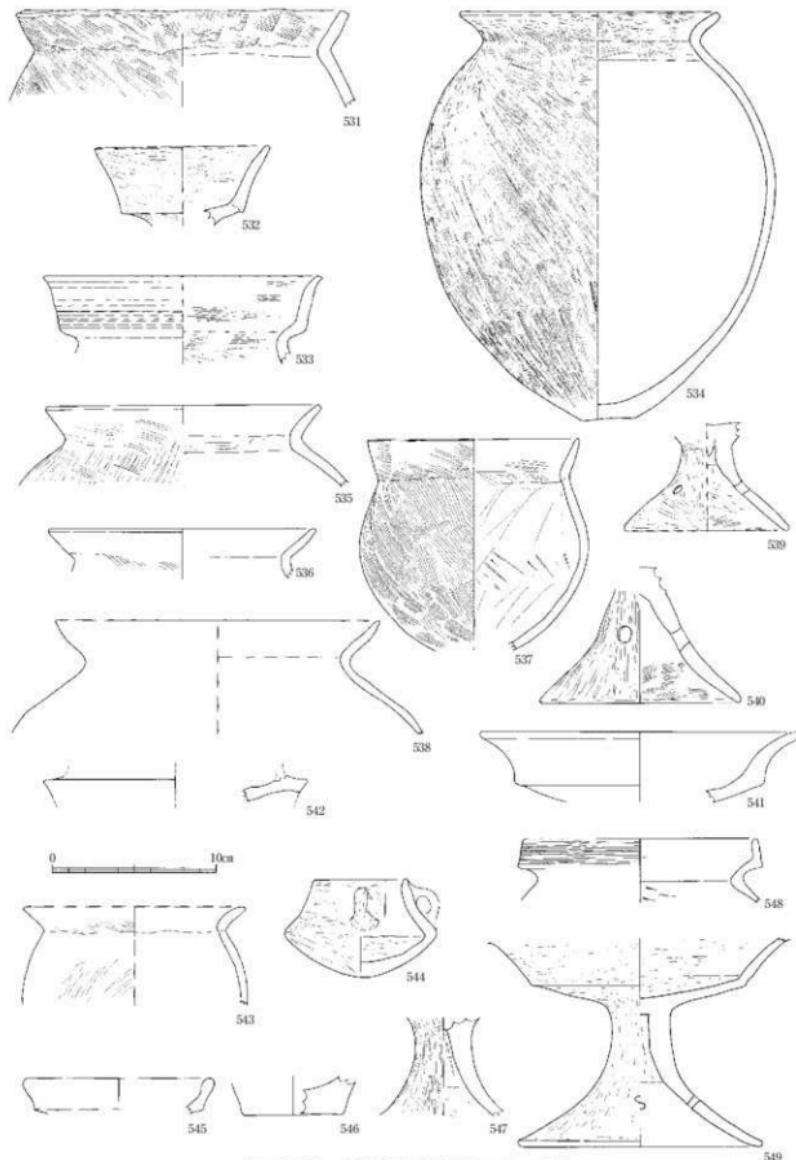
第47図 弥生・古墳時代の土器実測図27 (S=1/3)



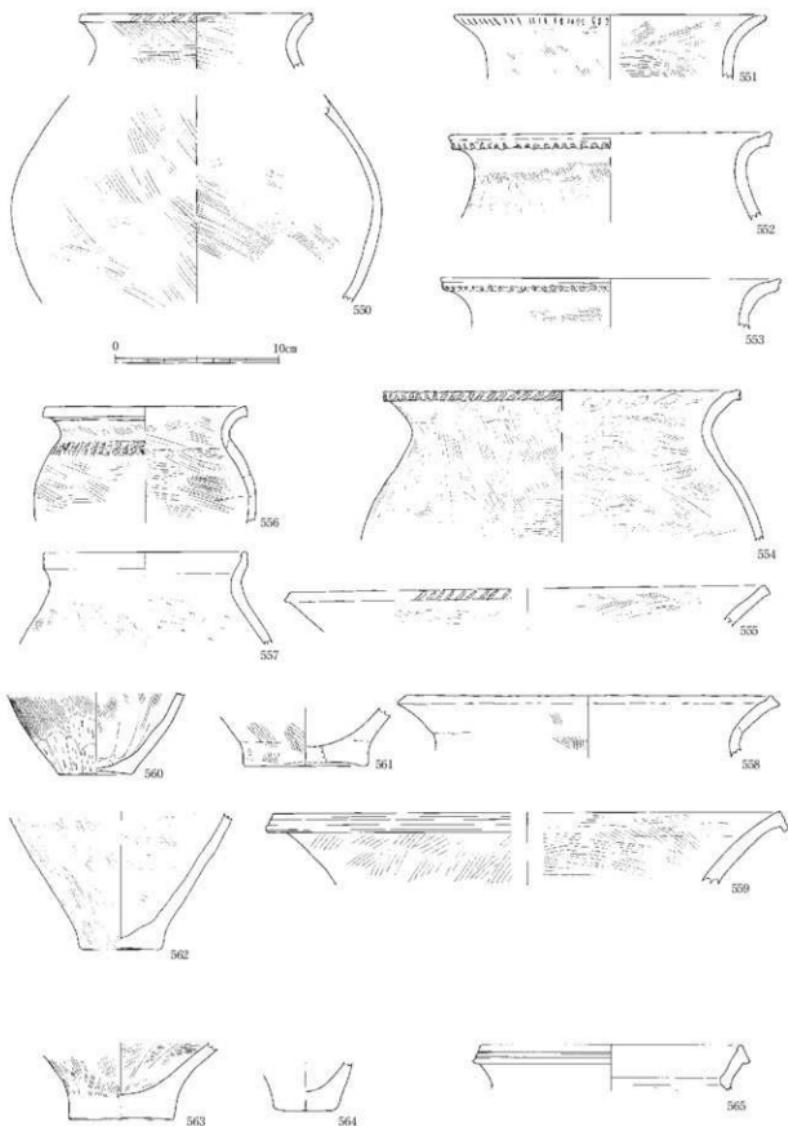
第48図 弥生・古墳時代の土器実測図28 (S=1/3)



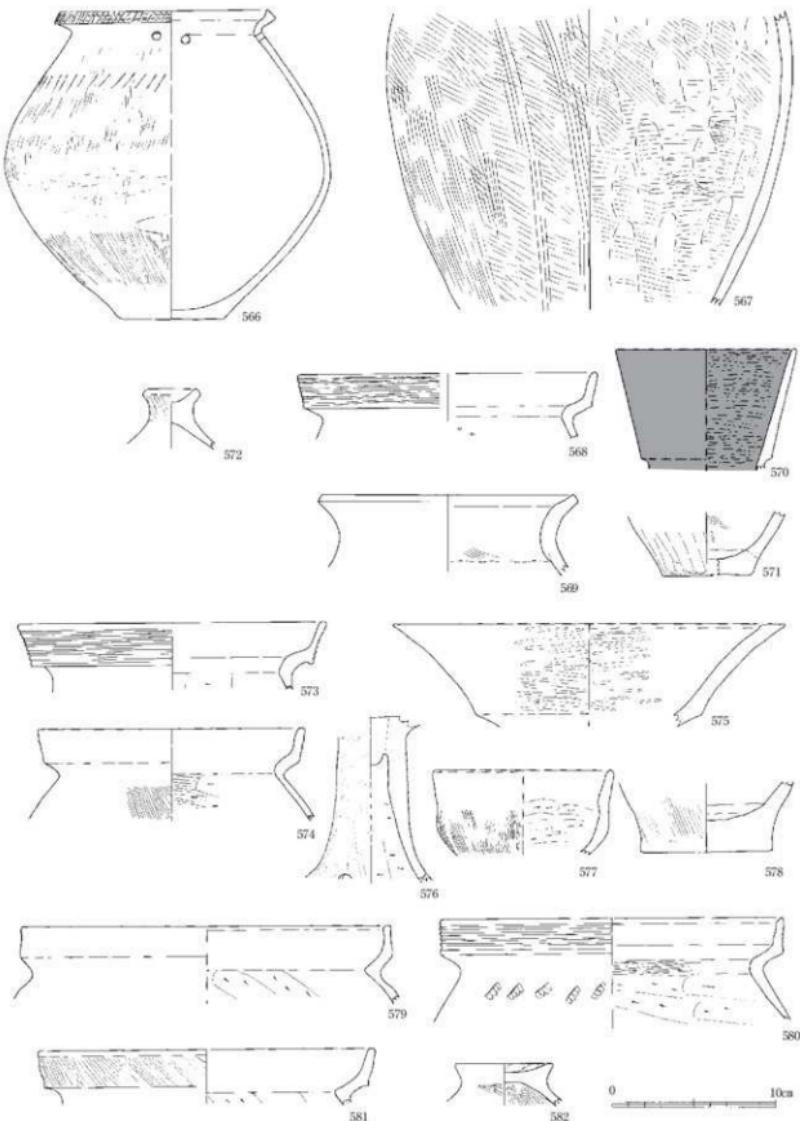
第49図 弥生・古墳時代の土器実測図29 (S=1/3)



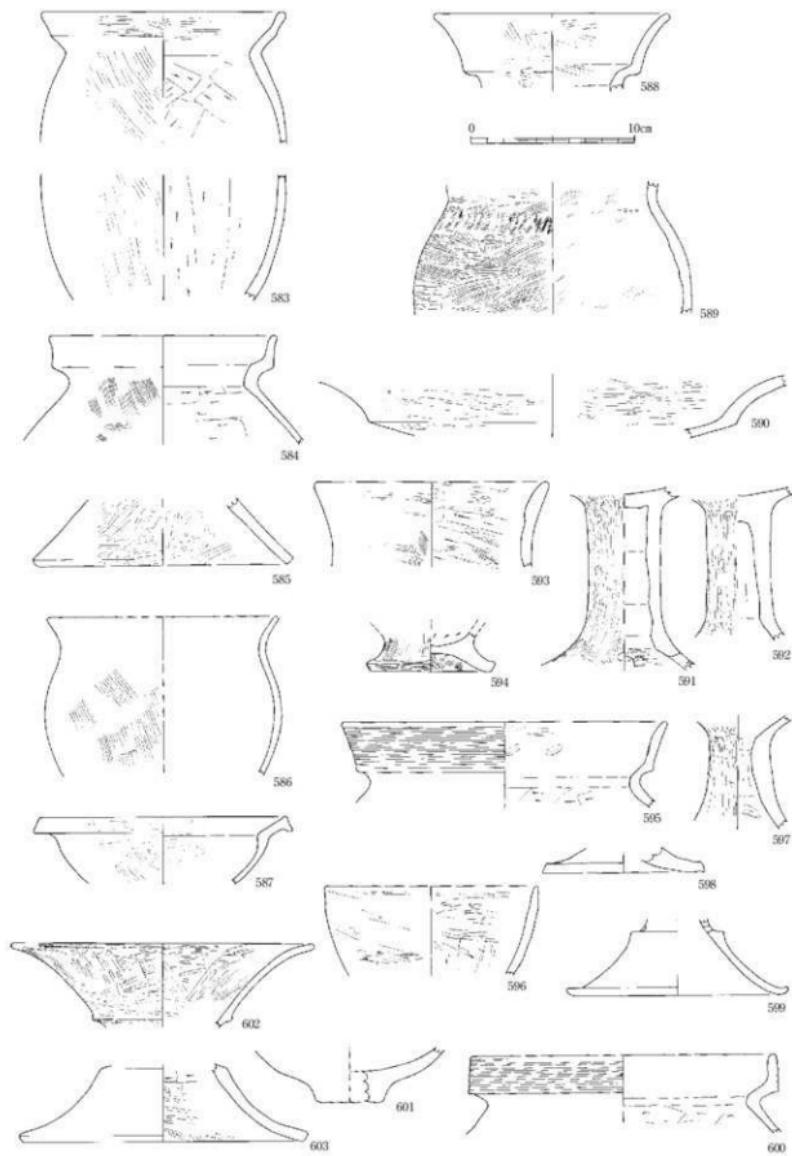
第50図 弥生・古墳時代の土器実測図30 (S=1/3)



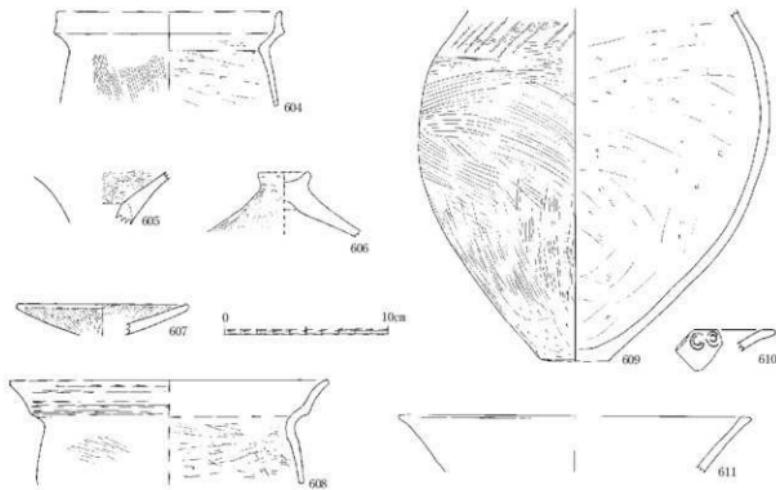
第51図 弥生・古墳時代の土器実測図31 (S=1/3)



第52図 弥生・古墳時代の土器実測図32 (S=1/3)



第53図 弥生・古墳時代の土器実測図33 (S=1/3)



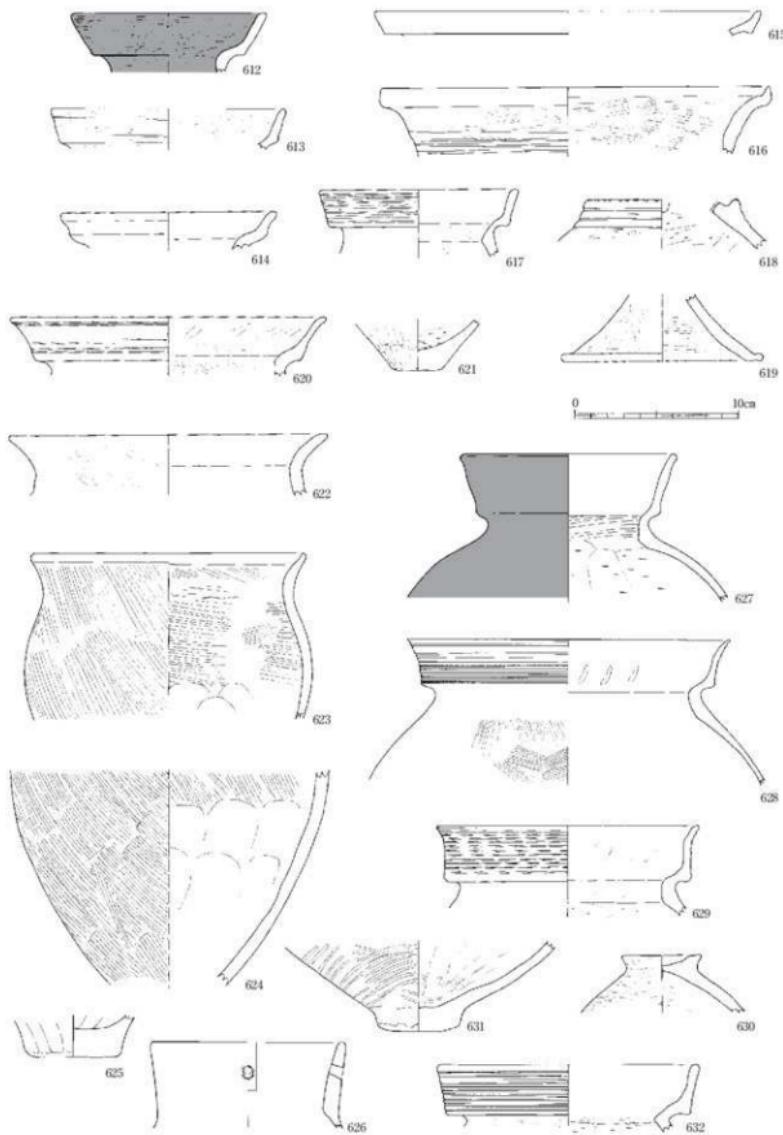
第54図 弥生・古墳時代の土器実測図34 (S=1/3)

b 古代以降の土器・陶磁器

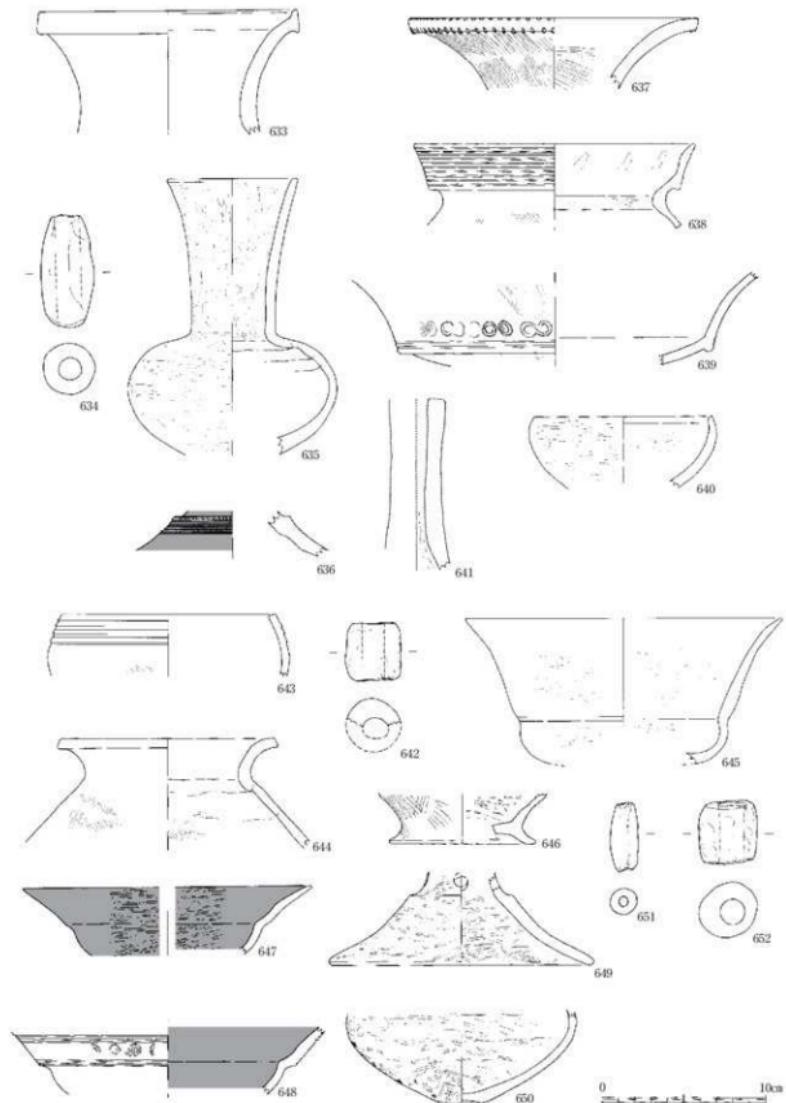
少量であるが、古代以降の土器・陶磁器も出土している。古代の須恵器（703～707）・土師器（708～711）と、中世以降の陶磁器（712～722）、時期不明の土製品（723）が図化されている（第59図）。遺構から出土しているものは少ないが、18号溝の須恵器有台杯（705）、P60の土師器有台椀（708）、P44の土師器甕（711）は遺構の時期を示す可能性が高く、他遺構より後出する遺構実測図の表現とも整合する。2号溝の白磁（712）・越前（719）・志野（722）については混入であろう。

須恵器は無台杯（703）・有台杯（706）が古代土器編年のIV期頃、有台杯（705）がVI期頃の時期である。甕（707）は底部平底で、胴部は内面の當て具痕をカキメ調整とその後のハケ調整で消す。土師器は有台椀（708）がVI期の時期である。土師器の甕（709～711）はいずれも小破片で詳細は不明であるが、つくりがよく、異質である。特に外面格子タタキ・内面無文の當て具痕調整のもの（709）は、出土遺構が35号溝であることからも、弥生・古墳時代に遡る可能性がある。白磁は碗底部（712）が11～12世紀、青磁は蓮弁文碗（714）・端反り碗（716）が14世紀、碗底部（713）・稜花皿（715）・細い蓮弁文の碗（717）が15～16世紀の時期である。朝鮮王朝陶磁の雜軸碗（718）は底部内外面に胎土目跡が観察できる。時期は16世紀である。越前の甕（719～721）は口縁形態から14世紀、志野の皿（722）は17世紀の時期である。土製品（723）は植物由来の不規則な条痕が観察される焼粘土塊であり、壁材の可能性がある。

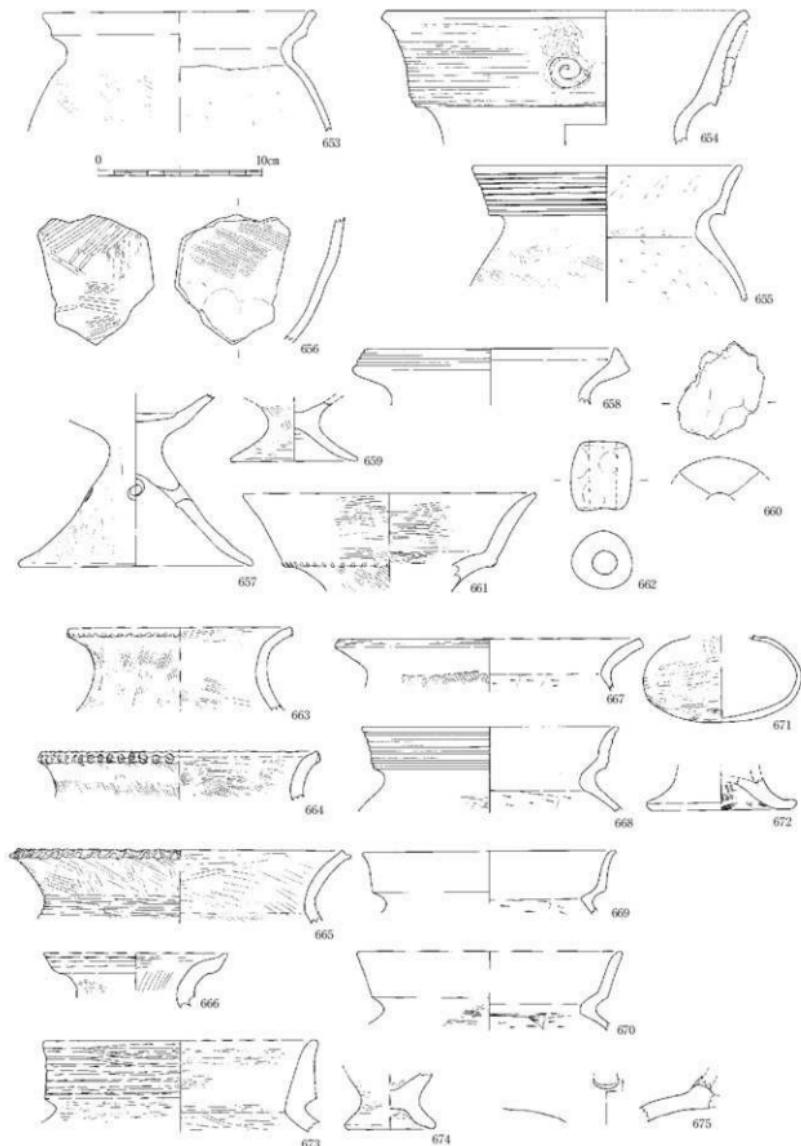
古代以降の土器・土製品はこの他、前項の挿図にも含まれており、土師器（435・439・641）、土鍤（189・239・634・642・651・652・662・678・683・684・687・688・702）、輪の羽口（660・701）がある。土師器の時期は古代土器編年のVI期頃、土鍤の時期は紡錘形のもの（634・651・702）が古代の可能性があり、その他は中世以降と推定される。輪の羽口は時期不明である。



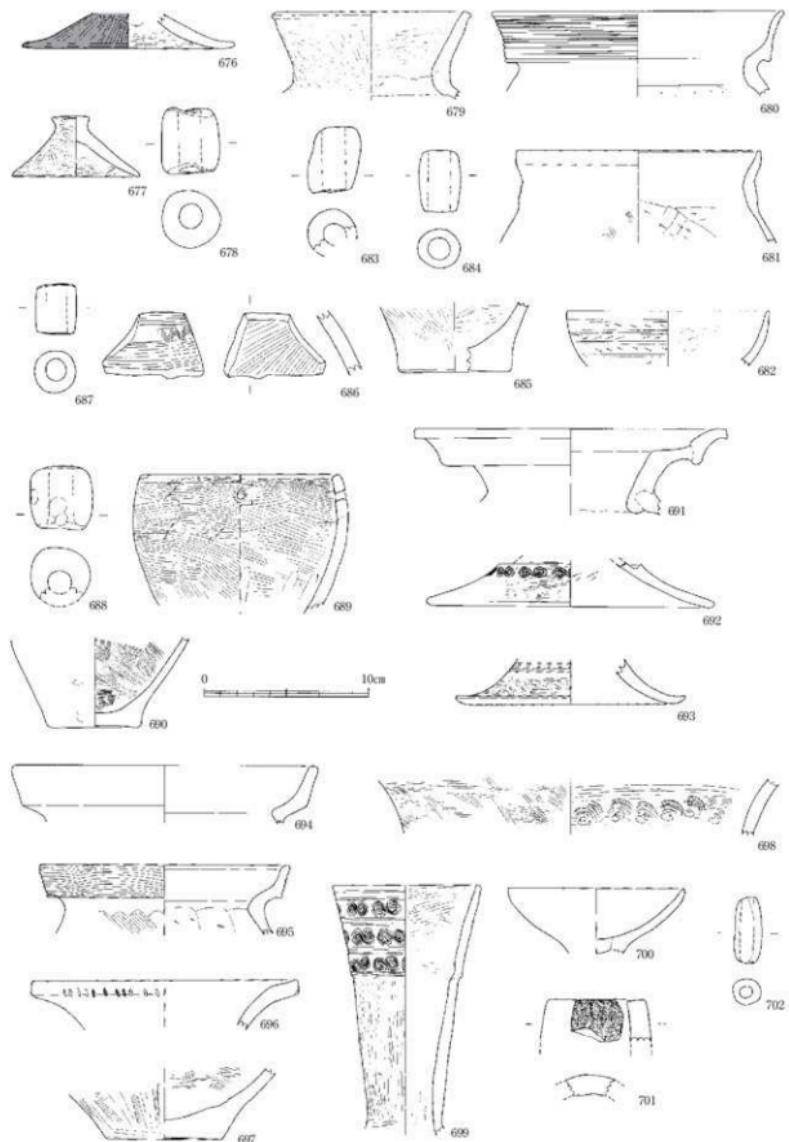
第55図 弥生・古墳時代の土器実測図35 (S=1/3)



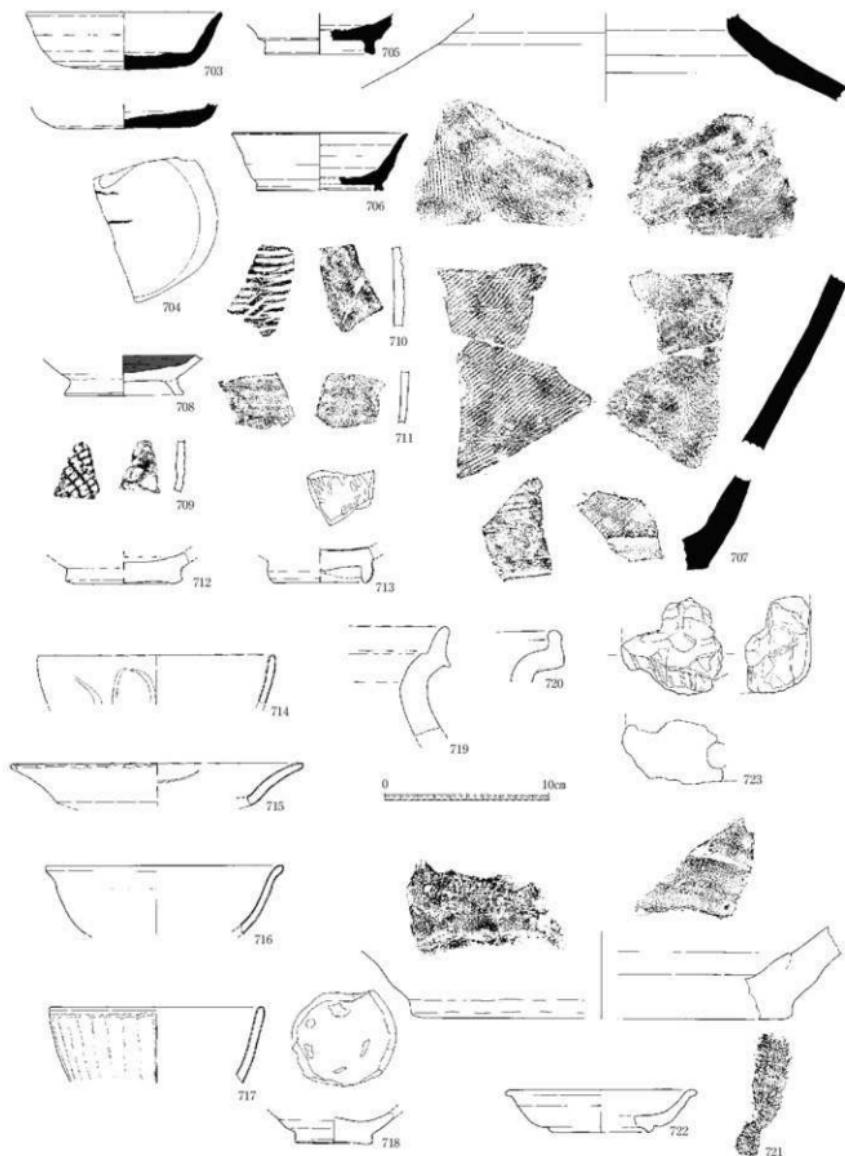
第56図 弥生・古墳時代の土器実測図36 (S=1/3)



第57図 弥生・古墳時代の土器実測図37 (S=1/3)



第58図 弥生・古墳時代の土器実測図38 (S=1/3)



第59図 古代以降の土器・陶磁器実測図 (S=1/3)

第2表 弟生・古河時代の土器調査表 1

番号	測量地名	測量名	(詳細)	口径 cm	高さ cm	底径 cm	測量(内)		測量(外)	
							底土	砂質少	底土	砂質多
1	66	1号窯	下	18.0	5.5	5.5	—	—	33.7	—
2	67	1号窯	下	16.0	4.7	—	—	—	33.7	—
3	71	1号窯	下	20.0	5.0	5.0	—	—	33.7	—
4	47	1号窯	下	14.2	6.2	—	—	—	33.7	—
5	26	1号窯	下	22.0	5.7	5.7	—	—	33.7	—
6	44	1号窯	下	15.4	4.8	4.8	—	—	33.7	—
7	37	1号窯	下	18.6	9.2	—	—	—	33.7	—
8	5	1号窯	下	16.0	5.2	—	—	—	33.7	—
9	4	1号窯	下	15.0	9.3	—	—	—	33.7	—
10	69	1号窯	下	13.0	9.0	—	—	—	33.7	—
11	7	1号窯	下	27.0	9.8	—	—	—	33.7	—
12	13	1号窯	下、底不明	15.0	7.7	—	—	—	33.7	—
13	40	1号窯	下	14.9	5.5	—	—	—	33.7	—
14	45	1号窯	下	15.7	4.8	—	—	—	33.7	—
15	48	1号窯	下	16.3	5.7	5.7	—	—	33.7	—
16	95	1号窯	下	14.0	6.1	6.1	—	—	33.7	—
17	35	1号窯	下	14.0	6.0	6.0	—	—	33.7	—
18	22	1号窯	下	13.2	8.2	—	—	—	33.7	—
19	3	1号窯	下	13.2	9.7	—	—	—	33.7	—
20	29	1号窯	下	26.0	9.7	—	—	—	33.7	—
21	81	1号窯	下	14.0	14.6	14.6	—	—	33.7	—
22	38	1号窯	下	18.2	20.0	—	—	—	33.7	—
23	34	1号窯	下	14.2	14.0	—	—	—	33.7	—
24	74	1号窯	下	13.0	8.1	—	—	—	33.7	—
25	79	1号窯	下	13.0	7.7	—	—	—	33.7	—
26	21	1号窯	下	13.0	7.7	—	—	—	33.7	—
27	29	1号窯	下	13.0	7.7	—	—	—	33.7	—
28	69	1号窯	下	14.2	5.3	—	—	—	33.7	—
29	33	1号窯	下	11.6	14.9	—	—	—	33.7	—
30	43	1号窯	下	11.6	14.9	—	—	—	33.7	—
31	39	1号窯	下	15.1	6.5	—	—	—	33.7	—
32	41	1号窯	下	13.0	7.7	—	—	—	33.7	—
33	42	1号窯	下	13.0	7.7	—	—	—	33.7	—
34	73	1号窯	下	13.0	7.7	—	—	—	33.7	—
35	72	1号窯	下	13.0	7.7	—	—	—	33.7	—
36	79	1号窯	下	13.0	7.7	—	—	—	33.7	—
37	83	1号窯	下	13.0	7.7	—	—	—	33.7	—
38	84	1号窯	下	13.0	7.5	—	—	—	33.7	—
39	290	1号窯	下	7.5	5.9	—	—	—	33.7	—
40	289	1号窯	下	30.5	—	—	—	—	33.7	—
41	29	1号窯	下	13.0	8.3	—	—	—	33.7	—
42	298	1号窯	下	13.0	8.3	—	—	—	33.7	—
43	29	1号窯	下	13.0	8.3	—	—	—	33.7	—
44	24	1号窯	下	11.0	4.7	—	—	—	33.7	—
45	73	1号窯	下	18.0	5.1	—	—	—	33.7	—
46	701	1号窯	下	14.0	5.8	—	—	—	33.7	—
47	82	1号窯	下	14.0	20.1	—	—	—	33.7	—
48	23	1号窯	下	—	—	—	—	—	33.7	—
49	84	1号窯	下	—	—	—	—	—	33.7	—
50	816	1号窯	蓋小臺台	—	—	—	—	—	33.7	—

第2表 异生・古墳時代の土器調査表 2

番号	測量面番号/グリッド	測量名	(詳細)	測量	口径cm	底面cm	高さcm	色調(?)	色調(?)	測量(?)		測量(?)
										底台	底台	
51	25	1号溝	下	底台	(10.1)			(6.6) 淡青	底台	(7.4) 黄緑		
52	617	1号溝	下	底台	(8.8)			(8.9) にごい青	底台	(8.9) にごい青	底台	小型土器?
53	67	1号溝	下	底台	(15.0)			(8.9) にごい青	底台	(8.9) にごい青	底台	透視
54	618	1号溝	下	底台	(12.0)			(5.4) にごい青	底台	(5.4) にごい青	底台	透視
55	53	1号溝	下	底台	(17.4)			(8.3) にごい青	底台	(8.3) にごい青	底台	透視
56	27	1号溝	下	底台	(2.0)			(2.0) にごい青	底台	(2.0) にごい青	底台	透視
57	18	1号溝	下	底台	(12.0)			(7.0) にごい青	底台	(7.0) にごい青	底台	透視
58	8	1号溝	下	底台	(14.5)			(5.8) にごい青	底台	(5.8) にごい青	底台	透視
59	95	1号溝	下	底台					底台		底台	透視
60	620	1号溝	下	底台					底台		底台	透視
61	70	1号溝	下	底台					底台		底台	透視
62	80	1号溝	下	底台	(3.5)			(3.5) にごい青	底台	(3.5) にごい青	底台	透視
63	22	1号溝	下	底台	(14.3)			(3.4) にごい青	底台	(3.4) にごい青	底台	透視
64	1	1号溝	下	底台	(13.7)			(2.9) にごい青	底台	(2.9) にごい青	底台	透視
65	764	1号溝	下	底台	(14.1)			(2.9) にごい青	底台	(2.9) にごい青	底台	透視
66	2	1号溝	下	底台	(18.5)			(2.5) にごい青	底台	(2.5) にごい青	底台	透視
67	702	1号溝	下	底台	(13.2)			(4.0) にごい青	底台	(4.0) にごい青	底台	透視
68	92	1号溝	下	底台	(4.8)			(12.5) にごい青	底台	(12.5) にごい青	底台	透視
69	93	1号溝	下	底台	(11.2)			(4.5) にごい青	底台	(4.5) にごい青	底台	透視
70	703	1号溝	上	底台	(14.2)			(10.7) 白	底台	(10.7) 白	底台	透視
71	17	1号溝	上	底台	(4.2)			(10.0) にごい青	底台	(10.0) にごい青	底台	透視
72	97	1号溝	上	底台	(4.0)			(4.8) にごい青	底台	(4.8) にごい青	底台	透視
73	19	1号溝	上	底台	(12.0)			(3.9) 淡青	底台	(3.9) 淡青	底台	透視
74	81	1号溝	上	底台	(2.1)			(3.9) 淡青	底台	(3.9) 淡青	底台	透視
75	21	1号溝	上	底台	(6.7)			(4.5) 淡青	底台	(4.5) 淡青	底台	透視
76	20	1号溝	上	底台	(14.0)			(4.0) にごい青	底台	(4.0) にごい青	底台	透視
77	89	1号溝	上	底台	(15.0)			(4.0) にごい青	底台	(4.0) にごい青	底台	透視
78	60	1号溝	上	底台	(8.0)			(4.0) にごい青	底台	(4.0) にごい青	底台	透視
79	95	1号溝	上	底台	(30.2)			(6.0) 淡青	底台	(6.0) 淡青	底台	透視
80	95	1号溝	上	底台	(21.2)			(1.3) にごい青	底台	(1.3) にごい青	底台	透視
81	59	1号溝	上	底台	(15.0)			(6.0) にごい青	底台	(6.0) にごい青	底台	透視
82	700	1号溝	上	底台	(6.0)			(3.4) にごい青	底台	(3.4) にごい青	底台	透視
83	19	1号溝	上	底台	(13.0)			(8.1) にごい青	底台	(8.1) にごい青	底台	透視
84	94	1号溝	上	底台	(4.8)			(4.8) にごい青	底台	(4.8) にごい青	底台	透視
85	14	1号溝	上	底台	(8.0)			(4.7) にごい青	底台	(4.7) にごい青	底台	透視
86	92	1号溝	上	底台				(3.0) 淡青	底台	(3.0) 淡青	底台	透視
87	93	1号溝	上	底台				(3.8) にごい青	底台	(3.8) にごい青	底台	透視
88	92	1号溝	上	底台				(4.7) 淡青	底台	(4.7) 淡青	底台	透視
89	51	1号溝	上	底台				(7.2) にごい青	底台	(7.2) にごい青	底台	透視
90	699	1号溝	上	底台	(24.1)			(7.3) にごい青	底台	(7.3) にごい青	底台	透視
91	9	1号溝	下	底台	(22.4)			(4.8) にごい青	底台	(4.8) にごい青	底台	透視
92	54	1号溝	下	底台	(19.2)			(9.0) 淡青	底台	(9.0) 淡青	底台	透視
93	49	1号溝	下	底台				(3.0) 淡青	底台	(3.0) 淡青	底台	透視
94	90	1号溝	下	底台				(12.1) にごい青	底台	(12.1) にごい青	底台	透視
95	91	1号溝	下	底台	(11.0)			(4.7) 淡青	底台	(4.7) 淡青	底台	透視
96	91	1号溝	下	底台	(11.0)			(9.5) にごい青	底台	(9.5) にごい青	底台	透視
97	698	1号溝	下	底台	(11.0)			(6.6) にごい青	底台	(6.6) にごい青	底台	透視

第2表 异生・古墳時代の土器断面観察表 3

番号	測量部位	測量名	(詳細)	測量	口径cm	底径cm	高さcm	色調(内)	色調(外)	測量(内)		測量(外)		
								厚さ	(2.9倍)	厚さ	(2.9倍)	厚さ	(2.9倍)	
99	705	西端部クリップ	1号壙	盤台	10.4	(6.2)	(5.2)	にぶい黄褐色	黄	1mm前後の砂利や多孔質	33.0	アマ	33.0	アマ
99	15	1号壙		盤台	9.0	(5.2)	(5.2)	にぶい黄褐色	黄	1mm前後の砂利や多孔質	33.0	アマ	33.0	アマ
100	35	1号壙		張掛盤台	8.6	(4.3)	(4.3)	にぶい黄褐色	黄	1mm前後の砂利や多孔質	33.0	アマ	33.0	アマ
101	56	1号壙	台付土器	盤台	7.5	(3.8)	(3.8)	にぶい黄褐色	黄	1mm前後の砂利や多孔質	33.0	アマ	33.0	アマ
102	53	1号壙	台付土器	盤台	7.5	(4.3)	(4.3)	にぶい黄褐色	黄	1mm前後の砂利や多孔質	33.0	アマ	33.0	アマ
103	49	1号壙		盤台	3.1	(2.0)	(2.0)	にぶい黄褐色	黄	1mm前後の砂利や多孔質	33.0	アマ	33.0	アマ
104	50	1号壙		盤台	4.4	(5.3)	(5.3)	にぶい黄褐色	黄	1mm前後の砂利や多孔質	33.0	アマ	33.0	アマ
105	89	1号壙		盤台	12.0	(11.8)	(11.3)	にぶい黄褐色	黄	1mm前後の砂利や多孔質	33.0	アマ	33.0	アマ
106	10	1号壙	高杯	盤台	20.0	(9.4)	(9.4)	にぶい黄褐色	黄	1mm前後の砂利や多孔質	33.0	アマ	33.0	アマ
107	11	1号壙		高杯	4.2	(3.4)	(3.4)	にぶい黄褐色	黄	1mm前後の砂利や多孔質	33.0	アマ	33.0	アマ
108	691	1号壙	高杯	盤台	5.9	(3.4)	(3.4)	にぶい黄褐色	黄	1mm前後の砂利や多孔質	33.0	アマ	33.0	アマ
109	891	1号壙	高杯	盤台	5.9	(3.4)	(3.4)	にぶい黄褐色	黄	1mm前後の砂利や多孔質	33.0	アマ	33.0	アマ
110	12	1号壙	高杯	盤台	3.5	(2.2)	(2.2)	にぶい黄褐色	黄	1mm前後の砂利や多孔質	33.0	アマ	33.0	アマ
111	87	1号壙	高杯	盤台	4.5	(4.4)	(4.4)	にぶい黄褐色	黄	1mm前後の砂利や多孔質	33.0	アマ	33.0	アマ
112	86	1号壙	高杯	盤台	6.8	(5.5)	(5.5)	にぶい黄褐色	黄	1mm前後の砂利や多孔質	33.0	アマ	33.0	アマ
113	219	C-S		高杯	7.7	(5.6)	(5.6)	白	白	1mm前後の砂利や多孔質	33.0	アマ	33.0	アマ
114	141	2号壙		高杯	7.7	(4.3)	(4.3)	白	白	1mm前後の砂利や多孔質	33.0	アマ	33.0	アマ
115	139	2号壙		高杯	16.4	(12.5)	(12.5)	白	白	1mm前後の砂利や多孔質	33.0	アマ	33.0	アマ
116	222	2号壙		高杯	22.0	(16.5)	(16.5)	白	白	1mm前後の砂利や多孔質	33.0	アマ	33.0	アマ
117	260	2号壙		高杯	2.7	(1.9)	(1.9)	白	白	1mm前後の砂利や多孔質	33.0	アマ	33.0	アマ
118	123-B-7	2号壙		盤台	18.0	(10.1)	(10.1)	白	白	1mm前後の砂利や多孔質	33.0	アマ	33.0	アマ
119	142	2号壙		盤台	2.4	(4.5)	(4.5)	白	白	1mm前後の砂利や多孔質	33.0	アマ	33.0	アマ
120	132	2号壙		盤台	2.4	(4.5)	(4.5)	白	白	1mm前後の砂利や多孔質	33.0	アマ	33.0	アマ
121	199-C-7,C-8,D-7	2号壙		盤台	19.0	(12.4)	(12.4)	白	白	1mm前後の砂利や多孔質	33.0	アマ	33.0	アマ
122	196	2号壙		盤台	19.4	(12.5)	(12.5)	白	白	1mm前後の砂利や多孔質	33.0	アマ	33.0	アマ
123	223	2号壙		盤台	14.0	(7.6)	(7.6)	白	白	1mm前後の砂利や多孔質	33.0	アマ	33.0	アマ
124	185	2号壙		盤台	16.4	(10.3)	(10.3)	白	白	1mm前後の砂利や多孔質	33.0	アマ	33.0	アマ
125	124	2号壙		盤台	18.7	(8.2)	(8.2)	白	白	1mm前後の砂利や多孔質	33.0	アマ	33.0	アマ
126	125-B-6	2号壙		盤台	13.0	(5.8)	(5.8)	白	白	1mm前後の砂利や多孔質	33.0	アマ	33.0	アマ
127	206	2号壙		盤台	17.8	(9.1)	(9.1)	白	白	1mm前後の砂利や多孔質	33.0	アマ	33.0	アマ
128	119	2号壙		盤台	15.5	(8.4)	(8.4)	白	白	1mm前後の砂利や多孔質	33.0	アマ	33.0	アマ
129	188-B-5	2号壙		盤台	17.6	(9.9)	(9.9)	白	白	1mm前後の砂利や多孔質	33.0	アマ	33.0	アマ
130	101-B-9	2号壙		盤台	18.0	(9.5)	(9.5)	白	白	1mm前後の砂利や多孔質	33.0	アマ	33.0	アマ
131	137	2号壙		盤台	17.0	(9.0)	(9.0)	白	白	1mm前後の砂利や多孔質	33.0	アマ	33.0	アマ
132	203-B-4	2号壙		盤台	17.0	(9.0)	(9.0)	白	白	1mm前後の砂利や多孔質	33.0	アマ	33.0	アマ
133	139	2号壙		盤台	18.0	(9.5)	(9.5)	白	白	1mm前後の砂利や多孔質	33.0	アマ	33.0	アマ
134	138	2号壙		盤台	18.0	(9.5)	(9.5)	白	白	1mm前後の砂利や多孔質	33.0	アマ	33.0	アマ
135	143	2号壙		盤台	16.4	(8.8)	(8.8)	白	白	1mm前後の砂利や多孔質	33.0	アマ	33.0	アマ
136	135	2号壙		盤台	15.6	(8.2)	(8.2)	白	白	1mm前後の砂利や多孔質	33.0	アマ	33.0	アマ
137	146	2号壙		盤台	14.0	(4.9)	(4.9)	白	白	1mm前後の砂利や多孔質	33.0	アマ	33.0	アマ
138	130-C-6	2号壙		盤台	13.8	(4.8)	(4.8)	白	白	1mm前後の砂利や多孔質	33.0	アマ	33.0	アマ
139	140	2号壙		盤台	10.6	(5.7)	(5.7)	白	白	1mm前後の砂利や多孔質	33.0	アマ	33.0	アマ
140	132	2号壙		盤台	16.0	(4.5)	(4.5)	白	白	1mm前後の砂利や多孔質	33.0	アマ	33.0	アマ
141	130	2号壙		盤台	13.2	(5.2)	(5.2)	白	白	1mm前後の砂利や多孔質	33.0	アマ	33.0	アマ
142	138	2号壙		盤台	18.0	(3.6)	(3.6)	白	白	1mm前後の砂利や多孔質	33.0	アマ	33.0	アマ

第2表 异生・古墳時代の土器断面表 4

番号	測量年(グリッド)	測量名	(詳細)	断面	口径cm	底径cm	高さcm	断面(円)	断面(方形)	断面(外)	断面(内)	測量外
								内	外	内	外	内
144	629	2号溝	下	井	9.9	(9.0)	(3.3)	直井	直井	直井	直井	ヨリナカ、アラマサ
145	629-B-6	2号溝	下	井	16.0	(16.0)	(4.8)	直井	直井	直井	直井	ヨリナカ、アラマサ
146	127	2号溝	下	井	14.0	(14.0)	(4.8)	直井	直井	直井	直井	ヨリナカ、アラマサ
147	131	2号溝	下	井	13.0	(13.0)	(3.4)	直井	直井	直井	直井	ヨリナカ、アラマサ
148	2025-B-9	2号溝	下	井	13.0	(13.0)	(3.4)	直井	直井	直井	直井	ヨリナカ、アラマサ
150	186	2号溝	下	井	12.0	(9.0)	(3.0)	直井	直井	直井	直井	ヨリナカ、アラマサ
151	117	2号溝	下	井	—	—	—	直井	直井	直井	直井	ヨリナカ、アラマサ
152	115	2号溝	下	井	—	—	—	直井	直井	直井	直井	ヨリナカ、アラマサ
153	223	2号溝	下	井	—	—	—	直井	直井	直井	直井	ヨリナカ、アラマサ
154	116	2号溝	下	井	—	—	—	直井	直井	直井	直井	ヨリナカ、アラマサ
155	119	2号溝	下	井	—	—	—	直井	直井	直井	直井	ヨリナカ、アラマサ
156	144	2号溝	下	井	—	—	—	直井	直井	直井	直井	ヨリナカ、アラマサ
157	200	2号溝	下	井	—	—	—	直井	直井	直井	直井	ヨリナカ、アラマサ
158	112	2号溝	下	井	—	—	—	直井	直井	直井	直井	ヨリナカ、アラマサ
159	121	2号溝	下	井	—	—	—	直井	直井	直井	直井	ヨリナカ、アラマサ
160	187	2号溝	下	井	—	—	—	直井	直井	直井	直井	ヨリナカ、アラマサ
161	207	2号溝	下	井	—	—	—	直井	直井	直井	直井	ヨリナカ、アラマサ
162	120	2号溝	下	井	—	—	—	直井	直井	直井	直井	ヨリナカ、アラマサ
163	222	2号溝	下	井	—	—	—	直井	直井	直井	直井	ヨリナカ、アラマサ
164	179	2号溝	下	井	—	—	—	直井	直井	直井	直井	ヨリナカ、アラマサ
165	154	2号溝	下	井	—	—	—	直井	直井	直井	直井	ヨリナカ、アラマサ
166	156	2号溝	下	井	—	—	—	直井	直井	直井	直井	ヨリナカ、アラマサ
167	151	2号溝	下	井	—	—	—	直井	直井	直井	直井	ヨリナカ、アラマサ
168	218-C-8	2号溝	下	井	—	—	—	直井	直井	直井	直井	ヨリナカ、アラマサ
169	152	2号溝	下	井	—	—	—	直井	直井	直井	直井	ヨリナカ、アラマサ
170	153	2号溝	下	井	—	—	—	直井	直井	直井	直井	ヨリナカ、アラマサ
171	149	2号溝	下	井	—	—	—	直井	直井	直井	直井	ヨリナカ、アラマサ
172	196	2号溝	下	井	—	—	—	直井	直井	直井	直井	ヨリナカ、アラマサ
173	213	2号溝	下	井	—	—	—	直井	直井	直井	直井	ヨリナカ、アラマサ
174	153	2号溝	下	井	—	—	—	直井	直井	直井	直井	ヨリナカ、アラマサ
175	155	2号溝	下	井	—	—	—	直井	直井	直井	直井	ヨリナカ、アラマサ
176	211	2号溝	下	井	—	—	—	直井	直井	直井	直井	ヨリナカ、アラマサ
177	215	2号溝	下	井	—	—	—	直井	直井	直井	直井	ヨリナカ、アラマサ
178	214	2号溝	下	井	—	—	—	直井	直井	直井	直井	ヨリナカ、アラマサ
179	154	2号溝	下	井	—	—	—	直井	直井	直井	直井	ヨリナカ、アラマサ
180	216	2号溝	下	井	—	—	—	直井	直井	直井	直井	ヨリナカ、アラマサ
181	212	2号溝	下	井	—	—	—	直井	直井	直井	直井	ヨリナカ、アラマサ
182	221	2号溝	下	井	—	—	—	直井	直井	直井	直井	ヨリナカ、アラマサ
183	126	2号溝	下	井	—	—	—	直井	直井	直井	直井	ヨリナカ、アラマサ
184	111-D-3	2号溝	下	井	—	—	—	直井	直井	直井	直井	ヨリナカ、アラマサ
185	105-B-3	2号溝	下	井	—	—	—	直井	直井	直井	直井	ヨリナカ、アラマサ
186	183-B-3	2号溝	下	井	—	—	—	直井	直井	直井	直井	ヨリナカ、アラマサ
187	147-D-7	2号溝	下	井	—	—	—	直井	直井	直井	直井	ヨリナカ、アラマサ
188	149	2号溝	下	井	—	—	—	直井	直井	直井	直井	ヨリナカ、アラマサ
189	220	2号溝	下	井	—	—	—	直井	直井	直井	直井	ヨリナカ、アラマサ
190	198-C-7	2号溝	下	井	—	—	—	直井	直井	直井	直井	ヨリナカ、アラマサ
191	197-C-7	2号溝	下	井	—	—	—	直井	直井	直井	直井	ヨリナカ、アラマサ
192	109-C-7	2号溝	下	井	—	—	—	直井	直井	直井	直井	ヨリナカ、アラマサ
193	110-C-7	2号溝	下	井	—	—	—	直井	直井	直井	直井	ヨリナカ、アラマサ
194	217-B-3	2号溝	下	井	—	—	—	直井	直井	直井	直井	ヨリナカ、アラマサ
195	190-B-7	2号溝	下	井	—	—	—	直井	直井	直井	直井	ヨリナカ、アラマサ
196	176	2号溝	下	井	—	—	—	直井	直井	直井	直井	ヨリナカ、アラマサ
197	188	2号溝	下	井	—	—	—	直井	直井	直井	直井	ヨリナカ、アラマサ

第2表 异生・古墳時代の土器断面研究表 5

番号	断面名	(詳細)	断面	口径cm	底径cm	高さcm	色調(?)	色調(?)	断面外	断面内
199	2号筒		筒	(17.5)	—	—	明黄	明黄	—	—
199	2号筒		筒	19.0	—	—	(3.4)	—	ヨリナリ、アマ	ヨリナリ、アマ
200	2号筒		筒	19.0	—	—	(3.4)	—	ヨリナリ、アマ	ヨリナリ、アマ
201	174		筒	(26.0)	—	—	（10.4）	（10.4）	—	—
202	172		筒	(26.0)	—	—	（10.4）	（10.4）	—	—
203	187	2号筒	筒	(24.0)	—	—	(8.0)	（8.0）	—	—
204	177	2号筒	筒	(24.0)	—	—	(8.0)	（8.0）	—	—
205	171	2号筒	筒	(19.0)	—	—	(4.5)	（4.5）	—	—
206	175	2号筒	筒	(19.0)	—	—	(4.1)	（4.1）	ヨリナリ、ナガ	ヨリナリ、ナガ
207	185-C		筒	—	—	—	—	—	—	—
208	180	2号筒	筒	—	—	—	—	—	—	—
209	190	2号筒	筒	(19.0)	—	—	(8.0)	（8.0）	—	—
210	189	2号筒	筒	(19.0)	—	—	(8.0)	（8.0）	—	—
211	178	2号筒	筒	(19.0)	—	—	(8.0)	（8.0）	—	—
212	188	2号筒	筒	(20.0)	—	—	(8.4)	（8.4）	—	—
213	192	2号筒	筒	(20.0)	—	—	(8.4)	（8.4）	—	—
214	197	2号筒	筒	(18.0)	—	—	(8.8)	（8.8）	—	—
215	193	2号筒	筒	(18.0)	—	—	(8.9)	（8.9）	—	—
216	194	2号筒	筒	(21.0)	—	—	(8.8)	（8.8）	—	—
217	195	2号筒	筒	(21.0)	—	—	(8.2)	（8.2）	—	—
218	821	2号筒	筒	(21.0)	—	—	(7.6)	（7.6）	—	—
219	191	2号筒	筒	(21.0)	—	—	(7.6)	（7.6）	—	—
220	825	2号筒	筒	(21.0)	—	—	(7.6)	（7.6）	—	—
221	826	2号筒	筒	(21.0)	—	—	(7.6)	（7.6）	—	—
222	193	2号筒	筒	(21.0)	—	—	(7.6)	（7.6）	—	—
223	824	2号筒	筒	(21.0)	—	—	(7.6)	（7.6）	—	—
224	823	2号筒	筒	(21.0)	—	—	(7.6)	（7.6）	—	—
225	827	2号筒	筒	(21.0)	—	—	(7.6)	（7.6）	—	—
226	194	2号筒	筒	(21.0)	—	—	(7.6)	（7.6）	—	—
227	822	2号筒	筒	(21.0)	—	—	(7.6)	（7.6）	—	—
228	194	2号筒	筒	(21.0)	—	—	(7.6)	（7.6）	—	—
229	162-B-9	2号筒	筒	(8.1)	2.5	10.3	灰黄	（4.8）	ヨリナリ	ヨリナリ
230	133	2号筒	筒	(10.0)	—	—	(5.1)	（5.1）	ヨリナリ	ヨリナリ
231	173	2号筒	筒	(10.0)	—	—	—	—	—	—
232	113	2号筒	筒	—	—	—	—	—	—	—
233	225	2号筒	筒	—	—	—	—	—	—	—
234	179	2号筒	筒	—	—	—	—	—	—	—
235	189-G-9	2号筒	筒	—	—	—	—	—	—	—
236	189-G-10	2号筒	筒	—	—	—	—	—	—	—
237	182	2号筒	筒	—	—	—	—	—	—	—
238	183	2号筒	筒	—	—	—	—	—	—	—
239	182	2号筒	筒	—	—	—	—	—	—	—
240	114-F-4	2号筒	筒	—	—	—	—	—	—	—
241	341-B-9	2号筒	筒	—	—	—	—	—	—	—
242	190	2号筒	筒	—	—	—	—	—	—	—
				16.7	3.6	7.1	深茶	深茶	ヨリナリ	ヨリナリ

第2表 异生・古墳時代の土器断面形表

番号	断面形名(グリッド)	断面名	(詳細)	断面	口径cm	底径cm	高さcm	断面形状	断面(内)		断面(外)		備考	
									小底土器	4.4	3.0	4.1	4.4	
243	2号丸	下(58)							直筒	17.4				直筒
244	3号丸	下							直筒	18.0	(5.4)	11.5	13.5	直筒
245	280-E	3号丸							直筒	15.5	(3.1)	11.5	13.5	直筒
246	280-E	3号丸							直筒	15.0	(3.9)	11.0	13.0	直筒
247	231	3号丸							直筒	14.6	(5.3)	11.0	13.0	直筒
248	252	3号丸							直筒	16.9	(22.8)	12.0	13.0	直筒
249	272	3号丸							直筒	15.2	(13.4)	11.5	13.0	直筒
250	257	3号丸							直筒	14.8	(2.9)	11.5	13.0	直筒
251	283	3号丸							直筒	13.5	(4.8)	11.0	13.0	直筒
252	258	3号丸							直筒	17.0	(4.0)	11.5	13.0	直筒
253	287	3号丸							直筒	16.5	(4.1)	11.5	13.0	直筒
254	313	3号丸							直筒	13.8	(4.1)	11.5	13.0	直筒
255	243	3号丸							直筒	17.2	(4.6)	11.5	13.0	直筒
256	258	3号丸							直筒	22.0	(7.3)	11.5	13.0	直筒
257	240	3号丸							直筒	14.8	(12.1)	11.5	13.0	直筒
258	294	3号丸							直筒	11.0	(5.8)	11.0	13.0	直筒
259	279	3号丸							直筒	13.0	(4.5)	11.0	13.0	直筒
260	337-E	3号丸							直筒	29.0	(8.5)	11.0	13.0	直筒
261	320	3号丸							直筒	20.5	(8.5)	11.0	13.0	直筒
262	259	3号丸							直筒	20.5	(8.5)	11.0	13.0	直筒
263	254	3号丸							直筒	20.5	(8.5)	11.0	13.0	直筒
264	254	3号丸							直筒	20.5	(8.5)	11.0	13.0	直筒
265	251	3号丸							直筒	20.0	(7.5)	11.0	13.0	直筒
266	253-E	3号丸							直筒	17.4	(9.4)	11.0	13.0	直筒
267	226-E	3号丸							直筒	17.2	(10.6)	11.0	13.0	直筒
268	250	3号丸							直筒	15.0	(9.9)	11.0	13.0	直筒
269	255	3号丸							直筒	17.6	(5.6)	11.0	13.0	直筒
270	339	3号丸							直筒	18.0	(7.8)	11.0	13.0	直筒
271	334-E	3号丸							直筒	15.8	(4.5)	11.0	13.0	直筒
272	281	3号丸							直筒	17.0	(6.0)	11.0	13.0	直筒
273	217	3号丸							直筒	16.5	(7.0)	11.0	13.0	直筒
274	217	3号丸							直筒	21.5	(7.0)	11.0	13.0	直筒
275	232	3号丸							直筒	10.1	(1.0)	11.0	13.0	直筒
276	272-E	3号丸							直筒	10.0	(3.6)	11.0	13.0	直筒
277	256-E	3号丸							直筒	13.0	(7.5)	11.0	13.0	直筒
278	256	3号丸							直筒	12.5	(15.4)	11.0	13.0	直筒
279	257	3号丸							直筒	12.0	(12.0)	11.0	13.0	直筒
280	239	3号丸							直筒	12.0	(4.0)	11.0	13.0	直筒
281	300-E	3号丸							直筒	12.0	(5.8)	11.0	13.0	直筒
282	287	3号丸							直筒	11.0	(14.2)	11.0	13.0	直筒
283	285	3号丸							直筒	12.0	(7.5)	11.0	13.0	直筒
284	285	3号丸							直筒	12.0	(7.5)	11.0	13.0	直筒
285	284	3号丸							直筒	13.0	(7.5)	11.0	13.0	直筒
286	238	3号丸							直筒	12.5	(13.0)	11.0	13.0	直筒
287	293	3号丸							直筒	15.4	(6.8)	11.0	13.0	直筒
288	295	3号丸							直筒	12.0	(1.0)	11.0	13.0	直筒
289	238	3号丸							直筒	11.0	(9.8)	11.0	13.0	直筒
290	290	3号丸							直筒	9.8	(14.2)	11.0	13.0	直筒
291	246	3号丸							直筒	12.0	(11.5)	11.0	13.0	直筒
292	619-E	3号丸							直筒	12.0	(12.0)	11.0	13.0	直筒
293	313-F	3号丸							直筒	13.0	(11.5)	11.0	13.0	直筒
294	313-F	3号丸							直筒	12.0	(12.0)	11.0	13.0	直筒
295	315-E	3号丸							直筒	12.0	(12.0)	11.0	13.0	直筒
296	296	3号丸							直筒	12.0	(6.4)	11.0	13.0	直筒
297	315-E	3号丸							直筒	12.0	(8.0)	11.0	13.0	直筒
298	318	3号丸							直筒	6.0	(3.0)	11.0	13.0	直筒
299	245	3号丸							直筒	6.0	(3.0)	11.0	13.0	直筒

第2表 异生・古生時代の土器断面表

番号	断面名	(断面)	断面	口径cm	底径cm	厚さcm	色調(?)	色調(?)	底質(?)	底質(?)	底質(?)
300	281	3号底	下	無地	6.0	2.4	灰白	灰白	砂土	砂土	砂土
301	282	3号底	下	無地	5.5	2.5	灰白	灰白	—2mmの砂粒少	砂土	砂土
302	283	3号底	下	無地	5.0	2.5	灰白	灰白	—2mmの砂粒少	砂土	砂土
303	284	3号底	下	無地	5.0	2.5	灰白	灰白	—2mmの砂粒少	砂土	砂土
304	287	3号底	下	無地	5.0	2.5	灰白	灰白	—2mmの砂粒少	砂土	砂土
305	104	3号底	下	無地	17.0	5.1	灰白	灰白	砂質粘土	砂質粘土	砂質粘土
306	204	3号底	下	高杯	5.0	3.0	灰白	灰白	砂質少	砂質少	砂質少
307	318	3号底	下	高杯	21.0	5.0	灰白	灰白	1mm後の砂粒少	砂土	砂土
308	291	3号底	下	高杯	13.0	4.0	灰白	灰白	0.5~2mmの砂粒少	砂土	砂土
309	289	3号底	下	高台	4.6	2.0	青	青	多	砂質少	砂質少
310	315	3号底	下	持輪輪台	4.5	2.0	青	青	砂質少	砂質少	砂質少
311	221	3号底	下	持輪輪台	15.4	12.8	灰白	灰白	砂質少	砂質少	砂質少
312	311	3号底	下	持輪輪台	14.0	11.0	灰白	灰白	砂質少	砂質少	砂質少
313	292	3号底	下	持輪輪台	11.5	9.0	灰白	灰白	砂質少	砂質少	砂質少
314	217	3号底	下	持輪輪台?	10.0	8.0	灰白	灰白	砂質少	砂質少	砂質少
315	889	3号底	下	高杯?	10.0	8.0	灰白	灰白	砂質少	砂質少	砂質少
316	284-E-7	3号底	下	高杯	11.7	9.0	灰白	灰白	砂質少	砂質少	砂質少
317	307	3号底	下	持輪輪台	8.0	6.0	灰白	灰白	砂質少	砂質少	砂質少
318	325	3号底	下	持輪輪台	10.0	8.0	灰白	灰白	砂質少	砂質少	砂質少
319	319	3号底	下	持輪輪台	13.7	10.0	灰白	灰白	砂質少	砂質少	砂質少
320	314	3号底	下	持輪輪台	13.0	10.0	灰白	灰白	砂質少	砂質少	砂質少
321	322	3号底	下	持輪輪台	10.4	8.0	灰白	灰白	砂質少	砂質少	砂質少
322	321	3号底	下	持輪輪台	10.0	8.0	灰白	灰白	砂質少	砂質少	砂質少
323	697	3号底	下	持輪輪台	10.5	8.0	灰白	灰白	砂質少	砂質少	砂質少
324	297	3号底	下	持輪輪台	12.0	8.0	灰白	灰白	砂質少	砂質少	砂質少
325	306	3号底	下	持輪輪台	13.4	8.0	灰白	灰白	砂質少	砂質少	砂質少
326	316	3号底	下	持輪輪台	7.0	5.0	灰白	灰白	砂質少	砂質少	砂質少
327	340	3号底	下	持輪輪台	3.0	2.0	灰白	灰白	砂質少	砂質少	砂質少
328	325	3号底	下	持輪輪台	3.0	2.0	灰白	灰白	砂質少	砂質少	砂質少
329	329	3号底	下	持輪輪台?	11.5	9.0	灰白	灰白	砂質少	砂質少	砂質少
330	324	3号底	下	持輪輪台	10.0	8.0	灰白	灰白	砂質少	砂質少	砂質少
331	332	3号底	下	持輪輪台	15.2	12.0	灰白	灰白	砂質少	砂質少	砂質少
332	699	3号底	下	持輪輪台	16.0	5.3	7.8	灰白	灰白	砂質少	砂質少
333	292	3号底	下	持輪輪台	10.0	4.4	7.8	灰白	灰白	砂質少	砂質少
334	297	3号底	下	持輪輪台	11.0	5.0	7.8	灰白	灰白	砂質少	砂質少
335	298	3号底	下	持輪輪台	11.0	5.0	7.8	灰白	灰白	砂質少	砂質少
336	270	3号底	下	持輪輪台	13.0	5.0	7.8	灰白	灰白	砂質少	砂質少
337	295-E-7	3号底	下	持輪輪台	15.0	5.0	7.8	灰白	灰白	砂質少	砂質少
338	232	3号底	下	持輪輪台	16.0	4.0	灰白	灰白	砂質少	砂質少	砂質少
339	233	3号底	下	持輪輪台	14.0	1.7	灰白	灰白	砂質少	砂質少	砂質少
340	259	3号底	下	持輪輪台	13.0	0.0	灰白	灰白	砂質少	砂質少	砂質少
341	283	3号底	下	持輪輪台	14.0	0.0	灰白	灰白	砂質少	砂質少	砂質少
342	388-E-7	3号底	下	持輪輪台	10.4	1.0	灰白	灰白	砂質少	砂質少	砂質少
343	226	3号底	下	持輪輪台	12.0	1.0	灰白	灰白	砂質少	砂質少	砂質少
344	225	3号底	下	持輪輪台	18.4	7.7	灰白	灰白	砂質少	砂質少	砂質少
345	289	3号底	下	持輪輪台	5.0	2.0	灰白	灰白	砂質少	砂質少	砂質少
346	248	3号底	下	持輪輪台	7.0	7.0	灰白	灰白	砂質少	砂質少	砂質少
347	302-E-7	3号底	下	持輪輪台	11.0	7.0	灰白	灰白	砂質少	砂質少	砂質少
348	288	3号底	下	持輪輪台	15.0	7.0	灰白	灰白	砂質少	砂質少	砂質少
349	698	3号底	下	持輪輪台	8.1	6.0	灰白	灰白	砂質少	砂質少	砂質少
350	626	3号底	下	持輪輪台	14.0	5.0	灰白	灰白	砂質少	砂質少	砂質少
351	278-D-7	3号底	下, 上	持輪輪台	14.0	5.0	灰白	灰白	砂質少	砂質少	砂質少

第2表 异生・古墳時代の土器調査表 8

番号	測量地名	(詳細)	断面	口径cm	底径cm	高さcm	色調(?)	色調(?)	測定(?)		測定(?)	
									底土	1mm以下の砂粒	底土	1mm以下の砂粒
352	234	3号溝	上	2.5	2.0	20.4	茶	茶	茶	茶	茶	茶
353	275	3号溝	上	2.5	2.0	20.4	茶	茶	茶	茶	茶	茶
354	277	3号溝	下	2.5	2.0	20.4	茶	茶	茶	茶	茶	茶
355	229	3号溝	SB	食	(28.0)	(6.0)	茶	茶	茶	茶	茶	茶
356	239	3号溝	SB	食	(28.0)	(7.5)	茶	茶	茶	茶	茶	茶
357	228	3号溝	SB	食	(14.0)	(4.0)	茶	茶	茶	茶	茶	茶
358	241	3号溝	SB	食	16.4	(0.7)	茶	茶	茶	茶	茶	茶
359	226	3号溝	粘土質台	(16.0)	(6.0)	茶	茶	茶	茶	茶	茶	茶
360	242	3号溝	T-SB	食	16.0	(1.5)	茶	茶	茶	茶	茶	茶
361	151	3号溝	南北引、下	食	19.0	(1.2)	茶	茶	茶	茶	茶	茶
362	263	3号溝	南北引	食	18.5	(1.5)	茶	茶	茶	茶	茶	茶
363	249	3号溝	南北引	食	18.5	(1.5)	茶	茶	茶	茶	茶	茶
364	342	4号溝	食	17.0	4.0	(21.6)	茶	茶	茶	茶	茶	茶
365	367	4号溝	食	15.5	4.0	(21.6)	茶	茶	茶	茶	茶	茶
366	245	4号溝	食	15.3	1.1	7.8	茶	茶	茶	茶	茶	茶
367	344	4号溝	食	(17.0)	(0.4)	茶	茶	茶	茶	茶	茶	茶
368	343	4号溝	食	(15.7)	(0.7)	茶	茶	茶	茶	茶	茶	茶
369	354	5号溝	食	(15.7)	(0.7)	茶	茶	茶	茶	茶	茶	茶
370	349	5号溝	食	(16.0)	(0.5)	茶	茶	茶	茶	茶	茶	茶
371	359	5号溝	食	(16.0)	(0.5)	茶	茶	茶	茶	茶	茶	茶
372	659	5号溝	食	(15.0)	(0.5)	茶	茶	茶	茶	茶	茶	茶
373	659	5号溝	食	(15.0)	(0.5)	茶	茶	茶	茶	茶	茶	茶
374	659	5号溝	食	19.4	(0.7)	茶	茶	茶	茶	茶	茶	茶
375	656	5号溝	食	11.6	(0.8)	茶	茶	茶	茶	茶	茶	茶
376	691	5号溝	食	(19.6)	(0.8)	茶	茶	茶	茶	茶	茶	茶
377	347	5号溝	食	13.2	(7.3)	茶	茶	茶	茶	茶	茶	茶
378	353	5号溝	食	(12.0)	(5.0)	茶	茶	茶	茶	茶	茶	茶
379	350	5号溝	食	(12.0)	(5.0)	茶	茶	茶	茶	茶	茶	茶
380	655	5号溝	食	15.2	(3.0)	茶	茶	茶	茶	茶	茶	茶
381	652	5号溝	食	2.0	2.0	茶	茶	茶	茶	茶	茶	茶
382	652	5号溝	食	2.0	2.0	茶	茶	茶	茶	茶	茶	茶
383	351	D-9	6号溝	食	2.7	(4.0)	茶	茶	茶	茶	茶	茶
384	346	6号溝	SB	土玉	3.4	3.7	3.5	茶	茶	茶	茶	茶
385	692	6号溝	SB	高杯	12.2	(4.3)	(5.1)	茶	茶	茶	茶	茶
386	356-C-9	6号溝	SB	高杯	(28.0)	(4.3)	茶	茶	茶	茶	茶	茶
387	355-C-9	6号溝	SB	高杯	(28.0)	(4.4)	茶	茶	茶	茶	茶	茶
388	359	7号溝	下	食	(20.2)	(2.4)	茶	茶	茶	茶	茶	茶
389	359	7号溝	下	食	(20.2)	(2.5)	茶	茶	茶	茶	茶	茶
390	359	7号溝	下	食	(20.2)	(2.5)	茶	茶	茶	茶	茶	茶
391	362	8号溝	食	(14.2)	(1.5)	茶	茶	茶	茶	茶	茶	茶
392	689	8号溝	食	(22.0)	(5.0)	茶	茶	茶	茶	茶	茶	茶
393	688-E-9	8号溝	食	17.9	(4.7)	茶	茶	茶	茶	茶	茶	茶
394	611-E-9	9号溝	食	16.9	(4.8)	茶	茶	茶	茶	茶	茶	茶
395	670-E-9	9号溝	食	11.3	(3.0)	茶	茶	茶	茶	茶	茶	茶
396	670-E-9	9号溝	食	23.6	(3.0)	茶	茶	茶	茶	茶	茶	茶
397	594	9号溝	食	22.7	(3.0)	茶	茶	茶	茶	茶	茶	茶
398	595	9号溝	食	(18.2)	(3.0)	茶	茶	茶	茶	茶	茶	茶
399	593	9号溝	食	(18.2)	(3.0)	茶	茶	茶	茶	茶	茶	茶
400	371	9号溝	食	17.2	(3.0)	茶	茶	茶	茶	茶	茶	茶
401	372	9号溝	食	17.3	(3.0)	茶	茶	茶	茶	茶	茶	茶
402	374	9号溝	食	18.4	(3.1)	茶	茶	茶	茶	茶	茶	茶
403	676	9号溝	食	13.4	(4.0)	茶	茶	茶	茶	茶	茶	茶
404	375	9号溝	食	14.0	(4.2)	茶	茶	茶	茶	茶	茶	茶

第2表 弁生・古墳時代の土器断面形状表

番号	断面形態名	通称名	(詳細)	断面	口径cm	底径cm	厚さcm	色調(内)	色調(外)	遺跡名
405	407 E-10	9号窓		要	13.8	9.0	(0.2)	多孔質黄色や 茶褐色	33号、ナガ	
406	264	9号窓		高杯	19.0	9.0	(0.2)	多孔質黄色や 茶褐色	33号、ナガ	
407	694	9号窓		高杯	19.0	9.0	(0.2)	多孔質黄色や 茶褐色	33号、ナガ	
408	373	9号窓		高杯	2.6	9.0	(3.4)	多孔質黄色や 茶褐色	33号、ナガ	
409	370	9号窓		高杯	3.2	14.3	(2.3)	多孔質黄色や 茶褐色	33号、ナガ	
410	377	9号窓		要	18.2	9.0	(3.5)	多孔質黄色や 茶褐色	33号、ナガ	
411	382	9号窓		要	17.4	9.0	(2.3)	多孔質黄色や 茶褐色	33号、ナガ	
412	379	9号窓		要	17.4	9.0	(2.3)	多孔質黄色や 茶褐色	33号、ナガ	
413	385	9号窓	包合層	要	17.4	9.0	(2.3)	多孔質黄色や 茶褐色	33号、ナガ	
414	386	9号窓	包合層	要	17.4	9.0	(2.3)	多孔質黄色や 茶褐色	33号、ナガ	
415	381	9号窓	包合層	要	9.3	9.3	(2.5)	多孔質黄色や 茶褐色	33号、ナガ	
416	380	9号窓	包合層	要	9.3	9.0	(2.5)	多孔質黄色や 茶褐色	33号、ナガ	
417	384	9号窓	包合層	要	12.2	9.0	(2.3)	多孔質黄色や 茶褐色	33号、ナガ	
418	385	9号窓	包合層	要	23.2	9.0	(0.1)	多孔質黄色や 茶褐色	33号、ナガ	
420	283	9号窓	高杯	要	13.1	9.0	(0.1)	多孔質黄色や 茶褐色	33号、ナガ	
421	380	9号窓	高杯	要	22.8	9.0	(0.1)	多孔質黄色や 茶褐色	33号、ナガ	
422	379	9号窓	高杯	要	22.8	9.0	(0.1)	多孔質黄色や 茶褐色	33号、ナガ	
423	370-D-10	9号窓	高杯	要?	17.4	9.0	(1.3)	多孔質黄色や 茶褐色	33号、ナガ	
424	370-E-11	10号窓	要?	要?	17.4	9.0	(1.3)	多孔質黄色や 茶褐色	33号、ナガ	
425	370-G-11	10号窓	要?	要?	17.4	9.0	(1.3)	多孔質黄色や 茶褐色	33号、ナガ	
427	389	10号窓	要?	要?	17.4	9.0	(1.3)	多孔質黄色や 茶褐色	33号、ナガ	
428	381-D-10	11号窓	要?	要?	20.0	9.0	(2.5)	多孔質黄色や 茶褐色	33号、ナガ	
429	392-C-10	11号窓	要?	要?	20.0	9.0	(2.5)	多孔質黄色や 茶褐色	33号、ナガ	
430	297-Q-10	12号窓	要?	要?	15.3	7.5	(1.5)	多孔質黄色や 茶褐色	33号、ナガ	
431	395-H-11	12号窓	要?	要?	12.1	6.0	(4.4)	多孔質黄色や 茶褐色	33号、ナガ	
432	394	12号窓	要	要	16.0	6.0	(6.9)	多孔質黄色や 茶褐色	33号、ナガ	
433	395	12号窓	要	要	19.0	6.0	(4.1)	多孔質黄色や 茶褐色	33号、ナガ	
434	399-G-11	13号窓	要	要	19.0	6.0	(4.1)	多孔質黄色や 茶褐色	33号、ナガ	
435	399-H-11	13号窓	要	要	19.0	6.0	(4.1)	多孔質黄色や 茶褐色	33号、ナガ	
436	402	19号窓	土器内盤	3.2	3.2	0.7	反白	33号		
437	401-E-12	19号窓	土玉	3.6	3.9	3.6	反白	33号		
438	400	19号窓	土玉	(3.0)	7.2	3.6	反白	33号		
439	403	20号窓	要?	要?	17.4	9.0	(3.4)	多孔質黄色や 茶褐色	33号	
440	404	20号窓	要?	要?	17.4	9.0	(3.4)	多孔質黄色や 茶褐色	33号	
441	417	23号窓	要?	要?	18.6	6.0	(3.2)	多孔質黄色や 茶褐色	33号	
442	429	23号窓	要?	要?	18.6	6.0	(3.5)	多孔質黄色や 茶褐色	33号	
443	429-C-12	23号窓	要?	要?	17.4	6.0	(4.5)	多孔質黄色や 茶褐色	33号	
444	429-B-12	23号窓	要?	要?	17.4	6.0	(4.5)	多孔質黄色や 茶褐色	33号	
445	429-B-12	23号窓	要?	要?	17.4	6.0	(4.5)	多孔質黄色や 茶褐色	33号	
446	429-B-12	23号窓	要?	要?	17.4	6.0	(4.5)	多孔質黄色や 茶褐色	33号	
447	414-11	31号窓	要?	要?	19.0	7.2	(4.1)	多孔質黄色や 茶褐色	33号	
448	427-C-12	31号窓	要?	要?	25.8	13.0	(1.7)	多孔質黄色や 茶褐色	33号	
449	411-C-12	31号窓	要?	要?	25.8	13.0	(1.7)	多孔質黄色や 茶褐色	33号	
450	412-B-11	31号窓	要?	要?	18.0	9.0	(4.2)	多孔質黄色や 茶褐色	33号	
451	427	34号窓	要	要	16.9	9.0	(5.4)	多孔質黄色や 茶褐色	33号	
452	426-C-11	32号窓	要?	要?	15.0	9.0	(5.4)	多孔質黄色や 茶褐色	33号	
453	426-B-10	34号窓	要?	要?	24.2	9.0	(5.6)	多孔質黄色や 茶褐色	33号	
455	417-B-11	32号窓	要?	要?	14.2	9.0	(5.0)	多孔質黄色や 茶褐色	33号	
456	419-B-11	32号窓	要?	要?	17.0	9.0	(5.2)	多孔質黄色や 茶褐色	33号	
457	418-B-11	32号窓	要?	要?	15.0	9.0	(4.9)	多孔質黄色や 茶褐色	33号	
458	419-B-11	32号窓	要?	要?	19.0	9.0	(4.9)	多孔質黄色や 茶褐色	33号	
459	882	32号窓	要?	要?	17.4	9.0	(2.0)	反白	33号	

第2表 异生・古酒時代の土器調査表 10

番号	測量場所コード	測量名	(詳細)	断面 概形	口径cm	底径cm	高さcm	色調(?)	色調(?)	測量(外)		測量(内)
								底?	底?	底?	底?	
460	415 C-10	32号窓		土玉	(2.4)	(6.5)	4.8	灰	灰	底多く 1mm以下の砂粒少	灰	灰
461	415	32号窓		土玉	1.9	3.7	3.7	灰	灰	1mm以下の砂粒少	灰	灰
462	415	32号窓		土玉	12.4	(7.4)	1.4	灰	灰	1mm以下の砂粒少	灰	灰
463	425 B-12	32号窓		土玉	13.7	(5.3)	1.4	灰	灰	1mm以下の砂粒少	灰	灰
464	424 B-12	32号窓		土玉	13.7	(5.8)	1.4	灰	灰	1mm以下の砂粒少	灰	灰
465	425 B-12	32号窓		土玉	18.8	(5.8)	1.4	灰	灰	1mm以下の砂粒少	灰	灰
466	472 B-11	32号窓		土玉	12.0	4.8	4.8	灰	灰	1mm以下の砂粒少	灰	灰
467	423 B-12	32号窓		脚形	7.4	(6.4)	2.0	灰	灰	0.5mm前後の少々 1mm以下の砂粒少	灰	灰
468	473 B-12	32号窓		脚形	4.1	(8.9)	2.0	灰	灰	0.5mm前後の少々 1mm以下の砂粒少	灰	灰
469	420	32号窓	竹付け土器	土玉	12.5	(8.9)	2.0	灰	灰	0.5mm前後の少々 1mm以下の砂粒少	灰	灰
470	424 C-11	32号窓		土玉	14.4	(7.0)	2.0	灰	灰	0.5mm前後の少々 1mm以下の砂粒少	灰	灰
471	423 C-11	32号窓		土玉	20.2	(7.0)	2.0	灰	灰	0.5mm前後の少々 1mm以下の砂粒少	灰	灰
472	423 C-11	32号窓		土玉	14.4	(7.0)	2.0	灰	灰	0.5mm前後の少々 1mm以下の砂粒少	灰	灰
473	424 C-11	32号窓		土玉	28.2	(4.9)	2.0	灰	灰	0.5mm前後の少々 1mm以下の砂粒少	灰	灰
474	424 C-11	32号窓		高杯	25.0	(4.2)	2.0	灰	灰	0.5mm前後の少々 1mm以下の砂粒少	灰	灰
475	425 C-11	32号窓		高杯	21.0	(4.6)	2.0	白	白	0.5mm前後の少々 1mm以下の砂粒少	白	白
476	423 C-11	32号窓		高杯	4.6	(3.0)	2.0	灰	灰	0.5mm前後の少々 1mm以下の砂粒少	灰	灰
477	439 C-10	32号窓		脚形	9.6	(4.1)	2.0	灰	灰	0.5mm前後の少々 1mm以下の砂粒少	灰	灰
478	437	32号窓		脚形	7.8	(3.7)	2.0	灰	灰	0.5mm前後の少々 1mm以下の砂粒少	灰	灰
479	439 C-11	32号窓		脚形	16.6	(12.0)	2.0	灰	灰	0.5mm前後の少々 1mm以下の砂粒少	灰	灰
480	439 C-10	32号窓		脚形	11.0	(4.3)	2.0	白	白	0.5mm前後の少々 1mm以下の砂粒少	白	白
481	439 C-11	32号窓		脚形	11.0	(4.3)	2.0	白	白	0.5mm前後の少々 1mm以下の砂粒少	白	白
482	439 C-10	32号窓		竹付け土器	11.0	(4.3)	2.0	白	白	0.5mm前後の少々 1mm以下の砂粒少	白	白
483	439 C-11	32号窓		竹付け土器	11.0	(4.3)	2.0	白	白	0.5mm前後の少々 1mm以下の砂粒少	白	白
484	441	41号窓		土玉	22.0	(4.0)	2.0	灰	灰	0.5mm前後の少々 1mm以下の砂粒少	灰	灰
485	459	45号窓		土玉	16.8	(3.6)	2.0	灰	灰	0.5mm前後の少々 1mm以下の砂粒少	灰	灰
486	444	44号窓		土玉	13.0	(2.5)	2.0	灰	灰	0.5mm前後の少々 1mm以下の砂粒少	灰	灰
487	459	45号窓		土玉	15.8	(2.5)	2.0	灰	灰	0.5mm前後の少々 1mm以下の砂粒少	灰	灰
488	447	45号窓		土玉	10.7	(2.2)	2.0	灰	灰	0.5mm前後の少々 1mm以下の砂粒少	灰	灰
489	459	45号窓		土玉	10.7	(2.2)	2.0	灰	灰	0.5mm前後の少々 1mm以下の砂粒少	灰	灰
490	459	45号窓		土玉	10.5	(2.2)	2.0	灰	灰	0.5mm前後の少々 1mm以下の砂粒少	灰	灰
491	459	45号窓		土玉	10.5	(2.2)	2.0	灰	灰	0.5mm前後の少々 1mm以下の砂粒少	灰	灰
492	442	46号窓		土玉	12.6	(3.5)	2.0	灰	灰	0.5mm前後の少々 1mm以下の砂粒少	灰	灰
493	472 B-C-4	45号窓		脚形	15.8	(2.6)	2.0	灰	灰	0.5mm前後の少々 1mm以下の砂粒少	灰	灰
494	445 B-C-4	45号窓		脚形	5.7	(10.3)	2.0	灰	灰	0.5mm前後の少々 1mm以下の砂粒少	灰	灰
495	454 C-4	45号窓	色合窓	土玉	16.1	(16.4)	2.0	灰	灰	0.5mm前後の少々 1mm以下の砂粒少	灰	灰
496	473	46号窓		土玉	16.1	(16.4)	2.0	灰	灰	0.5mm前後の少々 1mm以下の砂粒少	灰	灰
497	448	46号窓		土玉	16.4	(16.4)	2.0	灰	灰	0.5mm前後の少々 1mm以下の砂粒少	灰	灰
498	449	46号窓		土玉	17.0	(14.5)	2.0	灰	灰	0.5mm前後の少々 1mm以下の砂粒少	灰	灰
499	453	47号窓		土玉	17.0	(4.1)	2.0	灰	灰	0.5mm前後の少々 1mm以下の砂粒少	灰	灰
500	455	47号窓		土玉	10.8	4.5	2.0	灰	灰	0.5mm前後の少々 1mm以下の砂粒少	灰	灰
501	459	47号窓		脚?	5.7	(5.7)	2.0	灰	灰	0.5mm前後の少々 1mm以下の砂粒少	灰	灰
502	454	47号窓		脚?	10.8	(5.7)	2.0	灰	灰	0.5mm前後の少々 1mm以下の砂粒少	灰	灰
503	452	47号窓		脚?	10.8	(5.7)	2.0	灰	灰	0.5mm前後の少々 1mm以下の砂粒少	灰	灰
504	452	47号窓		脚?	10.8	(5.7)	2.0	灰	灰	0.5mm前後の少々 1mm以下の砂粒少	灰	灰
505	450	47号窓		脚?	11.2	(5.7)	2.0	灰	灰	0.5mm前後の少々 1mm以下の砂粒少	灰	灰
506	450	47号窓		脚?	11.2	(5.7)	2.0	灰	灰	0.5mm前後の少々 1mm以下の砂粒少	灰	灰
507	451	47号窓		脚?	11.2	(5.7)	2.0	灰	灰	0.5mm前後の少々 1mm以下の砂粒少	灰	灰
508	450	47号窓		脚?	11.2	(5.7)	2.0	灰	灰	0.5mm前後の少々 1mm以下の砂粒少	灰	灰
509	450	47号窓		脚?	11.2	(5.7)	2.0	灰	灰	0.5mm前後の少々 1mm以下の砂粒少	灰	灰
510	457	49号窓		土玉	3.1	3.5	3.4	灰	灰	0.5mm前後の少々 1mm以下の砂粒少	灰	灰
511	274	1号窓	3.2号窓	土玉	3.1	3.5	3.4	灰	灰	0.5mm前後の少々 1mm以下の砂粒少	灰	灰
512	26	1号窓	3.2号窓	高杯	(27.1)	(20.3)	—	灰	灰	0.5mm前後の少々 1mm以下の砂粒少	灰	灰

第2表 异生・古酒時代の土器断面表

番号	地名(年代)アリット	断面名	断面形	口径cm	底径cm	高さcm	断面(外)		断面(内)	
							色	厚さ	底	壁
513 312	酒田市・3号窯	(斜面)	下、下	20.4	12.0	10.0	5.4 7.5	1.4 1.7	土	1.4 1.3
514 271	1号窯、3号窯	下、下	19.0	12.1	10.0	5.4 7.5	1.4 1.7	土	1.4 1.3	
515 309	1号窯、3号窯	斜面	19.0	12.1	10.0	5.4 7.5	1.4 1.7	土	1.4 1.3	
516 380	1号窯、3号窯	斜面	22.2	12.1	10.0	5.4 7.5	1.4 1.7	土	1.4 1.3	
517 189	1号窯、3号窯、上、下、層不明、下	斜台	16.1	11.0	10.0	5.4 6.4	1.4 1.7	土	1.4 1.3	
518 159 C-7	2号窯、3号窯	斜面	13.1	11.0	10.0	4.9 6.4	1.4 1.7	土	1.4 1.3	
519 103 E-7	2号窯、3号窯	下、下	16.0	10.0	10.0	5.4 6.4	1.4 1.7	土	1.4 1.3	
520 324	3号窯、9号窯	斜面	23.2	12.0	10.0	5.6 7.5	1.4 1.7	土	1.4 1.3	
521 475	1号土器、2号土器	斜面	20.0	10.0	10.0	5.6 7.5	1.4 1.7	土	1.4 1.3	
522 456	4号窯、5号窯、6号窯、7号窯	斜面	20.4	11.0	10.0	5.8 7.5	1.4 1.7	土	1.4 1.3	
523 460	4号窯、5号窯、6号窯、7号窯	斜面	19.8	11.0	10.0	5.8 7.5	1.4 1.7	土	1.4 1.3	
524 589 C-11	3号土器、21号土器	斜面	20.6	11.0	10.0	5.8 7.5	1.4 1.7	土	1.4 1.3	
525 599 B-11	3号土器、21号土器	斜面	20.6	11.0	10.0	5.8 7.5	1.4 1.7	土	1.4 1.3	
526 466	2号灰土灰	斜面	4.0	3.0	1.0	5.8 7.5	1.4 1.7	土	1.4 1.3	
527 413 B-12~10	31号窯、33号窯、	斜面	21.0	11.0	10.0	4.9 6.4	1.4 1.7	土	1.4 1.3	
528 422	33号窯	斜面	9.5	6.0	3.0	3.7 5.5	1.4 1.7	土	1.4 1.3	
529 431 B-11 D-12	33号窯、色合窯	斜面	15.3	6.0	3.0	3.5 5.5	1.4 1.7	土	1.4 1.3	
530 435 B-11	33号窯、色合窯	斜面	19.5	6.0	3.0	3.5 5.5	1.4 1.7	土	1.4 1.3	
531 465 A-1	1号土器	斜面	17.0	5.5	3.0	3.5 5.5	1.4 1.7	土	1.4 1.3	
532 464 A-1	1号土器	斜面	17.0	5.5	3.0	3.5 5.5	1.4 1.7	土	1.4 1.3	
533 829 A-1	2号土器	斜面	17.0	5.5	3.0	3.5 5.5	1.4 1.7	土	1.4 1.3	
534 529 A-1	2号土器	斜面	17.0	5.5	3.0	3.5 5.5	1.4 1.7	土	1.4 1.3	
535 487 A-1	2号土器	斜面	18.6	5.5	3.0	3.5 5.5	1.4 1.7	土	1.4 1.3	
536 828 A-1	2号土器	斜面	18.6	5.5	3.0	3.5 5.5	1.4 1.7	土	1.4 1.3	
537 811 A-1	2号土器	斜面	19.0	5.5	3.0	3.5 5.5	1.4 1.7	土	1.4 1.3	
538 470 A-1	2号土器	斜面	19.0	5.5	3.0	3.5 5.5	1.4 1.7	土	1.4 1.3	
539 471 A-1	2号土器	斜面	19.0	5.5	3.0	3.5 5.5	1.4 1.7	土	1.4 1.3	
540 468 A-1	2号土器	高杯	12.1	6.0	3.0	3.5 5.5	1.4 1.7	土	1.4 1.3	
541 630 A-1	2号土器	第2?	19.4	12.0	10.0	4.3 5.5	1.4 1.7	土	1.4 1.3	
542 631 A-1	2号土器	斜面	13.3	6.0	3.0	3.5 5.5	1.4 1.7	土	1.4 1.3	
543 472 A-2	3号土器	斜面	11.2	5.5	3.0	3.5 5.5	1.4 1.7	土	1.4 1.3	
544 587 E-9	5号土器	斜面	11.2	5.5	3.0	3.5 5.5	1.4 1.7	土	1.4 1.3	
545 539 E-9	5号土器	斜面	11.2	5.5	3.0	3.5 5.5	1.4 1.7	土	1.4 1.3	
546 540 E-9	5号土器	斜面	11.2	5.5	3.0	3.5 5.5	1.4 1.7	土	1.4 1.3	
547 539 E-9	5号土器	斜面	11.2	5.5	3.0	3.5 5.5	1.4 1.7	土	1.4 1.3	
548 519 E-9	6号土器	斜面	9.1	4.0	2.0	3.5 5.5	1.4 1.7	土	1.4 1.3	
549 518 E-9	6号土器	斜面	11.0	4.0	2.0	3.5 5.5	1.4 1.7	土	1.4 1.3	
550 469 E-9	7号土器	斜面	14.0	4.0	2.0	3.5 5.5	1.4 1.7	土	1.4 1.3	
551 480 E-9	8号土器	斜面	19.0	4.0	2.0	3.5 5.5	1.4 1.7	土	1.4 1.3	
552 479 G-H-11	9号土器	T-1	19.5	4.0	2.0	3.5 5.5	1.4 1.7	土	1.4 1.3	
553 548 G-H-11	8号土器	斜面	20.7	4.0	2.0	3.5 5.5	1.4 1.7	土	1.4 1.3	
554 619 G-H-11	8号土器	斜面	21.0	4.0	2.0	3.5 5.5	1.4 1.7	土	1.4 1.3	
555 621 G-H-11	8号土器	斜面	21.0	4.0	2.0	3.5 5.5	1.4 1.7	土	1.4 1.3	
556 686 G-H-11	8号土器	斜面	12.3	3.0	1.5	3.5 5.5	1.4 1.7	土	1.4 1.3	
557 683 G-H-11	8号土器	T-1	12.4	3.0	1.5	3.5 5.5	1.4 1.7	土	1.4 1.3	
558 683 G-H-11	8号土器	T-1	22.4	3.0	1.5	3.5 5.5	1.4 1.7	土	1.4 1.3	
559 481 G-H-11	8号土器	T-1	21.0	3.0	1.5	3.5 5.5	1.4 1.7	土	1.4 1.3	
560 642 G-H-11	8号土器	斜面	14.5	3.0	1.5	3.5 5.5	1.4 1.7	土	1.4 1.3	

第2表 异生・古酒時代の土器調査表 12

番号	遺跡名	(遺跡)	断面	口径cm	底径cm	高さcm	内側(V)	外側(W)	測量(内)		測量(外)	
							直形	曲形	直形	曲形	直形	曲形
561	東郷町ガリード	1号土坑	直形	7.1	4.6	4.5	（4.5）	（4.5）	1mm前後の少	1mm前後の少	（4.5）	（4.5）
562	644-C-11	6号土坑	直形	6.5	4.0	4.0	（4.0）	（4.0）	1mm前後の少	1mm前後の少	（4.0）	（4.0）
563	632-C-11	6号土坑	直形	6.5	4.0	4.0	（4.0）	（4.0）	1mm前後の少	1mm前後の少	（4.0）	（4.0）
564	630-C-11	6号土坑	直形	6.5	4.0	4.0	（4.0）	（4.0）	1mm前後の少	1mm前後の少	（4.0）	（4.0）
565	631-C-11	6号土坑	直形	6.5	4.0	4.0	（4.0）	（4.0）	1mm前後の少	1mm前後の少	（4.0）	（4.0）
566	637-C-11	6号土坑	直形	6.5	4.0	4.0	（4.0）	（4.0）	1mm前後の少	1mm前後の少	（4.0）	（4.0）
567	595-G-11	10号土坑	直形	6.1	3.8	16.0	（2.8）	（2.8）	1mm前後の少	1mm前後の少	（2.8）	（2.8）
568	477-D-11-12	11号土坑	直形	6.1	3.8	12.7	（1.4）	（1.4）	1mm前後の少	1mm前後の少	（1.4）	（1.4）
569	653-D-11-12	13号土坑	直形	6.1	3.8	18.0	（4.0）	（4.0）	1mm前後の少	1mm前後の少	（4.0）	（4.0）
570	473-D-11-12	13号土坑	直形	6.1	3.8	11.0	（4.0）	（4.0）	1mm前後の少	1mm前後の少	（4.0）	（4.0）
571	619-D-11	13号土坑	直形	6.1	3.8	11.0	（3.4）	（3.4）	1mm前後の少	1mm前後の少	（3.4）	（3.4）
572	620-D-11	13号土坑	直形	6.1	3.8	11.0	（3.4）	（3.4）	1mm前後の少	1mm前後の少	（3.4）	（3.4）
573	493-D-11	2号土坑	直形	6.1	3.8	18.0	（4.0）	（4.0）	1mm前後の少	1mm前後の少	（4.0）	（4.0）
574	494-D-11	2号土坑	直形	6.1	3.8	18.0	（4.0）	（4.0）	1mm前後の少	1mm前後の少	（4.0）	（4.0）
575	544-D-11	2号土坑	直形	6.1	3.8	24.0	（4.0）	（4.0）	1mm前後の少	1mm前後の少	（4.0）	（4.0）
576	489-D-11	2号土坑	直形	6.1	3.8	10.9	（4.0）	（4.0）	1mm前後の少	1mm前後の少	（4.0）	（4.0）
577	641-D-11	2号土坑	直形	6.1	3.8	8.0	（4.3）	（4.3）	1mm前後の少	1mm前後の少	（4.3）	（4.3）
578	489-D-11	2号土坑	直形	6.1	3.8	22.6	（4.0）	（4.0）	1mm前後の少	1mm前後の少	（4.0）	（4.0）
579	492-B-10	2号土坑	直形	6.1	3.8	21.0	（4.0）	（4.0）	1mm前後の少	1mm前後の少	（4.0）	（4.0）
580	490-B-10	2号土坑	直形	6.1	3.8	20.0	（4.0）	（4.0）	1mm前後の少	1mm前後の少	（4.0）	（4.0）
581	491-B-10	2号土坑	直形	6.1	3.8	20.0	（4.0）	（4.0）	1mm前後の少	1mm前後の少	（4.0）	（4.0）
582	493-B-10	2号土坑	直形	6.1	3.8	20.0	（4.0）	（4.0）	1mm前後の少	1mm前後の少	（4.0）	（4.0）
583	494-B-10-11	2号土坑	直形	6.1	3.8	11.0	（4.0）	（4.0）	1mm前後の少	1mm前後の少	（4.0）	（4.0）
584	496-C-10-11	2号土坑	直形	6.1	3.8	13.0	（4.0）	（4.0）	1mm前後の少	1mm前後の少	（4.0）	（4.0）
585	495-C-10-11	2号土坑	直形	6.1	3.8	15.1	（4.0）	（4.0）	1mm前後の少	1mm前後の少	（4.0）	（4.0）
586	502-B-10	31号土坑	直形	6.1	3.8	13.0	（4.0）	（4.0）	1mm前後の少	1mm前後の少	（4.0）	（4.0）
587	501-B-10	31号土坑	直形	6.1	3.8	15.0	（4.0）	（4.0）	1mm前後の少	1mm前後の少	（4.0）	（4.0）
588	500-C-12	34号土坑	直形	6.1	3.8	14.2	（4.0）	（4.0）	1mm前後の少	1mm前後の少	（4.0）	（4.0）
589	645-B-9	36号土坑	直形	6.1	3.8	11.2	（4.0）	（4.0）	1mm前後の少	1mm前後の少	（4.0）	（4.0）
590	631-B-9	36号土坑	直形	6.1	3.8	11.2	（4.0）	（4.0）	1mm前後の少	1mm前後の少	（4.0）	（4.0）
591	498-C-10	38号土坑	直形	6.1	3.8	11.2	（4.0）	（4.0）	1mm前後の少	1mm前後の少	（4.0）	（4.0）
592	490-C-10	38号土坑	直形	6.1	3.8	11.2	（4.0）	（4.0）	1mm前後の少	1mm前後の少	（4.0）	（4.0）
593	499-C-10	38号土坑	直形	6.1	3.8	11.2	（4.0）	（4.0）	1mm前後の少	1mm前後の少	（4.0）	（4.0）
594	497-C-10	38号土坑	直形	6.1	3.8	11.2	（4.0）	（4.0）	1mm前後の少	1mm前後の少	（4.0）	（4.0）
595	504-C-12	38号土坑	直形	6.1	3.8	18.0	（4.0）	（4.0）	1mm前後の少	1mm前後の少	（4.0）	（4.0）
596	846-C-12	39号土坑	直形	6.1	3.8	13.0	（4.0）	（4.0）	1mm前後の少	1mm前後の少	（4.0）	（4.0）
597	647-C-12	39号土坑	直形	6.1	3.8	9.8	（4.0）	（4.0）	1mm前後の少	1mm前後の少	（4.0）	（4.0）
598	648-C-12	39号土坑	直形	6.1	3.8	12.4	（4.0）	（4.0）	1mm前後の少	1mm前後の少	（4.0）	（4.0）
599	503-C-12	39号土坑	直形	6.1	3.8	18.6	（4.0）	（4.0）	1mm前後の少	1mm前後の少	（4.0）	（4.0）
600	649-B-11	39号土坑	直形	6.1	3.8	18.6	（3.5）	（3.5）	1mm前後の少	1mm前後の少	（3.5）	（3.5）
601	615-B-11	39号土坑	直形	6.1	3.8	18.6	（3.5）	（3.5）	1mm前後の少	1mm前後の少	（3.5）	（3.5）
602	613-B-11	39号土坑	直形	6.1	3.8	18.6	（3.5）	（3.5）	1mm前後の少	1mm前後の少	（3.5）	（3.5）
603	614-B-11	39号土坑	直形	6.1	3.8	18.6	（3.5）	（3.5）	1mm前後の少	1mm前後の少	（3.5）	（3.5）
604	507-C-12	4号土坑	直形	6.1	3.8	13.7	（4.0）	（4.0）	1mm前後の少	1mm前後の少	（4.0）	（4.0）
605	634-C-12	5号土坑	直形	6.1	3.8	11.2	（4.0）	（4.0）	1mm前後の少	1mm前後の少	（4.0）	（4.0）
606	632-C-12	5号土坑	直形	6.1	3.8	11.2	（4.0）	（4.0）	1mm前後の少	1mm前後の少	（4.0）	（4.0）
607	633-C-12	5号土坑	直形	6.1	3.8	11.2	（4.0）	（4.0）	1mm前後の少	1mm前後の少	（4.0）	（4.0）
608	505-C-4	6号土坑	直形	6.1	3.8	19.8	（4.0）	（4.0）	1mm前後の少	1mm前後の少	（4.0）	（4.0）
609	506-C-4	6号土坑	直形	6.1	3.8	19.8	（4.0）	（4.0）	1mm前後の少	1mm前後の少	（4.0）	（4.0）
610	508-C-4	6号土坑	直形	6.1	3.8	19.8	（4.0）	（4.0）	1mm前後の少	1mm前後の少	（4.0）	（4.0）
611	633-A-11	6号土坑	直形	6.1	3.8	20.3	（3.7）	（3.7）	1mm前後の少	1mm前後の少	（3.7）	（3.7）
612	802-D-9	井戸	直形	6.1	3.8	11.8	（3.7）	（3.7）	1mm前後の少	1mm前後の少	（3.7）	（3.7）
613	601-E-9	井戸	直形	6.1	3.8	14.2	（2.5）	（2.5）	1mm前後の少	1mm前後の少	（2.5）	（2.5）

第2表 异生・古酒時代の土器調査表 13

番号	測量場所	測量名	(目録)	断面	口径cm	高さcm	色調(?)	表面(?)	測量(内)		測量(外)	
									底径	底厚	底径	底厚
614	694-E-3	弓井戸	井戸内	直筒	1.2	2.5	(3.2) 灰	底灰	1mm前後の砂粒多	3.0?	ヨリナリ	ヨリナリ
615	695-E-3	弓井戸	井戸内	直筒	2.5	1.4	(2.4) 灰	底灰	0.5mm程度の砂粒多	3.0?	ヨリナリ	ヨリナリ
616	693-E-3	弓井戸	井戸内	直筒	8.0	4.2	(4.2) 淡黄	底灰	0.5mm程度の砂粒少	3.0?	ヨリナリ	ヨリナリ
617	690-E-3	弓井戸	井戸内	直筒	12.2	4.2	(4.2) 淡黄	底灰	0.5mm程度の砂粒少	3.0?	ヨリナリ	ヨリナリ
618	610-D-9	1号井戸	上	脚部	—	—	—	—	0.5mm前後の砂粒少	3.0?	ヨリナリ	ヨリナリ
619	699-D-10	1号井戸	上	脚部	19.2	12.1	(4.2) 灰	底灰	0.5mm前後の砂粒少	3.0?	ヨリナリ	ヨリナリ
620	695-D-4	2号井戸	脚方	直筒	2.8	2.8	(3.8) 二重灰	底灰	1mm前後の砂粒多	3.0?	ヨリナリ	ヨリナリ
621	694-C-4	2号井戸	脚方	直筒	3.2	2.8	(3.2) 二重灰	底灰	1mm前後の砂粒多	3.0?	ヨリナリ	ヨリナリ
622	696-D-3	3号井戸	1層	直筒	19.4	10.2	(10.2) 淡黄	底灰	0.5mm前後の砂粒少	3.0?	ヨリナリ	ヨリナリ
623	515-A-2	P1	直筒	直筒	5.5	2.6	(2.6) 白	底灰	0.5mm前後の砂粒多	3.0?	ヨリナリ	ヨリナリ
624	515-B-3	P1	直筒	直筒	5.5	2.6	(2.6) 白	底灰	0.5mm前後の砂粒多	3.0?	ヨリナリ	ヨリナリ
625	515-C-3	P1	直筒	直筒	5.5	2.6	(2.6) 白	底灰	0.5mm前後の砂粒多	3.0?	ヨリナリ	ヨリナリ
626	514-E-11	P28	直筒	直筒	13.4	9.1	(9.1) 淡黄	底灰	0.5mm前後の砂粒多	3.0?	ヨリナリ	ヨリナリ
627	512-D-12	P29	直筒	直筒	13.4	9.1	(9.1) 淡黄	底灰	0.5mm前後の砂粒多	3.0?	ヨリナリ	ヨリナリ
628	511-D-11	包含層	直筒	直筒	19.8	9.0	(9.0) 淡黄	底灰	0.5mm前後の砂粒多	3.0?	ヨリナリ	ヨリナリ
629	518-C-11	P92	直筒	直筒	16.0	5.6	(5.6) 淡黄	底灰	0.5mm前後の砂粒多	3.0?	ヨリナリ	ヨリナリ
630	517-C-11	P92	直筒	直筒	4.8	—	—	—	—	3.0?	ヨリナリ	ヨリナリ
631	515-B-4	P116	直筒	直筒	15.9	5.0	(5.0) 灰	底灰	0.5mm前後の砂粒少	3.0?	ヨリナリ	ヨリナリ
632	515-B-5	P116	直筒	直筒	10.8	7.6	(7.6) 灰	底灰	0.5mm前後の砂粒少	3.0?	ヨリナリ	ヨリナリ
633	515-B-11	P111	直筒	直筒	6.9	3.3	(3.3) 灰	底灰	0.5mm前後の砂粒少	3.0?	ヨリナリ	ヨリナリ
634	510-A-11	P111	直筒	直筒	6.9	3.3	(3.3) 灰	底灰	0.5mm前後の砂粒少	3.0?	ヨリナリ	ヨリナリ
635	509-B-11	P112	直筒	直筒	15.0	17.0	(17.0) 二重灰	底灰	0.5mm前後の砂粒少	3.0?	ヨリナリ	ヨリナリ
636	509-B-11	P112	直筒	直筒	15.0	17.0	(17.0) 二重灰	底灰	0.5mm前後の砂粒少	3.0?	ヨリナリ	ヨリナリ
637	507-A-12	P107	直筒	直筒	17.2	5.3	(5.3) 二重灰	底灰	0.5mm前後の砂粒少	3.0?	ヨリナリ	ヨリナリ
638	519-A-12	先山上	直筒	直筒	17.2	5.8	(5.8) 二重灰	底灰	0.5mm前後の砂粒少	3.0?	ヨリナリ	ヨリナリ
639	508-A-12	先山上	直筒	直筒	10.9	4.4	(4.4) 二重灰	底灰	0.5mm前後の砂粒少	3.0?	ヨリナリ	ヨリナリ
640	512-A-13	粘土	直筒	直筒	10.9	4.4	(4.4) 二重灰	底灰	0.5mm前後の砂粒少	3.0?	ヨリナリ	ヨリナリ
641	511-A-13	粘土	直筒	直筒	10.9	4.4	(4.4) 二重灰	底灰	0.5mm前後の砂粒少	3.0?	ヨリナリ	ヨリナリ
642	573-B-2	包含層	直筒	直筒	3.6	3.4	(3.4) 二重灰	底灰	0.5mm前後の砂粒少	3.0?	ヨリナリ	ヨリナリ
643	533-B-2	包含層	直筒	直筒	13.2	3.8	(3.8) 二重灰	底灰	0.5mm前後の砂粒少	3.0?	ヨリナリ	ヨリナリ
644	574-B-3	粘土	直筒	直筒	13.0	3.5	(3.5) 二重灰	底灰	0.5mm前後の砂粒少	3.0?	ヨリナリ	ヨリナリ
645	518-B-9	包含層	直筒	直筒	19.3	8.9	(8.9) 淡黄	底灰	0.5mm前後の砂粒少	3.0?	ヨリナリ	ヨリナリ
646	520-B-9	包含層	台付土器	直筒	9.3	—	—	—	—	3.0?	ヨリナリ	ヨリナリ
647	527-B-10	包含層	直筒	直筒	16.4	4.2	(4.2) 白	底白	1.5mm前後の砂粒少	3.0?	ヨリナリ	ヨリナリ
648	526-B-10	包含層	脚台	直筒	16.4	4.2	(4.2) 白	底白	0.5mm前後の砂粒少	3.0?	ヨリナリ	ヨリナリ
649	521-B-10	包含層	脚台	直筒	16.4	4.2	(4.2) 白	底白	0.5mm前後の砂粒少	3.0?	ヨリナリ	ヨリナリ
650	524-B-10	包含層	脚台	直筒	2.4	1.6	(1.6) 二重灰	底灰	0.5mm前後の砂粒少	3.0?	ヨリナリ	ヨリナリ
651	523-B-10	包含層	工藝	直筒	4.3	1.6	(1.6) 二重灰	底灰	0.5mm前後の砂粒少	3.0?	ヨリナリ	ヨリナリ
652	522-B-10	包含層	工藝	直筒	3.9	3.6	(3.6) 二重灰	底灰	0.5mm前後の砂粒少	3.0?	ヨリナリ	ヨリナリ
653	525-B-11	包含層	工藝	直筒	16.5	1.5	(1.5) 二重灰	底灰	0.5mm前後の砂粒少	3.0?	ヨリナリ	ヨリナリ
654	521-B-12	包含層	工藝	直筒	20.4	—	—	—	—	3.0?	ヨリナリ	ヨリナリ
655	520-B-12	包含層	工藝	直筒	16.4	—	—	—	—	3.0?	ヨリナリ	ヨリナリ
656	526-C-4	粘土	直筒	直筒	—	—	—	—	—	3.0?	ヨリナリ	ヨリナリ
657	516-C-4	粘土	直筒	直筒	14.1	10.7	(10.7) 淡黄	底灰	0.5mm前後の砂粒少	3.0?	ヨリナリ	ヨリナリ
658	577-C-9	粘土	直筒	直筒	15.4	3.5	(3.5) 淡黄	底灰	0.5mm前後の砂粒少	3.0?	ヨリナリ	ヨリナリ
659	580-C-9	粘土	直筒	直筒	7.6	3.6	(3.6) 二重灰	底灰	0.5mm前後の砂粒少	3.0?	ヨリナリ	ヨリナリ
660	578-C-9	粘土	脚の羽口	直筒	5.7	5.3	(5.3) 二重灰	底灰	0.5mm前後の砂粒少	3.0?	ヨリナリ	ヨリナリ

第2表 外生・古生時代の土器断面表 14

番号	実測値(グラッド)	通称名	(詳細)	断面	口径cm	底径cm	高さcm	色調(外) 色調(内)	断土		Imm以下の中段-後		断土		Imm以下の中段-後		通称(外)	通称(内)
									土種	土種?	上種	下種	上種	下種	上種	下種		
661	579	実測値9.11	粘土	27.9や26.6内	土種	4.3	3.8	(6.1)明褐色	17.0		3.0	2.8	3.0	2.8	3.0	2.8	ナガバ	ナガバ
662	534	5.3	粘土	27.9や26.6内	SB	1.0	0.8	(5.2)灰褐色	17.0	土種	2.5	2.2	2.5	2.2	2.5	2.2	ナガバ	ナガバ
663	595	5.3	粘土	27.9や26.6内	SB	1.0	0.8	(5.2)灰褐色	17.0	土種	2.5	2.2	2.5	2.2	2.5	2.2	ナガバ	ナガバ
664	593	5.3	粘土	27.9や26.6内	SB	1.0	0.8	(5.2)灰褐色	17.0	土種	2.5	2.2	2.5	2.2	2.5	2.2	ナガバ	ナガバ
665	593	5.3	粘土	27.9や26.6内	SB	1.0	0.8	(5.2)灰褐色	17.0	土種	2.5	2.2	2.5	2.2	2.5	2.2	ナガバ	ナガバ
666	589	D-10	粘土	27.9や26.6内	SB	1.1	0.9	(4.5)灰褐色	19.9	土種	2.0	1.8	2.0	1.8	2.0	1.8	ナガバ	ナガバ
667	541	D-10	包含層	要	1.3	1.2	反白	17.0	土種	2.5	2.2	2.5	2.2	2.5	2.2	ナガバ	ナガバ	
668	540	D-10	包含層	要	1.0	0.9	反白	18.0	土種	2.5	2.2	2.5	2.2	2.5	2.2	ナガバ	ナガバ	
669	538	D-10	包含層	要	1.0	0.9	反白	15.0	土種	2.5	2.2	2.5	2.2	2.5	2.2	ナガバ	ナガバ	
670	539	D-10	包含層	要	1.0	0.9	反白	15.0	土種	2.5	2.2	2.5	2.2	2.5	2.2	ナガバ	ナガバ	
671	537	D-10	包含層	要	1.0	0.9	反白	17.0	土種	2.5	2.2	2.5	2.2	2.5	2.2	ナガバ	ナガバ	
672	542	D-10	包含層	台付土器	土種	8.5	8.5	(2.0)にぶい黄褐色	16.0	土種	2.5	2.2	2.5	2.2	2.5	2.2	ナガバ	ナガバ
673	586	D-11	粘土	台付土器	土種	1.0	0.8	反白	17.0	土種	2.5	2.2	2.5	2.2	2.5	2.2	ナガバ	ナガバ
674	588	D-11	粘土	台付土器	土種	1.0	0.8	反白	17.0	土種	2.5	2.2	2.5	2.2	2.5	2.2	ナガバ	ナガバ
675	543	D-11	包含層	脚部	要	1.0	0.9	反白	11.0	土種	2.5	2.2	2.5	2.2	2.5	2.2	ナガバ	ナガバ
676	546	E-10	包含層	脚部	要	1.0	0.9	反白	11.0	土種	2.5	2.2	2.5	2.2	2.5	2.2	ナガバ	ナガバ
677	590	F-10	粘土	脚部	SB	1.0	0.9	反白	7.6	土種	2.5	2.2	2.5	2.2	2.5	2.2	ナガバ	ナガバ
678	545	F-11	粘土	脚部	SB	1.0	0.9	反白	13.1	土種	2.5	2.2	2.5	2.2	2.5	2.2	ナガバ	ナガバ
679	552	F-10	包含層	脚部	SB	1.0	0.9	反白	17.0	土種	2.5	2.2	2.5	2.2	2.5	2.2	ナガバ	ナガバ
680	552	F-10	包含層	脚部	SB	1.0	0.9	反白	17.0	土種	2.5	2.2	2.5	2.2	2.5	2.2	ナガバ	ナガバ
681	592	F-10	包含層	脚部	SB	1.0	0.9	反白	12.3	土種	2.5	2.2	2.5	2.2	2.5	2.2	ナガバ	ナガバ
682	554	F-10	包含層	脚部	SB	1.0	0.9	反白	4.0	土種	2.5	2.2	2.5	2.2	2.5	2.2	ナガバ	ナガバ
683	550	F-12	包含層	脚部	SB	1.0	0.9	反白	3.8	土種	2.5	2.2	2.5	2.2	2.5	2.2	ナガバ	ナガバ
684	549	F-12	包含層	脚部	SB	1.0	0.9	反白	6.6	土種	2.5	2.2	2.5	2.2	2.5	2.2	ナガバ	ナガバ
685	551	F-12	包含層	脚部	SB	1.0	0.9	反白	3.1	土種	2.5	2.2	2.5	2.2	2.5	2.2	ナガバ	ナガバ
686	555	G-11	包含層	脚部	SB	1.0	0.9	反白	17.0	土種	2.5	2.2	2.5	2.2	2.5	2.2	ナガバ	ナガバ
687	559	G-12	包含層	脚部	SB	1.0	0.9	反白	17.0	土種	2.5	2.2	2.5	2.2	2.5	2.2	ナガバ	ナガバ
688	559	H-11	包含層	脚部	SB	1.0	0.9	反白	17.0	土種	2.5	2.2	2.5	2.2	2.5	2.2	ナガバ	ナガバ
689	559	H-11	包含層	脚部	SB	1.0	0.9	反白	17.0	土種	2.5	2.2	2.5	2.2	2.5	2.2	ナガバ	ナガバ
690	559	H-11	包含層	脚部	SB	1.0	0.9	反白	18.9	土種	2.5	2.2	2.5	2.2	2.5	2.2	ナガバ	ナガバ
691	483	B-C-3	粘土	器台	土種	12.4	12.4	反白	17.0	土種	2.5	2.2	2.5	2.2	2.5	2.2	ナガバ	ナガバ
692	593	B-C-3	粘土	器台	土種	12.4	12.4	反白	18.8	土種	2.5	2.2	2.5	2.2	2.5	2.2	ナガバ	ナガバ
693	592	B-C-3	粘土	器台	土種	12.3	12.3	反白	10.3	土種	2.5	2.2	2.5	2.2	2.5	2.2	ナガバ	ナガバ
694	592	B-C-3	粘土	器台	土種	12.3	12.3	反白	16.2	土種	2.5	2.2	2.5	2.2	2.5	2.2	ナガバ	ナガバ
695	590	B-C-3	粘土	器台	土種	12.3	12.3	反白	9.0	土種	2.5	2.2	2.5	2.2	2.5	2.2	ナガバ	ナガバ
696	591	B-C-3	粘土	器台	土種	12.3	12.3	反白	9.0	土種	2.5	2.2	2.5	2.2	2.5	2.2	ナガバ	ナガバ
697	592	B-C-3	粘土	器台	土種	12.3	12.3	反白	9.0	土種	2.5	2.2	2.5	2.2	2.5	2.2	ナガバ	ナガバ
698	593	B-C-3	粘土	器台	土種	12.3	12.3	反白	9.0	土種	2.5	2.2	2.5	2.2	2.5	2.2	ナガバ	ナガバ
699	593	B-C-3	粘土	器台	土種	12.3	12.3	反白	9.0	土種	2.5	2.2	2.5	2.2	2.5	2.2	ナガバ	ナガバ
700	593	B-C-3	粘土	器台	土種	12.3	12.3	反白	9.0	土種	2.5	2.2	2.5	2.2	2.5	2.2	ナガバ	ナガバ
701	594	B-C-3	粘土	器台	土種	12.3	12.3	反白	4.1	土種	2.5	2.2	2.5	2.2	2.5	2.2	ナガバ	ナガバ
702	593	B-C-3	粘土	器台	土種	12.3	12.3	反白	4.1	土種	2.5	2.2	2.5	2.2	2.5	2.2	ナガバ	ナガバ

* ()は薄荷青あるいは薄青。

** 土種、土種-土種は内面の色・表面を参照した。

第3表 古代以降の土器・陶器断面調査表

番号	遺構名	(目録)	材質等	断面 形状	口径 底径	高さ	色調 (表面外・裏地)	胎土 皮白	0.5~1mmの細孔含む	調査(内) 0.2mm~ 0.4mm	調査(外) 0.2mm~ 0.4mm	備考
703	廻転式グリッド 包含層		須恵器	無口台杯(底部)	12.1	8.8	3.2 褐色	皮白	微孔を含む	Dコロナ	Dコロナ	底面に墨書き?
704	11B-10 包含層		須恵器	無口台杯(底部)	9.0	6.6	皮白	皮白	微孔を含む	Dコロナ	Dコロナ	底面に墨書きあり
705	12B-11 15号溝	SB	須恵器	有台杯(底部)	10.7	7.8	3.6 明褐色	皮白	微孔を含む	Dコロナ	Dコロナ	
706	20E-7 16号溝		須恵器	有台杯(底部)	10.7	7.8	3.6 明褐色	皮白	微孔を含む	Dコロナ	Dコロナ	
707	8B-10-12 新土	SB	須恵器	無口台杯	7.3	5.5	2.0 黒	皮白	微孔を含む	平行外斜、Aカム Eコロナ	Eコロナ	内面墨色
708	9C-9 P50		土師器	有台腹(底部)	7.3	5.5	2.0 黒	皮白	微孔を含む	平行外斜、Aカム Eコロナ	Eコロナ	
709	9C-11 35号溝		土師器	?	7.8	5.5	2.0 黒	皮白	微孔を含む	平行外斜、Aカム Eコロナ	Eコロナ	
710	11B-10 P44		土師器	?	7.2	5.5	2.0 黒	皮白	微孔を含む	平行外斜、Aカム Eコロナ	Eコロナ	
711	10 2号溝		土師器	?	7.2	5.5	2.0 黒	皮白	微孔を含む	平行外斜、Aカム Eコロナ	Eコロナ	
712	1 新土		土師器	?	7.2	5.5	2.0 黒	皮白	微孔を含む	平行外斜、Aカム Eコロナ	Eコロナ	
713	16 新土		土師器	?	7.2	5.5	2.0 黒	皮白	微孔を含む	平行外斜、Aカム Eコロナ	Eコロナ	
714	18 A-12~ A-13		土師器	?	14.4	14.4	0.5 黒	皮白	無孔	無孔	無孔	青緑、墨并文 青緑、絞花
715	18E-11 包含層		須恵器	三	18.6	14.4	4.2 灰白	皮白	無孔	無孔	無孔	
716	7B-10 包含層	SB	須恵器	三	13.0	10.8	4.2 灰白	明褐色	明褐色	明褐色	明褐色	墨書きの痕跡あり 墨書き、墨并文、墨書きの痕跡あり
717	4C-11 新土	SB	須恵器	三	4.8	4.8	0.5 灰白	明褐色	明褐色	明褐色	明褐色	新土王室青釉陶器、目赤 新土新
718	14F-9 2号溝		須恵器	?	5.5	5.5	0.5 灰白	明褐色	明褐色	明褐色	明褐色	
719	2 新土		須恵器	?	5.5	5.5	0.5 灰白	明褐色	明褐色	明褐色	明褐色	
720	3 新土		須恵器	?	5.5	5.5	0.5 灰白	明褐色	明褐色	明褐色	明褐色	
721	18 不明		須恵器	?	23.4	23.4	2.0 灰	皮白	2mm以上の細孔含む	3コロナ	3コロナ	
722	21 2号溝?		須恵器	三	11.2	6.0	2.6 灰白	皮白	2mm以上の細孔含む	3コロナ	3コロナ	
723	15F-12? 包含層?		土製品	不明	(6.0)	(4.0)	1~2mmの細孔含む	皮白	1~2mmの細孔含む	平行外斜、Aカム Eコロナ	平行外斜、Aカム Eコロナ	斜面は長方形、底面は正方形 底面は長方形、底面は正方形

* 單位cm。()は調査値

* 調査器・調査器の調整でEコロナでは省略

2. 木製品

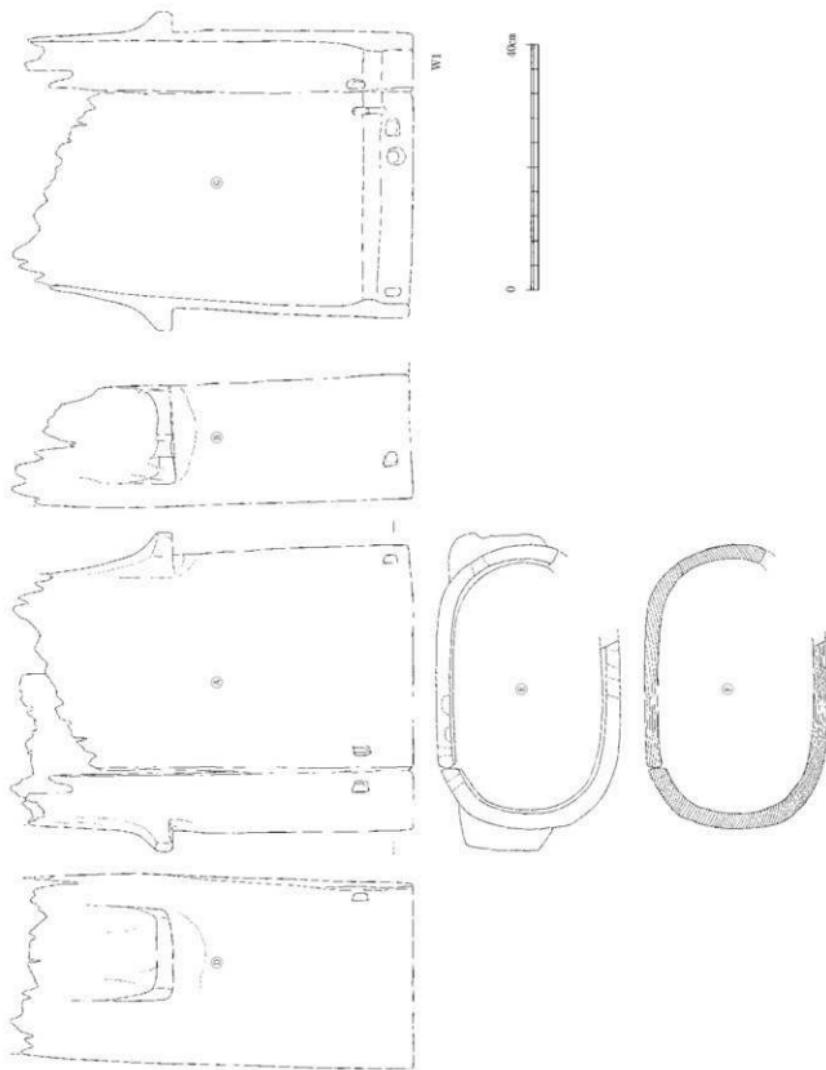
木製品については、現地調査から30年近くが経過し、報告書作成時には出土品の所在が把握できなくなっていた。報告書作成の過程ではその所在を確認したが、すでに出土品整理の過程で実測図化品の混同があり、そのままPEG含浸による保存処理が完了したことが明らかになった。報告書作成の過程ではその不備を補うべく作業を進めている。また、木製容器2点（W1・W4）については平成4年度に年輪年代が測定されている（光谷1993）が、結果を見ると年輪数が実物と逆転しており、W1とW4が混同して扱われていたものと推定される。以上のような理由から、過信できない成果となつておらず、残念である。

木製品は5点が図化されている（第60図～第63図）。W1は1号井戸の井戸側に転用されていた桶形の刳物容器である。双方向に突起状の把手が付く楕円筒状で、底板はなく、上半は腐朽して失われている。楕円の隅部分で縫に割れており、その対向側は割れて失われている。下端には貫通した騎孔が5個、未貫通の騎孔が2個観察されるが、肥厚部より上位で割れ目を挟んで位置する2個の貫通孔は補修結合孔で、それ以外は底板の固定に関係する孔と推定される。樹種は年輪年代の測定時にスギと鑑定されている。年輪年代が測定されているが、前述の推定に従えば、心材型で西暦20年の値となる。W2とW3は3号井戸の井戸側に組み合わされて転用されていた刳抜材である。質感は類似するが、遺存している下端では接合しない。W4は2号井戸の井戸側に転用されていた桶形の刳物容器である。楕円筒状で上半は腐朽して失われているが、双方に僅かな隆起が確認でき、把手は削り取られている。底板はない。下端には貫通した騎孔2個が接近して並び、未貫通の騎孔4個が内面の四隅に観察され、底板の固定に関係する孔と推定される。樹種は年輪年代の測定時にスギと鑑定されている。年輪年代が測定されているが、前述の推定に従えば、心材型で西暦142年の値となる。W5は3号溝から出土した堅杵である（写真図版8）。心去り材で、ほとんど欠損のない優品である。

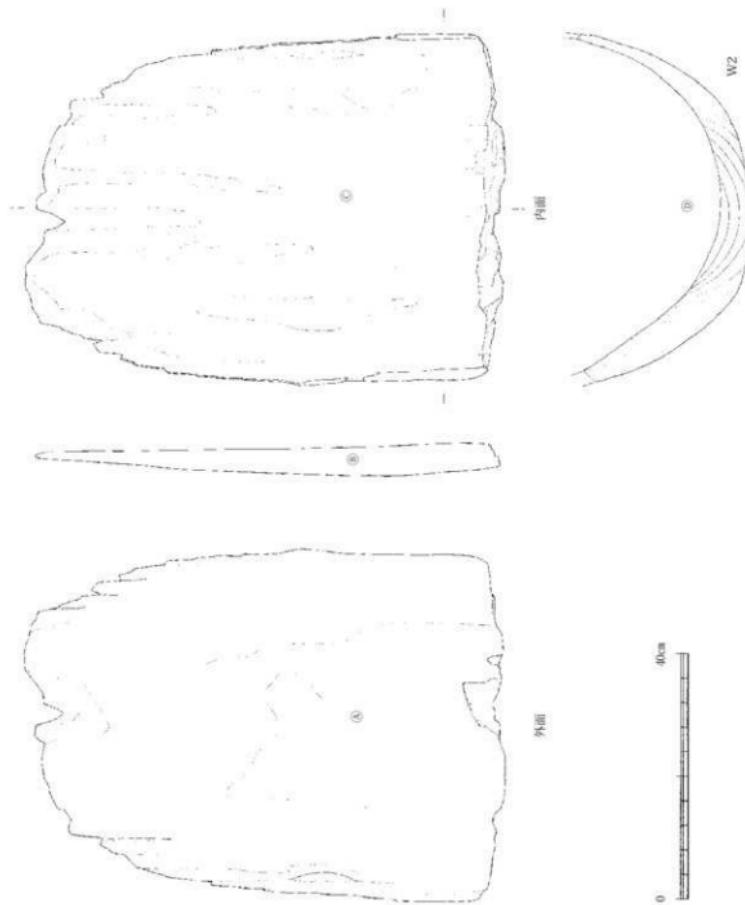
3. 石製品・金属製品

石製品（第64図～第67図） 打製石斧（S1～S5）、磨製石斧（S6・S7）、環石（S8）、磨製石庖丁（S8）、砥石（S10～S15）、軽石（S16～S21）、すり石類（S22）、石核（S23）、管玉（S24～S26）、石鏃（S27）が図化されている。磨製石斧は弥生時代に通有の伐採斧である。S6は頂部と側面に敲打痕が、S7も外縁にすり面があり、ともに転用を示す。S9の素材は凝灰岩であるが、加賀北部地域に通有の白色系（松尾2004）と比較すると、やや硬質で青みがかつた色調である。砥石は凝灰岩素材の手持ち砥石（S10～S14）と河川縛素材の置き砥石（S15）があり、石質はやや軟質で粗（S10・S12）、やや硬質で密（S11・S13・S14）、硬質で密（S15）である。軽石はすり面や線条痕（S18）が観察できる。S23は玉石材の石核である。石材は淡緑色でやや軟質である。接合しているが、割れ面の風化が進んでいないことから、後世に割れた可能性が高い。S24・S25は管玉の成品である。細身で、石材は濃緑色で硬質である。S26は管玉の未成品であり、角柱体に成形された段階である。石材はS23と似る。S27は有茎鏃で、石材はチャート質である。

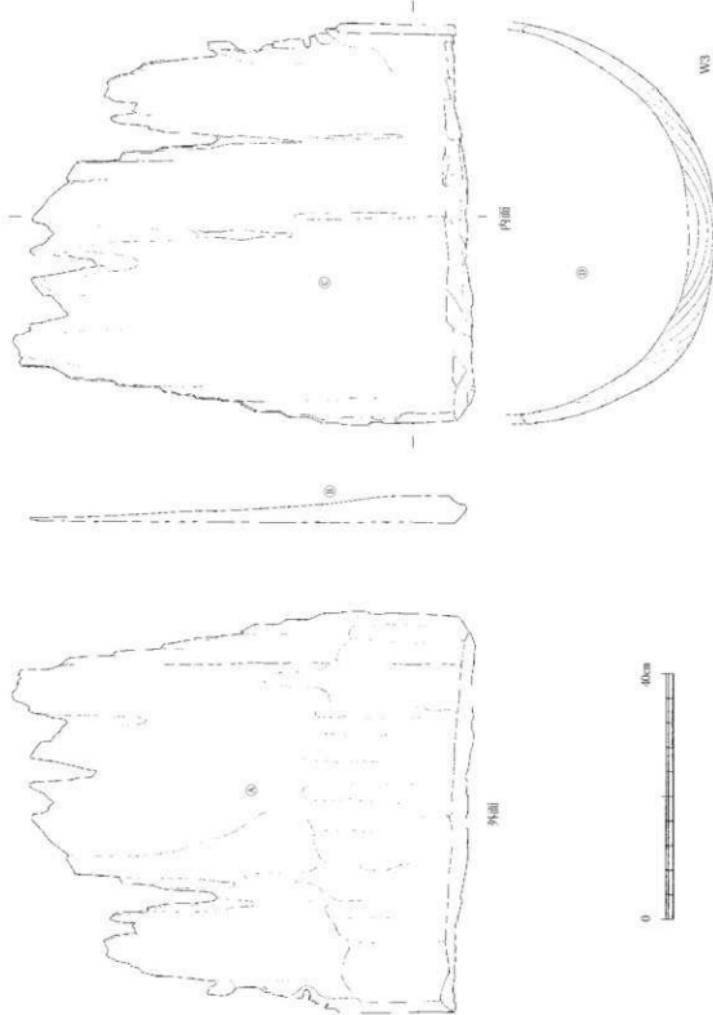
石製品の時期について述べる。打製石斧については弥生・古墳時代であり、出土した遺構の時間幅で考えてよいが、限定はできない。磨製石斧は弥生中期、環石は弥生中期か後期、磨製石庖丁は弥生中期、管玉成品は弥生中期、石核と未成品は弥生後期以降、石鏃は弥生中期以前に通有の特徴を示す。遺構で共伴する土器とは時期が一致しないか時間幅があつて限定が難しいが、3号溝の一部（S



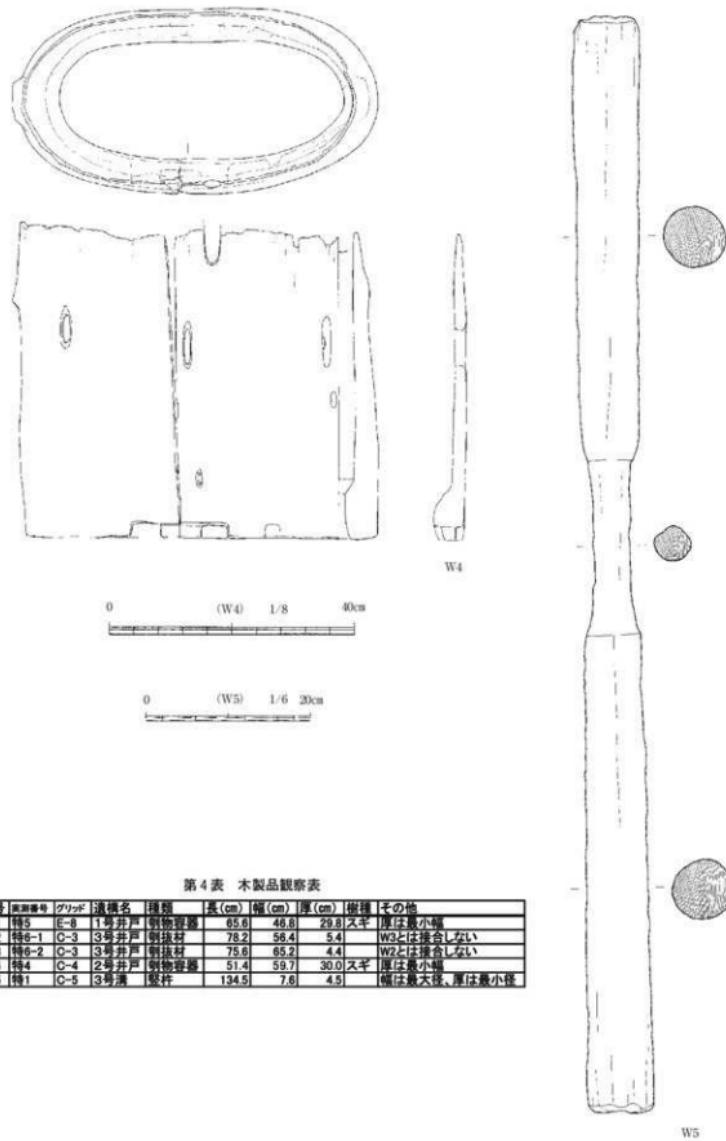
第60図 木製品実測図1 (S=1/8)



第61図 木製品実測図2 (S=1/8)



第62図 木製品実測図3 (S=1/8)



第4表 木製品観察表

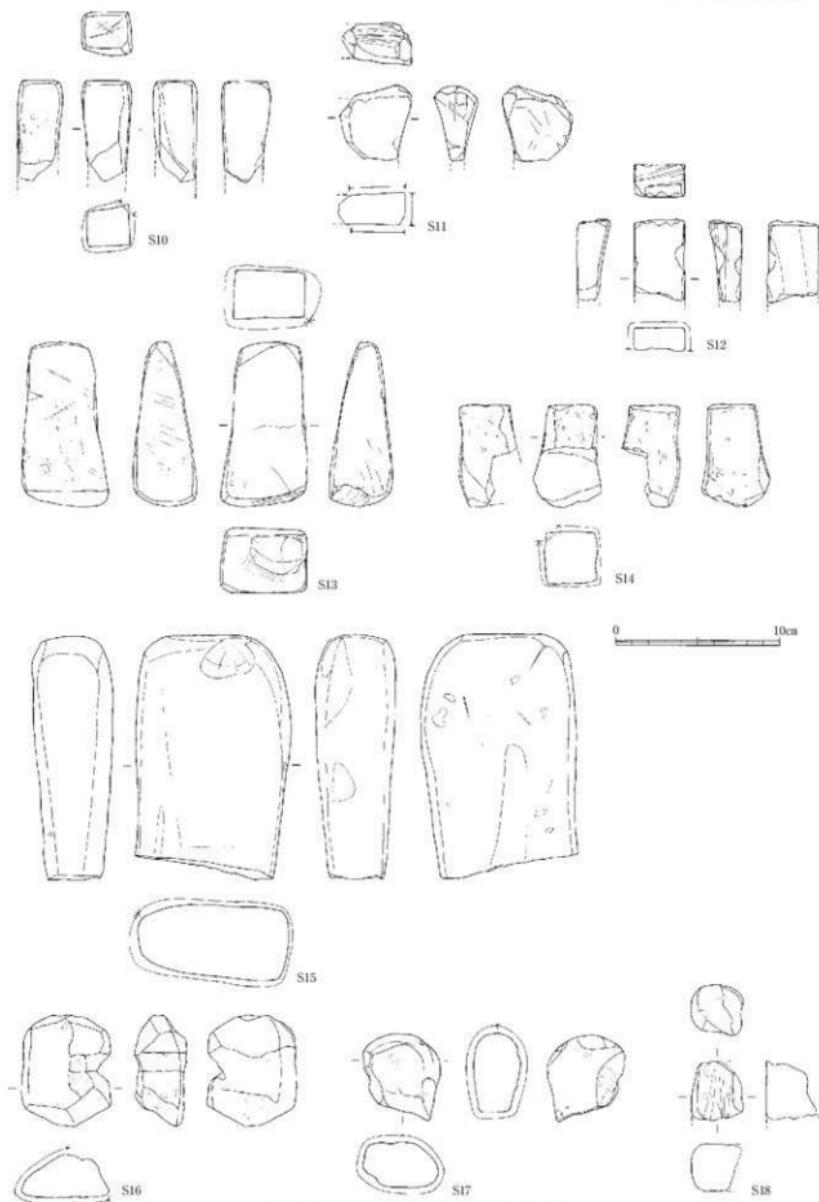
番号	実測番号	グリップ	遺構名	種類	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	材種	その他
W1	井5	E-8	1号井戸 剥物取扱	スギ	65.6	48.8	29.8	スギ	厚は最も小
W2	井6-1	C-3	3号井戸 剥物取扱	スギ	78.2	58.4	5.4	スギ	W3とは接合しない
W3	井6-2	C-3	3号井戸 剥物取扱	スギ	75.6	65.2	4.4	スギ	W2とは接合しない
W4	井4	C-4	2号井戸 剥物取扱	スギ	51.4	59.7	30.0	スギ	厚は最も小
W5	井1	O-5	3号井 截打	スギ	134.5	7.6	4.5	スギ	厚は最大後、厚は最小後

第63図 木製品実測図4 (S=1/6・1/8)

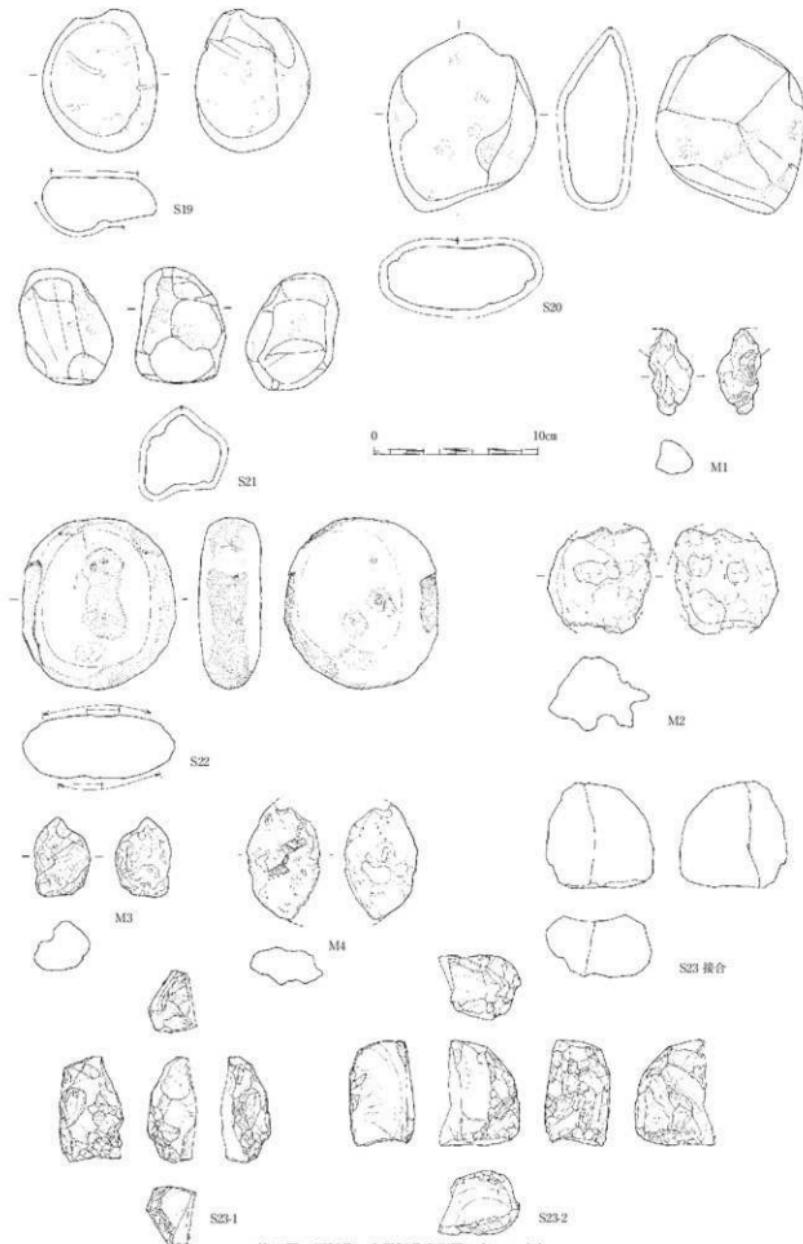
第4節 遺物



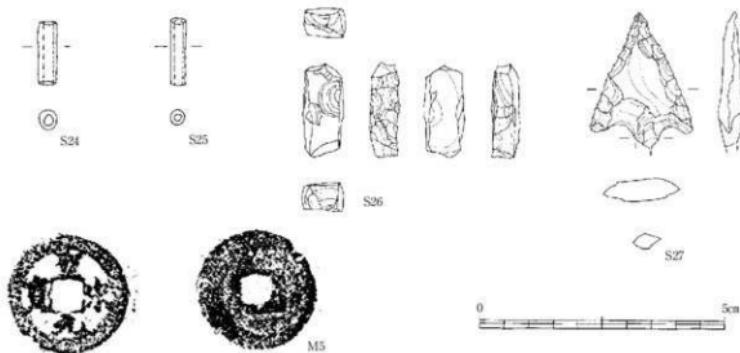
第64図 石製品・金属製品実測図1 (S=1/3)



第65図 石製品・金属製品実測図2 (S=1/3)



第66図 石製品・金属製品実測図3 (S=1/3)



第67図 石製品・金属製品実測図4 (S=1/1)

第5表 石製品観察表

番号	実測番号	グリッド	遺構名	(詳細)	種類	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	備考
S01	石07		1号溝	下	打製石斧	(6.7)	6.9	2.2	(142.3)	
S02	石08		2号溝		打製石斧	(10.7)	9.4	2.2	(258.2)	
S03	石06	B-6	1号溝		打製石斧	(11.5)	9.6	3.6	(487.5)	
S04	石02		3号溝	下	打製石斧	(7.32)	7.1	(2.1)	(164.2)	
S05	石25	H-11	包含層		打製石斧	24.0	12.3	3.6	1042.9	
S06	石03	D-7	3号溝		磨製石斧	(11.1)	6.1	4.8	(465.1)	
S07	石20	B-11	31号溝		磨製石斧	(7.0)	5.0	3.2	(198.3)	
S08	石01		3号溝	下	環石	(9.9)		2.9	(155.2)	孔径2.4cm
S09	石04		3号溝	下	磨製石包丁	(5.6)	(6.3)	1.1	(48.6)	
S10	石21	B-10			砾石	(6.1)	3.2	2.6	(62.7)	
S11	石30	G-11	耕土		砾石	(4.5)	4.1	2.7	(45.5)	
S12	石09	C-11	土器群		砾石	(4.9)	3.2	1.9	(45.3)	
S13	石05	D-11	包含層・P57		砾石	10.1	5.7	3.1	282.2	
S14	石23	D-11	19号溝		砾石	6.4	4.2	3.2	(95.3)	
S15	石28	C-11	包含層		砾石	(15.0)	9.4	4.9	(1220.7)	
S16	石13	B-12			砾石	6.8	5.3	2.9	33.0	
S17	石16		3号溝		砾石	5.1	4.6	2.9	11.7	
S18	石17		3号溝	下	砾石	3.6	3.3	2.9	6.8	
S19	石22		5号溝		砾石	8.2	6.9	3.4	39.6	
S20	石29	D-9	P1		砾石	11.3	9.4	4.3	61.2	
S21	石24	11	31号溝		砾石	7.1	5.9	5.8	32.2	
S22	石19		9号溝		すり石類	10.6	9.3	3.9	569.4	
S23	石32	B-10	31号土坑・包含層		石核	6.5	6.6	4.0	155.3	
S24	石11	D-8	3号溝	上	管玉	1.4	0.4		0.3	孔径0.2cm
S25	石10		32号溝		管玉	1.3	0.3		0.1	孔径0.15cm
S26	石15	D-12	13号土坑		管玉未成品	1.9	0.8	0.6	1.3	
S27	石14	D-12	13号土坑		石鐵	(2.6)	2.2	0.5	(2.0)	

()は欠損値あるいは復元値

第6表 金属製品観察表

番号	実測番号	グリッド	遺構名	(詳細)	種類	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	その他
M1	石18	B-8 C-8	2号溝	下	鉛津	5.3	2.5	2.1	16.6	
M2	石26	H-11	包含層		鉛津	6.5	6.4	4.4	144.2	炉底津か
M3	石27	D-11	包含層		鉛津	4.8	3.4	3.0	42.4	
M4	石31	F	包含層		鉛津	7.0	4.5	2.2	55.7	
M5	石12	B-1	耕土		錢貨	2.4			2.9	長は銭径 孔径0.65cm

5・S24)については中期の土器と同時期かもしれない。砥石は古代以降まで時間幅をもたせる必要があるが、19号溝のもの(S14)は弥生・古墳時代であろう。軽石は弥生・古墳時代であり、出土した遺構の時間幅で考えてよいが、限定はできない。

金属製品(第66図・第67図) 鉛滓(M1~M4)、銭貨(M5)が國化されている。鉛滓のうち、M2は形状から炉底滓の可能性があり、やや比重が大きい。鉛滓の時期は古代以降であろう。2号溝出土のM1についても陶磁器と同様に混入の可能性が高い。M5は北宋銭の「聖宋元寶」である。西暦1108年初鋤の銅錢で、書体は行書であるが、鋳造が進んでいる。

第5節 小 結

1. 調査の成果

今回の調査で確認された遺構と遺物は圧倒的に弥生・古墳時代の時期を主体とするものであった。古代以降の時期はP44・60等、きわめて少ない。弥生・古墳時代で出土土器から時期を限定できる遺構は以下のとおりである。この他の遺構は土器に時間幅があり、遺構の存続なのか土器の混入なのか判断が難しい。ただし、1~3号溝については西念3~5期にかけて存続した遺構と推定できる。

弥生中期後葉(西念1期) 12号溝、7・8・10・11号土坑

弥生後期前半(西念2期) 15・31号土坑

弥生後期後半(西念3期) 8・47号溝、5・24・26・29・32・45号土坑、1号井戸

弥生終末(西念4期) 30・31・33・34号溝、6号土坑、2号掘立柱建物、2号井戸

古墳前期前半(西念5期) 2・3号土坑、3号井戸

遺構の性格については、形状や出土遺物から想定できるものを示す。1~3号溝は規模や堆積から流路と推定され、出土土器では同時並存した可能性がある。3号溝は堰状遺構の存在から1号溝と2号溝の水量を調整するバイパス的な存在かもしれない。その周辺に位置する4・7・39・40号溝は流路と関係する溝群であろう。一方、33・49・50号溝、31・34・47号溝(45号土坑も含む)、9?・30・35号溝、12号溝など、流路の南・西に離れて位置する弧状の溝群は竪穴建物ないし平地建物の周溝となる可能性がある。地勢が低湿なことや弧の内部が広いことから、平地建物の外周溝と考えておく。掘立柱建物は3棟が復元されている。建物の機能は平地建物が住居、掘立柱建物が倉として大過あるまい。土坑のうちでは平面が長方形状の13~15・22・24号土坑や、土器の壺1個体が出土した7・10号土坑は土坑墓の可能性がある。前者の群については過去に弥生中期の土坑墓として紹介されたものであるが、整理作業の結果、時期は限定できなかった。井戸は3基とも流路の周辺に分布し、木製の井戸欄が遺存していた。現地調査時は弥生・古墳時代の井戸として県内でも初めてに近い調査例であり、以降、多くの文献で紹介されている。

遺跡の性格としては、弥生・古墳時代の住居、倉、井戸、墓が流路の近くに営まれる景観から、当時の平野部に展開した集落と考えられよう(第68図)。その中心となる時期は弥生中期後葉と弥生後期後半~古墳前期前半に大別できる。弥生中期後葉は調査区南端に偏った限定期的な分布を示す。平地建物の外周溝と土坑墓の可能性がある土坑が重なっているが、大きな時間差は認められず、むしろ住居と墓が近接するこの時期の集落構造と評価できよう。弥生後期後半~古墳前期前半は流路の南西岸に建物が集中しており、主要な居住域と推定される。弥生終末には遺構密度や遺物量が増大するが、古墳前期前半には急減し、その新相には廃絶する。以上のような消長は遺跡が立地する金沢平野西部

の主要な遺跡（出越2003）と共に多くの部分が多く、地域の動向も反映している。

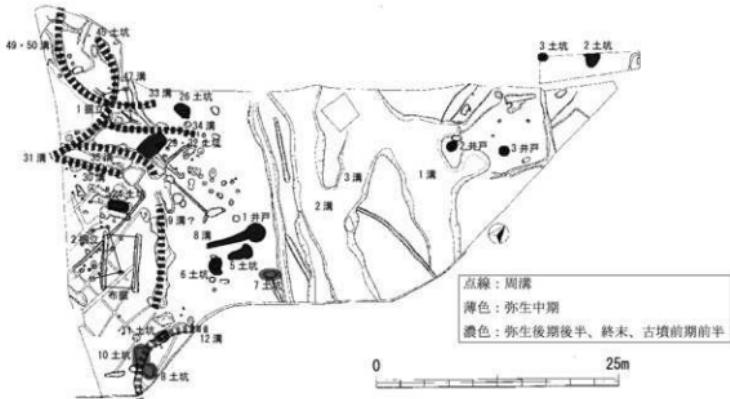
2. 弥生・古墳時代の遺跡周辺

今回の調査区で確認された遺構・遺物が弥生・古墳時代の時期を中心とする様相は、金石往還を挟んで南北側に位置する昭和61年度調査区、昭和63年度調査区が古代を中心とする様相と大きく異なっており、むしろ南東約200m先に位置する寺中遺跡との関連が指摘されてきた。また、近年は各遺跡の発掘調査が進み、各遺跡の重複や詳細な時期など新たな知見が加わっている。以上のような成果をふまえて周辺の弥生・古墳時代遺跡の分布や時期について述べ（第69図）、結びとしたい。

弥生中期 中期中葉には寺中遺跡とやや遅れて寺中B遺跡、後葉にはそれらに加えて金石本町遺跡の本調査区、同じく西端部で住居や墓を含む遺構が確認される。各調査区における分布範囲は限定的であり、遺構・遺物ともそれほど多くない。相互の間隔は比較的空いている。中期中葉は小規模な集落の出現、後葉はそれらが複数点在する状況と理解できる。

弥生後期～古墳前期 後期前半は本調査区で遺構・遺物が著しく減少し、その他の地点では見られなくなる。後期後半は本調査区で分布が拡大し、密度も高くなる。弥生終末には加えて金石本町遺跡の西端部、寺中遺跡、寺中B遺跡にも分布し、寺中遺跡と寺中B遺跡は分布域が重なって一体化する。各集落は古墳前期前半の古相まで続くが、新相には消失している。

遺跡の動態 弥生中期、後期とも遺構・遺物の分布が先行する地点があり、その後遅れて周間に複数の地点で分布域が形成されるという特徴を指摘できる。集落の規模や集団の系譜については論及



第68図 弥生・古墳時代集落の主要遺構配置 (S=1/500)

できないが、母村と分村に類似した関係は注目に値しよう。また、前期前半はさらに東に近接する畠田・寺中遺跡が遺構・遺物を増加させており、集落の主たる居住域が徐々に移動している可能性が高い。以上のように、本調査区の周辺は遺跡の動態がかなり具体的に把握されている地域となった。今後、その歴史的・社会的背景の追求がいっそう期待されるところである。

寺中遺跡・寺中B遺跡 両遺跡と本調査区の間には遺跡の分布調査・発掘調査が行われていない区域が広がっており、遺構・遺物の分布が一連のものであるかどうかは不明である。しかし、寺中遺跡・寺中B遺跡では、分布範囲が最大となり本調査区に最も接近する弥生終末の段階には、明らかに周縁部の分布が希薄化しており、畠田・寺中遺跡との接点となる北東端部では遺跡より古い旧河川で途切れている。北西端部と本調査区の間においても、周辺の低湿な地勢から考えると、旧河道や下降地形が存在し、弥生・古墳時代においては分布が途切れると考えた方が自然ではないだろうか。ただし、そうであったとしても両遺跡と本調査区の関係が密接であることは明白である。これらを一つの集落と見なすかどうかについては、集落の概念に関わる別次元の問題であろう。



第69図 金石本町遺跡・寺中遺跡・寺中B遺跡 (S = 1 / 5,000)

第7表 寺中遺跡・寺中B遺跡の発掘調査一覧表

番号	遺跡名	調査年度	調査面積	文献
10	寺中遺跡	昭和43(1968)	448㎡	石川考古学研究会1969『石川考古学研究会々誌』第12号
11	寺中遺跡	昭和49(1974)・昭和50(1975)	900㎡	金沢市教育委員会1977『金沢市寺中遺跡－第Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ次調査報告書－』
12	寺中遺跡	昭和4(1979)	100㎡	石川県立埋蔵文化財センター1982『石川県立埋蔵文化財研究センター年報』第1号
13	寺中B遺跡	昭和5(1980)	150㎡	金沢市教育委員会1982『金沢市無量寺遺跡』
14	寺中B遺跡	昭和6(1986)・平成元(1989)	3258㎡	石川県立埋蔵文化財センター1991『金沢市寺中B遺跡』
15	寺中B遺跡	平成元(1989)	300㎡	金沢市教育委員会1991『金沢市寺中B遺跡』
16	寺中B遺跡	平成2(1991)	600㎡	金沢市教育委員会1991『金沢市寺中B遺跡』、金沢市教育委員会1992『金沢市寺中B遺跡』
17	寺中B遺跡	平成8(1996)	1,350㎡	金沢市教育委員会2000『金沢市内遺跡発掘調査報告書』
18	寺中B遺跡	平成14(2002)	6,000㎡	金沢市(金沢市埋蔵文化財センター)2006『石川県金沢市寺中B遺跡VI・桔町南遺跡』、祇園・寺中遺跡III、金沢市(金沢市埋蔵文化財センター)2007『石川県金沢市寺中B遺跡VII・祇園・寺中遺跡IV』
19	寺中B遺跡	平成15(2003)	268㎡	金沢市(金沢市埋蔵文化財センター)2008『石川県金沢市 市内遺跡発掘調査報告書』
20	寺中B遺跡	平成16(2004)	230㎡	金沢市(金沢市埋蔵文化財センター)2008『石川県金沢市 市内遺跡発掘調査報告書』

*番号1~9については第1章第1図と共に省略する。

引用文献

- 楠 正勝 1996 「第5章第1節 弥生時代中期後葉から古墳時代前期前半の土器」『西念・南新保遺跡Ⅳ』金沢市教育委員会 401頁
- 出越茂和 2003 「内水面と古代水上交通～戸水・大友遺跡群の総括に代えて～」『石川県金沢市大友西遺跡Ⅲ』金沢市（金沢市埋蔵文化財センター） 13-14頁
- 橋本英道 1987 「第5章第3節 スタンプ文について」『吉竹遺跡』石川県立埋蔵文化財センター 79頁
- 松尾 実 2004 「石川県における磨製石庭丁研究についての現状と若干の考察」『石川県埋蔵文化財情報』第12号（財）石川県埋蔵文化財センター 56頁
- 光谷拓実 1993 「石川県内遺跡出土木製品の年輪年代」『拓影（石川県立埋蔵文化財センター所報）』第40号 石川県立埋蔵文化財センター（財団法人石川県埋蔵文化財センター2001「金沢市藤江C遺跡！」 186-187頁に再掲載）

参考文献

金沢市（金沢市埋蔵文化財センター） 2002 「大友西遺跡Ⅱ」 金沢市（金沢市埋蔵文化財センター）

茶道資料館 1990 「遺跡出土の朝鮮王朝陶磁－名碗と考古学－」 茶道資料館

北陸古代土器研究会・石川考古学研究会 1988 『シンポジウム 北陸の古代土器研究の現状と課題』

北陸古代土器研究会 2000 『シンポジウム 古代の須恵器貯蔵具Ⅱ－貯蔵具の制作技術を復元する－』

第4章 昭和61年度調査

第1節 調査の概要

本年度調査区は大きく2調査区に分かれ、東側がⅡ区、西側がⅢ区と呼称される。Ⅰ区は昭和63年度調査区に相当する。臨港線道路のセンターラインを基準にグリッドを設定している(第1図)。工事杭No140がB14杭に相当する。グリッドは金石往還を基点に、南西に向かって数字が大きくなる。センターライン北側をB列、南側がC列である。このセンターラインより47°北に振ると、座標系上の真北となる。検出面の標高は、Ⅱ区東端C14で0.4m、Ⅱ区西端C17で0.5m、Ⅲ区中央C20で上層面が0.9m、下層面が0.7m、Ⅲ区西端C23上層面が0.8mとなる。なお、Ⅲ区西側については、昭和60年度に県立埋蔵文化財センターが試掘調査を実施しており、現木曳川から普正寺高畠遺跡付近まで、湿润な旧凹地形を確認している。検出された遺構は、その多くが古代のものと推定されるが、Ⅲ区上層では中世以降の遺構が検出され、包含層より中近世陶磁器が定量出土している。

Ⅲ区においては、全城の遺構検出・掘削を行い、上部(上層)遺構として平面図作成を行っている。その後、さらにトレンチ等を設け下部(下層)の状況を確認し、遺構が検出された区域を面的に掘削している。面的に下層を掘削したのは、B20グリッドの一部、C20、21グリッドである。

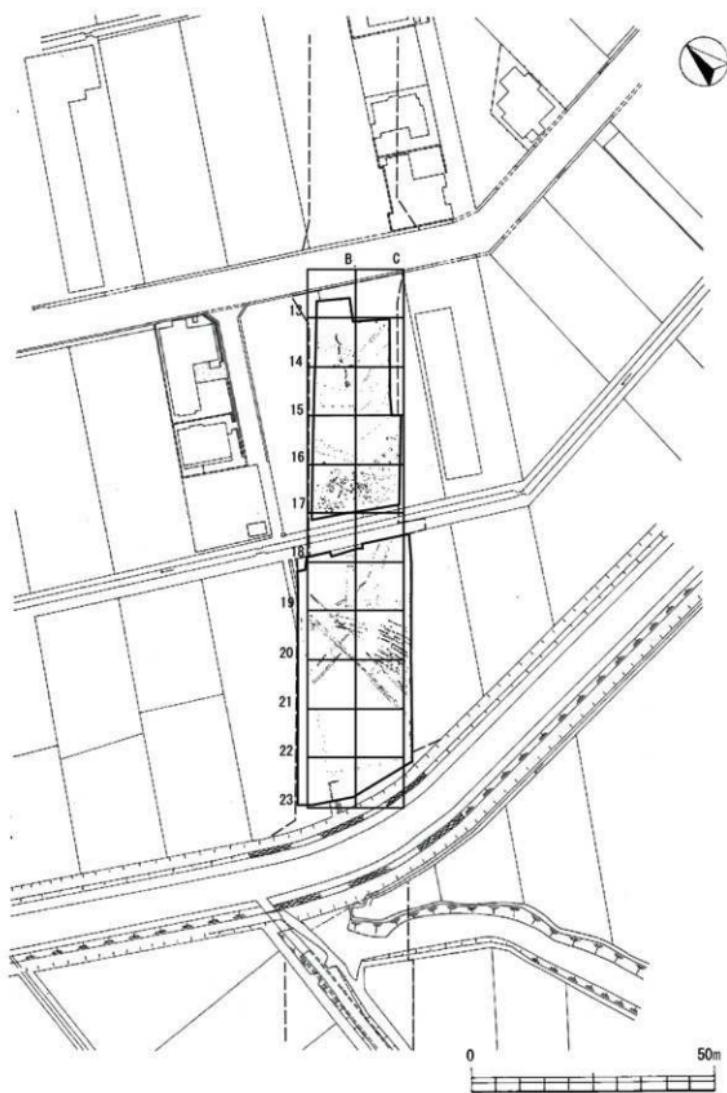
第2節 遺構

1. Ⅱ区

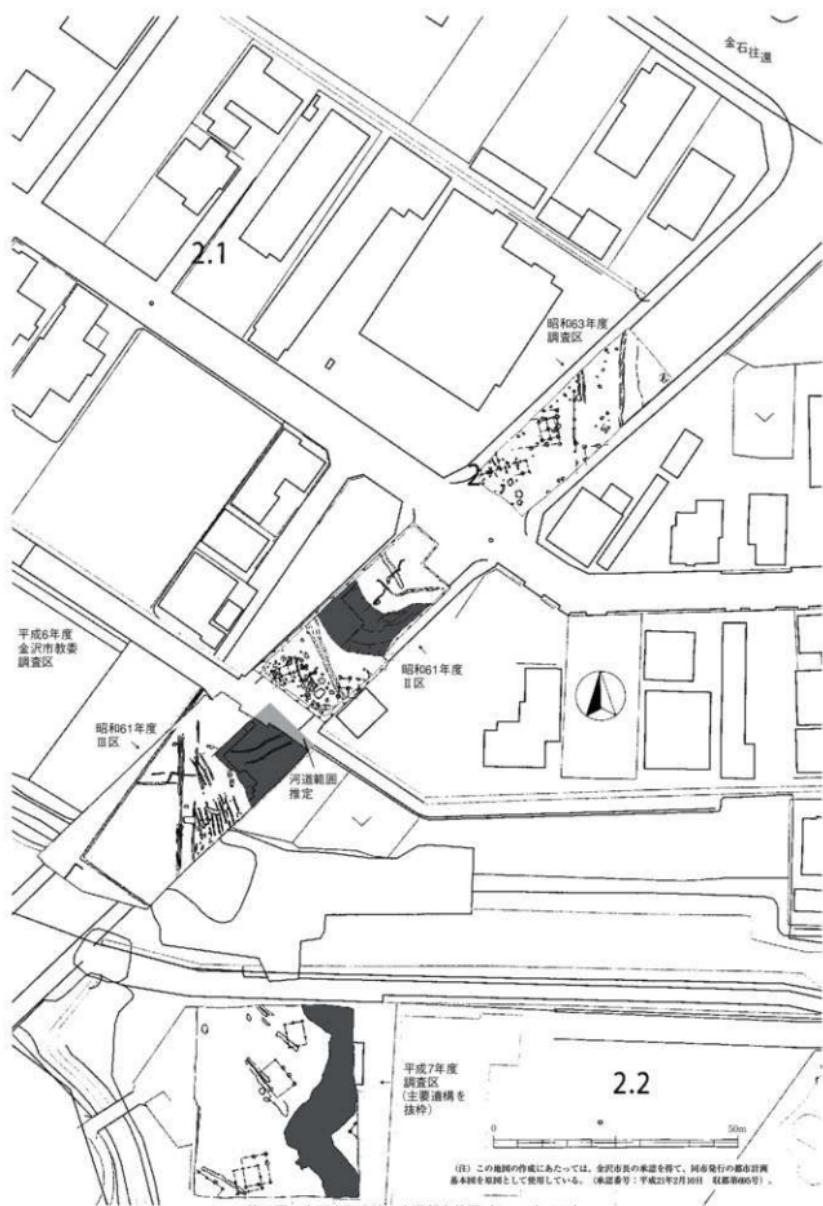
1号掘立柱建物(第5、9図) 軸はN-5°-Eとなる。2×2間(以上の可能性あり)の総柱建物である。確認した規模は約4×4mで面積16m²(以上)となる。南東側は調査区外になるため、全体規模の確定はできない。柱穴は概ね一辺が80cm程度の隅丸方形形状を呈する。柱穴の深さは40cm弱である。遺物はピット1から1、2が出土している。久保・小西(1996)は、金石本町遺跡の6世紀末から7世紀初頭以降9世紀までの遺構の変遷を、大きく3段階に分けている。(1期)真北を意識せず、建物に溝も伴わない段階(6世紀末~北陸古代土器編年Ⅱ₃期)、(2期)真北を意識していないが、建物に溝を伴う段階(同編年Ⅱ₃~Ⅳ₂(古)期)、(3期)真北を意識する段階(同編年Ⅳ₂(新)~VI₁期)、に分けている。主軸が真北に近い本建物は(3期)に属するものと推定される。

2号掘立柱建物(第6図) 軸はN-21°-W。2×2間(以上の可能性あり)の総柱建物である。確認した規模は約3.4×3.4mで面積11.6m²(以上)となる。西側は調査区外になるため、全体規模の確定はできない。柱穴は径約50cm程度の円形を呈すもので、隅丸方形形状をとるものもある。柱穴の深さは10~50cmとばらつきが大きい。ピット101、102で柱根が残存していた。本建物の主軸は、先の古代建物群としてはやや異質であり、所属時期の詳細については判然としないが、古代の2号溝と主軸が近いため、古代の建物の可能性をもつ。

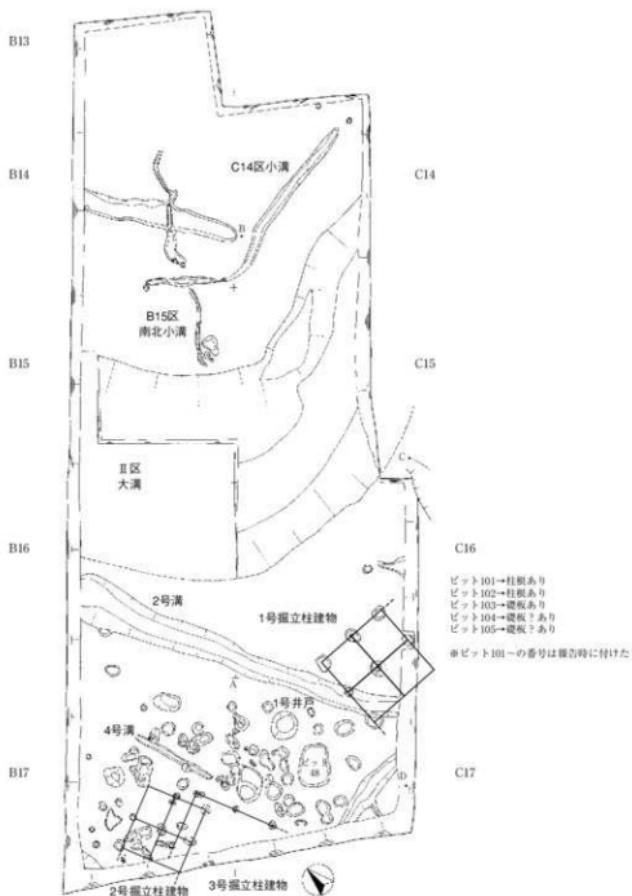
3号掘立柱建物(第6図) 軸はN-20°-W。桁行約4.3mを確認したが、4つのピットのみの検出にすぎず、西側は調査区外になるため、全体規模の確定はできない。櫛列である可能性も残る。柱穴は径30cm程度で円形を呈す。柱穴の深さは10~25cmである。ピット104、105で礎板状の木質遺物が残存していた。本建物は2号掘立柱建物と主軸をほぼ同一としているため、所属時期についても、同



第1図 調査区位置図 ($S=1/1,000$)



第2図 金石本町遺跡 南南部全体図 ($S=1/1,000$)



第3図 II区全体図 (S=1/250)

建物に近いものと推定される。

この他、2号建物の東側には、柱穴状のピットが多く見つかっており（第6図）、数棟の掘立柱建物又は柵列が存在するものと考えられる。ピット103は深さ41cmを測り、礎板が出土している。Eピットは深さ49cmを測り、柱根状の遺物が出土している。

1号井戸（第5、9図）長軸約1.4m、短軸約1.3m、深さ53cmを測り、最深部の標高は約0mである。井戸枠材は出土しておらず、掘削深度も目立った大きさをもたないことから、井戸跡とするには若干問題が残る。底部より6cm上に完形の須恵器蓋11が、逆位で出土した。外面にロクロ削り調整を施しV期でも古相を呈し、V期に属する遺物と推定される。外面には油煙状の黒色物が付着している。11は廃棄後に投入された可能性が考えられる。遺構の時期は9世紀前半と推定される。

ピット48（第5、9図）長軸約2.2m、短軸約1.6mの隅丸方形を呈し、深さ33cmを測る比較的大型の遺構である。出土遺物は9の内面黒色土師器を実測した。外側面下部や外底面は削っており、糸切り痕跡は残さない。遺構の時期は、周辺の状況より古代と思われるが判然としない。

Ⅱ区大溝（河道跡）（第3、4、10~12、15図）幅約11.2mを測り、調査における最深高は、標高約1mである。検出面からの深さは1.7~1.9m程度である。B16グリッドの大溝平面図は破線となっているが、調査では最終的に完掘している。調査区内で大きく蛇行し、この蛇行部で遺物の出土が目立った。地形を鑑み、南東から北に水が流れていたものと考えられる。

出土遺物としては土器20~66、167、木製品W1~78を実測した。出土地「B15たちわり」も本遺構出土の可能性がある。出土土器は52の古墳時代前期に属する遺物もわずかに存在する。主体となる古代については、8世紀前半から確実に遺物が存在し、8世紀後半~9世紀後半代が中心となる時期である。

2号溝（第3、4、9図）幅1.1~2.4m、深さ約30cmを測る。覆土は暗灰色粘土。軸は、2号掘立柱建物に近い。出土遺物は15~26を実測した。15~18のように弥生時代から古墳時代にかけての遺物を含むが、9世紀後半代の須恵器・土師器を含んでいる。遺構は古代の溝と推定されるが、9世紀代の1号掘立柱建物の柱穴を切っており、古代の遺構群のなかでは後出の遺構と推定される。

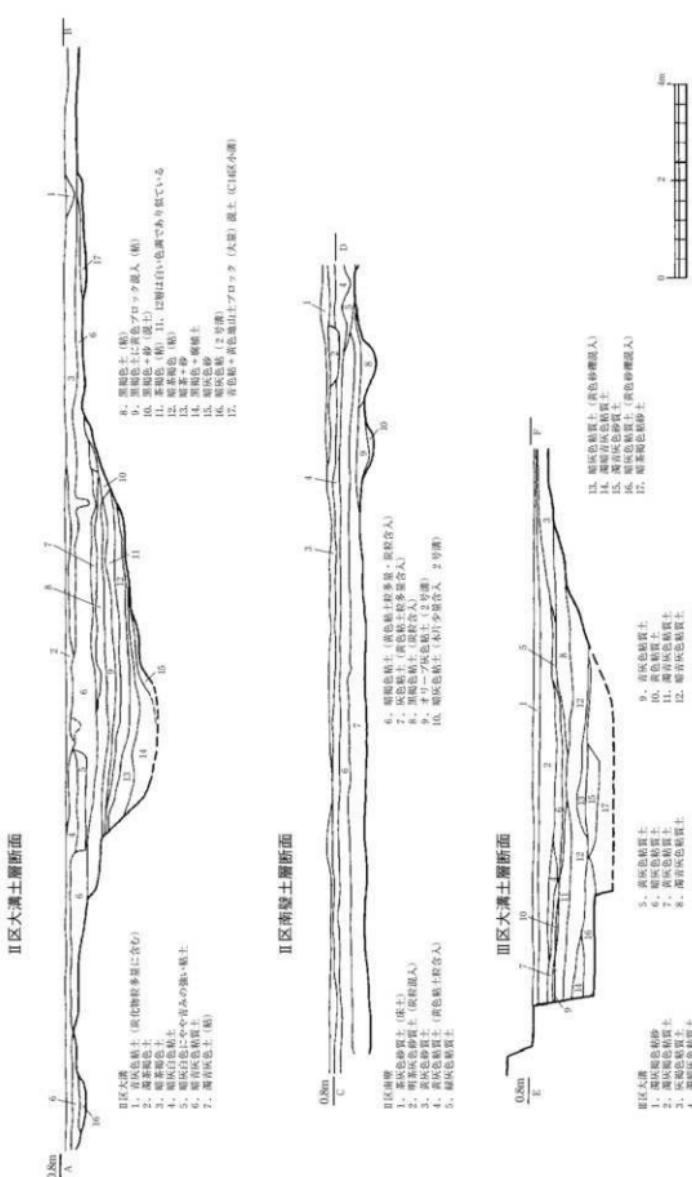
C14区小溝（第3、9図）幅約50cm、深さ約10cmを測る。出土遺物では12、13を実測した。12はV期の無台杯で口縁部は打ち欠いている可能性がある。大溝と並行しており、所属時期は大溝の時期に近いと判断され、古代の溝と推定される。

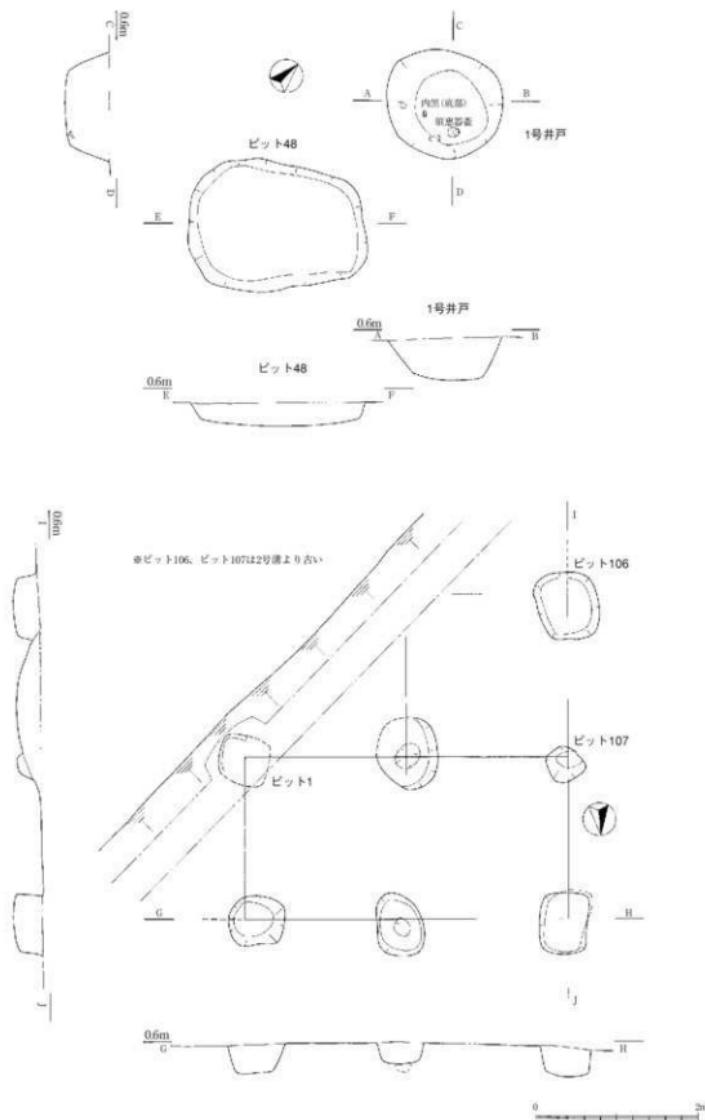
II区大溝の南東側で一部拡張して調査を行い、深さ約60cmの落ち込みを検出した。大溝に合流する溝の可能性がある。また、包含層4層から古代の遺物が出土している。

2. III 区

1号溝、2号溝（第7、8、15図）上層遺構。1号溝は幅約50cm、深さ20~30cm程度を測る。2号溝は幅約20cm、深さ5cm程度。2つの遺構は方向軸が揃っており同時期の遺構である。出土遺物では1号溝の139~143を実測した。14~17世紀の遺物である。ただし、2つの溝は、現代の土地区画に合っており、所属時期も近現代と推定される。

3号溝、4号溝、11号溝（第7、8、15図）上層遺構。3号溝は幅約30cm、深さ8cm程度、方向軸はN-1°-Eである。4号溝は幅約40cm、深さ8cm程度で、方向軸はN-2°-Eである。11号溝は幅約40cm、深さ10cm程度、方向軸はN-3°-Eである。この3条の溝は方向軸が少々異なっているが、所属時期は近いと推定される。4号溝と11号溝の間隔は、芯々間で、2.7~3mである。道路側溝又は土地を区画する溝の可能性がある。3号溝出土の青磁碗144は15世紀末~16世紀前半代の所

第4図 II区・III区大溝はか土層断面図 ($S=1/100$)



第5図 1号井戸・ピット48・1号掘立柱建物 ($S=1/60$)

産。11号溝の土師器皿151は13～14世紀の所産とそれぞれ推定される。溝資料のため、遺構の所属時期は中～近世と幅を持って考えたい。

9号溝、10号溝（第7、8、15図） 上層遺構。両溝とも幅約40cm、深さ5cm程度を測る。両溝の間隔は、芯々間で、2.4～2.2mで並走しており、所属時期も近いことが推察される。また、軸に共通性がある6号溝も同時期と推定される。道路側溝又は土地を区画する溝の可能性がある。10号溝出土の珠洲焼片口鉢150は珠洲焼V期で14世紀末～15世紀前半代の所産と推定される。溝資料のため、遺構の所属時期は中～近世と幅を持って考えたい。また、6号溝は3、4号溝に切られているため、これより古い遺構であると判断される。

1号土坑（第6、14図） 上層遺構。長軸約3.4m、短軸約1m、深さ約20cmを測る。出土遺物では、129～131の須恵器を実測した。ただし周辺の畝溝群を切っている。所属時期は中世以降である。

2号土坑（第6、14図） 上層遺構。長軸約1.7m、短軸約1mで隅丸方形を呈し、深さ約60cmを測る。周辺の畝溝群を切っている。出土遺物では133、134の18世紀代の遺物を実測した。近世の遺構と推定される。

3号土坑（第6、14図） 上層遺構。長軸約2.4m、短軸約1.4mでの隅丸方形を呈し、深さ約10cmを測る。出土遺物では古代の須恵器135を実測したが、上層遺構である11号溝を切っており、所属時期は中世以降と推定される。

4号土坑（第6図） 上層遺構。長軸約0.9m、短軸約0.7mの円形を呈し、深さ約20cmを測る。

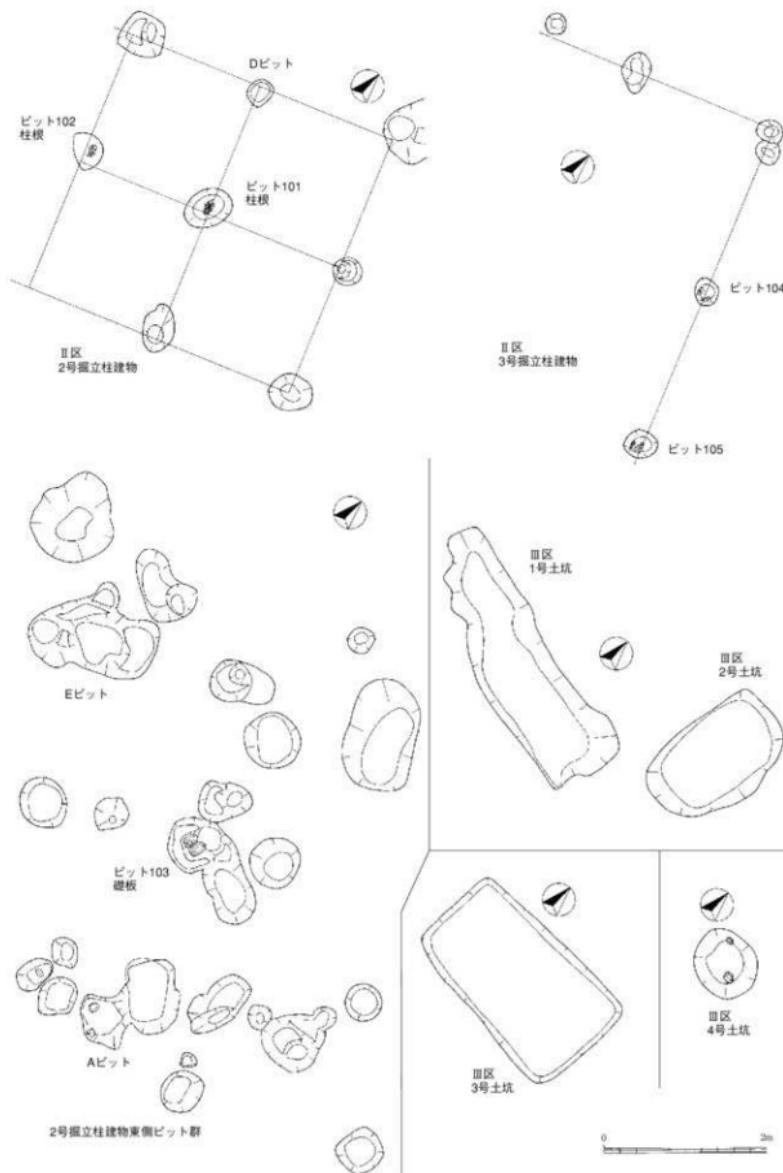
大溝（河道跡）（第4、7、14～16図） 下層遺構。調査では、B18～19グリッドに南北トレンチを設け、C19グリッドにおいて、西肩付近を掘削している。最深高は標高約-0.6mで、深さは約1.6mである。東側の肩については、Ⅱ区とⅢ区の間に存在している可能性が高く、幅15m程度であったことが予想される。この大溝は平成7年度調査区で検出された河道跡の下流部である可能性が高い。

出土遺物では、159～183（167除く）、木製品W86～88を実測した。また、B19グリッドの南北トレンチ出土128、187～193が大溝出土（若干の包含層遺物含む）の土器である。また、C19グリッドの下部傾斜部出土の184～186も大溝出土の遺物と推定される。出土土器は8世紀後半～9世紀後半代の時期の遺物を主体としているが、Ⅱ区河道と比較し9世紀代の遺物が目立つなど、Ⅱ区河道より新しい傾向がある。

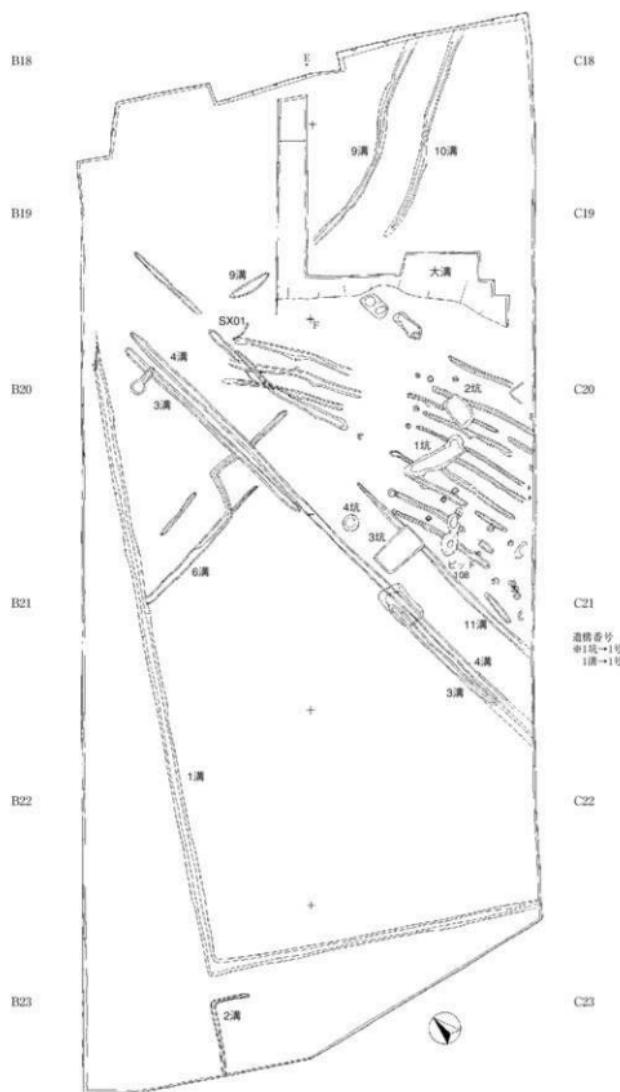
ピット108（第7図） 下層遺構。長軸約1.2m、短軸約0.8mの楕円形を呈し、深さ約40cmを測る。

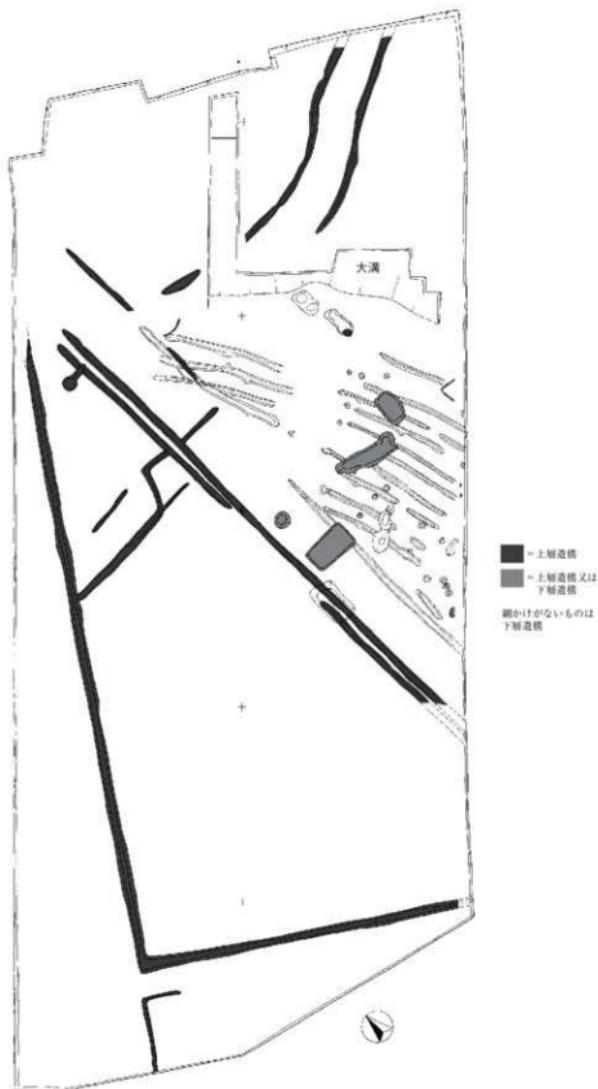
畝溝群（第7、8図） 下層遺構。B20、C20、C21グリッドで検出された溝群。幅20～30cm、深さ5cm程度で浅い。B20グリッドの溝群とC20グリッドの溝群と大きく2つの単位に分かれる。方向軸は前者がN-30°-W、後者がN-18°-Wである。大溝の西肩の方向と共通性があり、遺構の時期も古代であると推定される。古代建物群周辺における生産域の存在を示す資料である。

なお、Ⅲ区包含層2層は中近世、包含層3層が古代の時期に概ね分けられる。



第6図 2・3号掘立柱建物、1～4号土坑 ($S=1/60$)

第7図 III区全体図 ($S=1/250$)

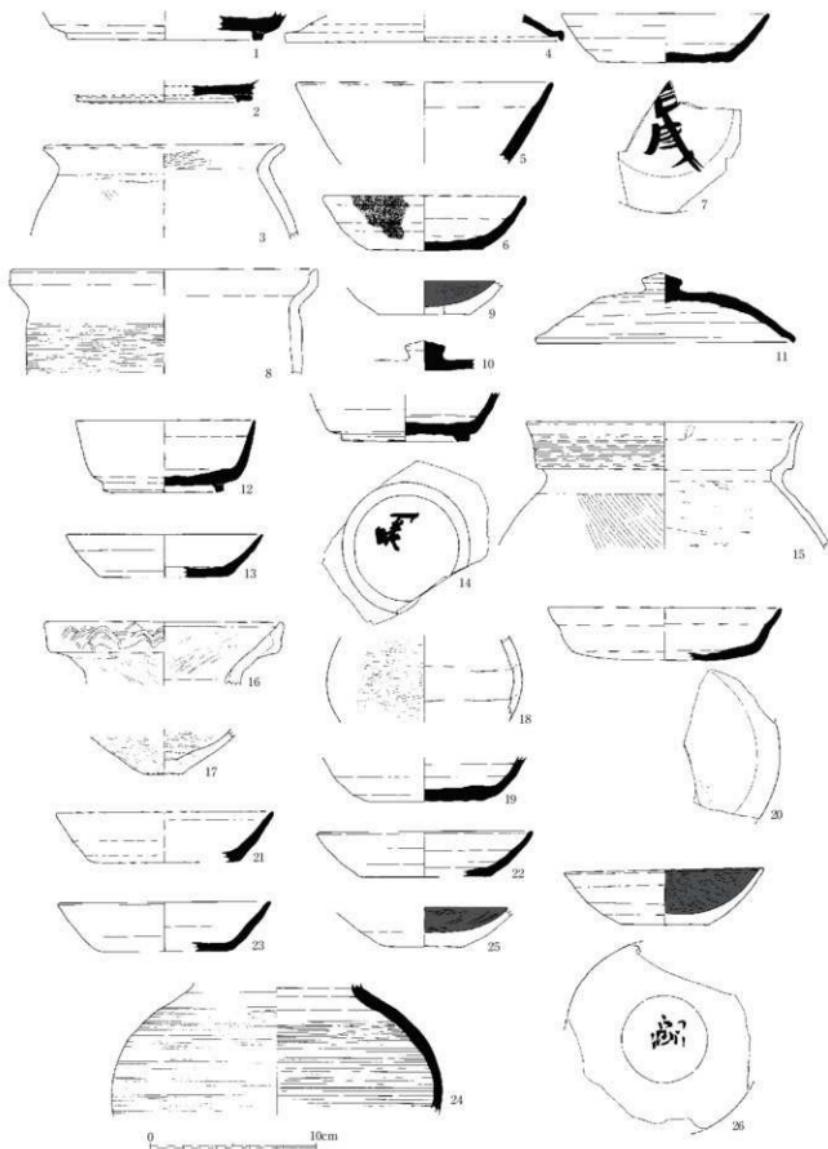


第8図 III区 上層・下層造構分類図 ($S=1/250$)

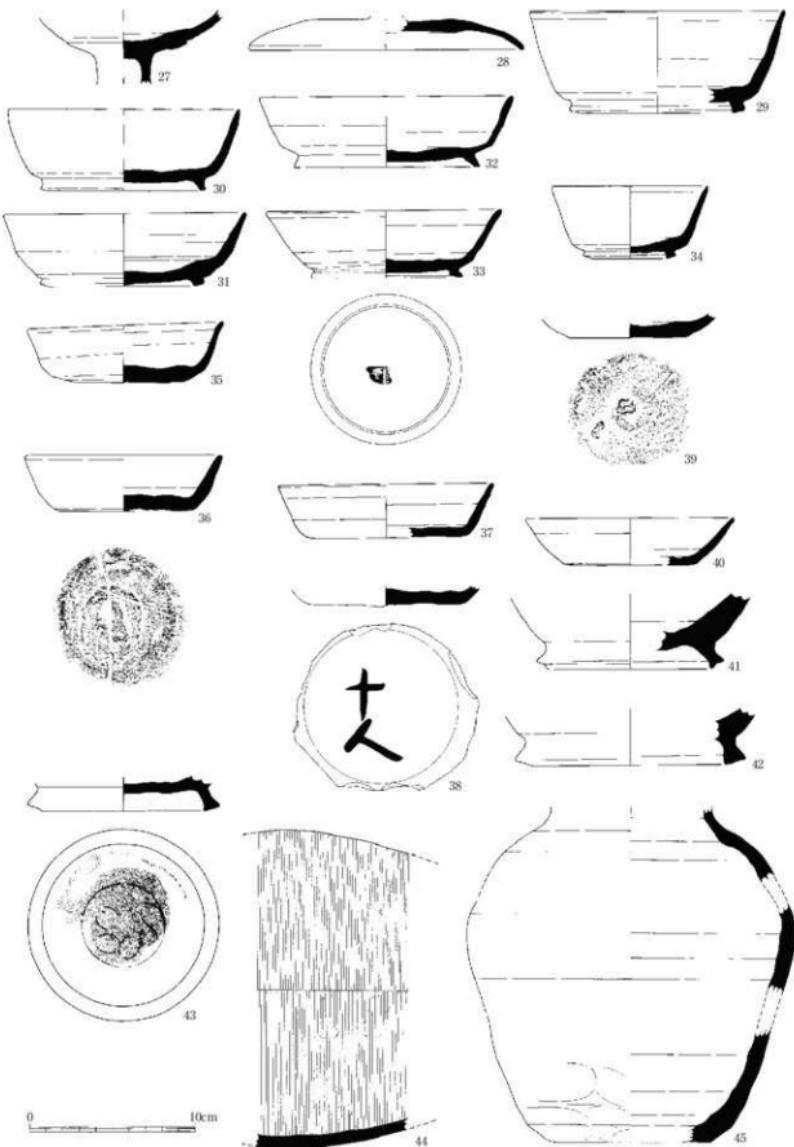
第3節 遺 物

1. 土器、陶磁器など（第9～21図）

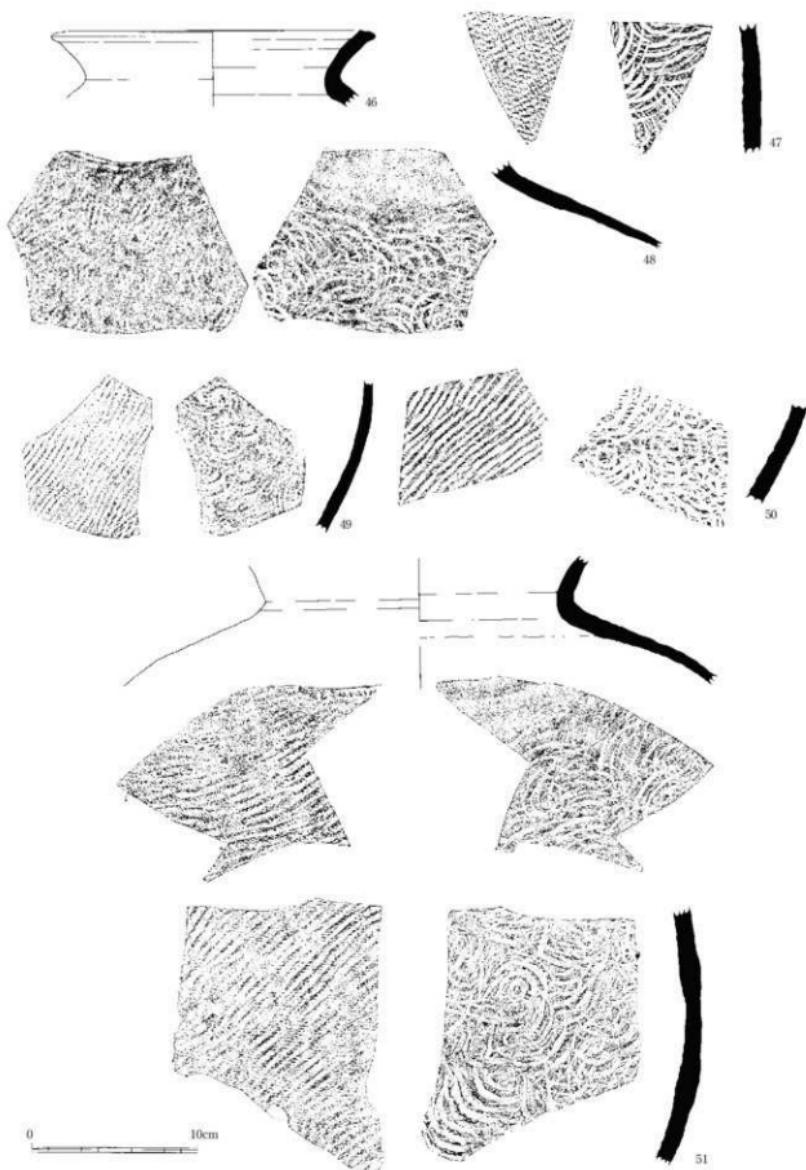
14はIV～V期の須恵器有台杯で外底面に不明の墨書がある。20はIV₁期の須恵器無台杯で、77と形態的に類似性が高い。26はVI₁期の内面黒色の土師器椀で、ロクロ削りされた外底面に墨書がある。字句として「副」や、平成7年度調査区の225墨書土器の字句が候補としてあげられる。27は須恵器高杯でII期の資料である。II区大溝出土の遺物としては、7世紀に遡る可能性をもつ古い資料である。29はIV₂期の須恵器有台杯である。30はIV₁期の須恵器有台杯で外底面は丁寧に削っている。31、33はII₃期の須恵器有台杯である。31には内外面に漆の可能性のある付着物がある。33の外底面には1cm程度の斑点状の墨痕が残存する。32はIII～IV₁期の須恵器有台杯である。内面は摩耗しており、多くの使用回数が想定される。34はV₂～VI₁期の小型の須恵器有台杯である。外底面に墨痕が残る。硯又は墨溜めに使用されたものであろうか。35、36はIV₂（古）期の須恵器無台杯である。37はIV₂期の須恵器無台杯。38はIV期の須恵器無台杯で外底面に「十人」の墨書がある。32同様に内面は摩耗している。43はIV～V期の壺又は瓶の底部。外底面に墨痕が残存し、筆先をととのえた痕跡も認められる。45は須恵器の短頸壺で、接合しない破片を図上で推定復元したものである。54はII期、57はII～III期の資料である。58は、古墳時代の土玉と推定される。孔部は粘土等がつまつており貫通していない。67は15世紀前半から中葉の古瀬戸である。73はV期の須恵器有台杯で外底面に墨書が3～4文字確認できる。一文字目は「佛」の可能性があるが、薄いため判読は困難である。78はV₂期の無台杯で外底面に「稻」の墨書がある。80はVI₁～₂期の須恵器無台杯で外底面に判読できない墨書がある。また、内外面に灯明痕をもつ。113はII区大溝出土の可能性があるV期の須恵器蓋で、外面の墨書は本遺跡出土例が多い「稻麻呂」と推定されるが、本遺跡の同字句例としては新しい。128はVI₁～₂期の土師器有台椀である。SX01出土の155は17世紀前半代の所産、156は18世紀以降で近代の所産の可能性もある。162はIV～V期の須恵器蓋で外面に不明の墨書がある。165はV₁期の須恵器有台杯で、外底面に墨痕と思われる黒色物が付着している。あまり擦れておらず、墨溜めに使用された可能性がある。これに対して、内底面の摩耗は著しい。166もV₁期の須恵器有台杯。167はII区大溝出土で、V期の須恵器無台杯である。外底面は摩耗しており、墨痕が付着している。168は、IV₂期の須恵器無台杯で、内外面に著しい灯明痕跡が観察できる。169はIV₂期の須恵器無台杯。170はV期の須恵器無台杯で、外底面に「+」状の墨書が確認できる。171はIV～V期の須恵器無台杯で、内外面に灯明痕が認められる。172はV期の盤で、内外面に灯明痕と推定される黒色物が付着している。173はV期の須恵器無台盤で外底面に「正」の墨書がある。内底面は非常に平滑である。180はV期の外面赤彩、内面黒色の土師器無台椀である。183はV期の土師器長胴甕である。188はV₁期の須恵器有台杯。外底面に「大」の墨書がある。189はV₁期の須恵器有台杯で、薄いため判読が難しいが外底面に「□成？」の墨書がある。190はV₂～VI₁期の須恵器有台杯で外底面に「副」の墨書がある。193はVI₂～₃期の土師器無台椀で外底面に回転糸切り痕を残す。また外面に灯明痕が残る。223、301は15世紀後半代の珠洲焼片口鉢。233は15世紀前半代の越前焼甕。242は18世紀前半の肥前系陶器の皿。286は双耳瓶で耳部の接合はやや雑で、V₂～VI₁期に属すると推定される。254は近世でも新相を示す陶器である。



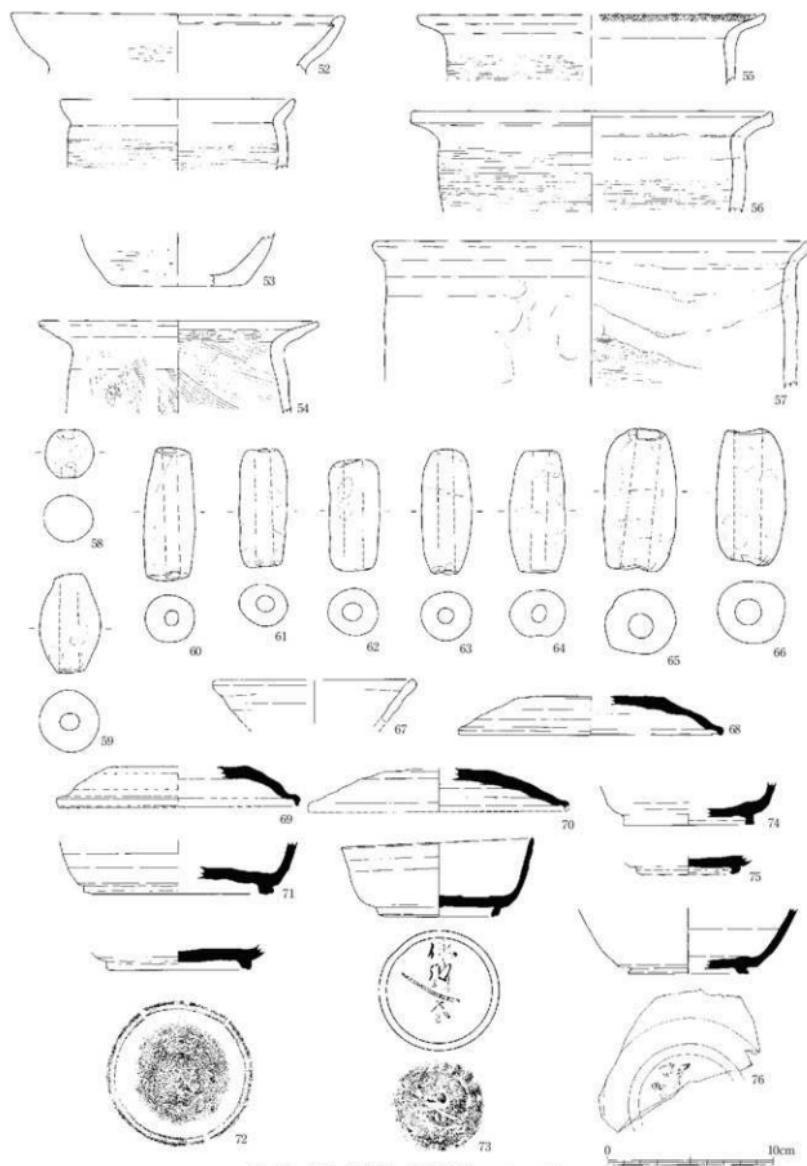
第9図 土器・陶磁器・土製品実測図1 (S=1/3)



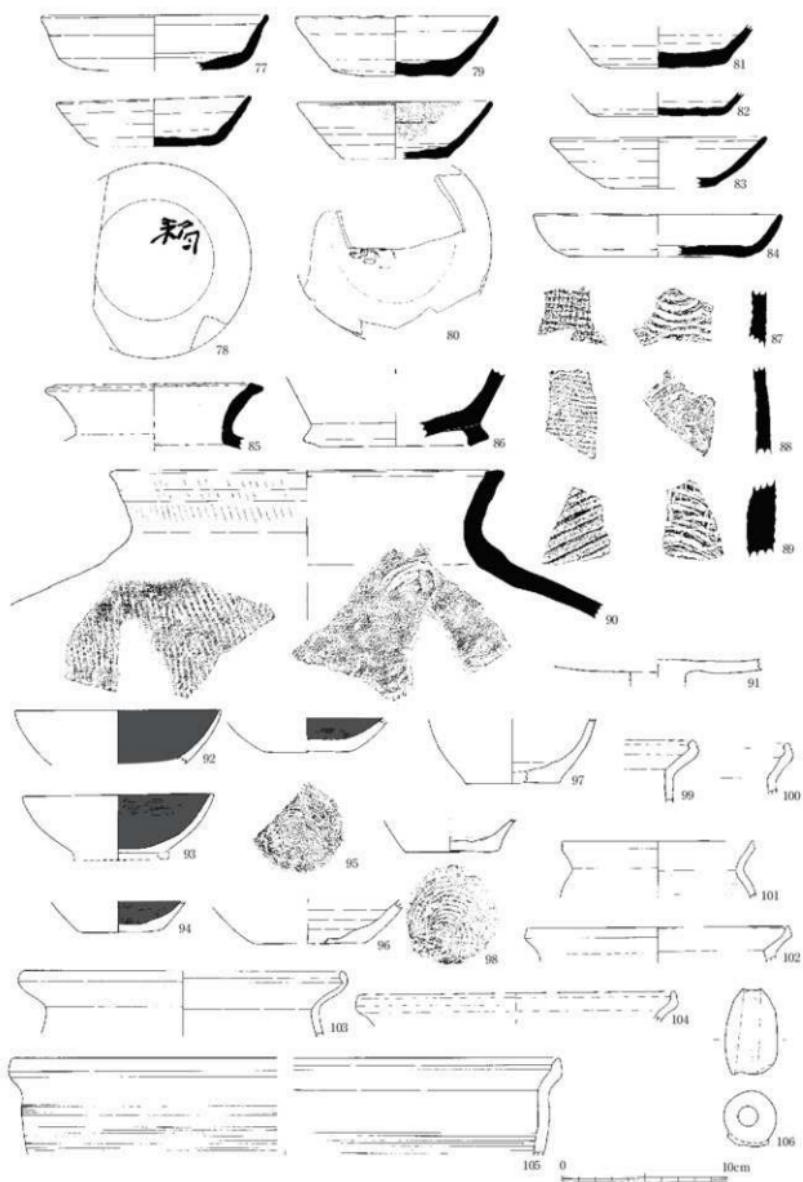
第10図 土器・陶磁器・土製品実測図2 (S=1/3)



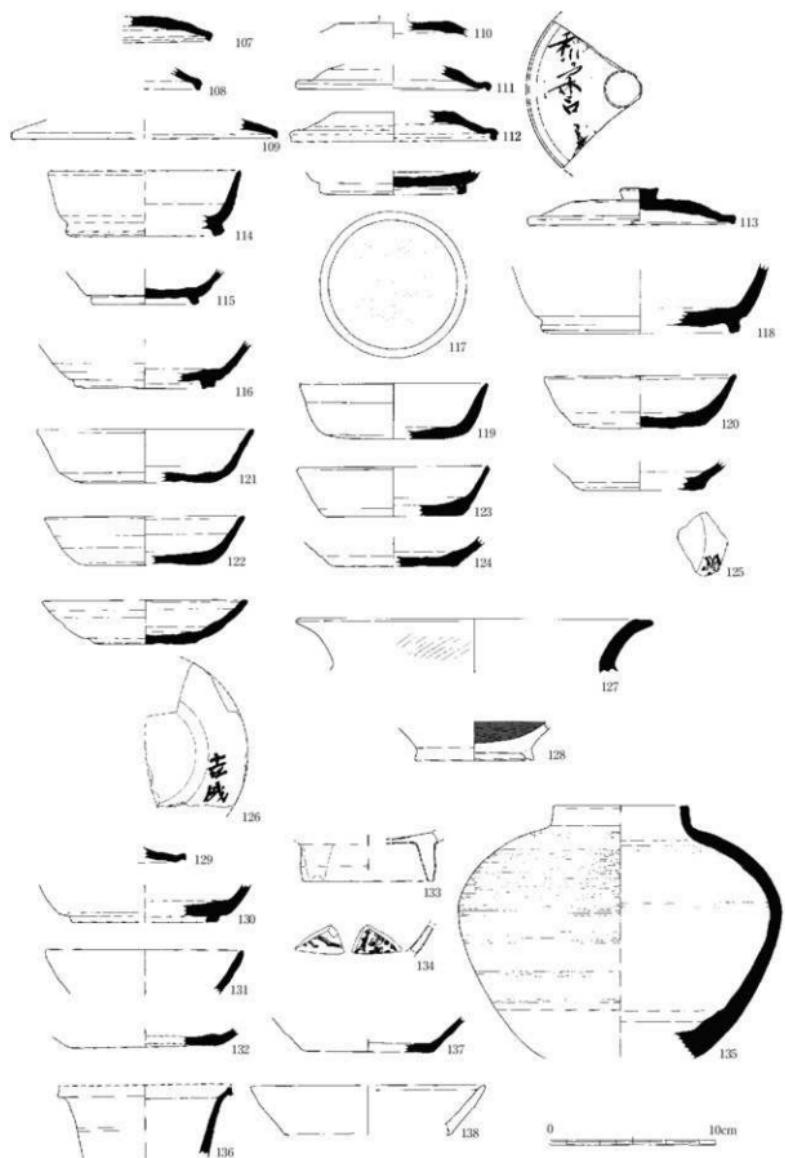
第11図 土器・陶磁器・土製品実測図3 ($S=1/3$)



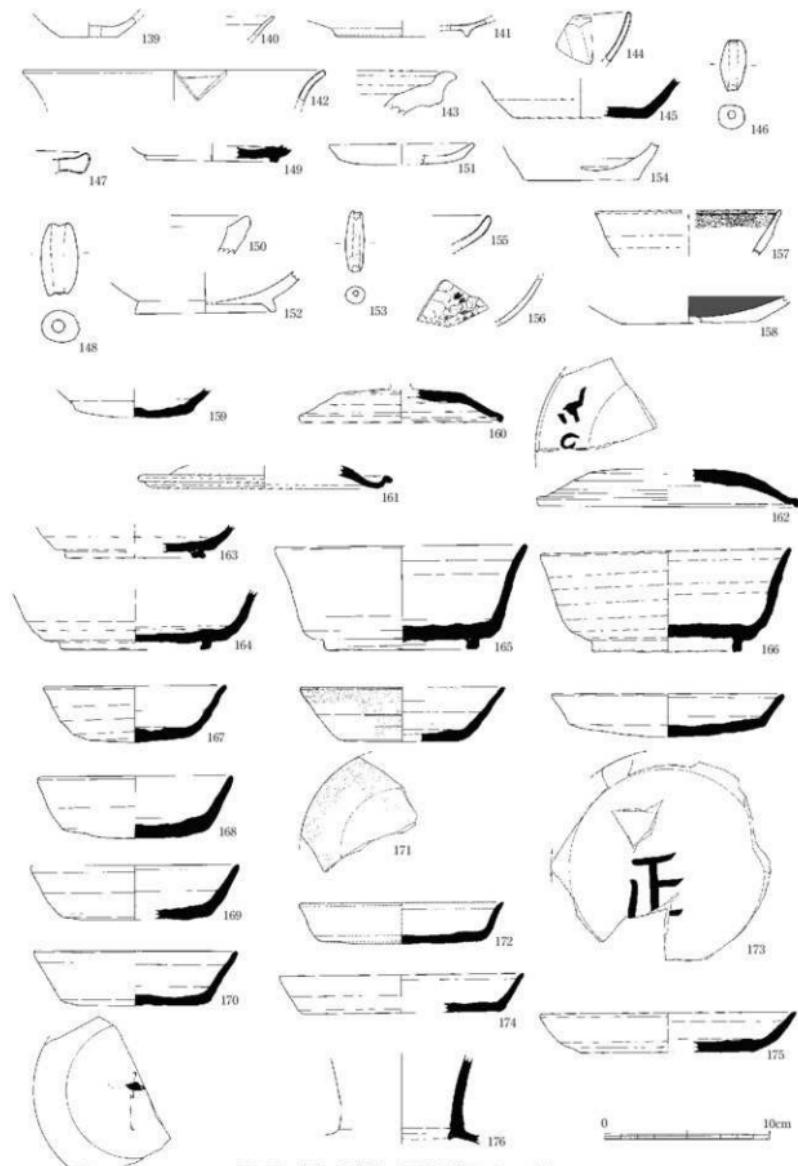
第12図 土器・陶磁器・土製品実測図4 (S=1/3)



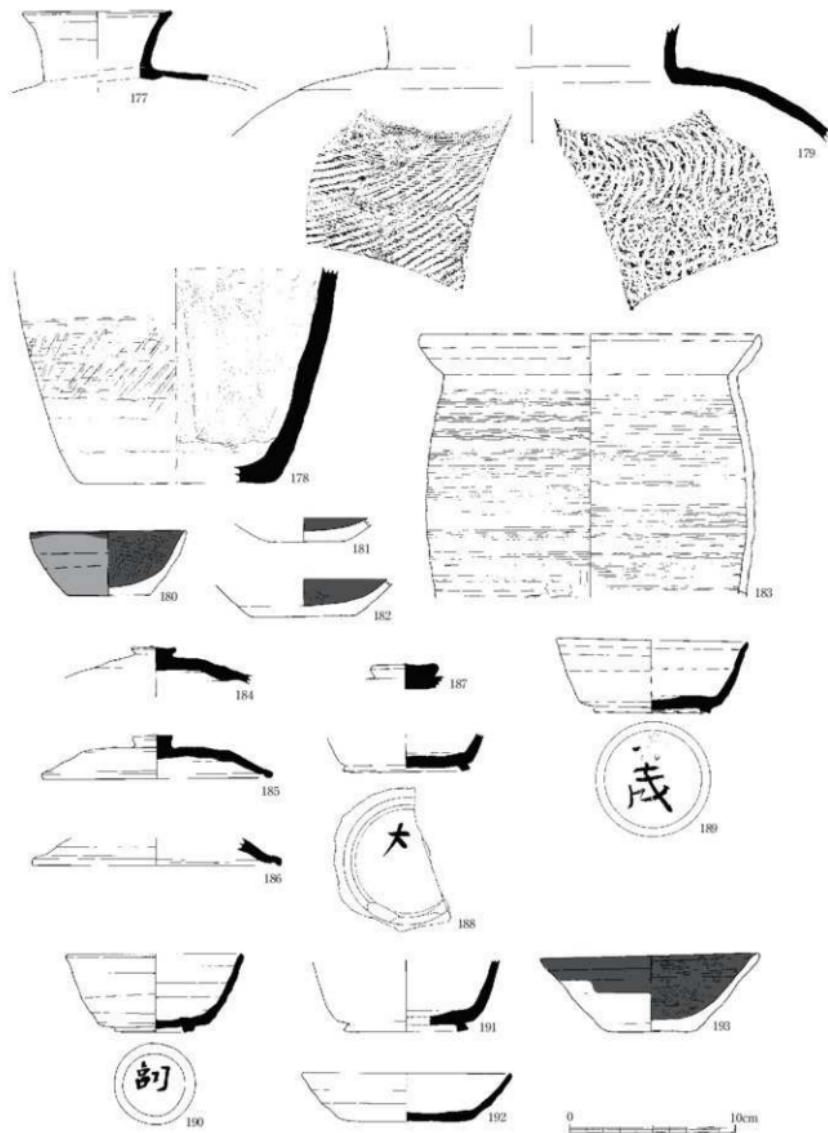
第13図 土器・陶磁器・土製品実測図5 ($S=1/3$)



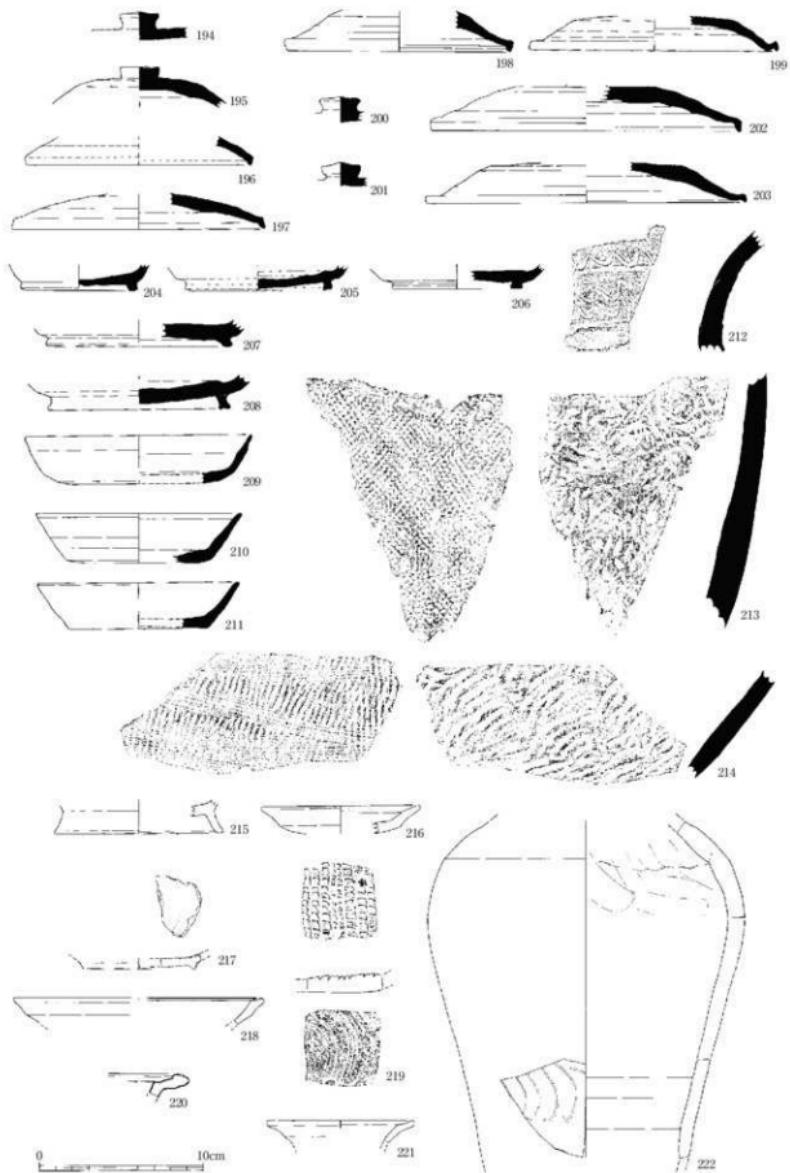
第14図 土器・陶磁器・土製品実測図6 (S=1/3)



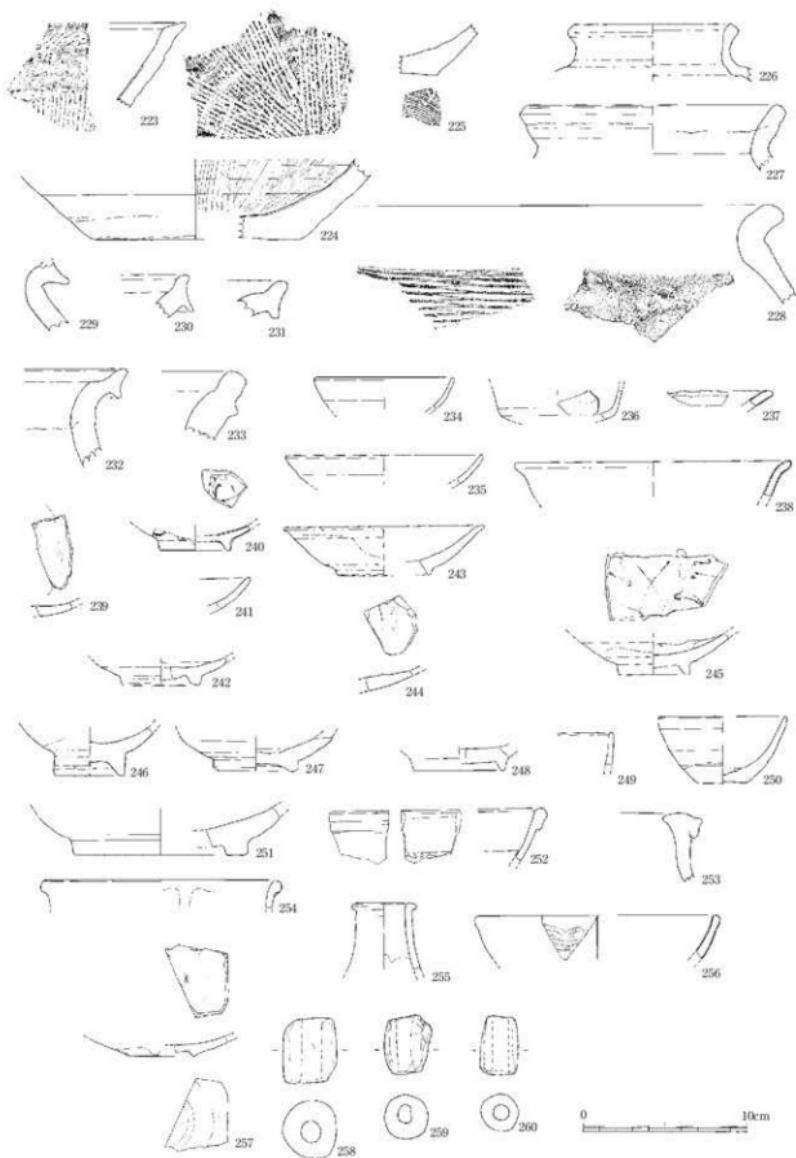
第15図 土器・陶磁器・土製品実測図7 (S=1/3)



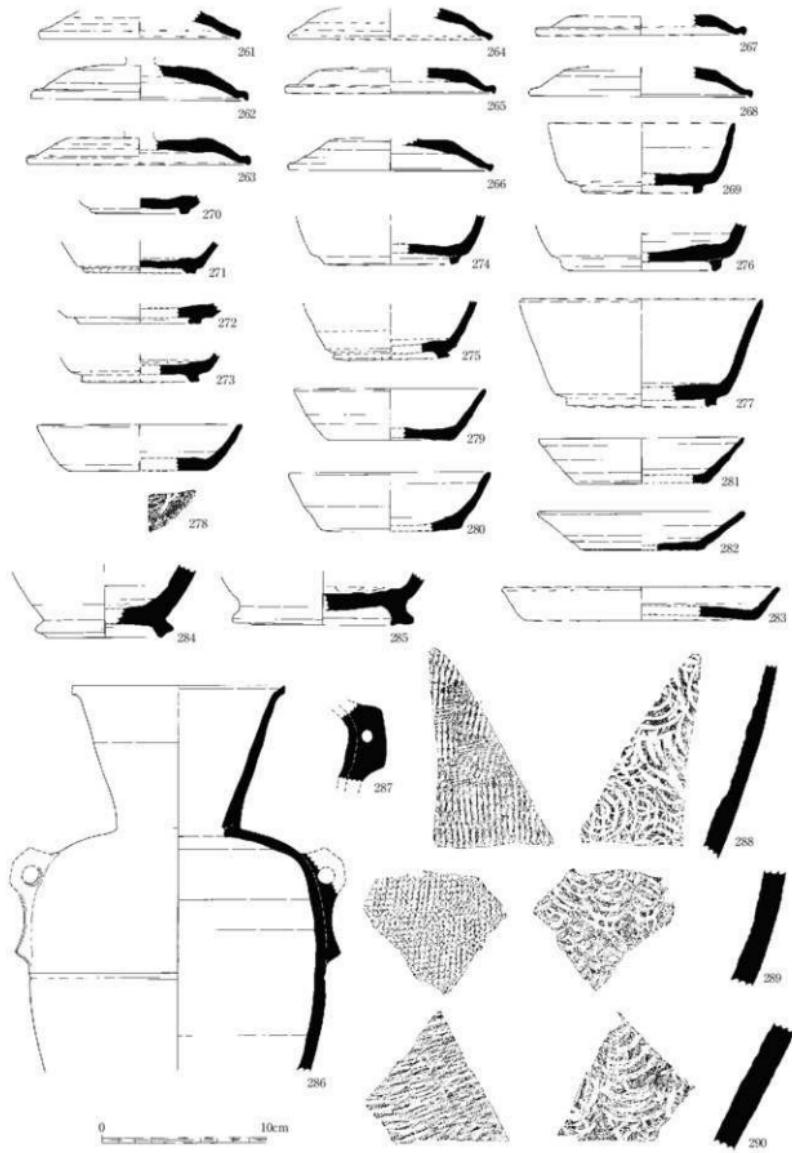
第16図 土器・陶磁器・土製品実測図8 (S=1/3)



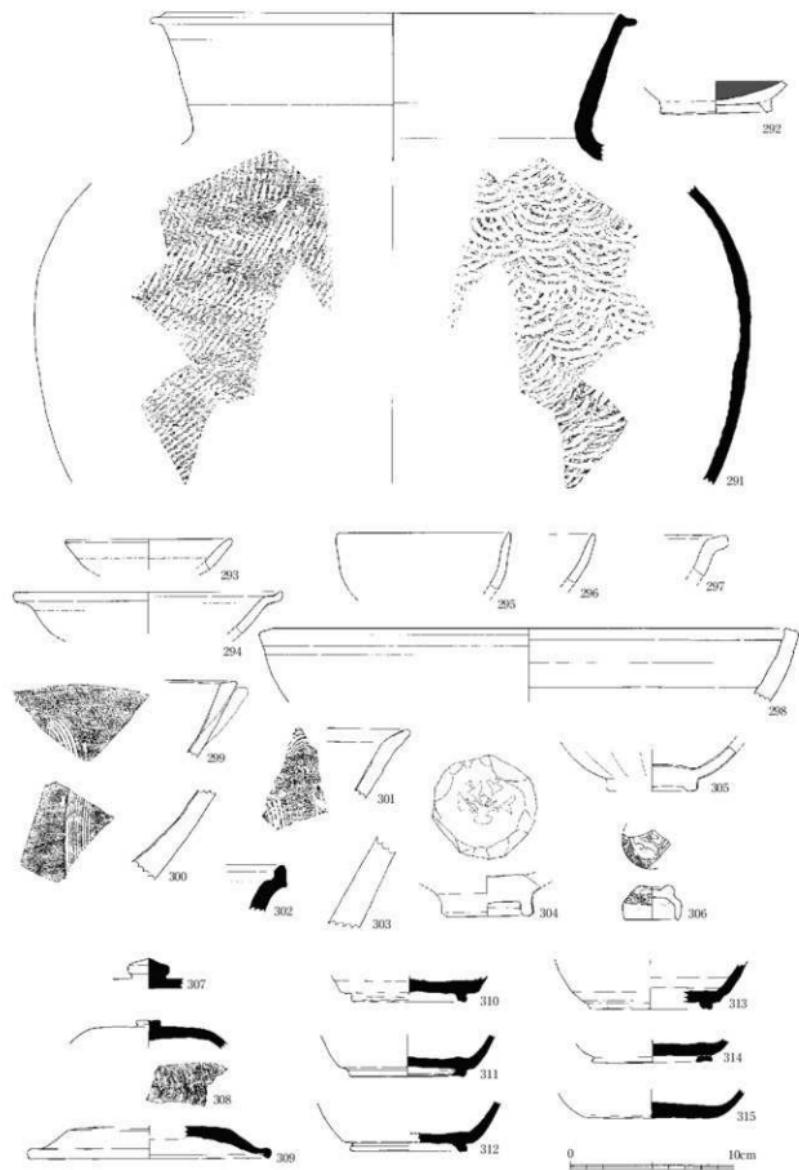
第17図 土器・陶磁器・土製品実測図9 (S=1/3)



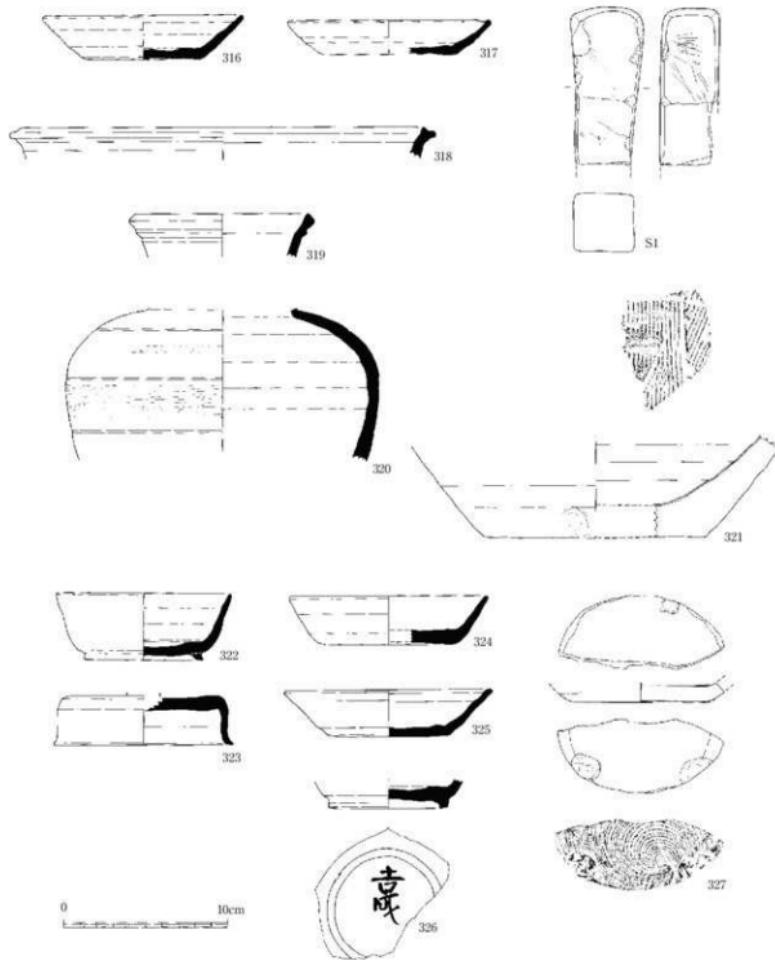
第18図 土器・陶磁器・土製品実測図10 (S=1/3)



第19図 土器・陶磁器・土製品実測図11 (S=1/3)



第20図 土器・陶磁器・土製品実測図12 (S=1/3)



第21図 土器・陶磁器・石製品実測図 ($S=1/3$)

2. 木製品ほか（第22～30図）

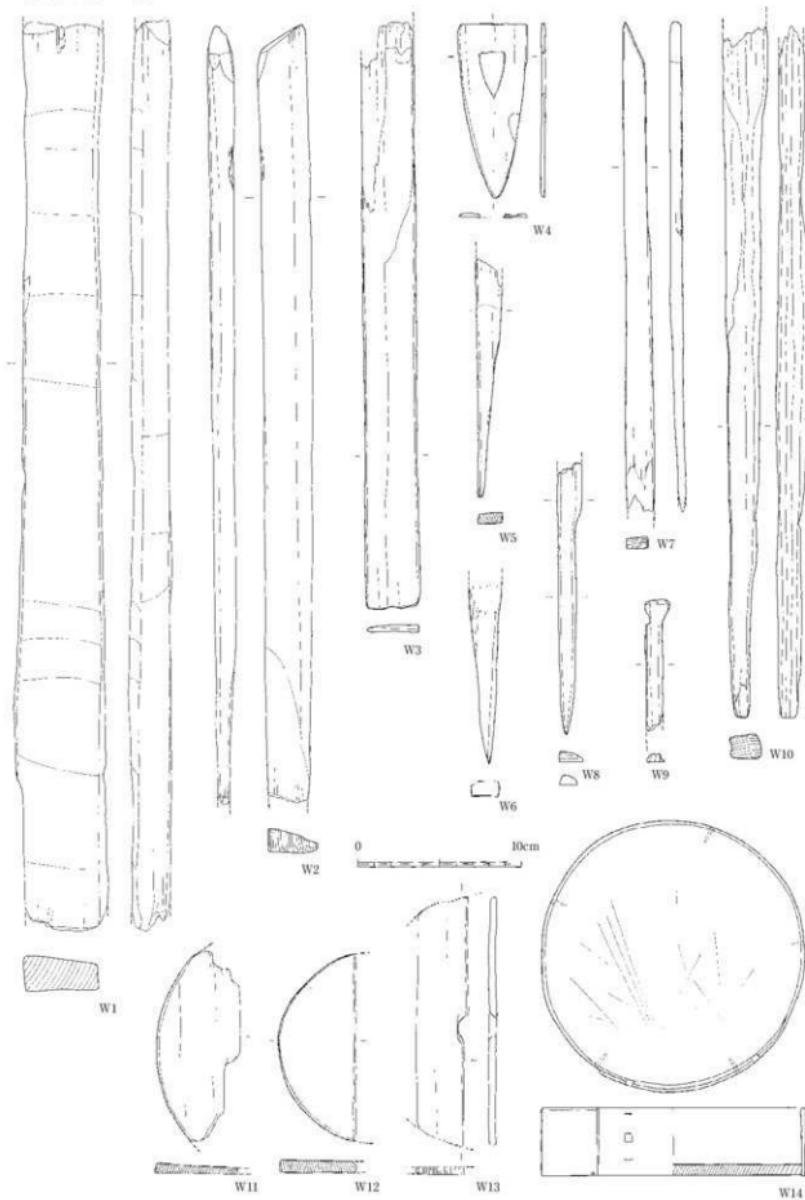
W1～78までが、II区大溝出土木製品で、概ね8～9世紀に属する遺物である。W13の中央部に半円状の欠損があるが、削り貫いている可能性もある。W34は直串で上部側面に左右一対の切り込みがある。奈文研分類のCⅢ型式に相当する。W35は馬形で上下の判断が非常に難しい。腹部の凸部に、串を差し込むための切り込み状の痕跡がわずかに観察できることから、この面を下面として図にした。

W38・39は十字形の木製品で、四ツ手綱の棒木を結合する部材と推定される。材は広葉樹材と推定される。W38の寸法は長さ33.5cm、最大幅5.9cm、最大厚5.0cm、W39は長さ34.1cm、最大幅5.5cm、最大厚4.9cmである。材を分割成形後、両端から中央部にかけて、中心部を樋状（長さ12～13cm、深さ2.3～2.8cm程度、幅2.6～3.0cm程度）に削り貫いている。深さは樋終点部付近が深くなる傾向がある。この樋部に、網枠となる計4本の棒状の木を差し込み、縄や蔓などの繊維で1ヵ所ずつ緊縛していたものと推定される。両端部には、緊縛させるための段部をもうけている。この内、W39の段部1ヵ所で、巻き付いた繊維が6重（幅5cm程度）残存していた（出土直後）。W39は上面が平坦なのに対し、W38は半円形を呈している。2本の接合においては、双方の中央部を長さ5cm程度、深さ2cm弱に切り欠いて接合部をつくりだしている。この部分でW38を上、W39を下にして十字に組み合わせる。時期の近いものとして静岡県浜松市伊場遺跡（1978）から出土した8世紀の木製品例や、磐田市御殿二之宮遺跡出土の古墳時代後期から平安時代前期の有樋木製品（1981）など、静岡県内で出土例が見られる。これらは中央部に孔があり、棒状の木を通し2本を固定しており、W38・39とは異なる。W38・39では組み合わせた後、縄や蔓などの繊維をさらに巻き付け、固定を強化した可能性もある。ただし、本製品の中央部に観察できる凹みは不明瞭なものであり、緊縛の有無について詳細を判断できない。なお、この十字形の木製品については、神野善治氏が民俗事例などにより詳細に検討を行っている（1983）。W38・39は同論考にある、譙訪湖の小型四ツ手綱における十字形の木製品と形態的類似性が高い（譙訪湖例は長さ26.3cm、直径6.8（6.7）cm、厚さ5.5cm。第31、32図参考）。この小型四ツ手綱は、網の大きさ90～120cm四方で、網の三方に腰網が付く構造を持つこと、魚を川や湖の浅瀬に追いかけて捕らえるときに手で直接持って使用することが、小林茂樹氏から教示された点を含めて紹介されている。使用方法についてはさらなる検討が必要だが、W38・39も小型の四ツ手綱として同様な方法で使用された可能性もある。なお、本製品について山田昌久先生より多く御教授いただいた。記して深謝の意を表するものである。

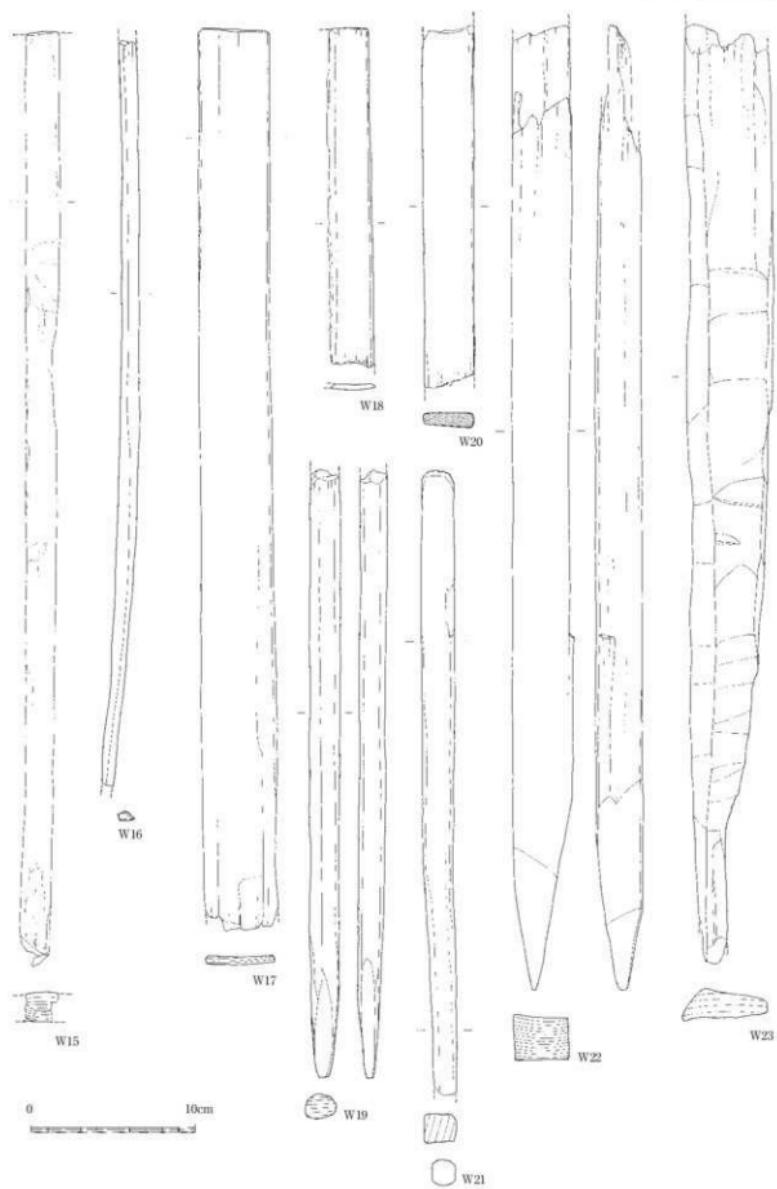
W48は下端部にコゲがあり、火鑽棒の可能性もある。W67は両端部を鋭く削りだし、側面にV字状の切り込みが2カ所ある。W86～88がIII区の大溝出土の木製品で、概ね8～9世紀に属する遺物である。W86は下端にコゲがあり、火鑽棒の可能性もある。また上端から4.6cm下に、横断するように孔（径2mm）がある。W88は上端部が若干先細になる。断面形状から刀形などの形代である可能性も考えられる。W89～94はII区大溝出土の可能性が高い木製品である。W89は、収縮により皿状になっており、旧状が不明確である。中央部に孔がある。

他に、大溝からは木製品の加工の際に発生する、加工片が出土している。

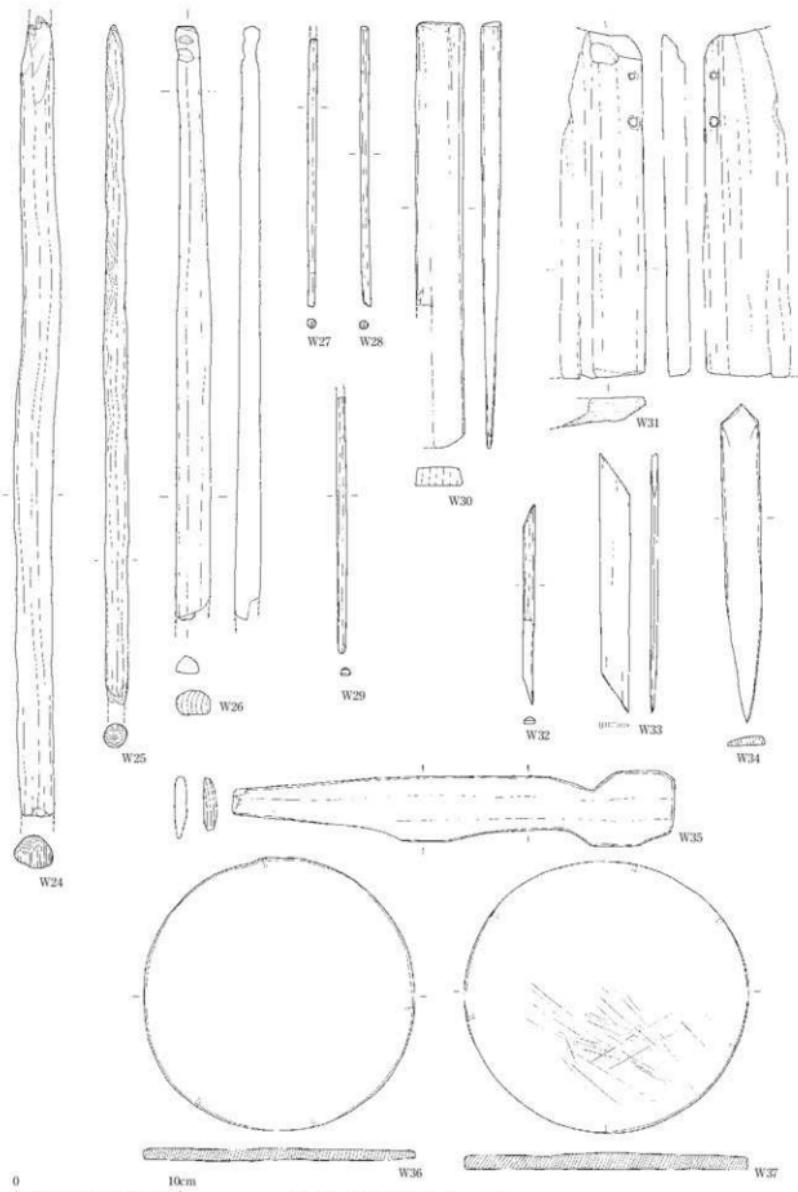
また、II区大溝からは縄状の繊維製品や、歯骨1点が出土している。歯骨はウマであり、右下顎骨の第2前臼歯（P₂、P₃、P₄）と第1後臼歯（M₁、M₂、M₃）などが確認されている。5才以上の成獣と推定される（骨の鑑定については、当センターの山川史子による）。



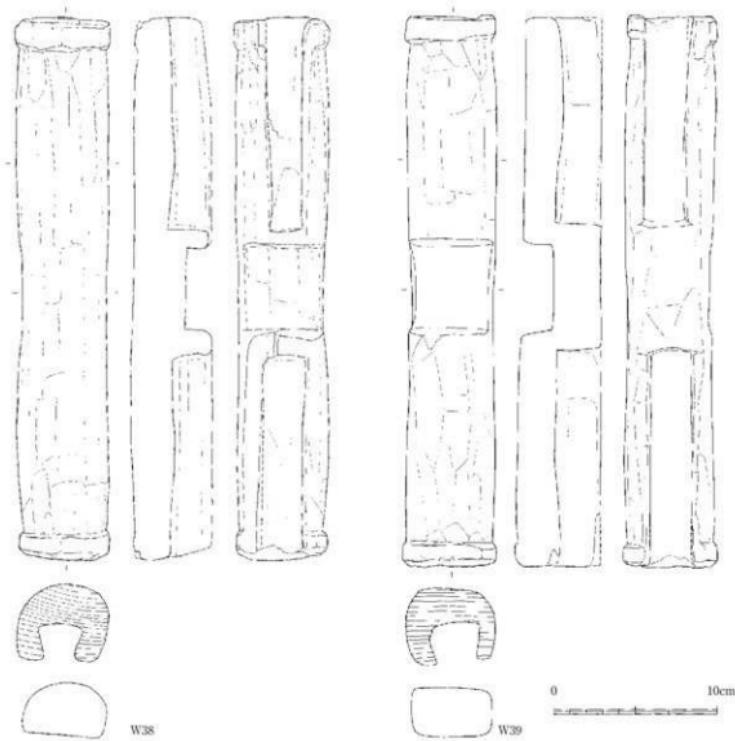
第22図 木製品実測図1 (S=1/3)



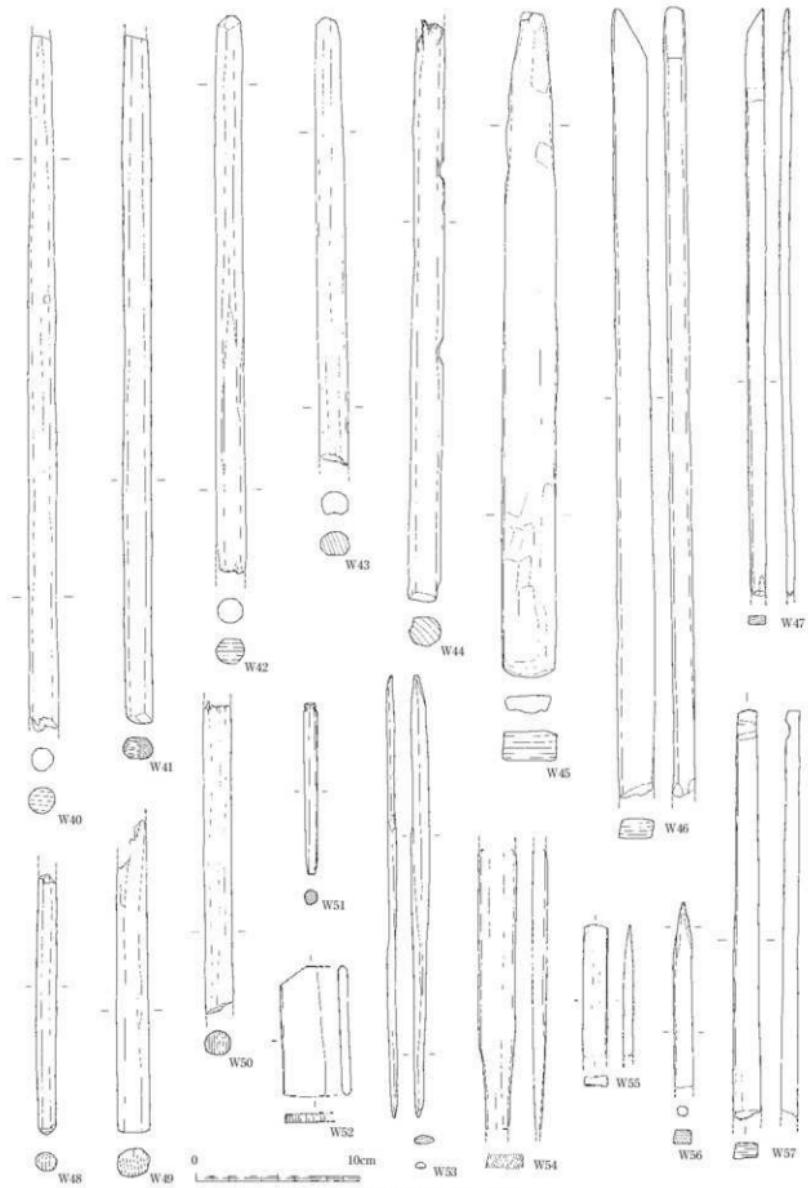
第23図 木製品実測図2 (S=1/3)



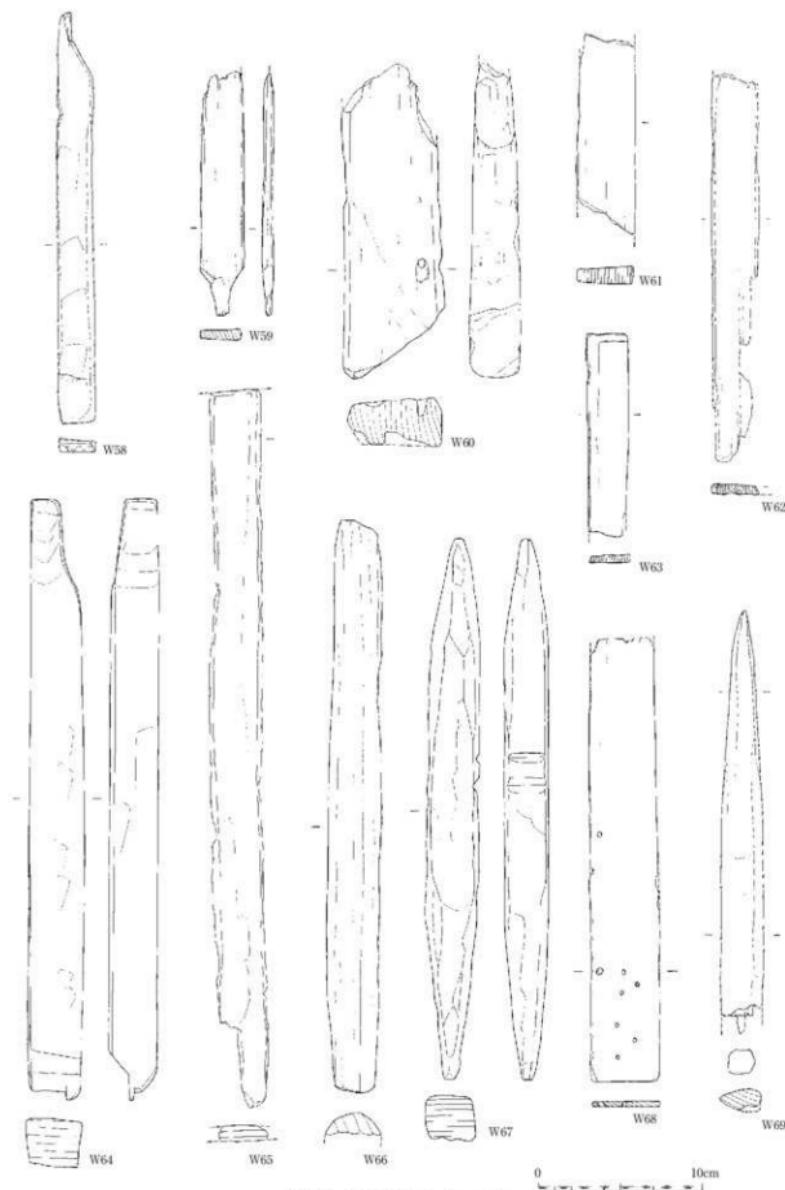
第24図 木製品実測図3 (S=1/3)



第25図 木製品実測図4 ($S=1/3 \cdot 1/6$)

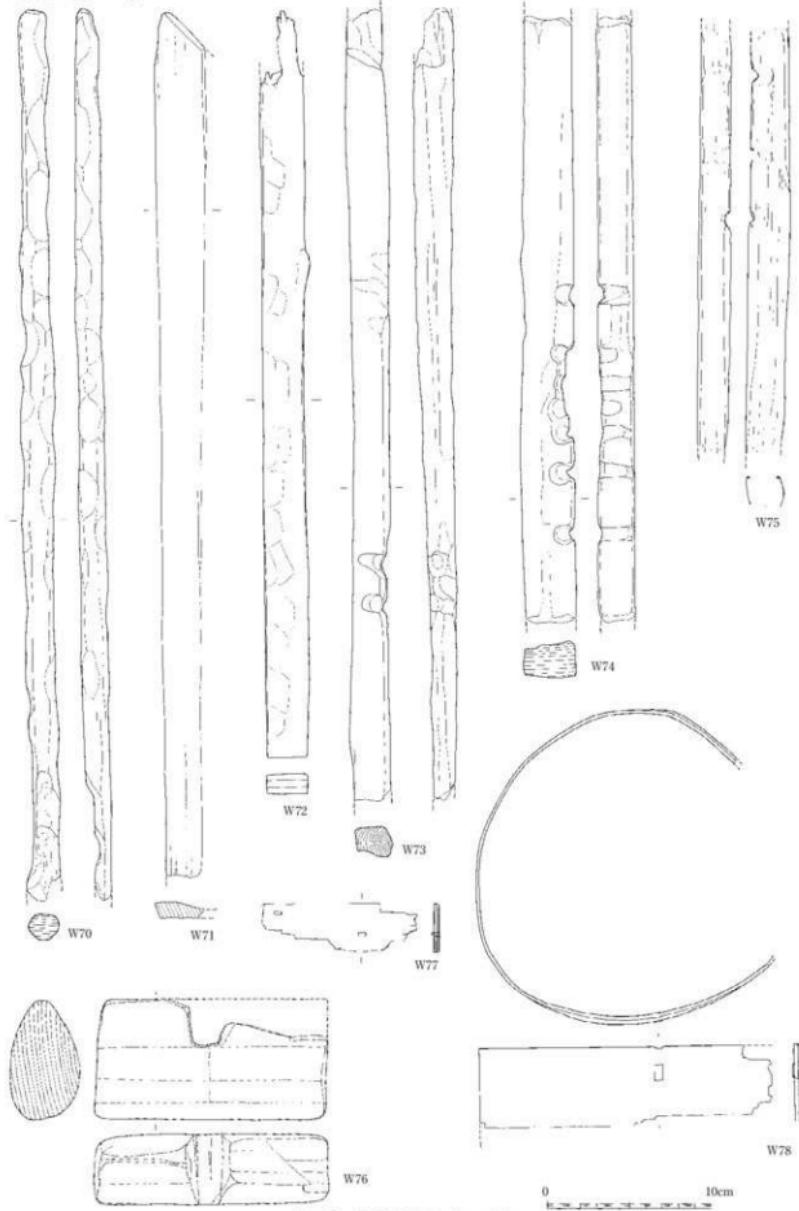


第26図 木製品実測図5 (S=1/3)

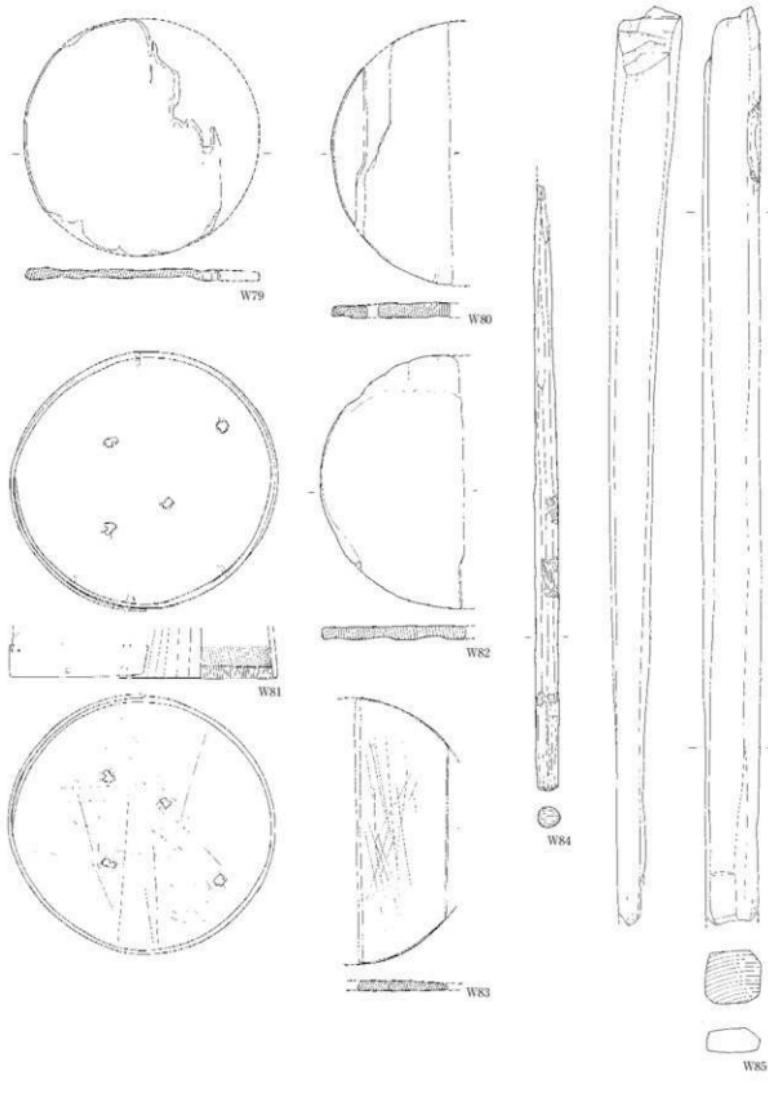


第27図 木製品実測図6 (S=1/3)

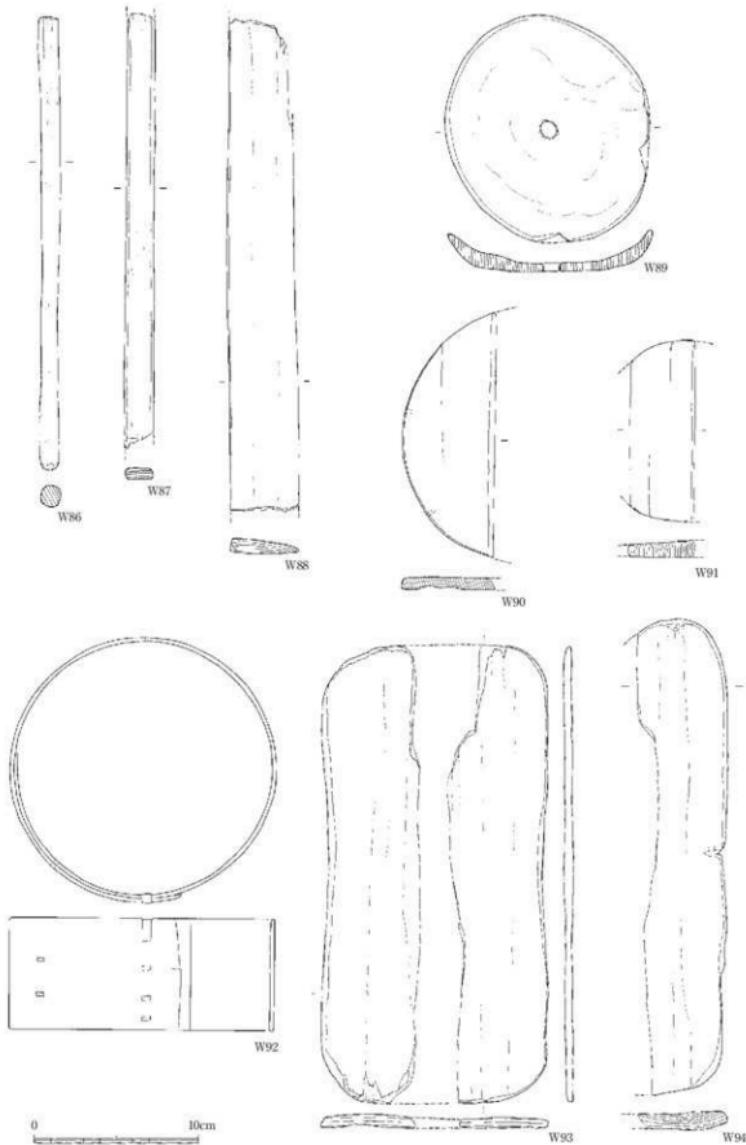
第3節 造 物



第28図 木製品実測図7 (S=1/3)



第29図 木製品実測図8 (S=1/3)



第30図 木製品実測図9 (S=1/3)

第1表 土器・陶器断面調査表

番号	場所	調査年次	調査者	グリッド	出土遺構	種類	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	色調(外)	色調(内)	施土	焼成	調整(内)	調整(外)	備考
9	1 90	86 II 区 C-16	2-21		漆器	合板杯	10.8	1.4	1.8	灰	灰	微沙含C	良	3.0±0.7	3.0±0.7	漆物付着、断面ランダム状、 ~切り抜きか? 面にサトウナメ付
2	189	86 II 区 C-16	2-21		漆器	合板杯	10.6	1.4	1.8	灰	灰	C-7mmの砂利多 C-5mmの黄褐色	良	3.0±0.7	3.0±0.7	灰、漆物付着
3	198	86 II 区 C-16	2-22		漆器	合板杯	14.6	1.8	2.8	淡黄	灰	微沙含C	良	3.0±0.7	3.0±0.7	灰、漆物付着
4	54	86 II 区 B-17	2-22		漆器	漆	16.9	1.8	3.0	灰	灰	微沙含C	良	3.0±0.7	3.0±0.7	灰、漆物付着
5	53	86 II 区 B-17	2-22		漆器	合板杯	15.6	1.0	2.8	灰	灰	微沙含C	良	3.0±0.7	3.0±0.7	灰、漆物付着
6	51	86 II 区 B-17	2-22, 2-4		漆器	合板杯	12.3	1.4	3.4	明青灰	明青灰	微沙含C	良	3.0±0.7	3.0±0.7	~切り抜き付
7	52	86 II 区 B-17	2-22		漆器	合板杯	12.6	1.4	3.0	灰白	灰白	微沙含C	良	3.0±0.7	3.0±0.7	外表面墨書き、漆灰
8	50	86 II 区 B-17	2-23		漆器	漆	13.7	1.4	3.5	灰	灰	微沙含C	良	3.0±0.7	3.0±0.7	漆付着
9	47	86 II 区 B-17	2-24		漆器	漆	13.6	1.4	3.0	灰	灰	微沙含C	良	3.0±0.7	3.0±0.7	漆付着
10	49	86 II 区 B-17	2-24		漆器	漆	15.6	1.0	2.0	黑	灰	微沙含C	良	3.0±0.7	3.0±0.7	不特定方向のゲ
11	228	86 II 区 C-17	1号井戸内		漆器	漆	15.8	1.4	3.0	灰	灰	微沙含C	良	3.0±0.7	3.0±0.7	ヨリカケラ、黒色無付着、施灰
12	175	86 II 区 C-14.5	1号中		漆器	合板杯	10.9	1.4	4.4	灰	灰	微沙含C	良	3.0±0.7	3.0±0.7	~切り抜き付
13	174	86 II 区 C-14	1号中		漆器	漆	12.0	1.4	2.7	灰	灰	微沙含C	良	3.0±0.7	3.0±0.7	~切り抜き付
14	181	86 II 区 C-17	小窓中		漆器	漆	7.9	1.0	2.0	灰	灰	微沙含C	良	3.0±0.7	3.0±0.7	~切り抜き付
15	205	86 II 区 B-16, C-17	2号窓中		漆器	漆	16.8	1.4	3.0	灰	灰	微沙含C	良	3.0±0.7	3.0±0.7	漆付着、3.0付
16	196	86 II 区 C-16	2号窓中		漆器	漆	14.4	1.4	3.0	灰	灰	微沙含C	良	3.0±0.7	3.0±0.7	漆付着、3.0付
17	192	86 II 区 C-16	2号窓中		漆器	漆	12.4	1.4	3.0	灰	灰	微沙含C	良	3.0±0.7	3.0±0.7	一部裏面
18	193	86 II 区 C-16	2号窓中		漆器	漆	12.0	1.4	3.0	灰	灰	微沙含C	良	3.0±0.7	3.0±0.7	~切り抜き付
19	194	86 II 区 C-16	2号窓中		漆器	漆	12.0	1.4	3.0	灰	灰	微沙含C	良	3.0±0.7	3.0±0.7	~切り抜き付
20	197	86 II 区 C-16	2号窓中		漆器	漆	11.3	1.2	2.8	灰	灰	微沙含C	良	3.0±0.7	3.0±0.7	~切り抜き付
21	219	86 II 区 C-17	2号窓中		漆器	漆	13.2	0.8	2.0	灰	灰	微沙含C	良	3.0±0.7	3.0±0.7	漆付着、3.0付
22	229	86 II 区 C-17	2号窓中		漆器	漆	13.2	0.8	2.0	灰	灰	微沙含C	良	3.0±0.7	3.0±0.7	漆付着、3.0付
23	216	86 II 区 C-17	2号窓中-4		漆器	漆	13.0	0.8	2.0	灰	灰	微沙含C	良	3.0±0.7	3.0±0.7	漆付着、3.0付
24	200	86 II 区 C-17	2号窓中		漆器	漆	13.0	0.8	2.0	灰	灰	微沙含C	良	3.0±0.7	3.0±0.7	漆付着、3.0付
25	231	86 II 区 C-17	2号窓内		漆器	漆	9.5	0.7	1.5	灰	灰	微沙含C	良	3.0±0.7	3.0±0.7	~切り抜き付
26	232	86 II 区 C-17	2号窓内		漆器	漆	12.2	0.5	2.0	灰	灰	微沙含C	良	3.0±0.7	3.0±0.7	~切り抜き付
27	20	86 II 区 B-16	大窓		漆器	漆	14.5	1.4	3.0	灰	灰	微沙含C	良	3.0±0.7	3.0±0.7	~切り抜き付
28	32	86 II 区 B-15-16	大窓		漆器	漆	18.8	0.8	3.0	灰	灰	微沙含C	良	3.0±0.7	3.0±0.7	~切り抜き付
29	198	86 II 区 C-15	大窓中		漆器	漆	14.9	1.0	2.0	灰	灰	微沙含C	良	3.0±0.7	3.0±0.7	~切り抜き付
30	233	86 II 区 B-15-16	大窓中		漆器	漆	14.8	1.0	2.0	灰	灰	微沙含C	良	3.0±0.7	3.0±0.7	~切り抜き付
31	31	86 II 区 B-15-16	大窓中		漆器	漆	14.9	1.0	2.0	灰	灰	微沙含C	良	3.0±0.7	3.0±0.7	~切り抜き付
32	31	86 II 区 B-15-16	大窓中		漆器	漆	14.5	1.0	2.0	灰	灰	微沙含C	良	3.0±0.7	3.0±0.7	~切り抜き付
33	185	86 II 区 C-15	大窓中		漆器	漆	14.3	0.9	2.0	灰	灰	微沙含C	良	3.0±0.7	3.0±0.7	~切り抜き付
34	19	86 II 区 B-15-16	大窓中		漆器	漆	14.3	0.9	2.0	灰	灰	微沙含C	良	3.0±0.7	3.0±0.7	~切り抜き付
35	178	86 II 区 C-15	大窓中		漆器	漆	11.9	0.7	2.0	灰	灰	微沙含C	良	3.0±0.7	3.0±0.7	~切り抜き付
36	179	86 II 区 C-15	大窓中		漆器	漆	12.0	0.6	2.0	灰	灰	微沙含C	良	3.0±0.7	3.0±0.7	~切り抜き付
37	2	86 II 区 B-15-16	大窓		漆器	漆	13.0	1.0	3.0	灰	灰	微沙含C	良	3.0±0.7	3.0±0.7	~切り抜き付
38	195	86 II 区 C-16	大窓斜面		漆器	漆	14.0	0.7	2.0	灰	灰	微沙含C	良	3.0±0.7	3.0±0.7	~切り抜き付
39	10	86 II 区 B-15-16	大窓斜面		漆器	漆	12.6	0.7	2.0	灰	灰	微沙含C	良	3.0±0.7	3.0±0.7	~切り抜き付
40	18	86 II 区 B-15-16	大窓斜面		漆器	漆	11.4	0.6	2.0	灰	灰	微沙含C	良	3.0±0.7	3.0±0.7	~切り抜き付
41	15	86 II 区 B-16	大窓斜面		漆器	漆	14.2	0.5	2.0	灰	灰	微沙含C	良	3.0±0.7	3.0±0.7	~切り抜き付
42	16	86 II 区 B-16	大窓斜面		漆器	漆	14.2	0.5	2.0	灰	灰	微沙含C	良	3.0±0.7	3.0±0.7	~切り抜き付

第1表 土器・陶器断面形状表²

地名	年次	調査者	グリッド番号	出土遺構	場所	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	色調(外)	色調(内)	地土		傾度	傾度(%)	調査(%)	備考	
											底	底					
10	43.1	86	Ⅲ区-C-16	大中	須器	11.8	(2)	底	底	底	砂質多	砂質少	アラ-33テ	アラ-33テ	33テ	埋入、裏付打(アラ)、陶灰	
11	44.34	86	Ⅲ区-B-15-16	大中	須器	11.8	(2)	底	底	底	砂質少	砂質少	アラ-33テ	アラ-33テ	33テ	自然焼付打(アラ)、陶灰	
11	45.17	86	Ⅲ区-C-15	大中	須器	11.8	(2)	底	底	底	砂質少	砂質少	アラ-33テ	アラ-33テ	33テ	自然焼付打(アラ)、陶灰	
11	45.10	86	Ⅲ区-C-15	大中	須器	11.8	(2)	底	底	底	砂質少	砂質少	アラ-33テ	アラ-33テ	33テ	自然焼付打(アラ)、陶灰	
11	45.14	86	Ⅲ区-C-15	大中	須器	11.8	(2)	底	底	底	砂質少	砂質少	アラ-33テ	アラ-33テ	33テ	自然焼付打(アラ)、陶灰	
12	46.11	86	Ⅲ区-B-15-16	大中	須器	11.8	(2)	底	底	底	砂質少	砂質少	アラ-33テ	アラ-33テ	33テ	自然焼付打(アラ)、陶灰	
12	46.12	86	Ⅲ区-B-15-16	大中	須器	11.8	(2)	底	底	底	砂質少	砂質少	アラ-33テ	アラ-33テ	33テ	自然焼付打(アラ)、陶灰	
12	46.19	86	Ⅲ区-B-15-16	大中	須器	11.8	(2)	底	底	底	砂質少	砂質少	アラ-33テ	アラ-33テ	33テ	自然焼付打(アラ)、陶灰	
12	52	21	86	Ⅲ区-B-15-16	大中	土器	14.2	(7.2)	底	底	底	砂質多	砂質少	アラ-33テ	アラ-33テ	33テ	外曲一帯焼付打
53	13	86	Ⅲ区-C-16	大中	土器	16.8	(7)	底	底	底	砂質少	砂質少	アラ-33テ	アラ-33テ	33テ	圓筒系切り、黒物付筒	
54	192	86	Ⅲ区-C-15	大中	土器	16.8	(7)	底	底	底	砂質少	砂質少	アラ-33テ	アラ-33テ	33テ	圓筒系切り、黒物付筒	
55	186	86	Ⅲ区-C-15	大中	土器	16.8	(7)	底	底	底	砂質少	砂質少	アラ-33テ	アラ-33テ	33テ	圓筒系切り、黒物付筒	
56	191	86	Ⅲ区-C-15	大中	土器	16.8	(7)	底	底	底	砂質少	砂質少	アラ-33テ	アラ-33テ	33テ	圓筒系切り、黒物付筒	
57	193	86	Ⅲ区-C-15	大中	土器	16.8	(7)	底	底	底	砂質少	砂質少	アラ-33テ	アラ-33テ	33テ	圓筒系切り、黒物付筒	
58	193	86	Ⅲ区-C-15	大中	土器	16.8	(7)	底	底	底	砂質少	砂質少	アラ-33テ	アラ-33テ	33テ	圓筒系切り、黒物付筒	
59	301	86	Ⅲ区-B-16	大中	土器	16.8	(7)	底	底	底	砂質少	砂質少	アラ-33テ	アラ-33テ	33テ	圓筒系切り、黒物付筒	
60	19	86	Ⅲ区-B-16	大中	土器	16.8	(7)	底	底	底	砂質少	砂質少	アラ-33テ	アラ-33テ	33テ	圓筒系切り、黒物付筒	
61	302	86	Ⅲ区-B-16	大中	土器	16.8	(7)	底	底	底	砂質少	砂質少	アラ-33テ	アラ-33テ	33テ	圓筒系切り、黒物付筒	
62	305	86	Ⅲ区-B-16	大中	土器	16.8	(7)	底	底	底	砂質少	砂質少	アラ-33テ	アラ-33テ	33テ	圓筒系切り、黒物付筒	
63	304	86	Ⅲ区-B-16	大中	土器	16.8	(7)	底	底	底	砂質少	砂質少	アラ-33テ	アラ-33テ	33テ	圓筒系切り、黒物付筒	
64	306	86	Ⅲ区-B-15-16	大中	土器	16.8	(7)	底	底	底	砂質少	砂質少	アラ-33テ	アラ-33テ	33テ	圓筒系切り、黒物付筒	
65	306	86	Ⅲ区-B-15-16	大中	土器	16.8	(7)	底	底	底	砂質少	砂質少	アラ-33テ	アラ-33テ	33テ	圓筒系切り、黒物付筒	
66	25	86	Ⅲ区-B-15-16	大中	土器	16.8	(7)	底	底	底	砂質少	砂質少	アラ-33テ	アラ-33テ	33テ	圓筒系切り、黒物付筒	
67	45	86	Ⅲ区-B-15-16	大中	土器	16.8	(7)	底	底	底	砂質少	砂質少	アラ-33テ	アラ-33テ	33テ	圓筒系切り、黒物付筒	
68	223	86	Ⅲ区-C-17	大中	須器	14.6	(2)	底	底	底	砂質少	砂質少	アラ-33テ	アラ-33テ	33テ	圓筒系切り、黒物付筒	
69	214	86	Ⅲ区-C-17	大中	須器	14.6	(2)	底	底	底	砂質少	砂質少	アラ-33テ	アラ-33テ	33テ	圓筒系切り、黒物付筒	
70	227	86	Ⅲ区-C-17	大中	須器	14.6	(2)	底	底	底	砂質少	砂質少	アラ-33テ	アラ-33テ	33テ	圓筒系切り、黒物付筒	
71	215	86	Ⅲ区-C-17	大中	須器	14.6	(2)	底	底	底	砂質少	砂質少	アラ-33テ	アラ-33テ	33テ	圓筒系切り、黒物付筒	
72	217	86	Ⅲ区-C-17	大中	須器	14.6	(2)	底	底	底	砂質少	砂質少	アラ-33テ	アラ-33テ	33テ	圓筒系切り、黒物付筒	
73	1	86	Ⅲ区-B-14	包-4	須器	10.6	7.4	4.8	底	底	砂質少	砂質少	アラ-33テ	アラ-33テ	33テ	圓筒系切り、黒物付筒	
74	225	86	Ⅲ区-C-17	包-4	須器	10.6	(8.0)	(2.6)	底	底	砂質少	砂質少	アラ-33テ	アラ-33テ	33テ	圓筒系切り、黒物付筒	
75	220	86	Ⅲ区-C-17	包-4	須器	10.6	(8.0)	(2.6)	底	底	砂質少	砂質少	アラ-33テ	アラ-33テ	33テ	圓筒系切り、黒物付筒	
76	219	86	Ⅲ区-C-17	包-4	須器	10.6	(8.0)	(2.6)	底	底	砂質少	砂質少	アラ-33テ	アラ-33テ	33テ	圓筒系切り、黒物付筒	
77	21	86	Ⅲ区-C-17	包-4	須器	10.6	(8.0)	(2.6)	底	底	砂質少	砂質少	アラ-33テ	アラ-33テ	33テ	圓筒系切り、黒物付筒	
78	201	86	Ⅲ区-C-17	包-4	須器	10.6	(8.0)	(2.6)	底	底	砂質少	砂質少	アラ-33テ	アラ-33テ	33テ	圓筒系切り、黒物付筒	
79	212	86	Ⅲ区-C-17	包-4	須器	10.6	(8.0)	(2.6)	底	底	砂質少	砂質少	アラ-33テ	アラ-33テ	33テ	圓筒系切り、黒物付筒	
80	213	86	Ⅲ区-C-17	包-4	須器	10.6	(8.0)	(2.6)	底	底	砂質少	砂質少	アラ-33テ	アラ-33テ	33テ	圓筒系切り、黒物付筒	
81	211	86	Ⅲ区-C-17	包-4	須器	10.6	(8.0)	(2.6)	底	底	砂質少	砂質少	アラ-33テ	アラ-33テ	33テ	圓筒系切り、黒物付筒	
82	226	86	Ⅲ区-C-17	包-4	須器	10.6	(8.0)	(2.6)	底	底	砂質少	砂質少	アラ-33テ	アラ-33テ	33テ	圓筒系切り、黒物付筒	
83	224	86	Ⅲ区-C-17	包-4	須器	10.6	(8.0)	(2.6)	底	底	砂質少	砂質少	アラ-33テ	アラ-33テ	33テ	圓筒系切り、黒物付筒	
84	29	86	Ⅲ区-B-17	包-4	須器	10.6	(8.0)	(2.6)	底	底	砂質少	砂質少	アラ-33テ	アラ-33テ	33テ	圓筒系切り、黒物付筒	
85	7	86	Ⅲ区-B-15	包-4	須器	10.6	(8.0)	(2.6)	底	底	砂質少	砂質少	アラ-33テ	アラ-33テ	33テ	圓筒系切り、黒物付筒	

第1表 土器・陶器類別調査表

探査番号	発掘年	調査年	グリッド	出土遺構	種類	断面	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	色調(外)	色調(内)	地土	焼成	調整(%)	備考	
基盤	蓋又は蓋	底	底	底	底	底	底	底	底	色	底	土質	外	外	外	外
13	86	86	II区-B-17	包-4層	漆器	漆器	-	-	-	灰	灰	砂質	灰	30±	30±	隕灰
87	222	86	II区-C-17	包-4層	漆器	漆器	?	-	-	灰	灰	砂質	灰	30±	30±	青海波の模様
88	218	86	II区-C-17	包-4層	漆器	漆器	?	-	-	灰	灰	砂質	灰	30±	30±	青海波の模様
89	241	86	II区-C-17	包-4層	漆器	漆器	?	-	-	灰	灰	砂質	灰	30±	30±	青海波の模様
90	40	86	II区-B-17	包-4層	漆器	漆器	?	-	-	灰	灰	砂質	灰	30±	30±	青海波の模様
91	23	86	II区-B-16-17	包-4層	土器	高杯	(12.6)	(3.1)	(10.4)	灰	灰	砂質	灰	30±	30±	隕灰
92	25	86	II区-B-17	包-4層	土器	高杯	(11.5)	(5.3)	(10.4)	灰	灰	砂質	灰	30±	30±	隕灰
93	27	86	II区-B-17	包-4層	土器	高杯	(11.5)	(5.3)	(10.4)	灰	灰	砂質	灰	30±	30±	隕灰
94	202	86	II区-C-17	包-4層	漆器	漆器	?	-	-	灰	灰	砂質	灰	30±	30±	隕灰
95	208	86	II区-C-17	包-4層	内壁漆器	漆器	?	-	-	灰	灰	砂質	灰	30±	30±	隕灰
96	210	86	II区-C-17	包-4層	土器	漆器	?	-	-	灰	灰	砂質	灰	30±	30±	隕灰
97	24	86	II区-B-17	包-4層	土器	漆器	?	-	-	灰	灰	砂質	灰	30±	30±	隕灰
98	28	86	II区-B-17	包-4層	土器	漆器	?	-	-	灰	灰	砂質	灰	30±	30±	隕灰
99	259	86	II区-C-17	包-4層	土器	漆器	?	-	-	灰	灰	砂質	灰	30±	30±	隕灰
100	207	86	II区-C-17	包-4層	土器	漆器	?	-	-	灰	灰	砂質	灰	30±	30±	隕灰
101	6	86	II区-B-15	包-4層	土器	漆器	?	-	-	灰	灰	砂質	灰	30±	30±	隕灰
102	204	86	II区-C-17	包-4層	土器	漆器	?	-	-	灰	灰	砂質	灰	30±	30±	隕灰
103	26	86	II区-B-17	包-4層	土器	漆器	?	-	-	灰	灰	砂質	灰	30±	30±	隕灰
104	203	86	II区-C-17	包-4層	土器	漆器	?	-	-	灰	灰	砂質	灰	30±	30±	隕灰
105	206	86	II区-C-17	包-4層	土器	漆器	?	-	-	灰	灰	砂質	灰	30±	30±	隕灰
106	22	86	II区-B-16	包-4層	土器	漆器	?	-	-	灰	灰	砂質	灰	30±	30±	隕灰
107	107	86	II区-B-15	包-4層	漆器	漆器	?	-	-	灰	灰	砂質	灰	30±	30±	隕灰
108	166	86	II区-C-14-15	包-4層	漆器	漆器	?	-	-	灰	灰	砂質	灰	30±	30±	隕灰
109	172	86	II区-C-14	包-4層	漆器	漆器	?	-	-	灰	灰	砂質	灰	30±	30±	隕灰
110	86	II区-C-14-15	包-4層	漆器	漆器	?	-	-	灰	灰	砂質	灰	30±	30±	隕灰	
111	165	86	II区-C-14-15	包-4層	漆器	漆器	?	-	-	灰	灰	砂質	灰	30±	30±	隕灰
112	168	86	II区-C-14-15	包-4層	漆器	漆器	?	-	-	灰	灰	砂質	灰	30±	30±	隕灰
113	203	86	II区-C-14-15	包-4層	漆器	漆器	?	-	-	灰	灰	砂質	灰	30±	30±	隕灰
114	162	86	II区-C-14-15	包-4層	漆器	漆器	?	-	-	灰	灰	砂質	灰	30±	30±	隕灰
115	160	86	II区-C-14-15	包-4層	漆器	漆器	?	-	-	灰	灰	砂質	灰	30±	30±	隕灰
116	163	86	II区-C-14-15	包-4層	漆器	漆器	?	-	-	灰	灰	砂質	灰	30±	30±	隕灰
117	164	86	II区-C-14-15	包-4層	漆器	漆器	?	-	-	灰	灰	砂質	灰	30±	30±	隕灰
118	173	86	II区-C-14-15	包-4層	漆器	漆器	?	-	-	灰	灰	砂質	灰	30±	30±	隕灰
119	171	86	II区-C-14-15	包-4層	漆器	漆器	?	-	-	灰	灰	砂質	灰	30±	30±	隕灰
120	171	86	II区-C-14-15	包-4層	漆器	漆器	?	-	-	灰	灰	砂質	灰	30±	30±	隕灰
121	170	86	II区-C-14-15	包-4層	漆器	漆器	?	-	-	灰	灰	砂質	灰	30±	30±	隕灰
122	161	86	II区-C-14-15	包-4層	漆器	漆器	?	-	-	灰	灰	砂質	灰	30±	30±	隕灰
123	3	86	II区-C-14-15	包-4層	漆器	漆器	?	-	-	灰	灰	砂質	灰	30±	30±	隕灰
124	169	86	II区-C-14-15	包-4層	漆器	漆器	?	-	-	灰	灰	砂質	灰	30±	30±	隕灰
125	167	86	II区-C-14-15	包-4層	漆器	漆器	?	-	-	灰	灰	砂質	灰	30±	30±	隕灰
126	188	86	II区-C-16	包-4層	漆器	漆器	?	-	-	灰	灰	砂質	灰	30±	30±	隕灰
127	187	86	II区-C-16	包-4層	漆器	漆器	?	-	-	灰	灰	砂質	灰	30±	30±	隕灰
128	166	86	II区-B-19	包-4層	漆器	漆器	?	-	-	灰	灰	砂質	灰	30±	30±	隕灰

第1表 土器・陶器断面形状表

番号	場所	調査年次	調査	グリット	出土遺物	場所	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	色調(外)	色調(内)	地土		鉢底	目盛(4)	目盛(6)	備考	
										無台杯	有台杯	無台杯	有台杯	無台杯	有台杯	無台杯	有台杯	
14	129	86	Ⅲ区-C-20	下部	手炒	土器	須磨器	無	(9.0)	灰	灰	無	無	無	無	無	無	無な焼きあり へり焼けなし
130	131	86	Ⅲ区-C-20	1号土坑	須磨器	無	無	(9.0)	灰	白	白	無	無	無	無	無	生焼け	
131	132	86	Ⅲ区-C-20	1号土坑	須磨器	無	無	(12.0)	灰	白	白	無	無	無	無	無	生焼け	
132	133	86	Ⅲ区-C-21	下部1号土坑	須磨器	無	無	(9.1)	灰	白	白	無	無	無	無	無	生焼け	
133	134	86	Ⅲ区-C-20	2号土坑	須磨器	無	無	(8.0)	灰	白	白	無	無	無	無	無	生焼け	
134	135	86	Ⅲ区-C-20	3号土坑	須磨器	無	無	(9.2)	灰	白	白	無	無	無	無	無	生焼け	
135	136	86	Ⅲ区-C-21	9号土坑	須磨器	無	無	(10.4)	灰	白	白	無	無	無	無	無	生焼け	
137	138	86	Ⅲ区-C-21	下部2号土坑	須磨器	無	無	(8.0)	灰	白	白	無	無	無	無	無	生焼け	
138	139	86	Ⅲ区-C-21	下部2号土坑	須磨器	無	無	(14.2)	灰	白	白	無	無	無	無	無	生焼け	
139	140	86	Ⅲ区-B-23	1号窓内	須磨器	無	無	(3.6)	灰	白	白	無	無	無	無	無	生焼け	
140	141	86	Ⅲ区-B-20	1号窓内	須磨器	無	無	(8.0)	灰	白	白	無	無	無	無	無	生焼け	
141	142	86	Ⅲ区-B-20	1号窓内	須磨器	無	無	(16.4)	灰	白	白	無	無	無	無	無	生焼け	
142	143	86	Ⅲ区-B-20	1号窓内	須磨器	無	無	(8.0)	灰	白	白	無	無	無	無	無	生焼け	
143	144	86	Ⅲ区-B-20	1号窓内	須磨器	無	無	(16.4)	灰	白	白	無	無	無	無	無	生焼け	
144	145	86	Ⅲ区-C-21上	3号窓	須磨器	無	無	(10.0)	灰	白	白	無	無	無	無	無	生焼け	
145	146	86	Ⅲ区-C-20	下部7号窓	須磨器	無	無	(8.0)	灰	白	白	無	無	無	無	無	生焼け	
146	147	86	Ⅲ区-C-20	下部7号窓	須磨器	無	無	(16.0)	灰	白	白	無	無	無	無	無	生焼け	
147	148	86	Ⅲ区-B-20	9号窓	須磨器	無	無	(9.0)	灰	白	白	無	無	無	無	無	生焼け	
148	149	86	Ⅲ区-C-20	下部8号窓	土器	土器	無	(9.0)	灰	白	白	無	無	無	無	無	生焼け	
149	150	86	Ⅲ区-C-20	下部8号窓内	須磨器	無	無	(8.0)	灰	白	白	無	無	無	無	無	生焼け	
150	151	86	Ⅲ区-C-21	10号窓	須磨器	無	無	(9.0)	灰	白	白	無	無	無	無	無	生焼け	
151	152	86	Ⅲ区-C-21	11号窓	須磨器	無	無	(8.0)	灰	白	白	無	無	無	無	無	生焼け	
152	153	86	Ⅲ区-C-20	下部1号窓	須磨器	無	無	(8.0)	灰	白	白	無	無	無	無	無	生焼け	
153	154	86	Ⅲ区-C-20	下部1号窓	須磨器	無	無	(7.0)	灰	白	白	無	無	無	無	無	生焼け	
154	155	86	Ⅲ区-C-21	小窓	須磨器	無	無	(12.1)	灰	白	白	無	無	無	無	無	生焼け	
155	156	86	Ⅲ区-B-19-20	5号窓	須磨器	無	無	(13.7)	灰	白	白	無	無	無	無	無	生焼け	
156	157	86	Ⅲ区-B-19-20	5号窓	須磨器	無	無	(15.9)	灰	白	白	無	無	無	無	無	生焼け	
157	158	86	Ⅲ区-C-20	下部5号窓	須磨器	無	無	(8.0)	灰	白	白	無	無	無	無	無	生焼け	
158	159	86	Ⅲ区-C-20	下部5号窓	須磨器	無	無	(11.2)	灰	白	白	無	無	無	無	無	生焼け	
159	160	86	Ⅲ区-C-21	大窓中	須磨器	無	無	(8.6)	灰	白	白	無	無	無	無	無	生焼け	
160	161	86	Ⅲ区-C-21	大窓中	須磨器	無	無	(12.1)	灰	白	白	無	無	無	無	無	生焼け	
161	162	86	Ⅲ区-C-21	大窓中	須磨器	無	無	(13.7)	灰	白	白	無	無	無	無	無	生焼け	
162	163	86	Ⅲ区-C-21	大窓中	須磨器	無	無	(8.4)	灰	白	白	無	無	無	無	無	生焼け	
163	164	86	Ⅲ区-C-21	大窓内	須磨器	無	無	(9.2)	灰	白	白	無	無	無	無	無	生焼け	
164	165	86	Ⅲ区-C-21	大窓内	須磨器	無	無	(12.6)	灰	白	白	無	無	無	無	無	生焼け	
165	166	86	Ⅲ区-C-19	大窓内	須磨器	無	無	(15.2)	灰	白	白	無	無	無	無	無	生焼け	
166	167	86	Ⅲ区-C-19	大窓内	須磨器	無	無	(15.3)	灰	白	白	無	無	無	無	無	生焼け	
167	168	86	Ⅲ区-C-19	大窓内	須磨器	無	無	(11.0)	灰	白	白	無	無	無	無	無	生焼け	
168	169	86	Ⅲ区-C-19	大窓内	須磨器	無	無	(11.8)	灰	白	白	無	無	無	無	無	生焼け	
169	170	86	Ⅲ区-C-19	大窓内	須磨器	無	無	(12.6)	灰	白	白	無	無	無	無	無	生焼け	
170																		

表5-1-1 土層・開槽壁觀察

第1表 土器・陶器断面調査表

番号	場所	年次	調査	グリッド	出土遺構	横幅	口径	底径	高さ	色調(外)	色調(内)	地土	調査(外)	調査(内)	備考
17	212	87	86	III	区-B-21	色-2層	須恵器	縦口楕	10.2	灰	灰	1mの砂利少	3.17	3.17-底灰	底灰
213	87	86	III	区-B-20	色-2層	須恵器	縦口楕	7.5	灰	灰	砂利少	3.17	3.17-底灰	タカミ平塗、青緑透状	
214	55	90	86	III	区-B-20	色-2層	須恵器	縦口楕	10.2	灰	灰	砂利少	3.17	3.17-底灰	内側(?)
215	90	86	III	区-B-20	色-2層	須恵器	縦口楕	7.5	灰	灰	砂利少	3.17	3.17-底灰	大塗(?)	
216	90	86	III	区-B-20	色-2層	須恵器	縦口楕	7.5	灰	灰	砂利少	3.17	3.17-底灰	2.ランク、外側斜	
217	80	86	III	区-B-20	色-2層	須恵器	縦口楕	6.9	(1)オーブ	灰	灰	灰	3.17	3.17-底灰	縦口楕
218	48	86	III	区-B-19	色-2層	古須恵	縦口楕	15.3	(1)灰	灰	灰	灰	3.17	3.17-底灰	縦口楕
219	103	86	III	区-B-22	色-2層	古須恵	縦口楕	15.3	(1)灰	灰	灰	灰	3.17	3.17-底灰	縦口楕
220	56	86	III	区-B-20	色-2層	古須恵	縦口楕	15.3	(1)灰	灰	灰	灰	3.17	3.17-底灰	縦口楕
221	104	86	III	区-B-22	色-2層	古須恵	縦口楕	15.3	(1)灰	灰	灰	灰	3.17	3.17-底灰	縦口楕
222	283	86	III	区-C-22	色-2層	古須恵	縦口楕	15.3	(1)灰	灰	灰	灰	3.17	3.17-底灰	縦口楕
223	43	86	III	区-B-19	色-2層	古須恵	縦口楕	15.3	(1)灰	灰	灰	灰	3.17	3.17-底灰	縦口楕
224	188	86	III	区-B-21	色-2層	古須恵	縦口楕	15.3	(1)灰	灰	灰	灰	3.17	3.17-底灰	縦口楕
225	17	86	III	区-B-23	色-2層	古須恵	縦口楕	15.3	(1)灰	灰	灰	灰	3.17	3.17-底灰	縦口楕
226	89	86	III	区-B-21	色-2層	古須恵	縦口楕	15.3	(1)灰	灰	灰	灰	3.17	3.17-底灰	縦口楕
227	46	86	III	区-C-20	色-2層	古須恵	縦口楕	15.3	(1)灰	灰	灰	灰	3.17	3.17-底灰	縦口楕
228	113	86	III	区-B-23	色-2層	古須恵	縦口楕	15.3	(1)灰	灰	灰	灰	3.17	3.17-底灰	縦口楕
229	57	86	III	区-B-20	色-2層	古須恵	縦口楕	15.3	(1)灰	灰	灰	灰	3.17	3.17-底灰	縦口楕
230	85	86	III	区-B-20	色-2層	古須恵	縦口楕	15.3	(1)灰	灰	灰	灰	3.17	3.17-底灰	縦口楕
231	85	86	III	区-B-20	色-2層	古須恵	縦口楕	15.3	(1)灰	灰	灰	灰	3.17	3.17-底灰	縦口楕
232	284	86	III	区-C-22	色-2層	古須恵	縦口楕	15.3	(1)灰	灰	灰	灰	3.17	3.17-底灰	縦口楕
233	44	86	III	区-B-19	色-2層	古須恵	縦口楕	15.3	(1)灰	灰	灰	灰	3.17	3.17-底灰	縦口楕
234	47	86	III	区-B-19	色-2層	白磁	小坪	8.4	(1)灰	灰	灰	灰	3.17	3.17-底灰	小坪
235	41	86	III	区-B-19	色-2層	白磁	小坪	12.0	(1)灰	灰	灰	灰	3.17	3.17-底灰	小坪
236	92	86	III	区-B-21	色-2層	白磁	小坪	16.7	(1)灰	灰	灰	灰	3.17	3.17-底灰	小坪
237	46	86	III	区-B-19	色-2層	白磁	小坪	16.7	(1)灰	灰	灰	灰	3.17	3.17-底灰	小坪
238	46	86	III	区-B-19	色-2層	白磁	小坪	16.7	(1)灰	灰	灰	灰	3.17	3.17-底灰	小坪
239	76	86	III	区-B-20	色-2層	茶付	小坪	16.7	(1)灰	灰	灰	灰	3.17	3.17-底灰	小坪
240	100	86	III	区-B-21	色-2層	茶付	小坪	16.7	(1)灰	灰	灰	灰	3.17	3.17-底灰	小坪
241	87	86	III	区-B-20	色-2層	茶付	小坪	16.7	(1)灰	灰	灰	灰	3.17	3.17-底灰	小坪
242	90	86	III	区-B-21	色-2層	茶付	小坪	16.7	(1)灰	灰	灰	灰	3.17	3.17-底灰	小坪
243	77	86	III	区-B-20	色-2層	茶付	小坪	16.7	(1)灰	灰	灰	灰	3.17	3.17-底灰	小坪
244	75	86	III	区-B-20	色-2層	茶付	小坪	16.7	(1)灰	灰	灰	灰	3.17	3.17-底灰	小坪
245	73	86	III	区-B-20	色-2層	茶付	小坪	16.7	(1)灰	灰	灰	灰	3.17	3.17-底灰	小坪
246	289	86	III	区-C-23	色-2層	茶付	小坪	16.7	(1)灰	灰	灰	灰	3.17	3.17-底灰	小坪
247	14	86	III	区-B-20	色-2層	茶付	小坪	16.7	(1)灰	灰	灰	灰	3.17	3.17-底灰	小坪
248	81	86	III	区-B-20	色-2層	茶付	小坪	16.7	(1)灰	灰	灰	灰	3.17	3.17-底灰	小坪
249	83	86	III	区-B-20	色-2層	茶付	小坪	16.7	(1)灰	灰	灰	灰	3.17	3.17-底灰	小坪
250	79	86	III	区-B-20	色-2層	茶付	小坪	16.7	(1)灰	灰	灰	灰	3.17	3.17-底灰	小坪
251	84	86	III	区-B-20	色-2層	茶付	小坪	16.7	(1)灰	灰	灰	灰	3.17	3.17-底灰	小坪
252	78	86	III	区-B-20	色-2層	茶付	小坪	16.7	(1)灰	灰	灰	灰	3.17	3.17-底灰	小坪
253	14	86	III	区-B-23	色-2層	茶付	小坪	16.7	(1)灰	灰	灰	灰	3.17	3.17-底灰	小坪
254	294	86	III	区-C-22	色-2層	茶付	小坪	16.7	(1)灰	灰	灰	灰	3.17	3.17-底灰	小坪
255	37	86	III	区-B-19	色-2層	茶付	小坪	16.7	(1)灰	灰	灰	灰	3.17	3.17-底灰	小坪
256	111	86	III	区-B-23	色-2層	茶付	小坪	16.7	(1)灰	灰	灰	灰	3.17	3.17-底灰	小坪
257	91	86	III	区-B-21	色-2層	茶付	小坪	16.7	(1)灰	灰	灰	灰	3.17	3.17-底灰	小坪
258	25	86	III	区-B-20	色-2層	茶付	小坪	16.7	(1)灰	灰	灰	灰	3.17	3.17-底灰	小坪
259	25	86	III	区-B-20	色-2層	茶付	小坪	16.7	(1)灰	灰	灰	灰	3.17	3.17-底灰	小坪
260	236	86	III	区-C-19	色-2層	土器	土器	23	(2)土器	灰	灰	灰	3.17	3.17-底灰	土器

第1表 土器・陶器類別統計表

番号	場所	測量年次	調査名	グリッド	出土遺物	種別	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	色調(外)	土色	焼成	測量(内)	備考
										基盤	蓋	底盤	蓋	底盤
19	261	136	86 III区 C-20	包2-2-3層	須恵器	蓋	(12.2)	(1.7)	灰白	灰白	灰白	灰白	2m×2mの複数個	新しい時代 と見られると思われる
	139	86 III区 C-20	包2-2-3層	須恵器	蓋	(13.3)	(1.6)	灰白	灰白	灰白	灰白	1m×1mの複数個	古い時代 のものと思われる	
263	144	86 III区 C-20	包2-2-3層	須恵器	蓋	(13.6)	(1.6)	灰白	灰白	灰白	灰白	1m×1mの複数個	古い時代 のものと思われる	
264	142	86 III区 C-20	包2-2-3層	須恵器	蓋	(12.3)	(1.9)	明黄色	明黄色	明黄色	明黄色	1m×1mの複数個	新しい時代 のものと思われる	
265	258	86 III区 C-20	包2-2-3層	須恵器	蓋	(12.7)	(1.6)	明黄色	明黄色	明黄色	明黄色	1m×1mの複数個	新しい時代 のものと思われる	
266	260	86 III区 C-21	包2-2-3層	須恵器	蓋	(12.4)	(1.2)	明黄色	明黄色	明黄色	明黄色	1m×1mの複数個	新しい時代 のものと思われる	
267	257	86 III区 C-21	包2-2-3層	須恵器	蓋	(12.8)	(1.2)	明黄色	明黄色	明黄色	明黄色	1m×1mの複数個	新しい時代 のものと思われる	
268	259	86 III区 C-21	包2-2-3層	須恵器	蓋	(13.6)	(1.6)	青灰	青灰	青灰	青灰	1m×1mの複数個	新しい時代 のものと思われる	
269	149	86 III区 C-20	包2-2-3層	須恵器	蓋	(11.3)	(7.4)	4.3	灰白	青灰	青灰	青灰	1m×1mの複数個	新しい時代 のものと思われる
270	147	86 III区 C-20	包2-2-3層	須恵器	蓋	(6.0)	(6.8)	(0.9)	灰白	灰白	灰白	灰白	1m×1mの複数個	新しい時代 のものと思われる
271	143	86 III区 C-20	包2-2-3層	須恵器	蓋	(6.8)	(6.8)	(0.9)	灰白	灰白	灰白	灰白	1m×1mの複数個	新しい時代 のものと思われる
272	140	86 III区 C-20	包2-2-3層	須恵器	蓋	(7.5)	(1.3)	灰白	灰白	灰白	灰白	1m×1mの複数個	新しい時代 のものと思われる	
273	262	86 III区 C-21	包2-2-3層	須恵器	蓋	(7.2)	(1.9)	灰白	灰白	灰白	灰白	1m×1mの複数個	新しい時代 のものと思われる	
274	264	86 III区 C-21	包2-2-3層	須恵器	蓋	(10.2)	(1.3)	灰白	灰白	灰白	灰白	1m×1mの複数個	新しい時代 のものと思われる	
275	261	86 III区 C-21	包2-2-3層	須恵器	蓋	(7.1)	(1.5)	灰白	灰白	灰白	灰白	1m×1mの複数個	新しい時代 のものと思われる	
276	146	86 III区 C-20	包2-2-3層	須恵器	蓋	(8.9)	(1.2)	明黄色	明黄色	明黄色	明黄色	1m×1mの複数個	新しい時代 のものと思われる	
277	255	86 III区 C-20	包2-2-3層	須恵器	蓋	(14.7)	(9.2)	6.7	灰白	灰白	灰白	灰白	1m×1mの複数個	新しい時代 のものと思われる
278	259	86 III区 C-21	包2-2-3層	須恵器	蓋	(11.6)	(8.6)	2.2	灰白	灰白	灰白	灰白	1m×1mの複数個	新しい時代 のものと思われる
280	156	86 III区 C-20	包2-2-3層	須恵器	蓋	(12.3)	(8.6)	3.7	明黄色	明黄色	明黄色	明黄色	1m×1mの複数個	新しい時代 のものと思われる
281	263	86 III区 C-21	包2-2-3層	須恵器	蓋	(12.4)	(7.8)	2.9	明黄色	明黄色	明黄色	明黄色	1m×1mの複数個	新しい時代 のものと思われる
282	159	86 III区 C-20	包2-2-3層	須恵器	蓋	(12.6)	(7.6)	2.4	明黄色	明黄色	明黄色	明黄色	1m×1mの複数個	新しい時代 のものと思われる
284	148	86 III区 C-20	包2-2-3層	須恵器	蓋	(16.9)	(14.0)	2.1	灰白	灰白	灰白	灰白	1m×1mの複数個	新しい時代 のものと思われる
285	138	86 III区 C-20	包2-2-3層	須恵器	蓋	(7.1)	(7.1)	(4.5)	灰白	灰白	灰白	灰白	1m×1mの複数個	新しい時代 のものと思われる
286	155	86 III区 C-20	包2-2-3層	須恵器	蓋	(11.0)	(11.0)	(3.2)	灰白	灰白	灰白	灰白	1m×1mの複数個	新しい時代 のものと思われる
287	137	86 III区 C-21	包2-2-3層	須恵器	蓋	(13.0)	(21.6)	灰白	灰白	灰白	灰白	1m×1mの複数個	新しい時代 のものと思われる	
288	256	86 III区 C-21	包2-2-3層	須恵器	蓋	(10.1)	(6.9)	灰白	灰白	灰白	灰白	1m×1mの複数個	新しい時代 のものと思われる	
289	134	86 III区 C-20	包2-2-3層	須恵器	蓋	(16.4)	(16.4)	2.1	明黄色	明黄色	明黄色	明黄色	1m×1mの複数個	新しい時代 のものと思われる
290	265	86 III区 C-21	包2-2-3層	須恵器	蓋	(10.5)	(16.4)	2.1	明黄色	明黄色	明黄色	明黄色	1m×1mの複数個	新しい時代 のものと思われる
293	157	86 III区 C-20	包2-2-3層	須恵器	蓋	(10.5)	(15.5)	2.1	明黄色	明黄色	明黄色	明黄色	1m×1mの複数個	新しい時代 のものと思われる
294	266	86 III区 C-21	包2-2-3層	須恵器	蓋	(10.5)	(16.4)	2.1	明黄色	明黄色	明黄色	明黄色	1m×1mの複数個	新しい時代 のものと思われる
295	153	86 III区 C-20	包2-2-3層	須恵器	蓋	(13.4)	(31.4)	2.1	明黄色	明黄色	明黄色	明黄色	1m×1mの複数個	新しい時代 のものと思われる
297	247	86 III区 C-21	包2-2-3層	須恵器	蓋	(13.4)	(31.4)	2.1	明黄色	明黄色	明黄色	明黄色	1m×1mの複数個	新しい時代 のものと思われる
298	269	86 III区 C-21	包2-2-3層	須恵器	蓋	(13.4)	(31.4)	2.1	明黄色	明黄色	明黄色	明黄色	1m×1mの複数個	新しい時代 のものと思われる
299	159	86 III区 C-20	包2-2-3層	須恵器	蓋	(13.5)	(31.4)	2.1	明黄色	明黄色	明黄色	明黄色	1m×1mの複数個	新しい時代 のものと思われる
301	248	86 III区 C-21	包2-2-3層	須恵器	蓋	(4.3)	(4.3)	灰白	灰白	灰白	灰白	1m×1mの複数個	新しい時代 のものと思われる	

第1表 土器・陶器類調査表

番号	発掘場所	新次、調査者	グリッド	出土場所	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	色調(外)	色調(内)	地土	焼成	調整(内)	調整(外)	備考
										基盤	蓋	底盤	火候	基盤	火候	備考
20	3021 251	86 III区 C-21	色-2-2-3層	加須燒	器	(3.4) 未収	(5.0) 未収	(5.0) 未収	黒褐色	黒褐色	灰	微燃-1mmの白色砂	良	0.021テナ-	0.021テナ-	深灰
303	246	86 III区 C-21	色-2-2-3層	須恵燒	器	(3.4) 未収	(5.0) 未収	(5.0) 未収	黒褐色	黒褐色	灰	微燃-1mmの大粒骨食	良	ナ-	ナ-	火食含み透明感欠ける、質入質人無し。
304	268	86 III区 C-21	色-2-2-3層	須恵燒	器	(3.4) 未収	(5.0) 未収	(5.0) 未収	黒褐色	黒褐色	灰	微燃-1mmの大粒骨食	良	ナ-	ナ-	火食含み透明感欠ける、質入質人無し。
305	151	86 III区 C-20	色-2-2-3層	須恵燒	器	(3.4) 未収	(5.0) 未収	(5.0) 未収	黒褐色	黒褐色	灰	微燃-1mmの大粒骨食	良	ナ-	ナ-	火食含み透明感欠ける、質入質人無し。
306	250	86 III区 C-21	色-2-2-3層	須恵燒	器	(3.4) 未収	(5.0) 未収	(5.0) 未収	黒褐色	黒褐色	灰	微燃-1mmの大粒骨食	良	ナ-	ナ-	火食含み透明感欠ける、質入質人無し。
307	279	86 III区 C-21	色-2-2-3層中	須恵燒	器	2.6	(1.9) 未収	(1.9) 未収	黒褐色	黒褐色	灰	微燃-1mmの大粒骨食	良	0.021テナ-	0.021テナ-	深灰
308	280	86 III区 C-21	色-2-2-3層中	須恵燒	器	2.6	(1.9) 未収	(1.9) 未収	黒褐色	黒褐色	灰	微燃-1mmの大粒骨食	良	0.021テナ-	0.021テナ-	深灰
309	159	86 III区 C-20	色-2-2層	須恵燒	器	(1.4) 未収	(7.0) 未収	(7.0) 未収	青灰	青灰	灰	微燃-1mmの大粒骨食	良	0.021テナ-	0.021テナ-	火食含む。
310	71	86 III区 B-20	色-2-2層	須恵燒	器	(1.4) 未収	(7.0) 未収	(7.0) 未収	青灰	青灰	灰	微燃-1mmの大粒骨食	良	0.021テナ-	0.021テナ-	火食含む。
311	277	86 III区 C-21	色-2-2-3層中	須恵燒	器	(1.4) 未収	(7.0) 未収	(7.0) 未収	青灰	青灰	灰	微燃-1mmの大粒骨食	良	0.021テナ-	0.021テナ-	火食含む。
312	276	86 III区 C-21	色-2-2-3層中	須恵燒	器	(1.4) 未収	(7.0) 未収	(7.0) 未収	青灰	青灰	灰	微燃-1mmの大粒骨食	良	0.021テナ-	0.021テナ-	火食含む。
313	72	86 III区 B-20	色-2-2層	須恵燒	器	(1.4) 未収	(7.5) 未収	(7.5) 未収	青灰	青灰	灰	微燃-1mmの大粒骨食	良	0.021テナ-	0.021テナ-	火食含む。
314	158	86 III区 C-20	色-2-2層	須恵燒	器	(1.4) 未収	(7.5) 未収	(7.5) 未収	青灰	青灰	灰	微燃-1mmの大粒骨食	良	0.021テナ-	0.021テナ-	火食含む。
315	273	86 III区 C-21	色-2-2-3層	須恵燒	器	(1.4) 未収	(7.0) 未収	(7.0) 未収	青灰	青灰	灰	微燃-1mmの大粒骨食	良	0.021テナ-	0.021テナ-	火食含む。
21	316	272	86 III区 C-21	色-2-2-3層	須恵燒	(1.4) 未収	(7.0) 未収	(7.0) 未収	青灰	青灰	灰	微燃-1mmの大粒骨食	良	0.021テナ-	0.021テナ-	火食含む。
317	234	86 III区 C-19	色-2-2層	須恵燒	器	(1.2) 未収	(8.0) 未収	(8.0) 未収	灰	灰	灰	1mm以下の骨食	良	0.021テナ-	0.021テナ-	火食含む。
318	274	86 III区 C-21	色-2-2-3層中	須恵燒	器	(1.4) 未収	(10.6) 未収	(10.6) 未収	青灰	青灰	灰	白煙炒め芯含む。	良	0.021テナ-	0.021テナ-	深灰
319	278	86 III区 C-21	色-2-2-3層中	須恵燒	器	(1.4) 未収	(10.6) 未収	(10.6) 未収	青灰	青灰	灰	微燃少	良	0.021テナ-	0.021テナ-	深灰
320	275	86 III区 C-21	色-2-2-3層上部	須恵燒	器	(1.4) 未収	(9.5) 未収	(9.5) 未収	青灰	青灰	灰	微燃-~mmの骨食	良	0.021テナ-	0.021テナ-	深灰
321	105	86 III区 B-23	色-2-2-3層	須恵燒	器	(1.4) 未収	(11.7) 未収	(11.7) 未収	青灰	青灰	灰	微燃-~mmの骨食	良	0.021テナ-	0.021テナ-	深灰
322	281	86 III区 C-21	灰	須恵燒	器	(1.4) 未収	(7.2) 未収	(7.2) 未収	青灰	青灰	灰	微燃-~mmの骨食	良	0.021テナ-	0.021テナ-	深灰
323	282	86 III区 C-21	灰	須恵燒	器	(1.4) 未収	(11.0) 未収	(11.0) 未収	青灰	青灰	灰	微燃-~mmの骨食	良	0.021テナ-	0.021テナ-	深灰
324	270	86 III区 C-21	灰	須恵燒	器	(1.4) 未収	(7.8) 未収	(7.8) 未収	青灰	青灰	灰	1mm以下の骨食	良	0.021テナ-	0.021テナ-	深灰
325	271	86 III区 C-21	灰	須恵燒	器	(1.4) 未収	(12.0) 未収	(12.0) 未収	青灰	青灰	灰	微燃-~mmの骨食	良	0.021テナ-	0.021テナ-	深灰
326	284	86 III区 C-21	灰-木質	須恵燒	器	(1.4) 未収	(7.3) 未収	(7.3) 未収	青灰	青灰	灰	微燃多-2mmの大粒骨食	良	0.021テナ-	0.021テナ-	深灰
327	299	86 III区 B-24	古窯跡	古窯跡	器	(1.4) 未収	(7.7) 未収	(7.7) 未収	青灰	青灰	灰	微燃少-空窯	良	0.021テナ-	0.021テナ-	深灰

第2表 石製品・木製品観察表1

捲回 番号	報告 番号	実測 番号	年次	調査区	グリッド	出土遺構	種別	器種	最大長 (口径)	最大幅 (底径)	最大厚 (器高)	備考
21	S1	1	86	III区	C-21(北)	3層	石器	砥石	(9.7)	(4.5)	(3.6)	重量: 251.0g
22	W1	34	86	II区	BC-15-16	大溝中	木器	杭か	(56.1)	5.8	2.7	上端部に孔?あり
	W2	85	86	II区	BC-15-16	大溝中	木器	不明	(58.0)	3.2	1.5	
	W3	27	86	II区	BC-15-16	大溝中	木器	板材	36.1	3.3	0.5	
	W4	59	86	II区	C-15-16	大溝中	木器	部材	10.8	4.3	0.2	
	W5	90	86	II区	BC-15-16	大溝中	木器	加工片か	14.7	1.6	0.7	
	W6	89	86	II区	BC-15-16	大溝中	木器	加工片か	11.1	2.1	1.0	
	W7	87	86	II区	B-16	大溝	木器	不明	(30.1)	1.8	0.9	
	W8	48	86	II区	B-16	大溝	木器	不明	(16.8)	1.5	0.7	
	W9	49	86	II区	B-16	大溝	木器	不明	(8.1)	1.5	0.5	
	W10	81	86	II区	B-16	大溝	木器	不明	42.5	2.4	1.5	
	W11	57	86	II区	B-16	大溝	木器	曲物底板	11.7	5.2	0.6	(推定径16.6)
	W12	52	86	II区	B-16	大溝	木器	曲物底板	11.6	4.7	0.8	(推定径11.8)
	W13	53	86	II区	B-16	大溝	木器	曲物底板 又は蓋	15.3	3.2	0.5	(推定径16.0) 中心部に半円状の 欠けあり
	W14	15	86	II区	B-16	大溝	木器	曲物		16.2	4.2	底板厚: 0.7 側板厚: 0.25
23	W15	77	86	II区	B-16	大溝	木器	不明	(57.6)	2.4	2.1	
	W16	88	86	II区	B-16	大溝	木器	不明	(50.0)	1.2	0.6	
	W17	37	86	II区	B-16	大溝中	木器	板材	(55.5)	4.6	0.5	
	W18	93	86	II区	B-16	大溝中	木器	板材	(20.9)	2.8	0.4	柱目材
	W19	19	86	II区	B-16	大溝中	木器	不明	(37.5)	2.0	1.7	
	W20	94	86	II区	B-16	大溝中	木器	板材	(22.4)	3.2	1.0	
	W21	21	86	II区	B-16	大溝中	木器	角棒材	38.6	2.0	1.5	
	W22	20	86	II区	B-16	大溝	木器	杭	59.5	2.9	3.8	
	W23	38	86	II区	B-16	大溝中	木器	杭が	(57.8)	5.6	2.0	
24	W24	83	86	II区	B-16	大溝中	木器	不明	59.0	2.4	2.0	
	W25	82	86	II区	B-16	大溝中	木器	不明	41.8	1.5	1.5	
	W26	22	86	II区	B-16	大溝中	木器	不明	36.6	2.1	1.6	上端部抉りあり
	W27	97	86	II区	B-16	大溝	木器	著状木製品	16.6	0.5	0.6	
	W28	24	86	II区	B-16	大溝中	木器	著状木製品	17.3	0.7	0.5	
	W29	23	86	II区	B-16	大溝中	木器	著状木製品	15.8	0.6	0.5	
							板材又は加					
	W30	96	86	II区	B-16	大溝中	木器	工片	26.2	3.0	1.3	
	W31	67	86	II区	B-16	大溝中	木器	不明	21.4	(5.3)	1.8	2ヶ所孔あり
	W32	25	86	II区	B-16	大溝中	木器	牽引	12.3	0.8	0.4	
	W33	64	86	II区	B-16	大溝中	木器	牽引	25.9	1.8	0.4	
	W34	60	86	II区	B-16	大溝	木器	牽引	19.7	2.3	0.6	2ヶ所切り込みあり
	W35	58	86	II区	C-16	大溝	木器	馬形	27.3	45.0	0.8	
	W36	51	86	II区	B-16	大溝	木器	曲物底板	16.8	16.8	0.8	
	W37	47	86	II区	B-16	大溝	木器	曲物底板	16.7	17.8	1.0	擦痕あり
25	W38	74	86	II区	B-16	大溝	木器	四ツ手網	33.5	5.9	5.0	
	W39	45	86	II区	B-16	大溝	木器	四ツ手網	34.1	5.5	4.9	
	W38	-39	109	86	II区	大溝	木器	(四ツ手網)				W38とW39の組み合わせ、上面
	W38	-39	110	86	II区	大溝	木器	(四ツ手網)				W38とW39の組み合わせ、下面
26	W40	101	86	II区	B-15-16	大溝中	木器	丸棒材	33.9	1.8	1.8	
	W41	69	86	II区	B-16	大溝	木器	丸棒材	(42.4)	1.9	1.3	
	W42	100	86	II区	B-16	大溝	木器	丸棒材	34.3	1.8	1.8	
	W43	99	86	II区	B-16	大溝	木器	丸棒材	27.7	1.8	1.8	
	W44	80	86	II区	BC-15-16	大溝中	木器	不明	35.7	2.1	1.8	
	W45	35	86	II区	B-16	大溝	木器	杭か	40.9	2.9	1.9	
	W46	73	86	II区	B-16	大溝	木器	不明	(48.6)	1.4	2.2	
	W47	39	86	II区	B-16	大溝	木器	不明	36.1	1.1	0.6	
	W48	46	86	II区	B-16	大溝	木器	丸棒材	16.0	1.3	1.1	下端部コゲあり
	W49	33	86	II区	B-16	大溝	木器	丸棒材	19.2	2.0	2.0	下端部コゲなし
	W50	28	86	II区	B-16	大溝	木器	丸棒材	19.3	1.8	1.5	
	W51	92	86	II区	B-16	大溝	木器	浮子	10.6	0.8	1.0	両端に挟り
	W52	106	86	II区	B-16	大溝	木器	不明	8.0	2.6	0.6	
	W53	26	86	II区	B-16	大溝	木器	不明	27.2	1.2	0.5	
	W54	91	86	II区	B-16	大溝	木器	不明	17.4	2.4	0.9	
	W55	107	86	II区	B-16	大溝	木器	不明	8.2	1.5	0.7	
	W56	108	86	II区	B-16	大溝	木器	不明	11.4	1.2	0.9	
	W57	98	86	II区	B-16	大溝	木器	不明	25.2	1.7	1.0	上端部抉り
27	W58	105	86	II区	B-16	大溝	木器	不明	25.3	2.3	0.9	切り込み部にコゲあり
	W59	63	86	II区	B-16	大溝	木器	部材	(25.1)	0.7	2.7	
	W60	75	86	II区	B-16	大溝	木器	不明	(19.4)	6.3	3.2	
	W61	102	86	II区	B-15	大溝	木器	不明	12.4	3.5	1.2	
	W62	103	86	II区	B-16	大溝	木器	不明	(23.9)	(3.0)	0.7	
	W63	104	86	II区	B-16	大溝	木器	板材	12.6	2.6	0.5	

第2表 石製品・木製品観察表2

番号	報告番号	実測番号	年次	調査区	グリッド	出土遺構	種別	器種	最大長 (口径)	最大幅 (底径)	最大厚 (器高)	備考
27	W64	68	86	II 区		大溝	木器	部材	34.1	3.4	3.0	
	W65	76	86	II 区	B-16	大溝	木器	不明	(44.3)	(3.4)	1.0	
	W66	30	86	II 区	B-16	大溝	木器	不明	35.2	3.4	1.4	
	W67	65	86	II 区	B-16	大溝	木器	部材	33.3	3.3	3.2	
	W68	31	86	II 区	B-16	大溝	木器	不明	27.3	4.3	0.4	孔あり(人為的なものか不明)
	W69	29	86	II 区	B-16	大溝	木器	杭か	26.2	2.6	(1.1)	
28	W70	70	86	II 区		大溝	木器	火耕臼か	(55.0)	2.1	1.7	
	W71	86	86	II 区	BC-15-16	大溝中	木器	不明	(53.4)	4.2	1.0	
	W72	32	86	II 区	BC-15-16	大溝中	木器	不明	46.0	2.7	1.3	
	W73	71	86	II 区		大溝	木器	火耕臼	48.9	2.6	2.5	
	W74	72	86	II 区		大溝	木器	火耕臼	38.0	3.3	2.3	
	W75	66	86	II 区	B-16	大溝中	木器	火耕臼	26.3	2.1	2.6	
	W76	62	86	II 区		大溝	木器	木鍤か	14.5	7.3	4.3	
	W77	14	86	II 区	C-15	大溝トレンチ中	木器	曲物側板か		9.1	(3.0)	
29	W78	40	86	II 区	B-16	大溝	木器	曲物側板			4.9	
	W79	50	86	II 区	BC-15	断ち割り	木器	曲物底板	14.6	11.9	0.8	推定径14.6
30	W80	43	86	II 区	BC15-16		木器	曲物底板	16.2	7.4	0.9	推定径16.4
	W81	17	86	II 区	B-C	アゼ(中央)崩落	木器	曲物	16.5	15.7	(3.2)	底板厚: 0.8 薄板厚: 0.3 棒皮幅: 0.3~0.4 木釘径: 0.3 ケビキ幅: 0.3~0.4 底板に孔あり(人為的な孔か不明確)
	W82	42	86	II 区	B-16		木器	曲物底板	15.6	8.9	0.9	推定径15.6
	W83	56	86	II 区	BC-15-16		木器	曲物底板	16.4	5.6	0.7	推定径16.6 痕痕あり
	W84	78	86	II 区	C-15		木器	丸棒材	37.5	1.6	1.2	下端部コゲなし
	W85	36	86	II 区	BC-15-16		木器	杭か	56.5	4.5	3.6	
30	W86	79	86	III 区		大溝	木器	丸棒材	27.8	0.9	1.3	孔あり 下端部コゲあり
	W87	95	86	III 区		大溝	木器	板材	(26.8)	1.8	0.7	
	W88	84	86	III 区		大溝	木器	不明	30.4	4.3	1.0	
	W89	61	86			不明	木器	不明	12.7		2.4	中心に孔あり(内径: 1.0cm)
	W90	54	86			不明	木器	曲物底板	15.1	5.7		推定径16.0
	W91	55	86			不明	木器	は蓋	11.2	4.1	1.1	(推定径11.2) 釘穴見えず
	W92	16	86			不明	木器	曲物側板	16.3		6.9	釘穴径0.3
	W93	44	86			不明	木器	曲物底板か	28.2	(14.0)	0.9	
	W94	41	86			不明	木器	不明	29.4	5.6	1.2	

法量の単位はcm

第4節 小結

本遺跡は犀川河口域の低地帯に立地する。古代建物群は、大溝（市教委調査区SD21）を中心に東西に広がり、東西約200m、南北約240mの範囲で建物が確認されている。古代の湊（津）に関連する性格が考えられる遺跡である。

本年度の調査区では、II・III区の両大溝に挟まれた幅15~20mの狭隘な島状地形において、8~9世紀（9世紀が主体）と推定される遺構を検出している。1号掘立柱建物は総柱となり、倉庫として機能していた可能性が高い。大溝を通して舟で物資を運搬し、倉庫に貯蔵していたものと推定される。また、III区大溝の西側では歓溝も検出され、本建物群への食糧等を供給する生産域であったと考えられる。両大溝からは、8世紀後半~9世紀後半を中心とする古代の遺物が出土した。これまでの本遺跡での調査では8世紀前半の遺物が多く出土しているが、今回の調査では概期の遺物は少ない。墨書き土器が字句不明を含めて17点含まれている。9世紀代の「吉成」など既調査区と共通する字句が認められる。また、転用硯が一定量確認できた。出土した杯類の内底面は摩耗しているものが目立ち、使用回数の多いことが推定される。

木製品では、W38・39は、四ツ手綱の部材と推定され、当時の漁法を復元する上で、重要な資料となる。

多くの遺物を包含する両大溝は調査区外にもさらにのびており、古代の建物群もさらに調査区外に

展開しているものと推定される。なお、昭和63年度調査区の第1号溝東側は低湿地帯となり、これより東側の昭和55年度調査区では古代の遺物がほとんど確認されていない。昭和63年度調査区は本遺跡の古代建物群の東端であると推定される（第2図）。

また、本年度の調査では、中近世陶器も出土している。該期に属する明確な建物は検出されていないが、本年度調査区の周辺に、中近世の集落城が存在している可能性がある。

引用・参考文献

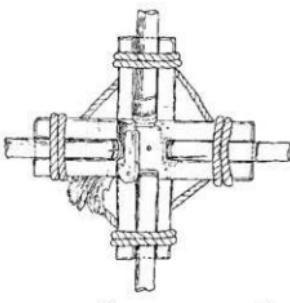
- 神野善治 1983 「四ツ手網考」『物質文化』物質文化研究会
 小西昌志⁽¹⁾ 1996 「金石本町遺跡Ⅰ」金沢市教育委員会
 小西昌志 1996 「金石本町遺跡Ⅱ」金沢市教育委員会
 久保有希子・小西昌志 1996 「金石本町遺跡Ⅲ」金沢市教育委員会
 向坂誠二・川江秀孝⁽²⁾ 1978 「伊場遺跡 遺物編Ⅰ」浜松市教育委員会
 鎌田重徳 1997 「金石本町遺跡」石川県立埋蔵文化財センター
 立石栄穂・吉田豊 1987 「B網具（2）」「漁具の考古学」砺市博物館 43、142頁
 田辺悟 2002 「網」ものと人間の文化史106 法政大学出版局
 中嶋郁夫 1981 「遺物」「御殿、二之宮遺跡発掘調査報告」静岡県磐田市教育委員会 57~58頁
 中島俊一 1987 「金石本町遺跡」「拓影 石川県立埋蔵文化財センター所報」第23号 石川県立埋蔵文化財センター
 奈良国立文化財研究所 1993 「漁撈具」「木器集成図録 近畿原始篇」123~128頁
 奈良国立文化財研究所 1985 「祭祀具」「木器集成図録 近畿古代篇」70~71頁

*古代造構・遺物の時期は、田嶋郁夫の示した古代土器編年軸（北陸古代土器研究会・石川考古学研究会「シンボジウム北陸の古代土器研究の現状と課題」1988）に基づき記載した。なお、実年代については、（財）石川県埋蔵文化財センター・石川県教育委員会が2006年に発刊した「金沢市歴田東遺跡群Ⅳ」例言（北陸古代土器研究会「シンボジウム 古代の須恵器貯蔵具Ⅱ－貯蔵具の制作技術を復元する－」2000年を参考）に概ね準拠した。以下のとおりになる。

- I期（I₁・I₂）：7世紀初頭～中頃 II期（II₁～II₂）：7世紀後半～8世紀初頭 III期：8世紀第2四半期頃
 IV期（IV₁・IV₂古・IV₂新）：8世紀中頃～9世紀初頭 V期（V₁・V₂）：9世紀前半～9世紀第3四半期頃
 VI期（VI₁～VI₂）：9世紀後葉～10世紀中葉前後 VII期（VII₁・VII₂古・VII₂新）：10世紀後葉～11世紀中葉前後



第31図 輛訪湖の小型四ツ手網



第32図 輹訪湖の小型四ツ手網部品

※第31、32図は神野論文「四ツ手網考」（1983）から転載したもの

第5章 昭和63年度調査

第1節 調査の概要

金石本町遺跡の分布範囲は、これまでに実施されてきた9次におよぶ発掘調査によって広い範囲に拡がることが知られている。また、北側地区が金石東遺跡として弥生時代後期の別遺跡と理解されていたように、地点ごとに時期が異なる事も知られていた。犀川に流れ込む木曳川の旧の流路が地形的な境とし、地形図での段丘のラインが南方を画すると判断して大過ないであろう。対する北側では都市化が進んでいる為に表面観察だけで分布境界を認定するのは困難であり、東・西端についても判然としていないのが実態である。多数の掘立柱建物跡の検出を基として、遺跡の性格に触れる提起もされているが、遺跡の範囲そのものは定まってはいない。本次調査は、金石東遺跡としていた発掘地区に最も近い調査区であり、第2次調査区までの間に遺構の空白域があるとの分布調査成果を裏付けるもので、金石本町遺跡の内容を見ていく上で一つの手がかりとなるものである。

調査区は臨港線地内で、金石本町地内と金石東地内の二地点に分かれている。金石本町側の南地点は、道路予定地幅14mに延長約44mの長方形となる区画で、面積では約630m²となる。

南調査区は以前宅地であり、厚い盛土が水田耕作土の直上に施されていた。盛土は約80cmの厚さの山砂で、旧耕作土などを含めて遺構検出面までは重機掘削で掘り進め、耕土の一部は現場から搬出した。遺物包含層を含んだ層序は極めて単純で、安定した水平堆積土の形で調査区全体に広がり、河道などによる分断、擾乱などは認められなかった。盛土層の下には耕作土と推測できる青灰色粘質土が約20cmの厚さで広がるのが見られ、その下には床土と見られる灰褐色粘質土が約15cmの厚みをもって、古代の遺物を含んだ包含層を覆っていた。包含層は約10cmの層厚となる淡黒褐色粘質土で、取り除いたところが古代の遺構検出面である。地山としたのは黄褐色シルト質土層で、掘り下げた調査区内で雨水や湧水で満水した場合には浸透速度が遅い事もあって遺構検出面が極めて軟弱となる。その為に排水後に遺構を再確認する時には検出面を幾分かは削り込むような状態となった。遺構面の標高は約1.5mであるが、初めの検出の状態からは、幾分かは下がった数値となっている。

調査区画は調査範囲平面形に適応しやすい任意の座標軸を設定し、4mグリッドとした。残念ながら隣接する第Ⅱ・Ⅲ調査区での調査区画とは無関係である。北東から南西方向にアラビア数字、北西から南東方向にアルファベットを割りあて、北西隅交点でグリッド名とした。

遺構は調査区全体に展開しているが、掘立柱建物群は南西側の木曳川へと拡がる様相が窺える状態で、旧の金石東遺跡に向かう北東端部は溝および低地が南北方向に走行する形で伸びていくものの、掘立柱建物などの遺構展開は薄くなるように推測された。遺物の出土状況においても遺構の配置に関係する状態で濃淡があるようだが、判然とはしない。

検出した遺構は掘立柱建物跡5棟、2列の柱列、3条の溝で、幾つかの柱穴には柱根および礎盤が遺存しているものが認められた。掘立柱建物跡は調査区が限定されている為に、建物規模を確認できたのは2間×2間の縦柱建物の1棟だけということになる。他の建物跡は調査区域外への展開が想定される。

検出した遺構群は、概ね南北方向に長軸を、棟方向を意識していたと想定され、建物の用途、性格に關係していたものと考えられる。遺物は奈良時代末葉から平安時代にかけての資料が大部分で、限られた時期での展開と推測でき、建物跡での重複が少ない状況を反映しているのであろう。

南地区での調査が終盤を迎えた段階で、北地区（旧金石東遺跡）の重機掘削を開始した。

調査経過

発掘調査は1988（昭和63）年の10月20日から同年12月5日（本報告分は10月20日～11月22日）までの間、延べ25日間の現地作業を実施した。参加作業員は延べ260人である。

現地調査終了後の遺物整理は、南地区（旧の金石本町遺跡：本報告分）が1993（平成5）年に、石川県文化財保存協会に委託して実施した。

調査日誌（抄録）

南地区（本報告分）

10月20・21日（木・金曜、晴れ・雨）金沢土木事務所と現地協議、重機による盛土搬出

10月24・25日（月・火曜、曇り、晴れ）重機による盛土掘削と搬出

10月27・28日（木・金曜、晴れ）現場事務所へ発掘器材の搬入

11月1日（火曜、晴れ）作業員の参加、排水溝の設置

11月4日（金曜、晴れ）排水溝の設置、ベルトコンベアの配置

11月8・9日（火・水曜、晴れ）調査グリッドの設定、遺物包含層の掘り下げ、遺構検出

11月14～17日（月～木曜、曇り）排水作業、遺構検出作業

11月18・19日（金・土曜、曇り）南西地区の遺構検出、柱穴群の掘り下げ

11月21・22日（月・火曜、曇り・晴れ）遺構検出、柱穴掘り下げ、写真撮影、実測作業

北地区

11月25日（金曜、雨）北調査区（旧の金石東遺跡）の盛土搬出

11月28・29日（月・火曜、曇り）表土除去作業、包含層の掘り下げ、遺構検出作業

11月30日（水曜、曇り時々雨）遺構検出作業、全景写真撮影、実測作業

12月1・2日（木・金曜、曇り）実測作業、遺物取り上げ

12月5日（月曜、雨）発掘器材の搬出、現地作業は本日にて終了。

発掘担当者 平田天秋（調査専門員）、西野秀和（主査）、岡本恭一（主事）

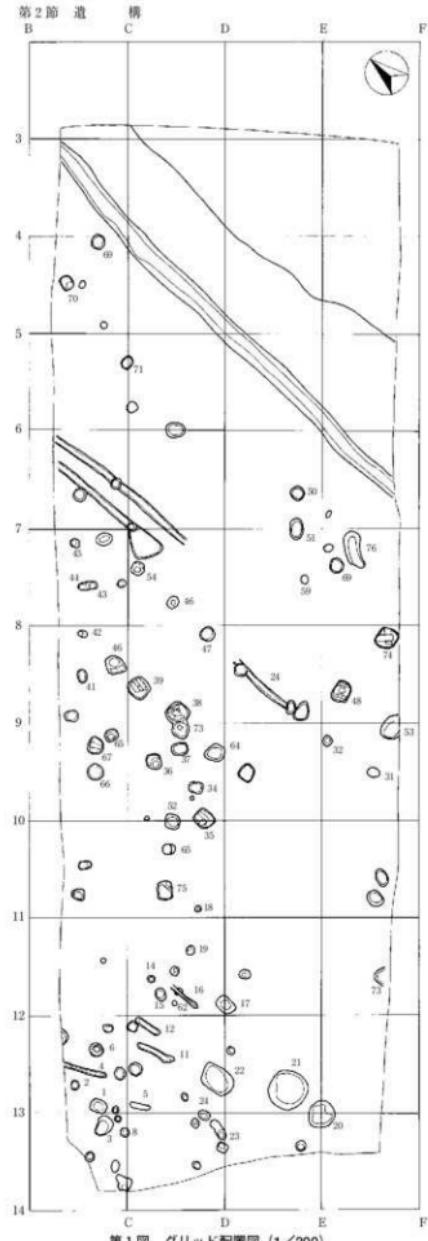
現地作業員 最里健太郎、宮田ハル、西川愛子、西村みどり、坂井澄江、高崎春子、竹山くみ子、高柳美代子、西 年男、市村耕治、長田一雄、渡辺栄吉、小島清高、北村清二、藤森重信、来間清市、坂田進午、中西義男、寺西栄松、山本外男、中橋幸雄、大町政弘、口田登喜雄、上村外志雄、林 実、池田 勝、夷藤一郎、中田義男、西 広三、木下外茂勝、炭 博子、坂井かづ子、村上義男、蓮田貞子、川端美智子、三谷正子、宮崎雅人、村上勝次

遺物整理 辻森由美子、黒田和子、戸調かがり、馬場正子（石川県埋蔵文化財保存協会）

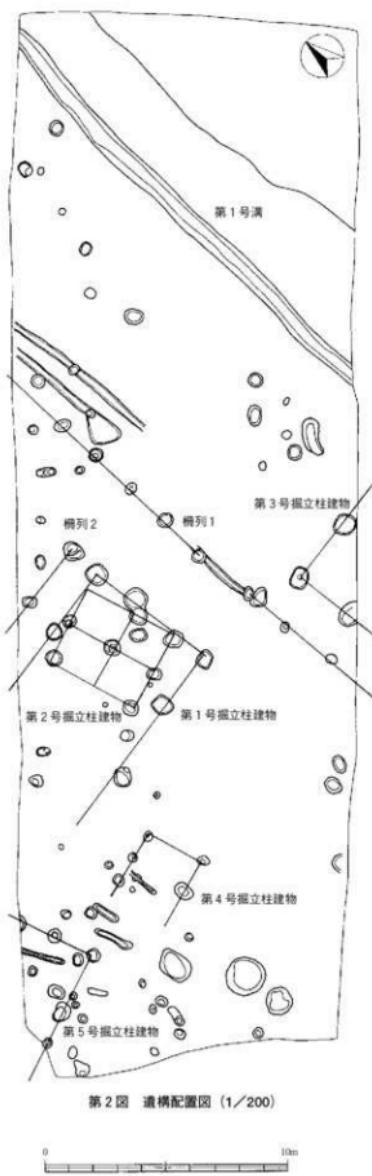
林 茂久、小村佑子、戌亥久美子（嘱託調査員）

（所属などは、作業当時のもの）

第2節 遺構



第1図 グリッド配置図 (1/200)



第2図 遺構配置図 (1/200)

第2節 遺構

1. 挖立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡（第3図、図版55）

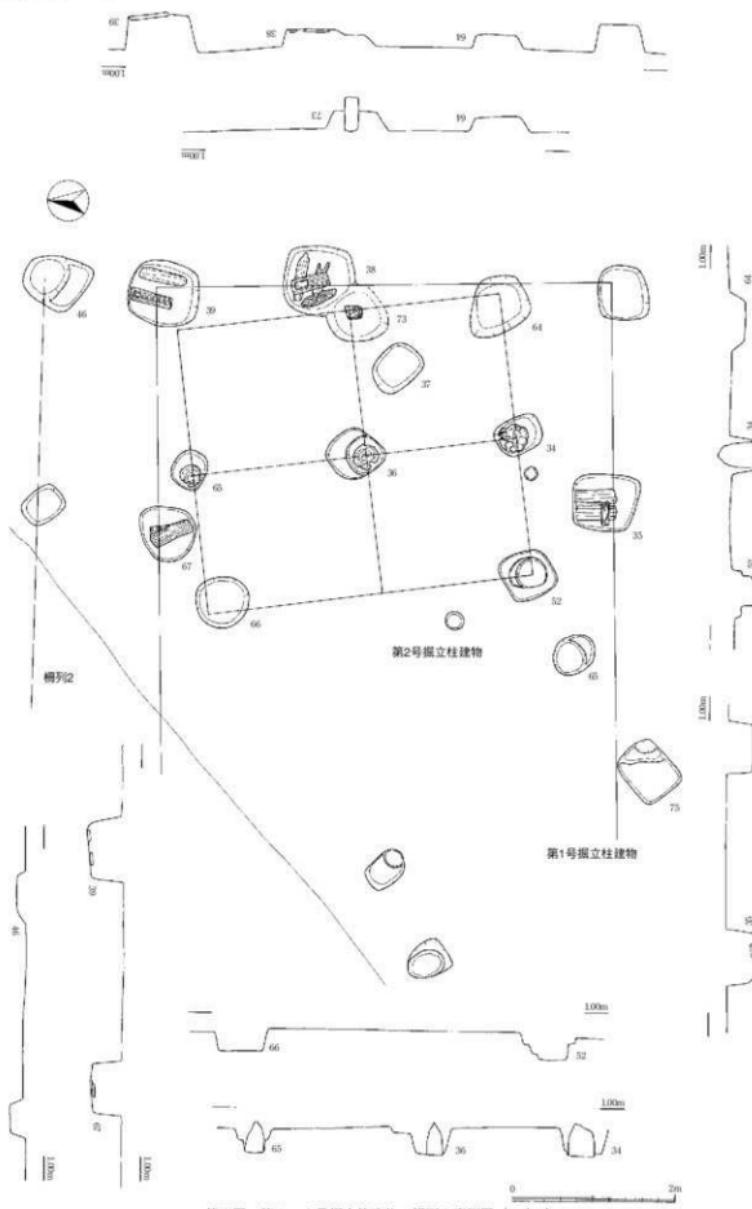
調査区の中央部、B8・9、C8～10、D9グリッドで検出したもので、横列とした横列2が北側に接し、横列1が東側に位置している。本建物跡内部に包括される形で、総柱建物と推定した第2号掘立柱建物跡が位置している。重なる建物跡は微妙に軸線がずれないと判断できる。柱穴での切り合い、重複関係が2箇所で見られるものの、設置の前後関係は不明である。しかし、柱穴内に遺存している礎板や柱根の在り方から、礎板がなく柱根が遺存していた第2号掘立柱建物跡が、柱根がなく礎板だけとなっていた第1号掘立柱建物跡と比較して新しく設置された可能性が高いと推定される。一方で片付けがあり、他方では片付けが行われなかつたとの視点である。

全ての柱穴が把握できていないので建物規模は不明で、また、建物跡に捉え切れない柱穴が見られるところから重複している建物も第2号掘立柱建物跡だけではない可能性も考えられる。東西方向とした桁行では2間として長さ600cm（270+330cm）とするが、北側では1間が310cmであり、余り統一が取れていない状況である。さらに、梁間方向では長さ560cm（200+360cm）であるものの、第2号掘立柱建物跡と複合するP64を含めるならば、柱間は統一のとれないものとなる。本建物跡を構成する柱穴の間隔が揃わないのが、残された長方形を基本形とする礎板の状態から一つの建物を構成していた柱穴であるとの性格付けは動かないであろう。軸線からはずれ、掘り方自体も傾いているP75の在り方も除外するまでは至らないように思われる。柱穴の掘り方においても、P67を除いて隅円方形プランを呈し、P39で見るならば長さ85cm、幅80cm、深さ30cmの規模となる。P67では平面形が方形からずれるような状況となる。柱穴が確認できなかった部分については、深さが検出した柱穴の30cmよりは浅かった為との理解で良いのかは、類例の検討を要するであろう。

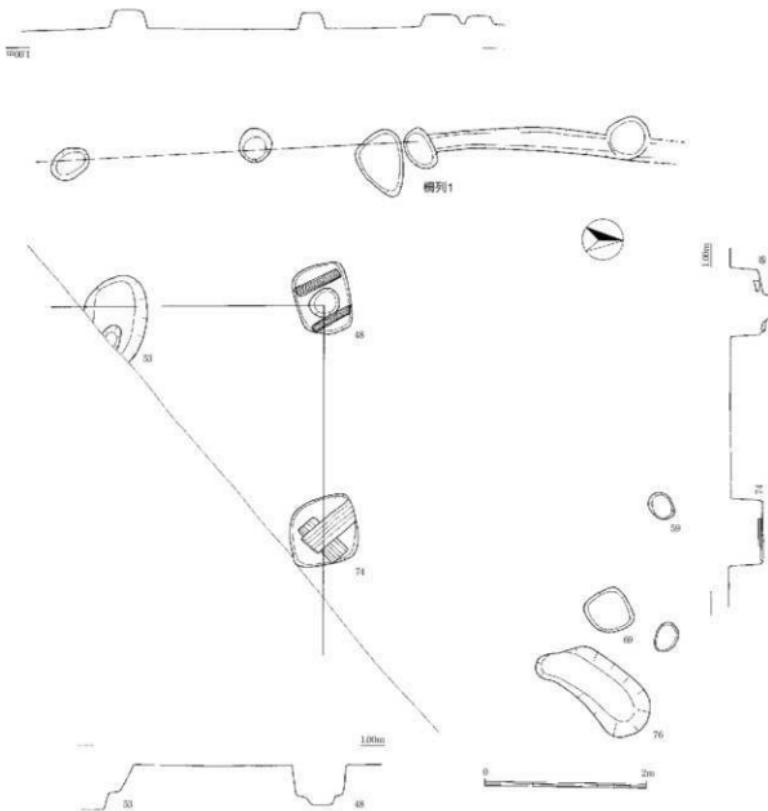
第2号掘立柱建物跡（第3図、図版55）

調査区の中央、北西側、B8・9、C9・10グリッドに位置している。既述したように、第1号掘立柱建物跡の内側に内接したような状態で、柱穴が配置されている。7個の柱穴が確認されただけであり、総柱建物跡の要件を満たしてはいないのであるが、柱穴内に遺存していた4本の柱根が角柱であり同じ規模であるところと、中央柱根が見られたことから総柱建物跡と性格付けた。総柱建物は通常的に正方形プランを呈するものだが、本例は長軸を南北方向に置いた平面長方形となる。桁行2間400cm（215+185cm）で、梁間2間350cm（170+180cm）となる。柱間の距離が揃わないのであるが、遺存している柱根で計測しているので、柱穴だけの事例よりは実態的であると評価できる。第1号掘立柱建物跡でも確認されたように、柱穴掘り方についても統一のとれない楕円形状をなしているのも特徴の一つともきよう。柱根の遺存していたP73は略方形プランの掘り方で、長さ、幅共に約70cm、深さ20cmの規模である。遺存していた柱根は礎板が敷かれていない為に地山に約15cm沈み込んだ状態で検出された。建築された何時の時点とは判断できないが、一般的には荷重のかかるたて上げの時点ではないかと思われるが、柱が沈んでも支障がなかったとの評価が取られるならば、建物の性格を検討する上で大きな手がかりではなかろうか。

第3号掘立柱建物跡（第4図、図版53）

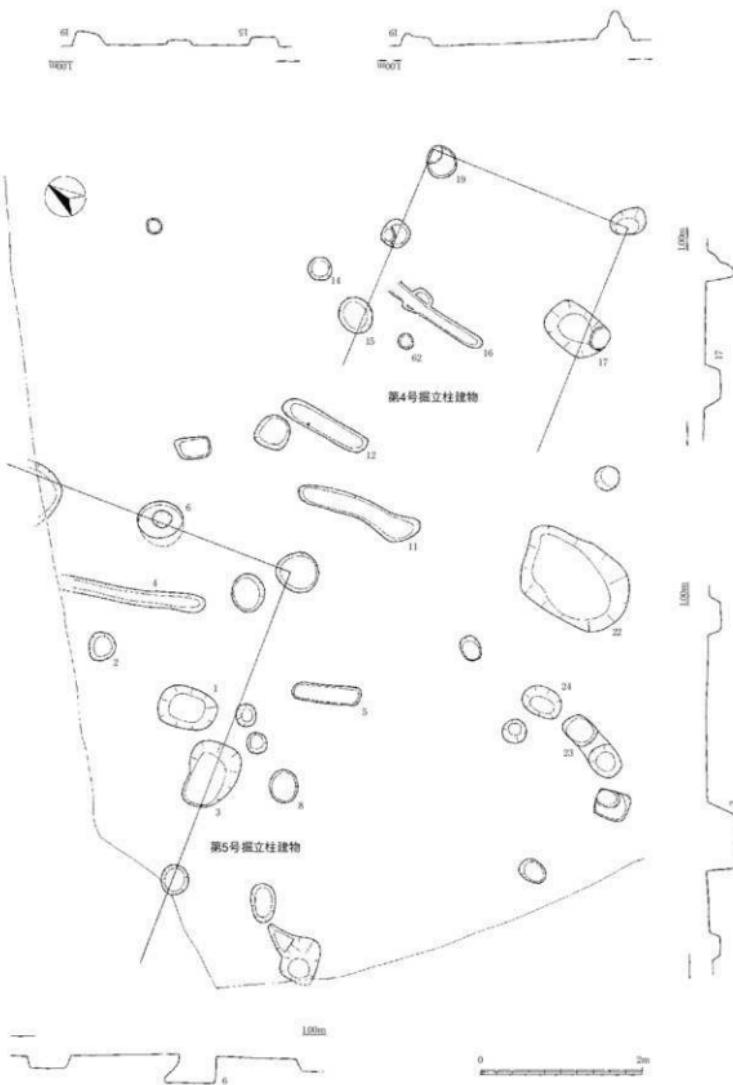


第3図 第1・2号据立柱建物、横列2実測図 (1/60)

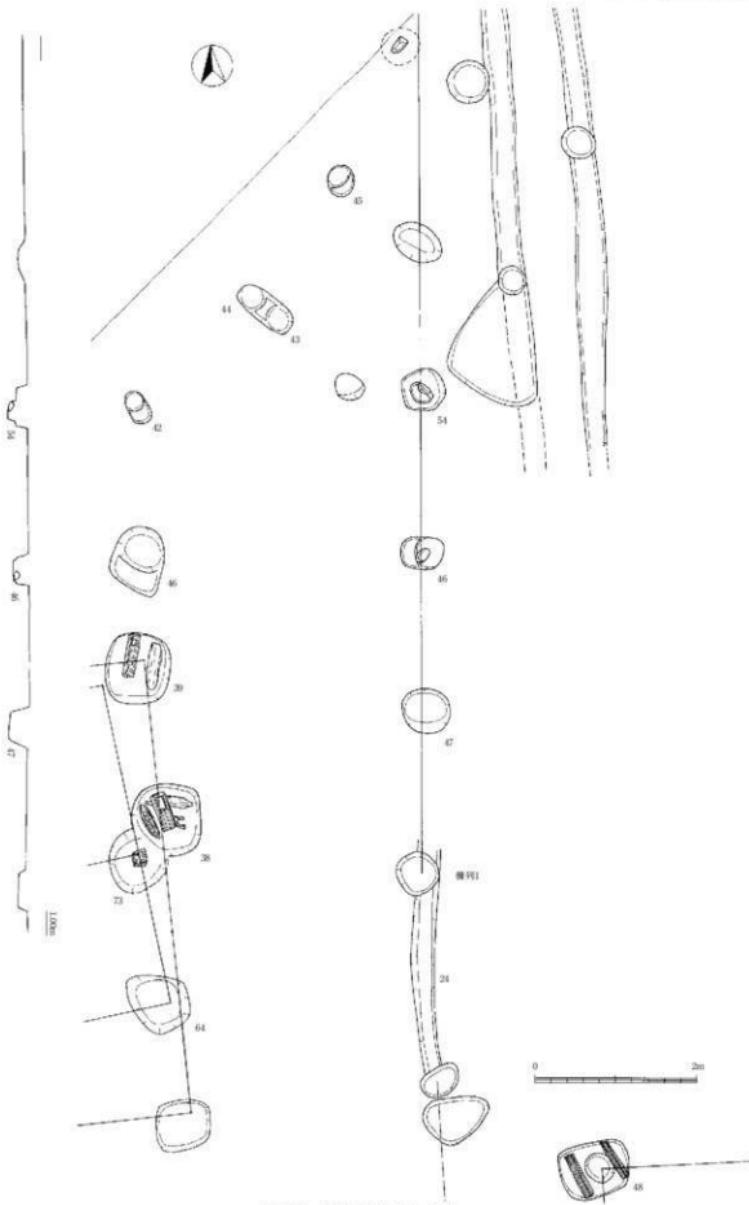


第4図 第3号掘立柱建物、構列1実測図(1/60)

調査区の中央、南東側、E8・9グリッドで検出した建物跡であるが、北西隅部の検出にとどまり大部分は調査区外に延びる形となる。南北方向に延びる構列1に隣接し、隅部の西方に第1・2号掘立柱建物跡が位置している。桁行方向はどちらを向くかは判断できないが、方向軸としては第1号掘立柱建物跡に類似していると見て良いであろう。検出できた3個の柱穴の内2例で礎板が施設されていた。柱穴の平面プランを見ると隅円方形から梢円形までの幅があり、幾つかの縞みが現れていると判断される。本調査区における傾向であろうか。P48は長さ88cm、幅67cm、深さ50cmを計測する。柱が建てられた部分が落ち込む状態となり、脇の礎板2枚が斜め位置となる。柱が礎板を押し沈めた状態と判断される。P74では礎板が交差した状態で遺存していたのを見ると、礎板の設置が異なる手法であるのが注意される。柱間を礎板あるいは底面が二段落ちとなる部分で計測すると、260cm、285cmと異なる値を示し、いずれが桁行とは決めがたいものである。



第5図 第4・5号掘立柱建物実測図 (1/60)



第4号掘立柱建物跡（第5図、図版54）

調査区の南部、C11、D11グリッドに位置するもので、1間×2間の規模が推定できる。西側に隣接して第5号掘立柱建物跡が配置され、北東方向約5mに第2号掘立柱建物跡が位置している。主軸方向での類似で見ると、建物規模、柱穴規模から第1・3号掘立柱建物跡とそれ以外と二分することができる。本例は後者のグループに入り、前者よりは後出的と見て良いであろう。柱穴平面形は個々で異なり、統一がとれていない。柱間で見ると、2間としたものは330cm(115+115cm)となるが、相対するところでは140cmと異なる値となる。1間とした柱間の距離は260cmであり、中間に1穴があったのかもしれない。本例の柱穴で底面が二段落ちとなるものが5例の内3例で見られ、第2号掘立柱建物跡のように、柱が礎板なしに底面に直接に建てられ沈み込んだ痕跡の可能性を考えられる。この仮定を生かすならば、建物群は方向軸、柱穴平面規模、礎板の有無、柱間統制の有無などを元に区分が可能と思われる。

第5号掘立柱建物跡（第5図、図版54）

調査区の南端部、B12・13、C12グリッドで検出したもので、周囲に多くのピットが配置されている。5個の柱穴で想定したが、大部分の柱穴は調査区外に展開しているものと想定される。東方向に隣接して第4号掘立柱建物跡が位置している。第4号掘立柱建物跡を含めて注意しなければならないのは、南東方向に隣接して長さが1m前後の土坑がまとまるように配置されていることである。いずれの土坑も深さも浅く、出土遺物においても特色は見出されないのであるが、隣接して集中している事からの性格を留意する必要を考えたい。本次調査では明確な内容は捉えきれないが、類似遺跡での在り方への一つの視点として残しておきたい。5個の柱穴の平面形は大方円形をなし、径約40~60cm、深さ約15~30cmの規模を測る。遺物の出土したP6では中央部に崖みがつき、柱根による沈み込みと推測される。

柵列1（第4、6図、図版53）

調査区の中央部、B6・7、C7・8、D8、E9グリッドで検出したもので、調査区を斜め方向に延びて東西に分ける形となる。西側約2mには第1号掘立柱建物跡が、東側約1mに第3号掘立柱建物跡が配置されている。軸線が平行している建物跡は第1号と第3号であるものの、いずれに付くものか、また、別の区画であるかは決め難い。

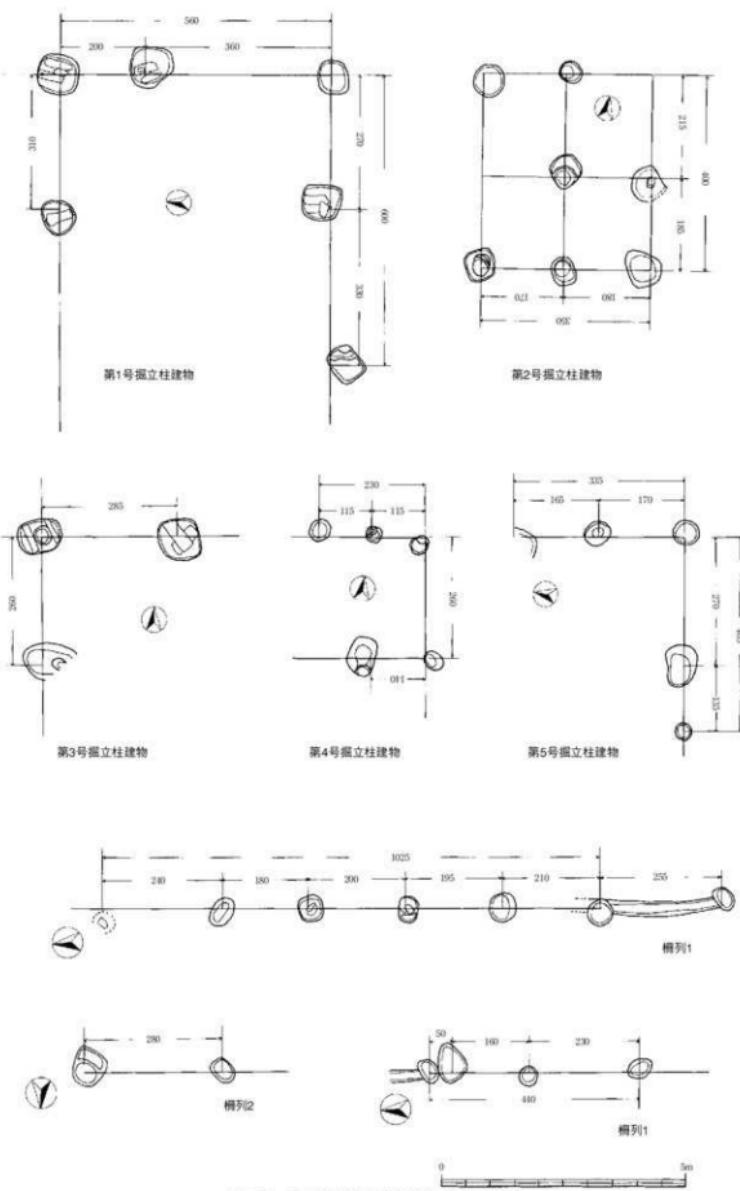
第1号掘立柱建物跡に近い位置で細い溝が柱間に見られるが、性格は不明である。この部分から北に延びる柱穴は、平面形が円形、楕円形、方形と多様である。また、柱間においても180・195・200・210・240cmと異同が激しい。溝のある南側においても同様のあり方を示す。径40~65cm、深さ10~25cmの規模を測り、幾つかの柱穴からは遺物が出土している。北端には掘り方を失って柱根だけが遺存しているものもあり、柱穴底面に小片となった柱根を残すものも見られる。

柵列2（第3図）

調査区の中央部、B8グリッドで検出した柱列である。南約50cmには第1号掘立柱建物跡が位置している。東西に延ばした配置で柵列としたが、調査区外に延びる掘立柱建物跡の柱列としても良いのであるが、建物跡に極めて近い位置であることから柵列とした。一つの柱穴は二段掘りとなる方形プランで、長さ70~80cm、深さ10cm、柱間は280cmを測る。柱根、礎板の遺存は見られなかった。

土坑群

調査区の端部、南西部のC12、D12・13、E12・13グリッドで検出した土坑群である。調査区の北側では確認されていないから、制約が加えられているか、設営地区が特別な地点であったか、あるいは、別の要素によるものは不明であるが、2基が接近し、1基が微妙な距離を置いている点での在り方は留意しなければならない。P20は径110cm、深さ3cmの浅いもので、断面形では底面がはっきりとしない。P21までの距離は40cmである。P21は平面円形で、径165cm、深さ7cmを測る。底面は均一ではなく、北東側が深くなる形状を呈する。次のP22までの距離は145cmである。P22は平面長方形とも捉えられるもので、長さ140cm、幅100cm、深さ11cmの規模を測る。底面は東辺側が若干ながら下がる形状となっている。これら3基の土坑のいずれからも土器の出土が見られる。しかし、深い事もあって、所在している以上の手がかりは得られなかった。



第7図 掘立柱建物等の規模計測 (1/100)

第3節 遺 物

1. 遺構内出土土器（第8～10図）

包含層からは小片となった土器片が相当量得られ（整理箱で20箱）、さらに各遺構からも量的な差はあるものの多くの遺物が見られた。量的には第1号溝からのものが目立つ。また、ピットおよび柱穴の大多数からも土器片は出土しているが、掘立柱建物跡や横列跡の構成を関連づける資料としては捉えきれなかった。本調査での特色として柱穴底に敷かれた礎板の在り方などとの関連に注意しなければと思われる。

1はP39から出土した杯で、第1号掘立柱建物跡に関連するものと思われる。内面は灰褐色を呈し、口縁部に重ね焼きの痕跡が認められる。底面の下半近くにまで黒色の色素が付着し、墨書き土器の可能性も考えられる。同ピットからは薄手に成形された杯類があり、瓶・壺の破片、土師器片なども含まれていた。

2は第2号掘立柱建物跡につくP66から出土した土師器小型壺の底部片で、平底となっている。表面とともに風化が進み調整痕は確認できない。

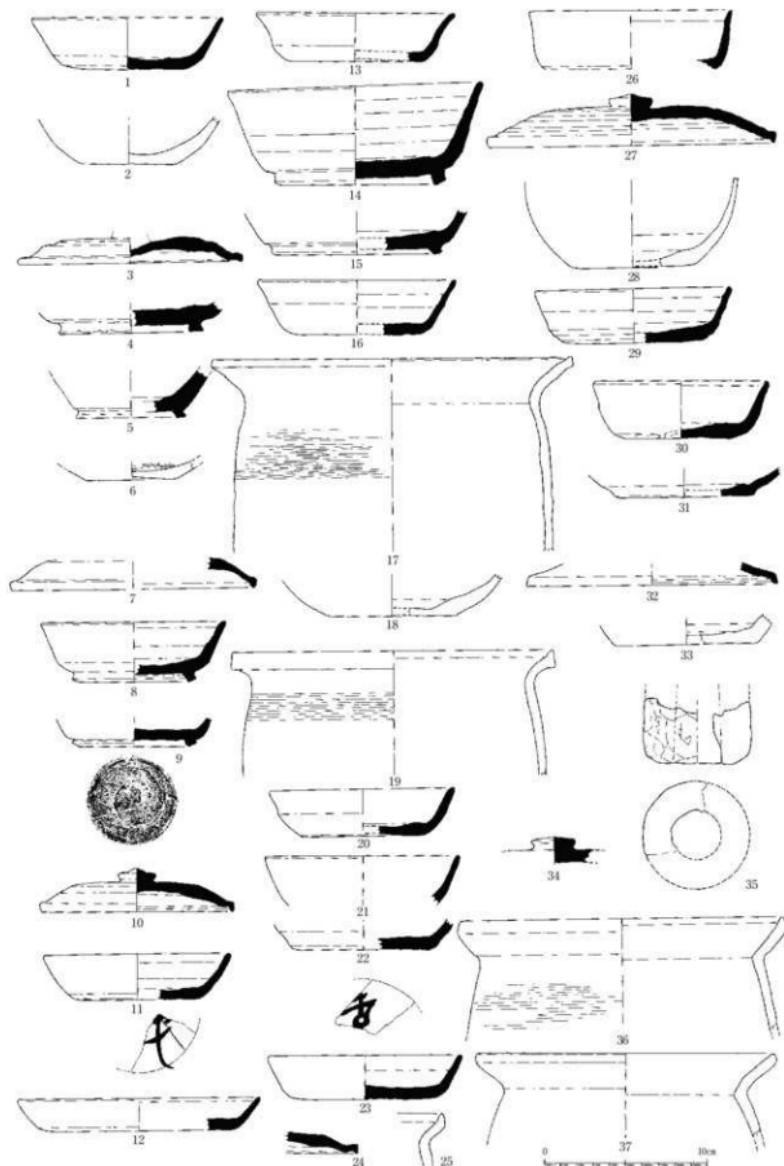
3～6は第3号掘立柱建物跡を構成するP48・53・74から出土した。3は宝珠が剥離した状態となる小型の蓋で、焼き歪んでいるもの。4は高台を貼り付けた状態が見える。内底面に厚く煤が付着しているが、割れ口にも見られる事から破損した後に火熱を受けたものである。5は小型壺の底部片で、体部は厚く、高台は比較的に小振りに成形されている。6は内黒土器であるが、外周は風化の為に調整痕を見る事ができない。赤彩が施されていたであろう。

7は第4号掘立柱建物跡を構成するP17から出土した蓋の断片で、内面は暗茶褐色を呈している事から体部と組み合わされて焼成されたと推測できる。

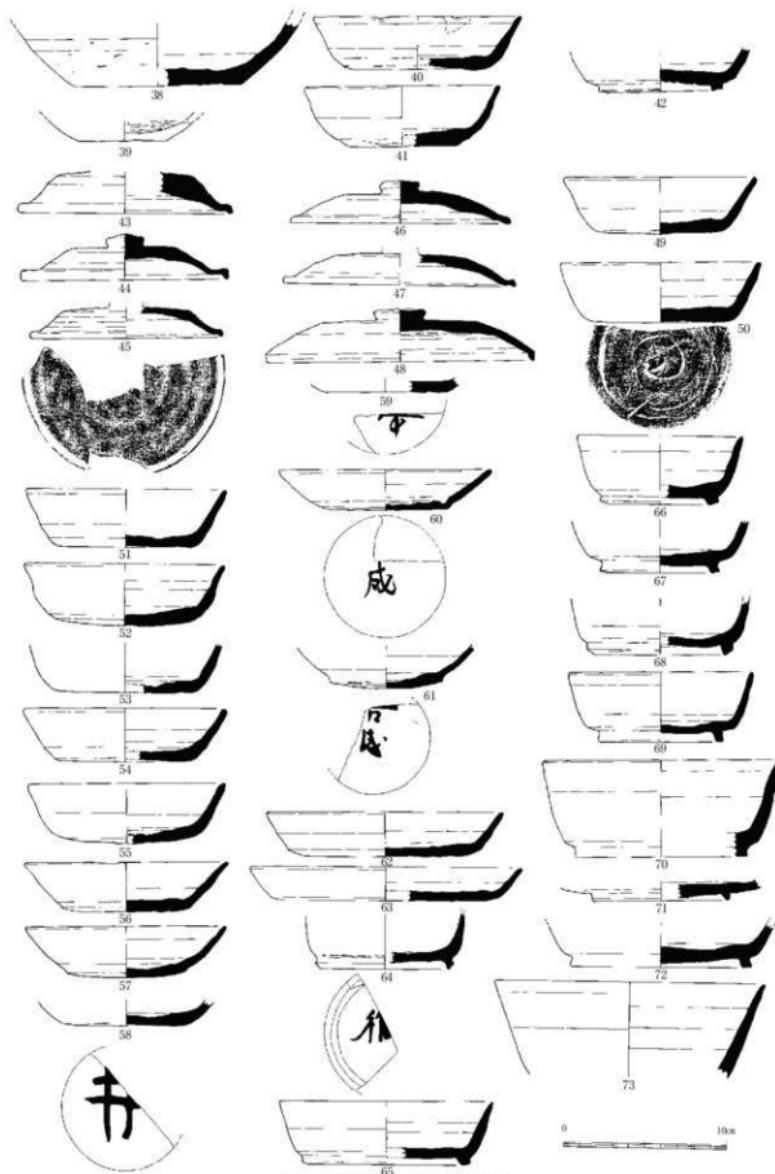
8～10は第5号掘立柱建物跡の柱穴としてP6から出土した。8は体部が外に開き、内面に凹凸が顕著に残る成形である。9は外底面に一本線のヘラ記号があるもので、内面に煤の付着が一部に認められ、灯芯油痕のような状態である。

11・12は横列1のP32、P46から出土した小片で、前者の杯には外底面にヘラ記号と墨書きが認められる。12は小型の盤で、重ね焼きの痕跡が残る。

13～42は建物跡、横列跡に想定できなかったピットから出土した資料である。13・14はP1から出土した。13は口縁部端部が外反するような特異な成形を施している。軟質となった焼成で、内外周ともに平滑な状態と認められ、使い込まれたものかと想定される。14は大部分が遺存している大型の有台杯である。15は底部が厚手に作られている。17・18はP5から出土したもの。全体に風化の為に細部の調整痕を見る事ができない。18は稜線がはっきりした成形で、断面を含めて二次的な火熱を受けた状況が観察される。17とは胎土に含まれる砂粒の径と含まれる量が異なるところから、同一の個体ではないようだ。19は頭部に煤が付着し、カキ目調整痕がきれいに残されている。20・21はP10から出土した杯の小片である。22の墨書きは判読できなかった。23～25は調査区南東隅のP20から出土したもので、他には須恵器・土師器壺体部片などがある。26～28はP22から出土したもので、28は器表に煤の付着が顕著である。29・30はP23からのもので、30では底面と体部の境で、ヘラ削り調整が半周程度の範囲で行われている。極めて類例の少ないもののように思われる。31は小片であるが、体部が大きく反る成形がなされるもので、本遺跡でも少数例である。後出するものであろう。伴出したものは土師器小型壺の底部・体部片である。32の器表の灰釉が高温で剥落しているのが見られ、内面でも



第8図 遺構内出土遺物(1) (1/3)



第9図 遺構内出土遺物(2) (1/3)

ざらついた状態となっている。多くの須恵器とは生産地が異なることが想定される。34～36はP49から出土したもので、34の内面に墨書か煤の付着か判然としない炭化物が見られる。35は輪の羽口で、径6.6cm、内径3cmを測る。断面での色調は明茶褐色が入った状態から火熱を受けているものと判断できるが、端部であるにもかかわらずスラグの付着が見られないから炉内には直接的に接しない部分かと思われる。胎土は微砂粒を若干含む精選されたものと思われる。36・37の長甕は風化のために調整痕は判然とはしない。

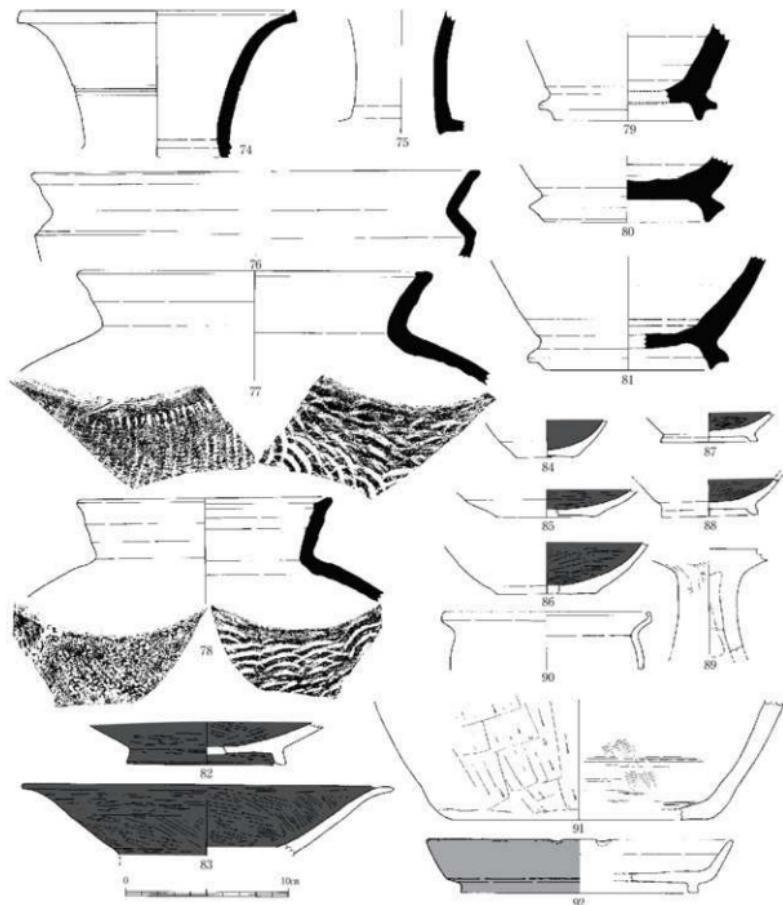
38は鉄鉢の底部片で、外周にヘラ削りによる砂粒の移動が認められる。39は内黒土器で磨きによる光沢を保っているが、外面は風化が激しく調整痕は確認できない。40の口縁内面は凹凸のある成形で、外面に重ね焼きの痕跡が見られ、内面には灯芯油痕が明瞭に残る。

43～92は第1号溝跡（幅約80cm、深さ20～30cm程度）から得られた土器群である。43はきわめて厚手に成形された蓋で、口縁端部のみに自然釉が掛かっている事から有台杯と重ねて焼成された事が窺える。44は前者に比較して薄手に作られたもので、肩部だけに強いナデが入れられている。45も薄手の成形で、内面にヘラ記号が見られる。記号の端部が残るのみで、間隔の空いた二本線かと思われる。46・47は重ね焼きの状況が見え、全体が磨耗か風化かの判別は難しいが器表が平滑となっていることからは磨耗かと推測される。48は大型の蓋で、外周は風化の為かざらついた状態であるが、一方の内面は中央部分が滑らかな状態となっている。中心から外れていくと平滑な度合いが薄れていく事から、転用硯として使われたものと推測される。しかし、墨色の付着は全く認められず、明るい灰色を呈している。

49～61は杯で、口縁部の外傾度や体部の厚みなどに差異が認められ、49・50が古く、57・60などが後出的な様相を示すものとして認識されている。50は外底部に一文字のヘラ記号が施されている。鋭利な工具によるものと思われる。51は内外面ともに墨状の付着が見られ、特に口縁部外側のものは墨書の後に墨によって塗り潰されたような状況にも考えられるが、確定はできない。53は十分な還元焼成に至らなかったもので、内外周ともに明茶褐色を呈している。成形の特徴として、体部から口縁部への立ち上がり部が強く押されて溝状となるのが認められる。同様の成形は56・60などでも指摘できる事である。対して、54は体部から口縁への移行が明瞭な線として表れない成形となるのが特色として捉えられようか。56は器壁は薄く、外傾度も大きくなるもので、明灰色から薄い茶色をなす生焼けの製品で、風化が進行している。57は底部と口縁の器壁の差が殆んどなくなるまでになったもので、外傾度の状態からも後出的と判断される。58は外底面に「井」と墨書されたもので、口縁部の立ち上がり具合から新しい時期の所産と思われる。59の墨書は小片である事もあって判読できなかった。60は内面での口縁の立ち上がり部が明確な凹線状となるだけでなく、外面でも強い押圧が見られるのが特徴である。外面中央部に「成」の墨書が認められる。61の口縁部の成形は、内外両面から強く拘み、内湾気味の口縁を作り上げるようだ。外周では底部が際立つ形となる。墨書は判然とは捉えられない。

62・63は盤で、少数例の出土である。62は内面で口縁の立ち上がりが明瞭な線となって表れている。口縁部外周は暗茶褐色を呈しているもので、重ね焼き焼成で最も下に位置したものと推測される。63は内外面ともに滑らかとなるもので、長く使用されたのであろうか。

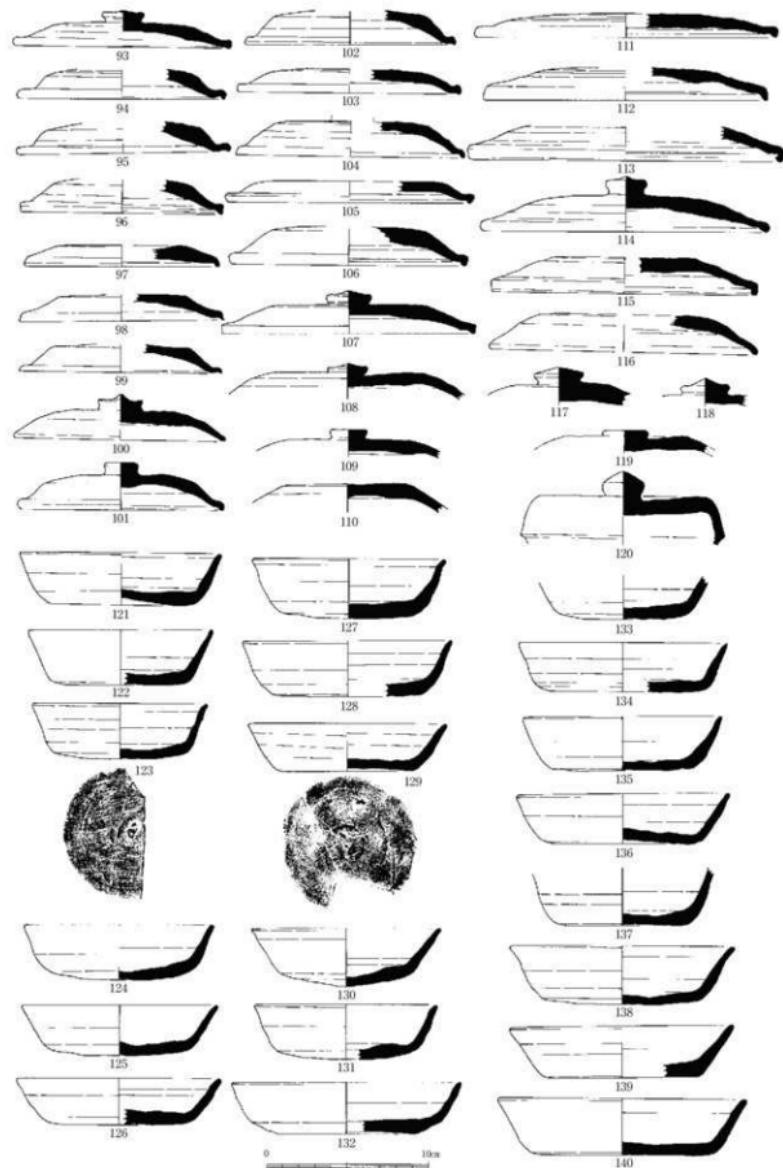
64～73は有台杯である。時期差は杯と同様に外傾度や体部の相対的な厚みなどによって捉えられている。例示したものは体部が箱状になる例の少ないもので、また、外傾度が著しいものも少ないようだ。64や68は端部が尖り気味に成形された高台となるもので、口縁部が直立気味に立ち上がるのが特徴的である。外底面の中央付近に墨書がなされている。判読はできない。65は体部から口縁部への移



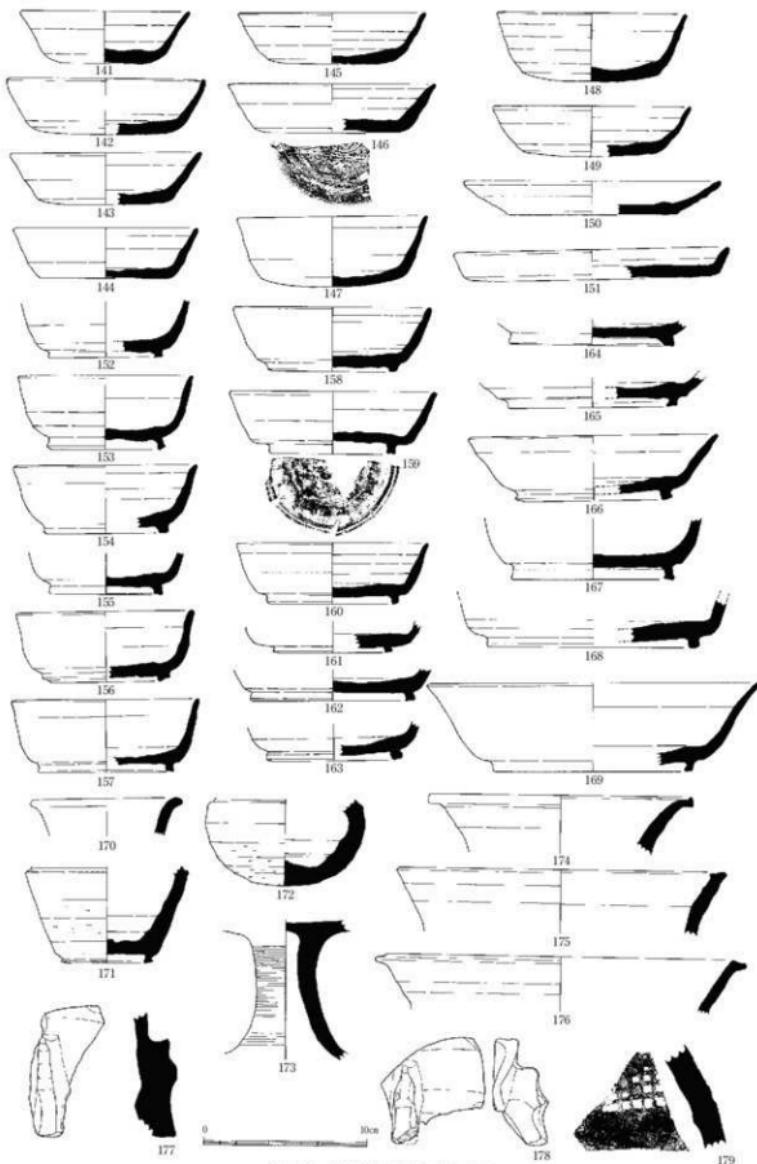
第10図 遺構内出土遺物(3) (1/3)

行が直角的で、一筋の線が引かれている。口縁部と内面が滑らかとなっていて、使用痕跡と想定される。66などは体部、口縁部とともに厚みのある成形で、相対的に古手に位置づけられる。69は細身で丈のある高台が取り付けられるのが特徴的である。71は細身の高台として図化したが、断面が略三角形状をなし、体部と口縁との境が捉えきれない事などから、蓋型土器の可能性も考えられる。70・72・73は大型の有台杯で、72は高台の成形が69と類似しているようだ。内底面は平滑な状態となってゐる。

74・75、79～81は長頭瓶、瓶である。74では内面に濃緑色の灰釉が厚く掛かっている。瓶の底部で見ると、高台の成形に微妙な差異が見られる。79は押圧によって端部が突出する状態となる。80では



第11図 包含層出土遺物(1) (1/3)



第12図 包含層出土遺物(2) (1/3)

高台底が平らな形で成形される。81は高台の内側への調整から尖り気味になる。底部内面に灰釉が掛かり、一部に焼き跡が生じている。

76は短頸壺で、小片の為に口径は不確かである。出土例は限定される。

77・78は甕で、口唇部での成形が大きく異なっている。後者の頸部には濃緑色の灰釉が掛かっている。

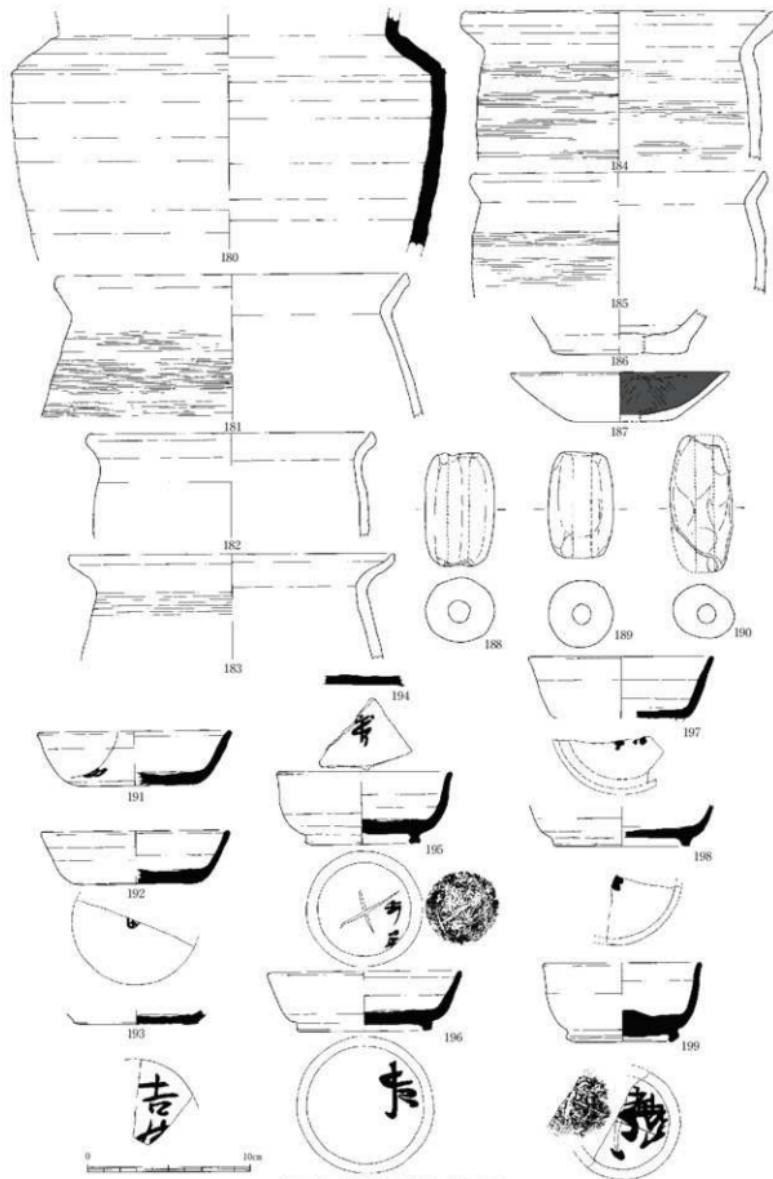
82~91は土師器である。82・83は別個体として図化したが、同一個体と推測される大型の高台皿である。内外面共に丁寧なハラ磨き調整が施され、全体は黒色に彩色されている。胎土の色調は濃灰色をなし、胎土は精選されている。84~86は内黒杯であると認められるが、外周は風化の為に調整や彩色の具合は不明である。87・88も遺存状態は良くない。高台の作りが尖り気味になるものと、狭い平坦面が成形されるものとの違いが認められる。これら5点の杯類の胎土は精選されている。89は高杯の脚部で、外面に赤彩の痕跡が微かに認められる。胎土は精選されたもので、微砂粒の混和も確認できない。90の小型甕の口縁端部が巻き込むような成形で、時期的な特色を明確に示す。内外面共に風化の為に調整痕は観察できないが、胎土に含まれる微砂粒は均質であり、精選されたものである。91は大型甕で、外周は縱方向の削り調整がなされ、内面では横方向の撫で調整が施されている。内面に少量の炭化物の付着が見られる。92は土師質の高台盤で、外周に赤彩痕が見られるが、内面は風化の為に確認できない。

包含層出土土器（第11~13図）

第11図以下に図示した資料は、包含層から出土したものである。93~119は有台杯の蓋で、120は壺の蓋である。93の内面は平滑となり、墨の付着が見られ、転用硯と推定できる。94・95は天井部が厚く成形され、口縁が段を作つて延びる形となる。96・97も天井部は厚いが、延びる口縁部の成形が微妙に異なるのが認められる。98は重ね焼きの痕跡が見られ、天井部内面に顯著な磨耗痕跡が確認できるものの墨などの付着は認めがない。98・99の成形は、天井部と口縁部との厚みに差が小さくなる傾向が認められる。口縁部は狭い段を作り延びる形を保つている。99は生焼けの製品で、淡褐色を呈している。100は口縁端が屈曲しない成形で、摘み部の中央が尖る形状である。本遺跡での類例は少ない。器表面は他の須恵器とは異なる状態でざらつき、生産地の違いを想定させる。101は口縁の一部を欠いただけの完好品である。104は天井部に削り調整が施されている。108は大型品で、内面の中央部が平滑となっている。109は全体の約半分以下しか遺存していないもので、他の製品に比較して比重が重いように感じられる。胎土は微砂粒が若干混じる在り方で、焼成は堅緻な状態である。112は約4分の1の遺存であるが、器表の灰釉が剥けた状況となり荒れている。114は表裏共に滑らかな部分があり、使い込まれた状態となっている。

120は壺の蓋で、段を形成する口唇端部を欠損しているだけで全形が捉えられる。器表面には宝珠にまで厚く灰釉がかかり、濃緑色を呈している。

121~149は杯である。121は口縁の一部を欠いているだけの完形品である。底面から立ち上がる境に押圧が施されている。焼成はやや甘く、底部は焼き歪みが生じている。123は口縁と体部との器壁の差が小さくなるもので、外底面に一本線のヘラ記号が入れられている。124は口縁端に重ね焼きの痕跡を残す。127は器壁が厚く、口縁の立ち上がりが外に開いた成形となる。淡い灰色を呈し、焼成はやや軟質である。131は内面での口縁部の立ち上がり部が押圧によって底面から沈み込んで溝状に成形されている。132は内面淡い茶褐色を呈する生焼けの製品で、使用による平滑な面が作られている。135も平滑面が見られるもので、口縁外部に墨痕が残り墨書き土器の可能性がある。138は口縁端部で外反させる成形で、特徴的と捉えられる。140は内面中央あたりが平滑となっている。141はやや小



第13図 包含層出土遺物(3) (1/3)

振りの杯で、外底が段上に成形されるのが特色である。重ね焼きの痕跡を残し、胎土は微砂粒も少なく精選されており、焼成も堅緻である。142は口縁端部がかすかに内湾する成形がなされているもので、内面は平滑に整っている。146の底面に一本線のヘラ記号が入れられている。147・148は共に器高のある作りで、後者では立ち上がりの部分に押圧が加えられ、溝状の調整となっている。149は薄手の作りで、口縁端が内湾する成形となる。内外周ともに平滑になっている。

150は口縁が大きく外傾するもので、杯器形とするよりも皿器形と認識できるものである。内外周共に体部との境に溝状の押さえが入り、底部では段が形成されたようになる。胎土に砂粒の混和が見られないもので、焼成堅緻で重ね焼きの痕跡が見られる。

151は盤である。盤の出土は限定的である。厚手の体部から短い口縁が立つもので、内面は使用による平滑な部分が認められる。

152～169は大小の差はあるが、有台杯である。総じて高台の作りが細めで、器壁が薄手の作りとなったものが多い。159は外底部に一本線のヘラ記号が入るもので、内定面が平滑になっている。暗青灰色を呈し、胎土に若干の砂粒の混和が見られ、焼成は良好である。160は立ち上がり部が溝状の押さえが入る。ヘラで整えられた底部に、細身の高台が付く。161は最も細身の高台で、幅4～5mmを測るに過ぎない。162では底部に火彌が生じているが、割れにまでは至らない。164の高台は体部と共に入念に調整されている。166は口縁の外傾度が強くなるもので、高台の付け方では内側で角を立てる手法が取られ、164などとは逆の調整手法となっている。内面全体が平滑となる。139は大型品で、底部に煤の付着が見られるが、破損面には及んではない。169は体部の器壁は比較的薄くに成形され、外傾して伸び上がる口縁端部で広がる調整がなされている。胎土には大粒の砂粒の混和が見られる。内外で色調が大きく異なるところから、蓋を付けた状態で焼成されたかと思われる。

170～178・180は瓶、壺類で、復元完形となるものは得られなかった。170は小型壺の口縁部で、内外共に灰釉が全体にかかっている。内面端部は濃緑色をなし、外周は薄い釉が全体に付いた状況である。171は小型品で、厚手の成形が特色である。径10cmの体部の中央付近に沈線が入れられ、底部にヘラ削り調整が見られる。173は脚柱にカキ目調整が施された高杯で、胎土に定量の砂粒の混和が認められる。焼成は堅緻である。176は薄手に成形されていることから短頸壺であろう。内外共に灰釉が掛かり、外周は特に厚く濃緑色を呈している。

177・178は径15cmに復元される円面観の脚部かと推定される。178では長さ5cm、高さ2cm、最大幅1.7cmの突起が付き、下から約2cmの高さから本体が形成される。突起は2個の抉りが入る形で、ヘラによる成形は手慣れた様相を感じさせる。器表面に厚く灰釉が掛かり、濃い緑色を呈しているが、内面には脚部の背面を含めて灰釉は飛んではない。胎土は淡茶褐色を呈し、本資料だけの色調を示す。胎土には定量の微砂粒が混和され、焼成は堅緻である。177の脚は下端が延びた作りで、全体の長さは6cmとなる。脚端部は内面側にもせり出す形となり、器表面は178と同様に厚い灰釉が掛かり、脚端部背面にまで掛かる状況となっている。なお、内面の上端には微かに屈曲する様相が窺える事から、内面での脚部を除いた本体の高さは5cmと推定でき、外周では約6cmほどであろう。2例の脚部背面端が微妙に欠損しているのが見られ、焼成時の重ね焼きの痕跡も考えられる。2点は脚部の高さが微妙に異なり、別個体の可能性も残すが、胎土・焼成・灰釉の状況は酷似している。

179は格子文の押印がある越前焼の壺である。

181～186は土師器壺である。182は内外面とも風化が著しく、調整痕は捉えられない。184は辛うじて調整痕が確認できる壺で、口縁と体部との境に幅のある凹線が入ってくる。185・186は共に風化が進んでいる。

187は外傾度の強い内黒土器である。口縁と底部との器壁の差はごく僅かである。外周は磨耗で調整は不鮮明である。

188～190は土錘である。前二者は類似した成形で、190は丈が伸びている。いずれも完形品に近いが、全体に磨耗が進んでいる。

191～199は、包含層から出土した墨書き土器である。191は外口縁に墨痕が見られるが、判読はできない。内底面は平滑になっている。192では微かに認められるもので、「田」であろうか。193は薄手に成形された杯で、本遺跡で類例の多い「吉成」と墨書きされていると判断される。墨書きの位置が底面中央からずれているのが注目される。ずらさなければならない理由が存在していたとしなければならない。195は厚手の底部の在り方から古くに位置付けられるもので、ヘラ記号を避けて、一部が高台に付くようにして二文字が記されているものの判読はできない。196は口縁端部を欠いただけの完形品で、高台に寄せた位置に墨書きが見られる。内底面は平滑となる。197は高台が剥落したもので、微かに墨痕が認められる。198は淡褐色を呈する生焼けの製品で、内面に煤の付着が認められる。199はヘラ記号に重なるように墨書きがあるが、肉眼では明瞭には捉えがたい。

出土木器（第14・15図）

木製品の出土は、第1～3号掘立柱建物及び柵列、第1号溝で認められた。第1号と第3号掘立柱建物の柱穴には柱根を支える礎板としての板材が認められ、貫穴や先端加工が遺存している在り方から、転用材とみなして大過ないであろう。第2号掘立柱建物では、礎板の遺存は認められず、柱根としての出土であった。第1号溝からは加工が施された板材や棒などが出土している。木製品の一部は、出土位置を特定できない状態となり、乾燥が進んだ形となっている。不手際をお詫びしたい。

第1表 金石本町土器觀察表1

遺物番号	出土地点	器形	口径	底径	高さ	色調	形状	地成	遺存	備考	実測量
1 P39	井		117	80	32	暗灰色	1~3ミリの砂粒や多く含む	良	3分の1	第1号獨立柱建物	175
2 P66	井			60		浅黄褐色	1~3ミリの砂粒や多く含む	良	破片	第2号獨立柱建物	181
3 P74	墓		138			暗灰色、灰茶色	砂粒の混入少ない	良	8分の1	第3号獨立柱建物	187
4 P74	有台杯			88		灰茶色	1~2ミリの砂粒や多く含む	良	8分の1	第3号獨立柱建物、 白	186
5 P48	瓶			66		暗灰色	1~3ミリの砂粒や多く含む	良	破片	第3号獨立柱建物	174
6 P53	瓶			66		黑色、浅黄褐色	1ミリ以下の砂粒少く含む	良	破片	第3号獨立柱建物、 内壁	188
7 P17	墓		149			灰茶色、にぶい赤褐色	圓錐~1ミリ太の砂粒含む	良	破片	第4号獨立柱建物	12
8 P6	有台杯		113	67	37	灰茶色	圓錐~1ミリ太の砂粒含む	良	3分の1	第5号獨立柱建物	6
9 P6	有台杯			67		灰茶色	1~2ミリ太の砂粒や多く含む	良	2分の1	第5号獨立柱建物、 白	5
10 P6	墓		117		27	青灰色	1~2ミリ太の砂粒を僅かに含む	良	8分の1	第5号獨立柱建物	7
11 P35	井		114	77	28	灰茶色	1ミリ太の砂粒を少し含む	やや不良	8分の1	第1、墨書	173
12 P46	盤		149	110	20	灰色	1ミリ太の砂粒僅かに含む	良	破片	盤列1	189
13 P1	杯		121	81	30	灰色、反褐色	圓錐粒を多量含む	良	8分の1	平滑	4
14 P1	有台杯		156	102	64	灰色	圓錐~4ミリ太の砂粒含む	良	はざ形	3	
15 P2	有台杯			100		青灰色	1ミリ以後の砂粒を多量含む	良	10分の1	2	
16 P3	井		122	74	34	明るい灰茶色	1~2ミリ太の砂粒を僅かに含む	良	6分の1		1
17 P5	甕		221			にぶい青褐色	1ミリ以後の砂粒を多量含む	良	破片		24
18 P5	甕			78		浅黄褐色	1~2ミリ太の砂粒を多量に含む	良	破片		25
19 P7	甕		197			浅黄褐色	圓錐粒から2ミリ太の砂粒を多量に含む	良	破片		8
20 P10	杯		112	74	29	灰茶色	圓錐~2ミリ太の砂粒を多量に含む	良	5分の1		11
21 P10	杯		118			灰白色	精緻	良	破片		9
22 P10	杯			84		灰白色	2ミリ程の石英粒を僅かに含む	良	破片	墨書	10
23 P20	杯		118	84	28	灰白色	圓錐粒をみじめび	やや不良	4分の1		15
24 P20	墓					灰色	圓錐粒を多量	良	破片		13
25 P20	甕					浅黄色	1~2ミリ太の砂粒を含む	良	破片		14
26 P22	有台杯		124			灰色	圓錐粒を多量含む	良	破片		17
27 P22	墓		176		32	明るい灰茶色	圓錐粒を多量	良	2分の1		16
28 P22	甕			77		浅黄褐色	1ミリ以後の砂粒を多量に含む	良	破片		20
29 P23	杯		120	85	34	明るい灰茶色	圓錐粒をみじめび	良	10分の1		18
30 P23	杯		107	86	36	反褐色	1ミリ以後の砂粒を多量含む	良	2分の1		19
31 P24	杯			84		反白色	1~3ミリ太の砂粒を僅かに含む	やや不良	破片		21
32 P26	甕		154			反白色	圓錐~1ミリ太の黑色の砂粒含む	良	破片		22
33 P27	甕			87		深い黄色、橙色	1~2ミリ太の砂粒を含む	良	破片		23
34 P49	墓					暗灰色	砂粒の混入少ない	良	破片		177
35 P49	湯口					にぶい黒	1~3ミリの砂粒や多く含む	良	破片		178
36 P49	甕		200			深い黒、浅黃褐色	1~3ミリ太の砂粒や多く含む	良	破片		176
37 P58	甕		181			深い黒、にぶい黒	1~2ミリ太の砂粒や多く含む	良	破片		179
38 P6	鉢				102	暗灰色	2~3ミリの石英粒を多量含む	良	破片		180
39 P69	瓶			53		黒、深い黒	1ミリ太の砂粒少く含む	良	4分の1	内裏	182
40 P76	杯		128	92	33	灰色	砂粒の混入少ない	良	破片		184
41 P76	杯		120	67	38	反白色	1~5ミリ太の砂粒を多量含む	やや良	3分の1		185
42 P76	有台杯			74		明曉灰、灰茶色	2~5ミリ太の砂粒を多量含む	不善	8分の1		183
43 P19	墓		130			反白色	5ミリ程度の砂粒をや多く含む	良	破片		118
44 P19	墓		127		28	反白色	5ミリ程度の砂粒をや多く含む	良	3分の2		115
45 P19	墓		118			青灰色	圓錐~1ミリ太の砂粒を含む	良	破片		116
46 P19	墓		134		26	反白色	砂粒の混入少い	良	2分の1		114
47 P19	墓		143			反白色	1ミリ程の砂粒少く含む	良	5分の1		117
48 P19	墓		164		33	反白色	5ミリ程度の砂粒を多量含む	良	2分の1		113
49 P19	墓		118	88	35	明るい灰茶色	圓錐~1ミリ太の白色の砂粒を含む	良	5分の1	ヘラ記号	106
50 P19	墓		122	89	37	明曉灰	1ミリ以後の白色砂粒を含む	良	2分の1		120
51 P19	墓		122	93	36	明るい反白色	白色的砂粒を多量	良	3分の1	墨書	95
52 P19	墓		122	86	38	反白色	圓錐~1ミリ太の砂粒を多量含む	良	4分の1		108
53 P19	杯			88		褐色	1~3ミリ太の白色砂粒少く含む	良	6分の1		125
54 P19	杯		123	81	33	明るい反白色	1~2ミリ太の砂粒、海綿骨片含む	良	4分の1		94
55 P19	墓		120	76	38	反白色	1~2ミリ太の砂粒少く含む	不善	2分の1		93
56 P19	墓		125	79	31	明るい灰茶色	圓錐粒を多量に含む	不善	3分の1		119
57 P19	墓		123	72	32	反白色	圓錐~1ミリ太の砂粒含む	やや不善	6分の1		123
58 P19	杯			79		反白色	1ミリ太の砂粒含む	良	6分の1		68
59 P19	杯			76		反白色	0.5~1ミリ太の白色砂粒をや多く含む	良	破片		65
60 P19	墓		130	75	25	反白色	1~2ミリ太の白色砂粒を少く含む	良	3分の1	墨書	107
61 P19	墓			89		反白色	1~2ミリ太の白色砂粒を少く含む	良	6分の1	墨書	124
62 P19	墓		145	96	27	明曉灰	圓錐~5ミリ太の砂粒	良	2分の1		92
63 P19	墓		166	91	21	反白色	圓錐~2ミリ太の砂粒多量	良	5分の1		91
64 P19	有台杯			76		反白色	1~2ミリ太の石英粒を少く含む	良	4分の1	墨書	104
65 P19	有台杯		132	104	39	反白色	1ミリ太の砂粒の君がり含む	良	5分の1		101
66 P19	有台杯		103	74	42	反白色	2~4ミリ太の砂粒少く含む	良	5分の1		97
67 P19	有台杯			74		反白色	細かい砂粒の混入	良	2分の1		100
68 P19	有台杯			8		反白色	1~2ミリ太の砂粒少く含む	良	3分の1		103
69 P19	有台杯		112	77	43	反白色	1ミリ程度の砂粒を少く含む	良	2分の1		99
70 P19	有台杯		147	106	59	暗反白色	2ミリ程の種々な砂粒、後砂粒の混入	良	破片		102
71 P19	墓			83		反白色	1~3ミリの砂粒少く含む	良	破片		105
72 P19	墓			111		反白色	1ミリ程の砂粒少く含む	良	4分の1	平滑	98

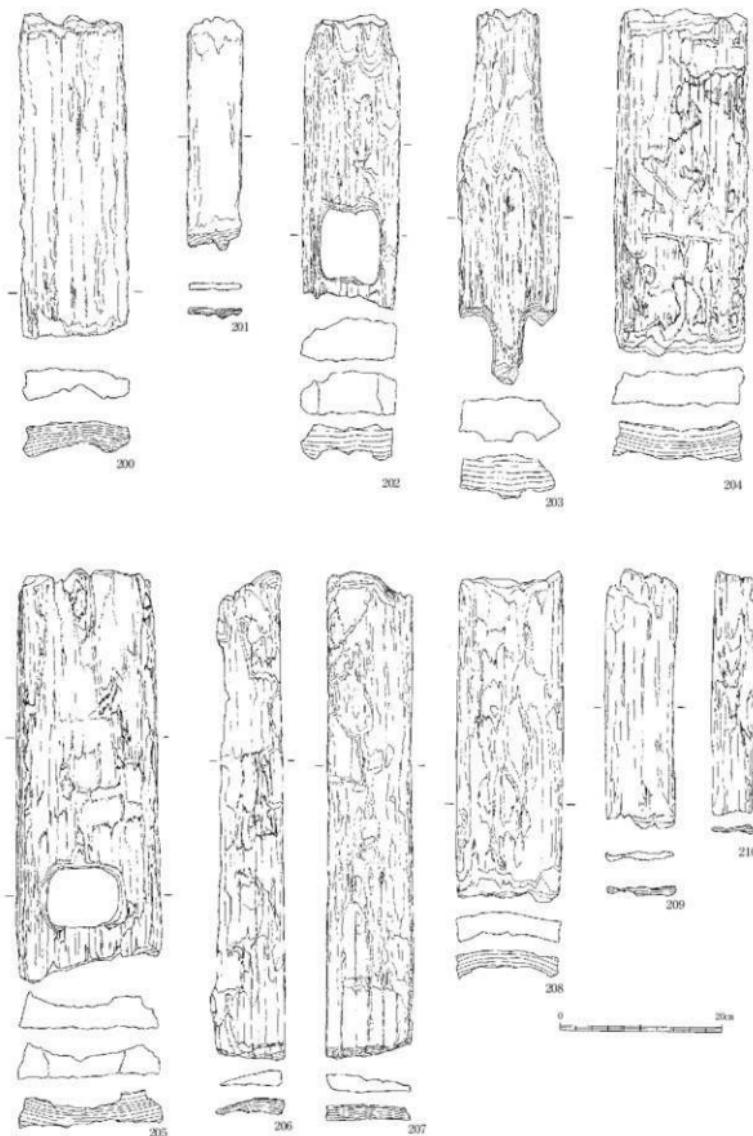
第1表 金石本町土器観察表2

遺物番号	出土地点	形態	口径	底径	高さ	色目	地質	地成	遺存	備考	実測値	
73	1号溝	有台盤		167	56	白っぽい灰色	微粒砂の入った大きい	魚	6分の1		96	
74	1号溝	長頸瓶	166			灰褐色	微細～2ミリ大の白色の砂粒	魚	破片		109	
75	1号溝	長頸瓶		63		灰白色	黒色の微粒砂を多量に含む	魚	破片		111	
76	1号溝	広口壺	270			黄褐色	微粒砂を多量に含み、ぼっさい	魚	破片		110	
77	1号溝	甕	212			明青灰色	1ミリ前後の白色の微粒砂を含む	魚	破片		122	
78	1号溝	甕	155			灰白色	1ミリ前後の白色の微粒砂を多量に含む	魚	破片		121	
79	1号溝	甕		90		青灰色。明青灰色	微細～2ミリの白色砂粒含む	魚	破片		112	
80	1号溝	甕		100		灰色	微細～2ミリの白色砂粒含む	魚	破片		109	
81	1号溝	甕		103		灰白色	微粒砂を少く含む、精良	魚	破片		158	
82	1号溝	有台盤		98		黒色	0.5ミリ程度の砂粒	魚	4分の1	両面	129	
83	1号溝	有台盤	224		55	黒色	0.5ミリ程度の砂粒	魚	圓上	両面	127	
84	1号溝	杯		35		深灰	砂粒混入少ない	魚	4分の1	内面	131	
85	1号溝	杯		58		黒。に少し黄緑	砂粒混入少ない	魚	6分の1	内面	132	
86	1号溝	杯		60		黒。深灰	砂粒混入少ない	魚	5分の1	内面	130	
87	1号溝	有台盤		56		深灰	砂粒混入少ない	魚	5分の1	内面	128	
88	1号溝	有台盤		59		深灰	砂粒混入少ない	魚	3分の1	内面	126	
89	1号溝	壺				浅青緑	1ミリ以下の白色砂粒を少量含む	魚や貝	3分の1	赤羽	136	
90	1号溝	甕	127			浅青緑	1～3ミリの砂粒や多く含む	魚	破片		134	
91	1号溝	甕		165		に少し青緑	1～3ミリの砂粒や多く含む	魚	破片		135	
92	1号溝	有台盤	188	146	32	に少し黒	砂粒混入少ない	魚	破片	赤羽、油渕	133	
93	青塚	甕		132		23	灰色	砂粒を多量に含む	魚	4分の1	裏面、平滑	192
94	D10	甕	126			灰白色	0.5ミリ程の砂粒を少含む	魚	破片		48	
95	E11	甕	130			灰色	1ミリ以下の白色砂粒を少含む	魚	破片		83	
96	D12	甕	124		21	暗緑色	1～5ミリの砂粒を少含む	魚	破片		72	
97	D10	甕	119			灰色	1～2ミリの白色砂粒を少量含む	魚	4分の1		30	
98	D12	甕	126		17	灰白色	黒色の砂粒混入	魚	破片	平滑	195	
99	D11	甕	126	17	灰白色	1～2ミリの砂粒を含む	魚	破片	平滑	55		
100	C12	甕	130	28	暗青色	微細～1ミリの白色砂粒を含む	魚	3分の1		148		
101	D10	甕	124	30	灰青色	0.5ミリ程の砂色砂を少含む	魚	完形		41		
102	D10	甕	128		灰白色	3ミリの灰白色を1枚含む	魚	破片		43		
103	E10	甕	136			灰白色	細かい白色砂粒を多量含む	不負	5分の1		78	
104	D4	甕	140			灰白色	白色の微粒砂を多く含む	魚	8分の1		29	
105	D12	甕	150			灰色	2～3ミリの砂粒を含む	魚	破片		71	
106	D12	甕	145	24	灰白色	0.5ミリ前後の砂粒を含む	魚	破片		196		
107	青塚	甕	154	26	青色	微細～1ミリの砂粒を含む	魚	8分の1		153		
108	D10	甕				灰白色	0.5ミリ程の砂粒をや多く含む	魚	5分の1		45	
109	D11	甕				暗緑色	1～2ミリ位の砂粒を含む	魚	3分の1		73	
110	D10	甕				灰色	砂～ぼっさい	魚	2分の1		36	
111	D10	甕	184			灰色	1～2ミリの灰色砂粒を少量含む	魚	4分の1		31	
112	青塚	甕	174			明るい灰色	白鳥と黒鳥の微粒砂を少量に含む	魚	6分の1		165	
113	D11	甕	190			灰色	0.5～7ミリの白色砂粒を少含む	魚	破片		63	
114	青塚	甕	175	34		灰色	微粒砂を多量に含む	魚	4分の1	平滑	164	
115	E11	甕	162			灰色	1～2ミリ位の砂粒や多く含む	魚	4分の1		84	
116	E10	甕	164			暗緑色	小さな白色砂粒混入	魚	10分の1	平滑	198	
117	E12	甕				灰色	2～3ミリ程の砂粒を少含む	魚	破片		85	
118	D10	甕				灰色	0.5ミリ程の砂色砂を少含む	魚	破片		44	
119	青塚	甕				灰色	1～2ミリの砂粒を少含む	魚や貝	破片		166	
120	E9	壺	118	45	暗緑色	黒色の砂粒を多量に含む	魚	4分の1		76		
121	D11	杯	155	90	32	灰色	2, 3ミリの砂粒が混入	魚や不魚	ほぼ完形		54	
122	D11	杯	113	86	34	青色	1～2ミリ程の砂粒を含む	魚	5分の1		53	
123	C11	杯	108	81	34	明青色	1ミリ位の砂粒を少含む	魚	29分の1		144	
124	D11	杯	117	90	34	灰白色	1～2ミリの砂粒が混入	魚	29分の1		49	
125	B11	杯	120	84	31	灰白色	1～2ミリの砂粒を少含む	魚	29分の1		137	
126	E11	杯	123	45	29	灰色、暗緑色	1ミリ前後の砂粒を含む	魚	4分の1		74	
127	青塚	杯	118	80	37	灰色	1～2ミリの砂粒を少含む	魚	3分の2		160	
128	D11	杯	130	92	34	青色	1～2ミリ位の砂粒を含む	魚	5分の1		50	
129	E10	杯	120	86	30	灰白色	2, 3ミリの砂粒の人	不魚	3分の2		77	
130	B12	杯	115	81	36	明青色	微細～1ミリの砂粒を含む	魚	3分の1		142	
131	C11	杯	112	85	36	暗緑色	砂粒を含む。1～2ミリ大の砂粒含む	魚	3分の1		145	
132	C10	杯	140	86	32	淡青色、灰色	砂粒を多量に含む	不魚	4分の1	平滑	152	
133	D11	杯		79		灰色	2～3ミリの砂粒を含む	魚	3分の1		59	
134	D11	杯	129	106	30	灰色	1ミリ位の砂粒が僅かに混入	魚	4分の1	平滑	57	
135	D11	杯	122	87	33	灰色	1ミリ位の砂粒を少含む	魚	4分の1		82	
136	D10	杯	128	98	32	灰白色	0.5～1ミリの白色砂粒を含む	魚や不魚	3分の2		33	
137	D10	杯		80		灰白色	0.5～1ミリの白色砂粒多く含む	魚や不魚	3分の2		40	
138	C9	杯	137	98	36	灰色	1ミリ位の砂粒少含む	魚	4分の1		141	
139	D11	杯	138	96	32	灰白色	2～4ミリの砂粒を含む	魚	4分の1		58	
140	青塚	杯	152	100	35	明青色	1ミリ前後の白色の微粒砂を多量に含む	魚	4分の1		162	
141	D12	杯	104	54	32	明青色	砂粒混入ない	魚	3分の1		70	
142	D10	杯	120	93	35	暗緑色	1～2ミリの暗緑色砂粒を僅かに含む	魚	8分の1		37	
143	青塚	杯	117	84	32	灰白色	微細～1ミリ大の白色の砂粒を含む	魚	4分の1		163	
144	C11	杯	113	83	31	明青色	1ミリ位の砂粒少含む	魚	3分の1		146	
145	E11	杯	114	78	32	灰白色	砂粒の混入少ない。2ミリ程の砂粒含む	魚	4分の1		80	
146	青塚	杯	127	80	30	暗緑色	1～3ミリの砂粒や多く含む	魚	5分の1		172	
147	D4	杯	117	88	43	灰白色	1ミリ前後の白色砂粒を少含む	魚	2分の1		27	

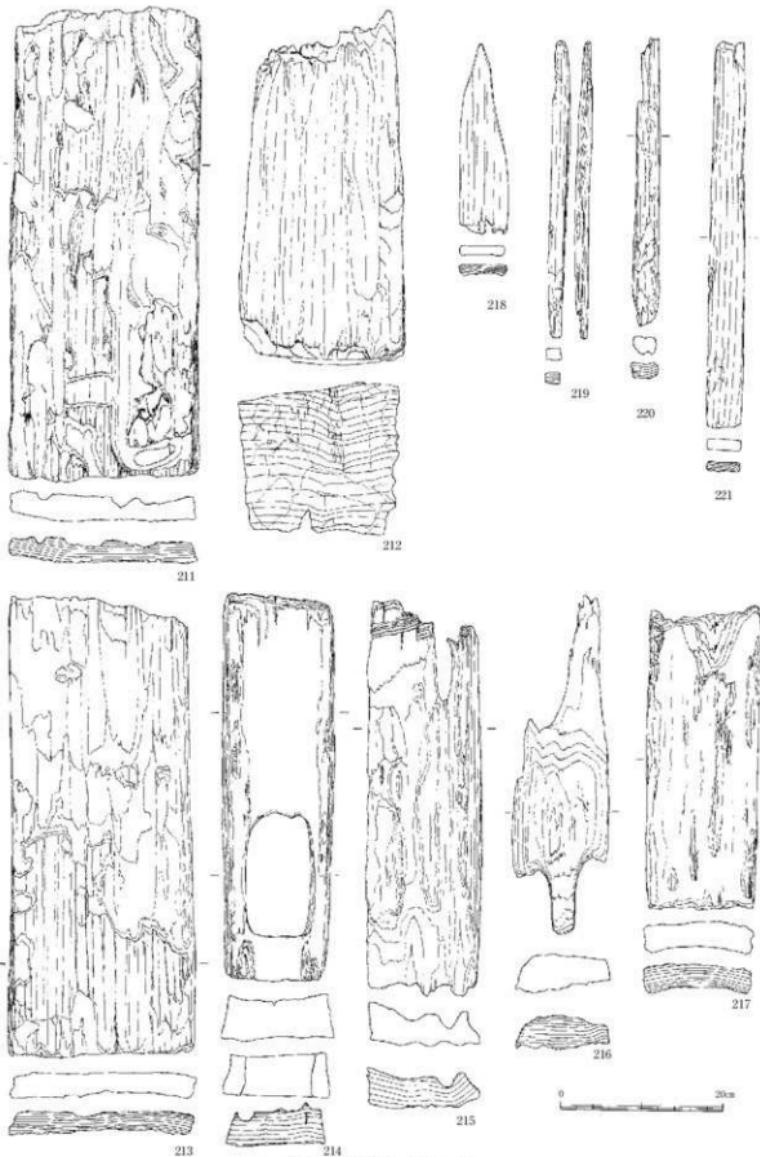
第1表 金石本町土器觀察表3

遺物番号	出土地点	器種	口径	底径	高さ	色調	形状	地成	遺存	備考	実測値
148 D4	井		116	85	43	明青灰色	1~4ミリの白色砂粒を含む	良	3分の1		28
149 E11	杯		120	84	31	灰青、明灰色	1~2ミリの砂粒少々含む	良	5分の1		81
150 貴族	皿		156	104	21	明青灰色	微細粒を多量に含む	良	3分の1		161
151 D11	盤		170	158	18	灰色	少々ばい	良	5分の1		61
152 E11	有台杯		70			暗青色、深色	1ミリ程の砂粒少々含む	良	3分の1		79
153 D11	有台杯		106	74	46	灰色	1~2ミリの白色砂粒を少量含む	良	8分の1		62
154 D11	有台杯		114	78	52	灰白色	砂粒を多く含む	良	8分の1		56
155 貴族	有台杯		69			灰白色、明オリーブ	砂粒を多く含む	良	2分の1		155
156 貴族	有台杯		108	79	44	青灰色	1~3ミリの砂粒を多く含む	やや不良	3分の1		170
157 貴族	有台杯		114	83	45	明灰色	砂粒を多く含む	良	3分の1		156
158 貴族	有台杯		120	100	40	灰白色	微細~2ミリの白色の砂粒を含む	やや不良	3分の1		181
159 D10	有台杯		125	76	39	灰色	2~3ミリの白色砂粒少々含む	良	3分の1		171
160 D11	有台杯		118	82	38	浅灰色、暗灰色	1~2ミリの砂粒が少し混入	良	3分の1		52
161 D11	有台杯		93			灰色、明暗灰色	1~2ミリの白色砂粒を少量含む	良	破片		60
162 E12	有台杯		102			灰白色	1~2.5ミリの砂粒少々含む	良	8分の1		87
163 E12	有台杯		84			暗い灰色	1~2.5ミリの細粒少々含む	良	8分の1		86
164 D10	有台杯		104			明青灰色	砂粒混入なし	良	10分の1		193
165 B12	有台杯		104			灰色	1~2ミリ、3~5ミリの砂粒少々含む	良	6分の1		138
166 D4	有台杯		152	97	40	明青灰色	黒色と白色的砂粒を多量に含む	良	3分の1		150
167 貴族	有台杯		100			明青灰色、青灰色	砂粒を多く含む	良	8分の1		154
168 C9	有台杯		126			明灰色	1.3~5ミリの砂粒少々含む	良	8分の1		139
169 E11	有台杯		206	124	55	暗灰色、灰色	2.5ミリ後の砂を含む	良	10分の1		75
170 D10	壺		86			灰白色	繊細な気泡を含む	良	破片		47
171 貴族	瓶		56			灰色、明るい灰色	白色と黒色の微細粒を多量に含む	良	5分の1		159
172 貴族	ハソウ					暗青灰色、青灰色	微細~2ミリの白色砂粒を多量	良	10分の1		157
173 D12	壺					暗灰色	1ミリ程の黒色の混入がある	良	3分の1		89
174 C12	長持壺		162			暗灰色	1~3ミリの砂粒をや多く含む	良	破片		149
175 貴族	壺		202			灰色	1~2.5ミリの砂粒少々含む	良	破片		190
176 D10	短持壺		214			灰色	1ミリ程の白色砂粒を少量含む	良	破片		46
177 D10	円筒壺					暗オリーブ色、墨色	繊細な黑色砂粒が混入	良	破片		
178	円筒壺					上		斜上	破片		51
179 D11	絞乳瓶					暗褐色	1ミリ程の砂粒が混入する	良	破片	漆付箋	194
180 貴族	短持壺					明灰色~暗灰色	1ミリ程の砂粒少々含む	良	破片		167
181 C11	長持壺		215			淡青褐色	1~3ミリの砂粒をや多く含む	良	破片		147
182 E12	壺		175			にじみ青色	1~2.5ミリの砂粒少々含む	良	破片		90
183 D4	長持壺		200			青褐色	微細~2ミリの砂粒を含む	良	破片		151
184 E12	長持壺		188			にじみ青褐色	1~3ミリの砂粒少々含む	良	破片		89
185 D11	長持壺		180			深い青色	1~2.5ミリの砂粒をや多く含む	良	破片		64
186 D11	壺		84			暗褐色	0.5~1ミリの砂粒を僅に含む	良	破片		66
187 貴族	壺		134	60	31	灰青色~灰褐色	砂粒の混入少ない	良	5分の1	内裏	169
188 D12	土錐		42	69	42	明褐色	砂粒混入なし	良	完形		61
189 C7	土錐		40	66		3~5ミリ程の細縫多く含む		良	完形		140
190 E11	土錐		39	85	85	灰青褐色	砂粒少々含む	良	ほぼ完形		88
191 D10	杯		118	85	34	灰色	0.5~1ミリの白色砂粒を含む	良	3分の1	整善	42
192 D10	杯		114	78	32	灰色	0.5~1ミリの白色砂粒をや多く含む	良	2分の1	整善	32
193 游2	杯		77			灰色	1ミリ前後の白色、黒色の砂粒を含む	良	破片		38
194 D4	杯					灰白色	2.5ミリ程の黒色の砂粒を僅に含む	やや不良	破片		26
195 D10	有台杯		104	71	46	灰色	1~2ミリの白色砂粒を少々含む	良	3分の2	整善	39
196 C11	有台杯		118	84	37	灰色	1~2ミリの白色砂粒を少量含む	良	ほぼ完形	整善	143
197 D10	有台杯		112			灰白色	0.5~1ミリ程の白色の砂粒をや多く含む	良	4分の1	整善	34
198 E12	有台杯				84	にじみ青褐色	0.5~1ミリ前後の砂粒を含む	やや不良	8分の1	整善	199
199 D10	有台杯		95	70	49	灰色	1ミリ前後の白色砂粒を少々含む	良	2分の1	整善	35

(単位4mm)



第14図 出土木器 (1) (1/6)



第15図 出土木器 (2) (1/6)

第4節 小 結

金石本町遺跡の第4次調査は、河道などによる分断や擾乱がなく、比較的まとまりのある遺構配置状況であると、9次まで行われている発掘成果から評価できるだろう。また、弥生時代から古代にまで継起的、重層的に営まれている本遺跡の分布状況を鑑みても、古代の遺構・遺物でまとまつた検出は問題を捉え易い成果かと思われる。

本調査で検出した遺構は、掘立柱建物跡5棟、柵列2、溝1条、土坑3基である。掘立柱建物跡の内で、第1～3号掘立柱建物跡の3棟には柱根あるいは礎板の検出が認められ、新旧関係や配置においての異同を見ていくことができる。第1号掘立柱建物跡と第2号掘立柱建物跡とは重なりあう関係と認められ、柱根が遺存しない第1号掘立柱建物跡に対し、柱根が残存していた第2号掘立柱建物跡が後続するものと判断して大過ないであろう。この新旧関係は主軸方向にも違いとして表れており、他の建物跡との関係を見ていく上で重要な手掛かりである。第1号掘立柱建物跡は第3号掘立柱建物跡及び柵列1・2、第1号溝と主軸方向がほぼ南北方位を意図していると判断でき、時期的に近い関係にあると想定できる。第1号掘立柱建物跡に後続する第2号掘立柱建物跡と近い関係にあるのは、第4・5号掘立柱建物跡と位置付ける事ができ、おおまかに二つの群に分けることが可能であり、時期差と考えられる。

柱穴の掘り方においては、第1号掘立柱建物跡と第3号掘立柱建物跡とに類似性が認められる。平面方形プランが基本形であるようだが、楕円形であったり円形であったりとやや統一性に欠けていると見なされるばかりではなく、柱が取まる位置がずれて直線ではない点も留意しなければならない。さらに、第3号掘立柱建物跡と共に柱穴底部に柱の沈降を防止する為の礎板が置かれていたのであるが、その礎板の配置形態が柱穴ごとに異なると言って良いほどに統一性を欠如しているのである。個々の柱穴におさめられた柱の底面の形状が異なっていたのではないかとさえ思われるが、柱穴ごとの作業者による違いであるか、個々の柱を建ててあげるごとに手法が変えられた結果であるかなどと想定できるが、性急な建設状況の反映ではとも憶測される。礎板で特徴的なのは、第3号掘立柱建物跡のP48での出土状況である。柱根があったと思われる中央部に向けて礎板が斜め位置となって遺存していたのである。柱が礎板ごと沈降していた可能性が考えられるものである。

柱穴の平面形で統一が取れていないのは、本調査区に限られるものではなく、金沢市教育委員会が発掘された第5～7次調査でも認められる。平面形態での在り方が本遺跡でのひとつの特徴とする事もできるが、周辺遺跡との比較検討が必要であり、取りあえず後出す第2号掘立柱建物跡での柱根の検出状況が注意される。まず、総柱建物と見られる内の3本が丸柱と推測され、ただ一つだけであるがP73で検出したのは角柱であった事である。同じ建物であるにも関わらず混在させた在り方は、建物の性格そのものに由来している可能性も考慮しなければと思われる。が、柱材が間に合わせで集められているとの見方も可能視される。評価は分かれることなるが、「金石本町遺跡II」で報告されているSB05が注目される。真北から東へ5度振れて主軸線とするもので、梁行、桁行は確定できないが約2m間隔での総柱建物が推定されている。4個の柱穴が確認され、4本の柱根が遺存している。その柱根は杉材とは異なる材で重みのあるもので、直径約50cmの丸太材を放射状に4分割したかのような横断形であると報告される。断面形態から通し柱ではなく、東柱構造の倉と捉えられている。ここで注意したいのは通柱であれ、東柱であれ、材を簡略に分割したものを使用している在り方である。間に合わせの材で組まれているとの理解は、本調査区の第2号掘立柱建物跡の丸柱、角柱が

混在している在り方にも通底してくる。礎板においても貫穴が残るところから柱材を割り込んで転用した材と判断できる。粗略で間に合わせの材を用いた建物の用途とは如何なるものだろうか。

柱材の選択と共に、遺存している状態も問題視される。先行する第1号掘立柱建物跡が礎板を置いて確実とは言えないまでも柱の沈降への対策を図っているのに対し、第2号掘立柱建物跡では遺存していた柱根は例外なく柱材を直接的に柱穴に配置している。果たして柱根は柱穴掘り方底面を抜いて沈降するのであるが、前段階では底面に礎板で沈降への対策が図られていた事からの手抜きの方法と注目される。本例のように柱根が沈んでいる本遺跡内の事例は、金沢市教育委員会の調査からSB06・SB08・SB09・SB10（『金石本町遺跡Ⅱ』）、SB03（『金石本町遺跡Ⅲ』）などを上げることができる。そして、柱根そのものは遺存しないが、柱根の位置で柱穴底面が二段落ちとなる例が認められる建物跡でも沈降の痕跡として把握して大過ないと推測するならば、本遺跡での事例はさらに増える事となる。柱が沈降して建物が傾くような状況は古い段階（第1号掘立柱建物跡など）では対策されたが、新しい段階（第2号掘立柱建物跡など）では傾くと予見されても対策が講じられないのが常態になると判断でき、倉庫様建物であっても対応に変わりがないとの認定は建物の用途に直接反映されなければならない。そうであるならば、建物そのものが手抜きの方向に新しい段階で傾斜していくのは、古い段階での建物の性格が引き継がれていないとも受け取れるが、同一地区での近い時期での継続で見るならば、ある時、突然にとするよりも、同じ用途での簡略形態が必然的に生じたとの推定が可能ではなかろうか。

さらに、柱穴掘り方の平面形や柱材の多様性に加えて、柱間距離が建物ごとに異なり、同じ建物であっても間隔が描わないのも、描えないのも、間に合わせ、粗雑な構築を裏付けるものではなかろうか。なお、蛇足であるが、柱にながれる建物構造に付随して、建物の主軸方向が、南北方位を意図していたものから変移していく、規範からの離脱も留意しなければならない。

さて、手抜き建物についての疑問の最後は、柱根の遺存そのものである。第1号掘立柱建物跡が解体処理されたと推測されるものの、本遺跡では柱根が遺存しているのは単独の建物跡ではなく、柱が林立したような状況が、地中だけに柱が残る状態の以前に金石本町遺跡の風景としてあったと想定できる事である。整理、片付けられることもなく放置された結果としての柱根の遺存との見方が取られているようだ。この視点は本遺跡に限定されるものではなく、低湿地遺跡の特性としての認識で捉えられているのが一般的で、遺存している状態を歴史的に問い合わせる課題提起は皆無であるようだ。ある段階で遺跡が放棄され廃屋群が出現したとの認定は火事や洪水、疫病、火山災害、戦火など様々な出来事を契機とするのは考えやすいのであるが、一般的な遺跡調査で上記のような事態を目にする事は火事を除いては稀であり、個別遺構での判別は難しいものがあると思われるが、全く疑問視もされていないのが通例であろう。本遺跡のように建物の柱が林立する様は突發的な出来事ではなく、継起的、重層するように出現したと見るのが出土遺物の在り様から推測でき、手抜きの建物は偶発的に放棄されたのではなく建物の性格から片付けてはならない規制が働いていたのではとさえ思われる。

掘立柱建物跡での検討課題は、その他の遺構へも必然的に係わるものであり、遺物の内容にも波及していくかねばならない、さらに、低湿地遺跡などの遺跡が遺跡となる基盤そのものも問わねばならないと思われ、今一度個別遺構や遺物を見つめ直していく作業が必要と思われる。

参照文献

- 小西昌志^著 1996a 「金石本町遺跡Ⅰ」金沢市教育委員会
小西昌志 1996a 「金石本町遺跡Ⅱ」金沢市教育委員会
小西昌志 1996a 「金石本町遺跡Ⅲ」金沢市教育委員会
滝川重徳 1997 「金石本町遺跡」石川県立埋蔵文化財センター



調査区全景（南から）



調査区南部（東から）



調査区南端部（北西から）



調査区南端部（北から）



調査区南西端部（南東から）



調査区南西端部（東から）



調査区西端部（東から）



調査区西端部（北から）



調査区中央部（南東から）



調査区北端部（南から）



1・2・3号溝（東から）



1・2・3・5・6・7号溝（南から）



2・5・6号溝（南東から）



3号溝（南から）



3号溝竖柱出土状況（北から）



2号溝土層断面（北西から、層6周辺を拡大）



3号溝埋状遺構検出状況（南から）



3号溝土層断面（南から）



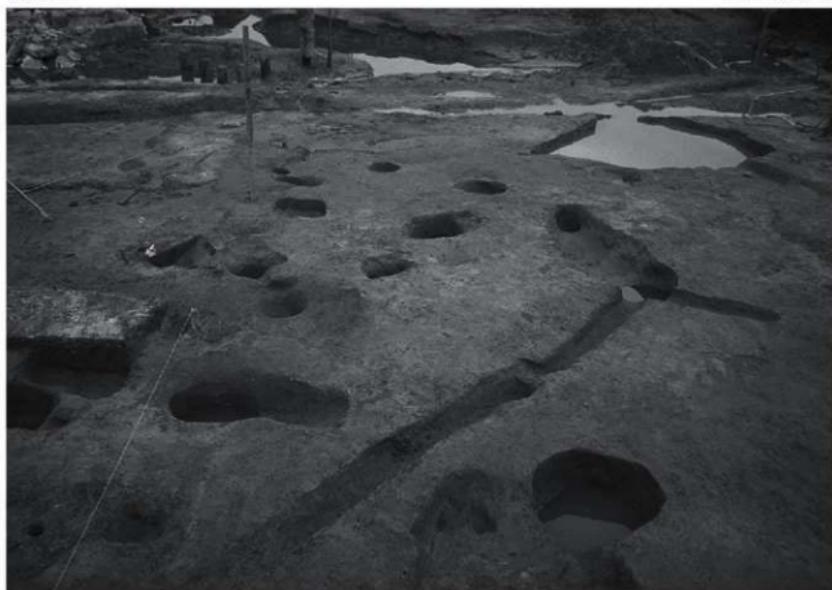
3号溝埋状遺構検出状況（南から、拡大）



32・34号溝（北東から）



33号溝他（東から）



4・20号土坑周辺（南から）



4号土坑周辺（南西から）



8号土坑他（西から）



10・13・14・15・24・25号土坑他（東から）



10・11・12号土坑他（北から）



10・13・14・15・24・25号土坑他（西から）



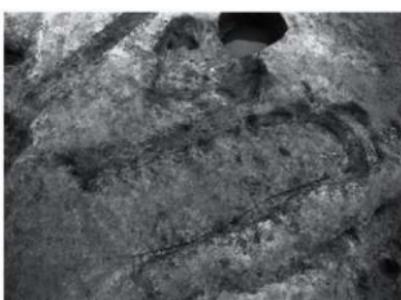
4号土坑周辺（南西から）



8・10・11・12号土坑（北から）



10号土坑土器出土状況（東から）



22号土坑（南から）



1号井戸検出状況（南西から）



1号井戸底板検出状況（北西から）



2号井戸検出状況（北から）



2号井戸（西から）



3号井戸（南東から）



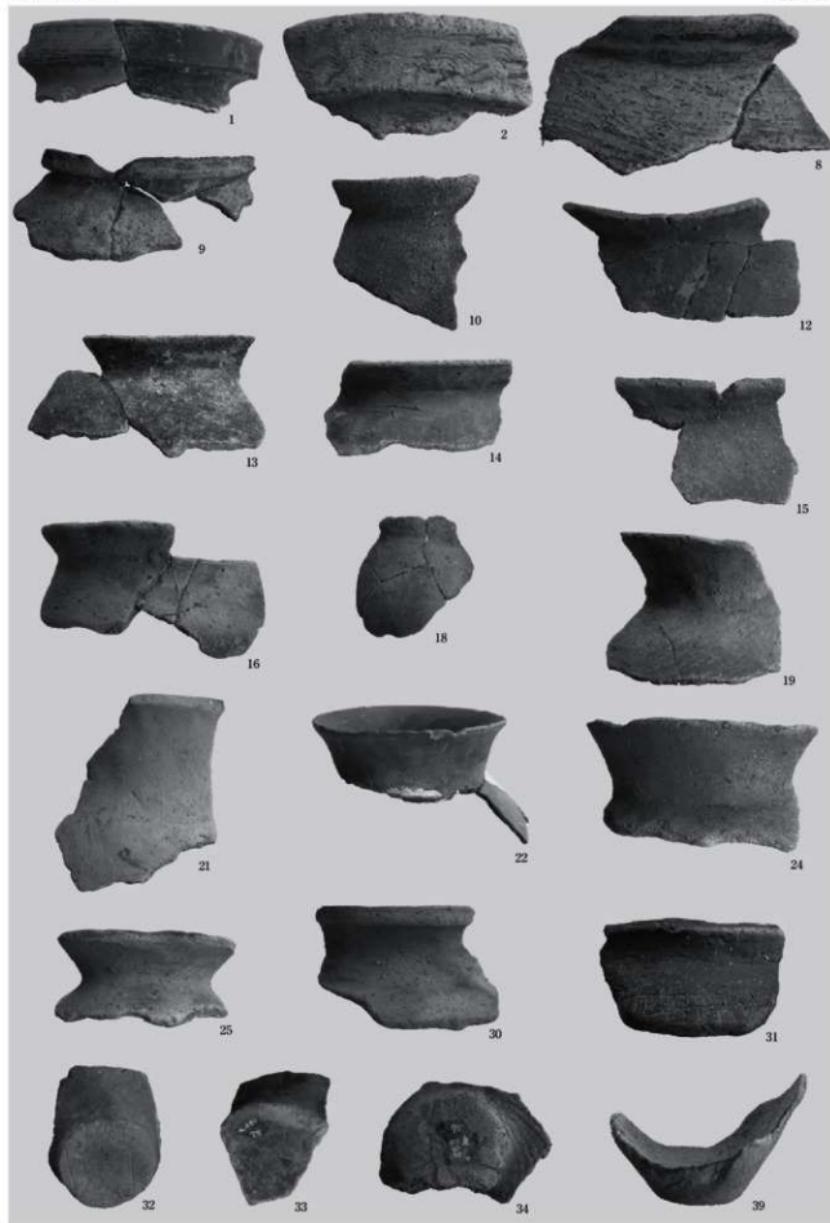
布掘建物（北西から）



2号掘立柱建物 北東角柱穴（南東から）



布掘建物土層断面



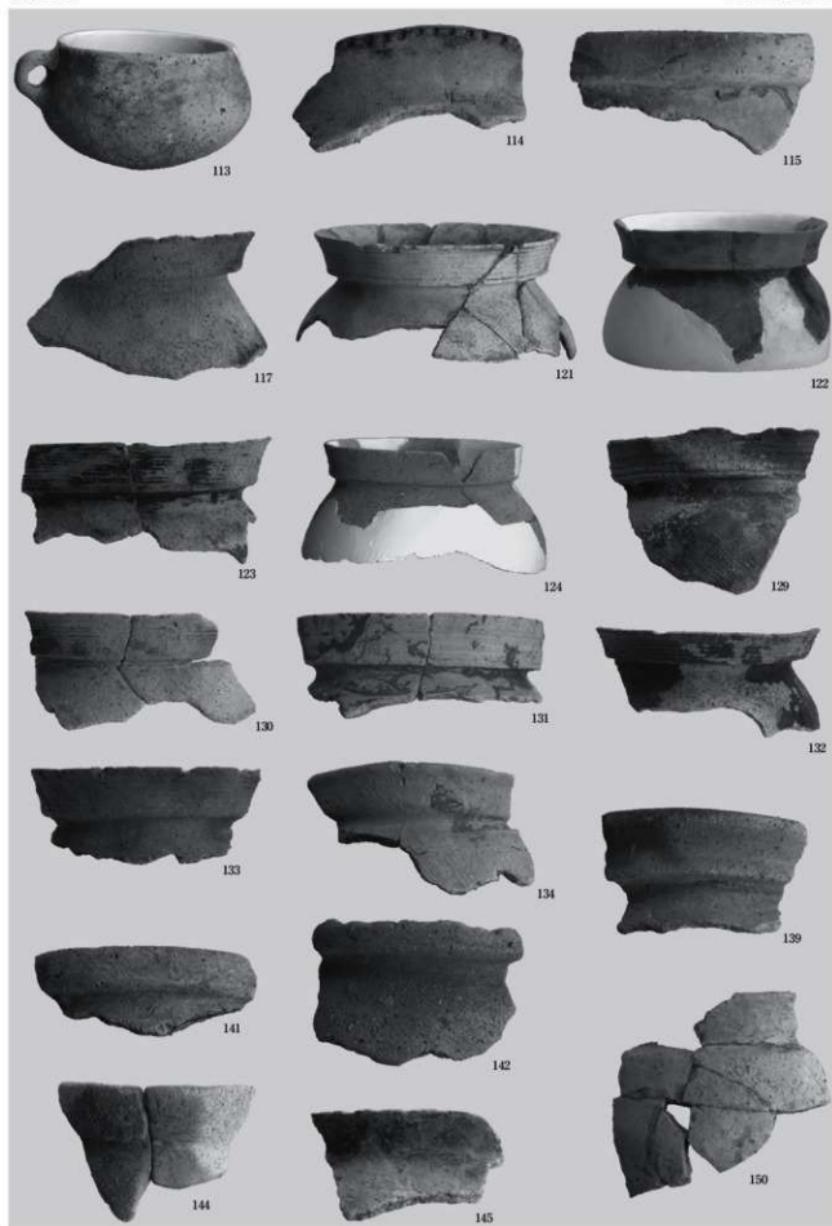
弥生・古墳時代の土器 1



弥生・古墳時代の土器 2



弥生・古墳時代の土器 3



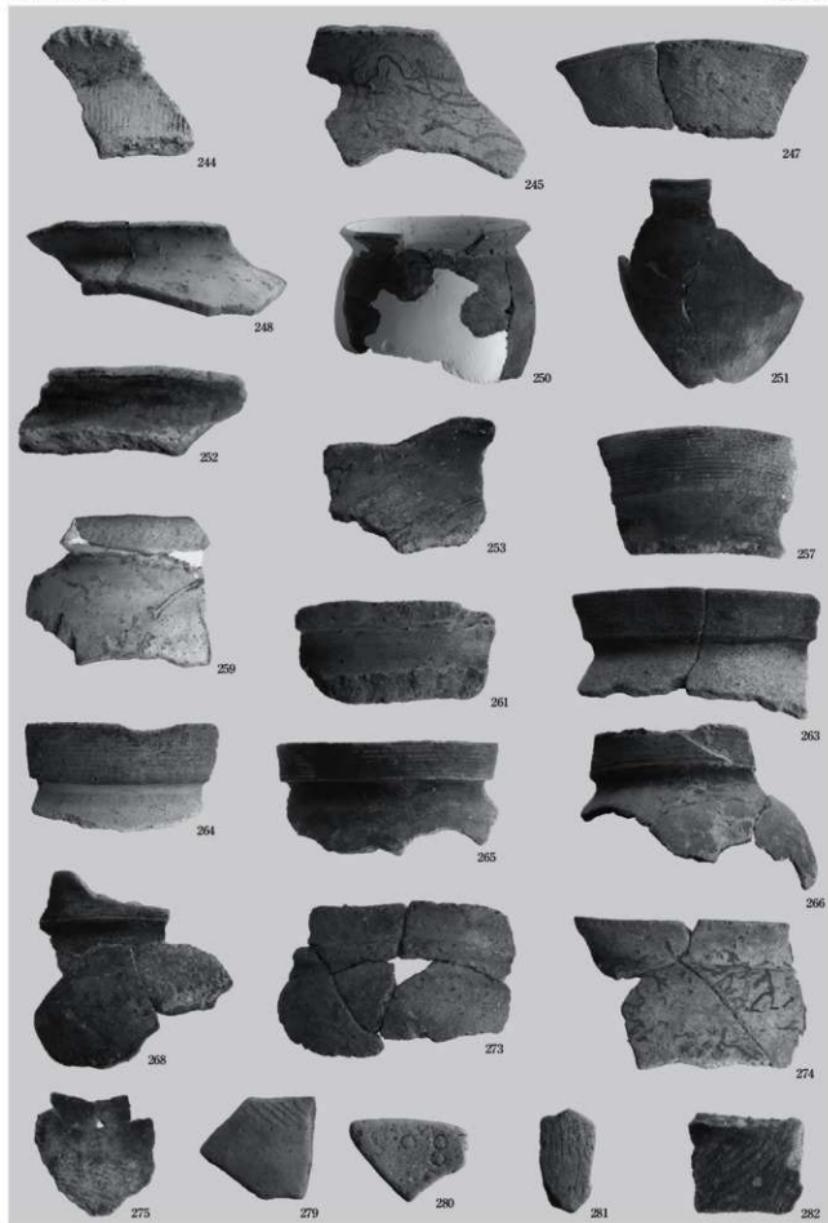
弥生・古墳時代の土器 4



弥生・古墳時代の土器 5



弥生・古墳時代の土器 6



弥生・古墳時代の土器 7



283



284



287



292



293



296



298



300



310



311



312



314



316



317



320



322



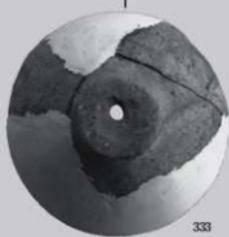
324



325



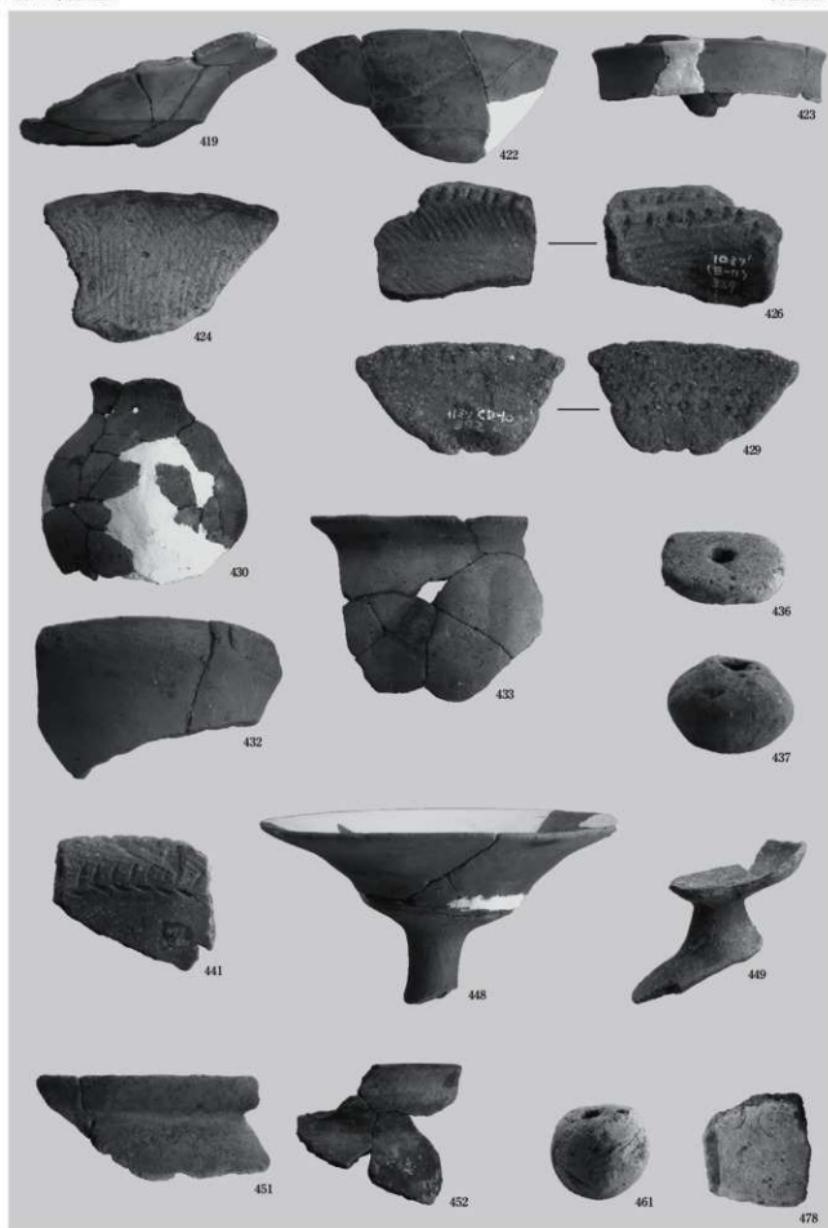
326



弥生・古墳時代の土器 9



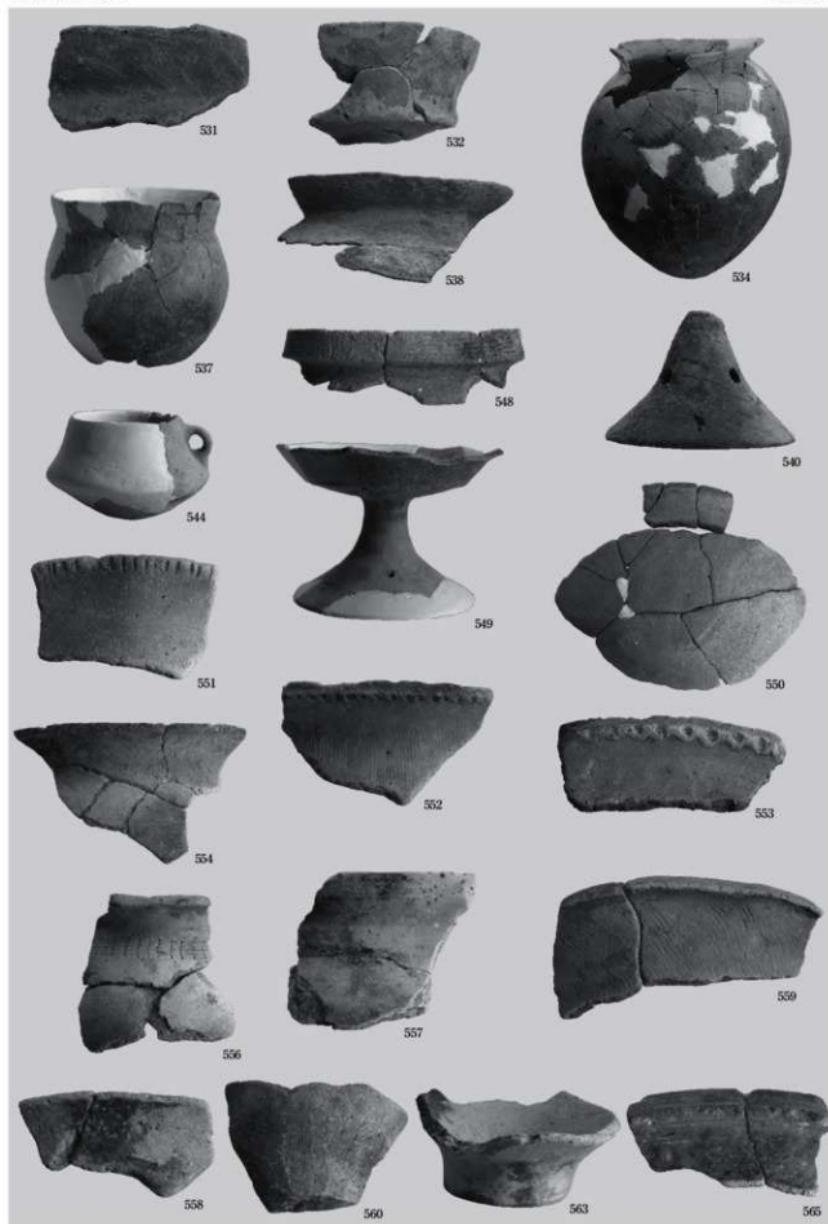
弥生・古墳時代の土器10



弥生・古墳時代の土器11



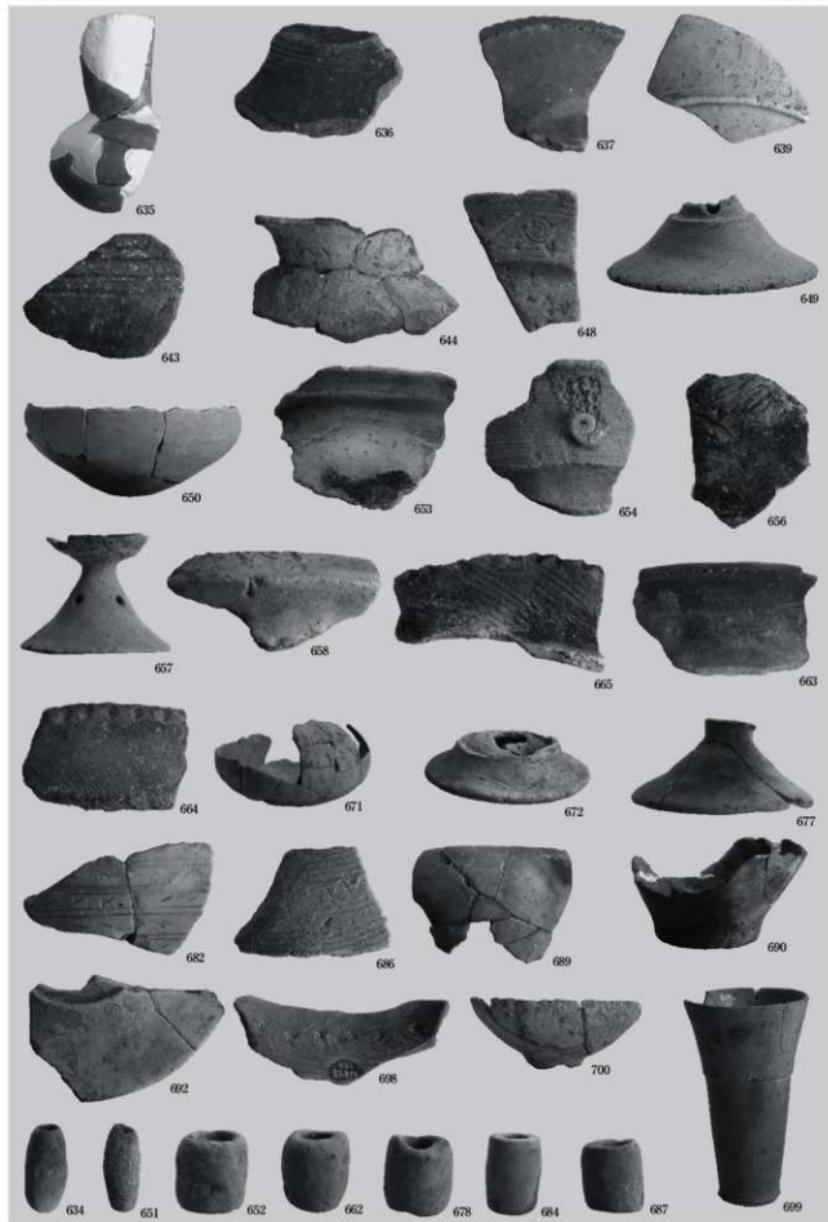
弥生・古墳時代の土器12



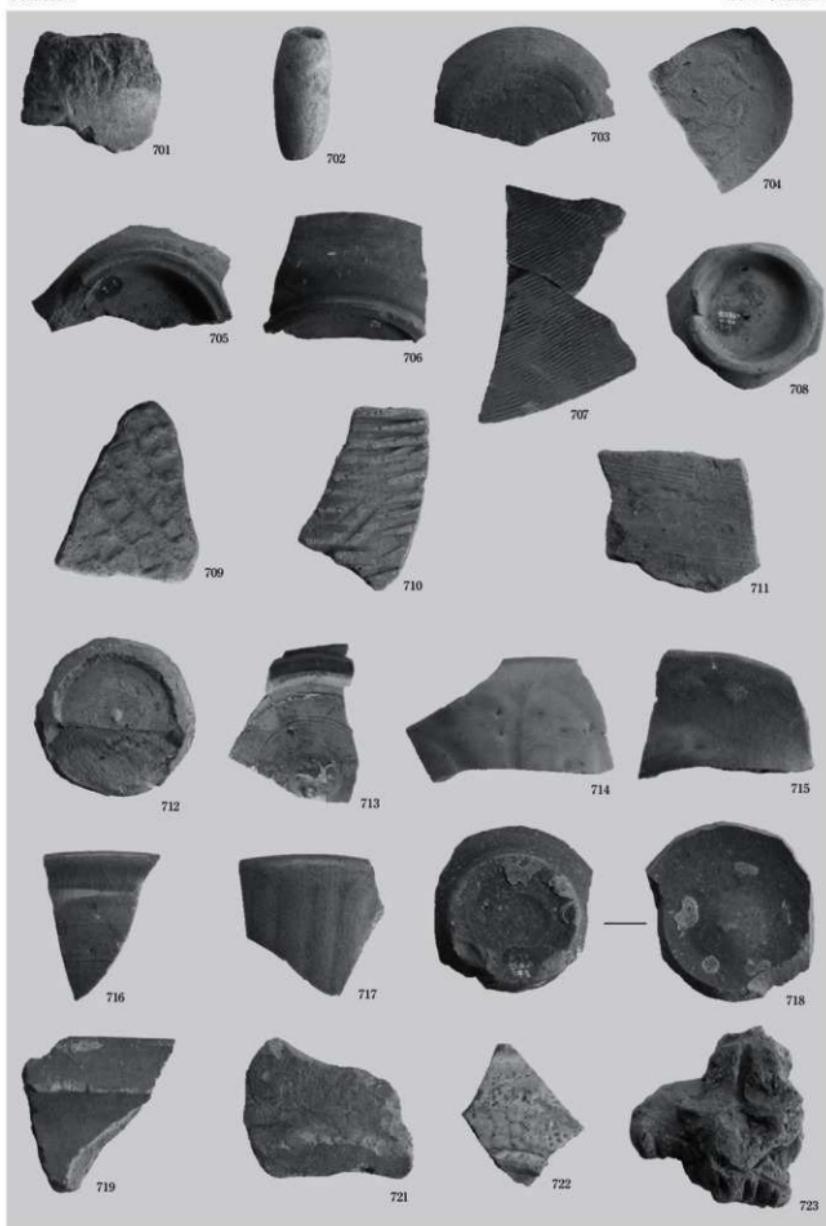
弥生・古墳時代の土器13



弥生・古墳時代の土器14



弥生・古墳時代の土器15



古代以降の土器・陶磁器



W1



W2



W4



W5



W3



石製品・金属製品 1



S16



S17



S18



S19



S20



S21



S22



S23



M1



M2



M3



M4



S24



S25



S26



M5

写真図版36

昭和61年度調査1（Ⅱ区）



全景（南から）



全景（北東から）



B・C17グリッド完掘状況（南東から）



B・C16~17グリッド完掘状況（南東から）



B 17グリッド完掘状況（南から）



C 17グリッド完掘状況（南西から）



B・C 17グリッド完掘状況（北から）



B・C 17グリッド完掘状況（南東から）



B17グリッド ピット列(西から)



同左(東から)



B17グリッド ピット102(東から)



ピット48周辺(南西から)



Eピット(南西から)



B17グリッド ピット



B17グリッド ピット103



1号井戸(南から)



大溝調査状況（北東から）



大溝調査風景



大溝土層断面（南東から）



大溝土層断面（南から）



大溝アゼ調査風景（南東から）



大溝アゼ除去状況（南から）



大溝東側断面確認作業（南から）



大溝纖維製品出土状況



2号溝（北から）



2号溝土層断面（北から）



B14～15グリッド（北から）



B14グリッド（北東から）



C14グリッド小溝（東から）



C14グリッド小溝遺物出土状況



B14グリッド（南東から）



B14グリッド（北西から）



表土掘削



完掘状況（東から）



降雨後の調査区（北東から）



作業風景（南西から）



作業風景（南西から）



C20～21グリッド作業風景（西から）



C20グリッド完掘状況（東から）



C20グリッド完掘状況（西から）



C20~21 グリッド完掘状況（北から）



同左（西から）



1号土坑土層断面（東から）



2号土坑土層断面（南から）



2号土坑土層断面（西から）



2号土坑完掘状況（西から）



3号土坑土層断面（西から）



3号土坑完掘状況（西から）



4号土坑完掘状況



C21グリッド ピット108



1・2号溝完掘状況（南から）



1号溝完掘状況（北から）



1号溝完掘状況（南から）



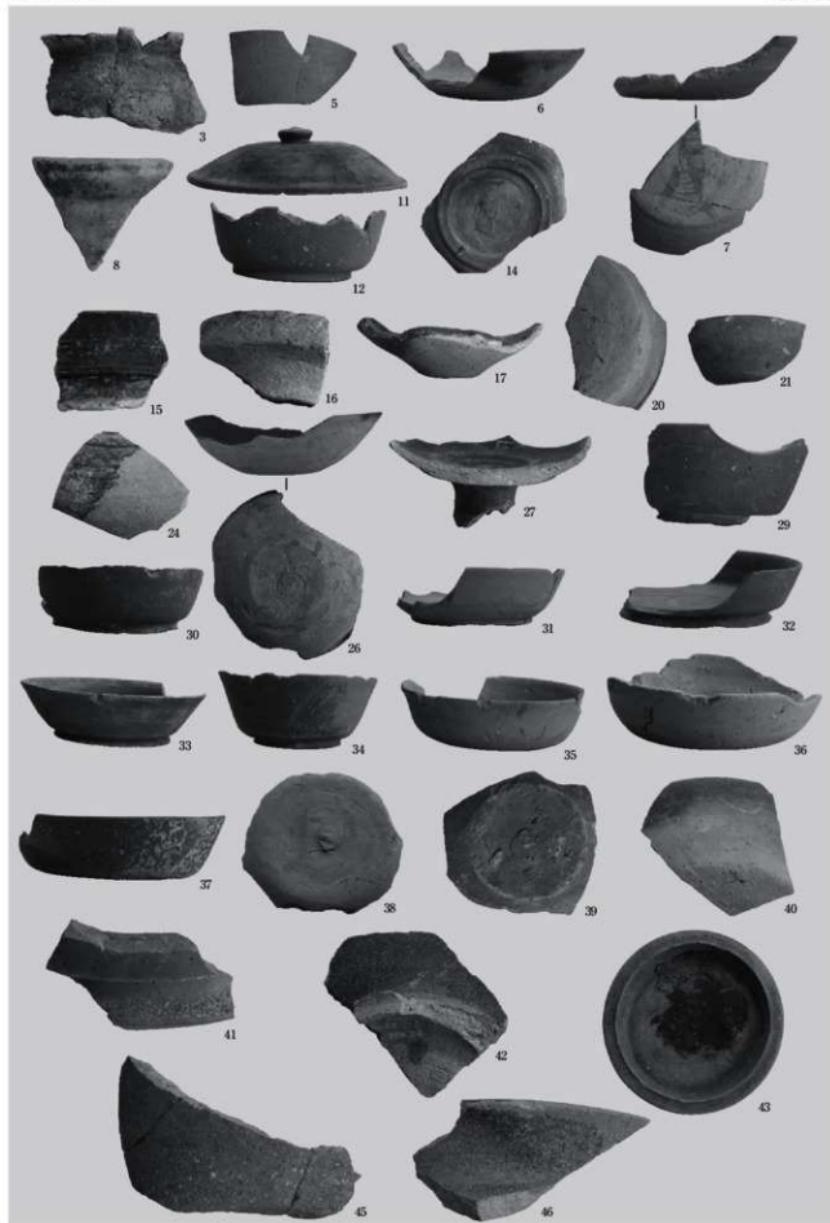
1号溝土層断面（南東から）



大溝南北トレンチ作業風景（北東から）



調査区から大野瀬神社の社殿を望む



遺物 1

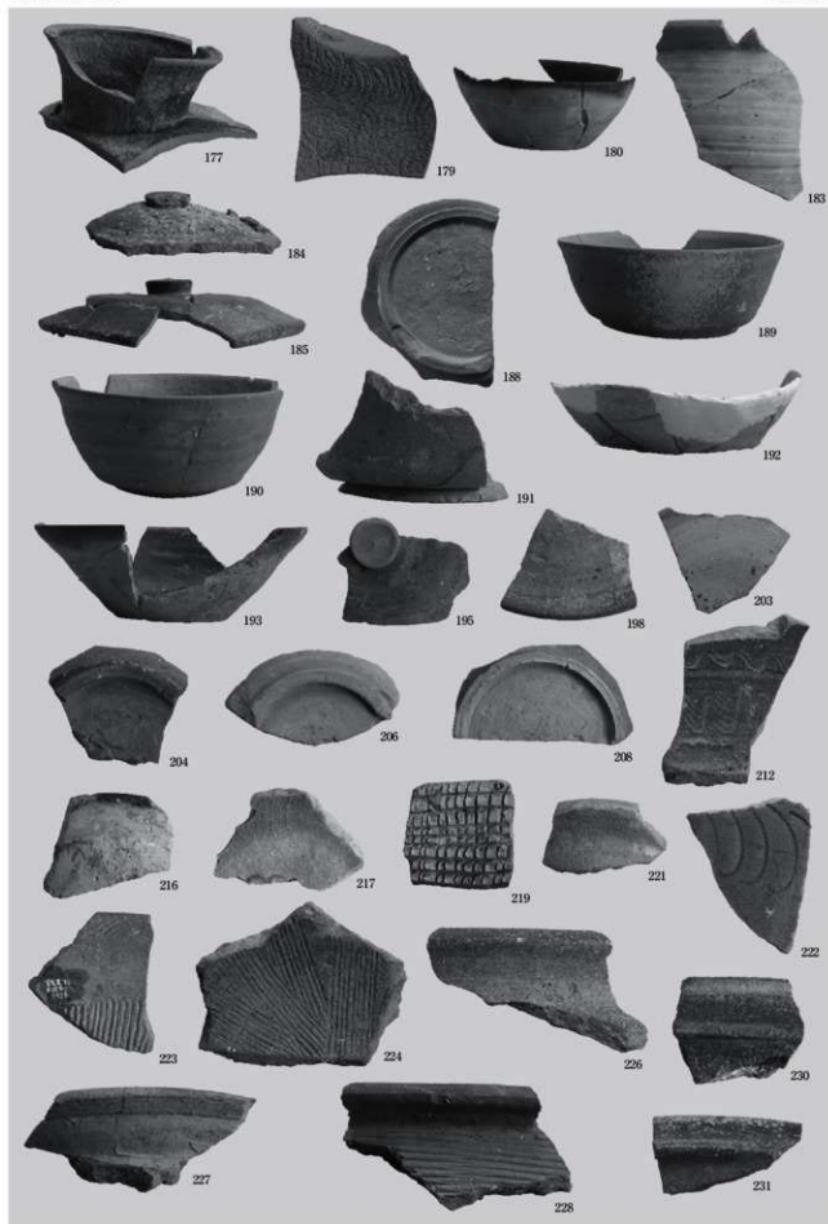


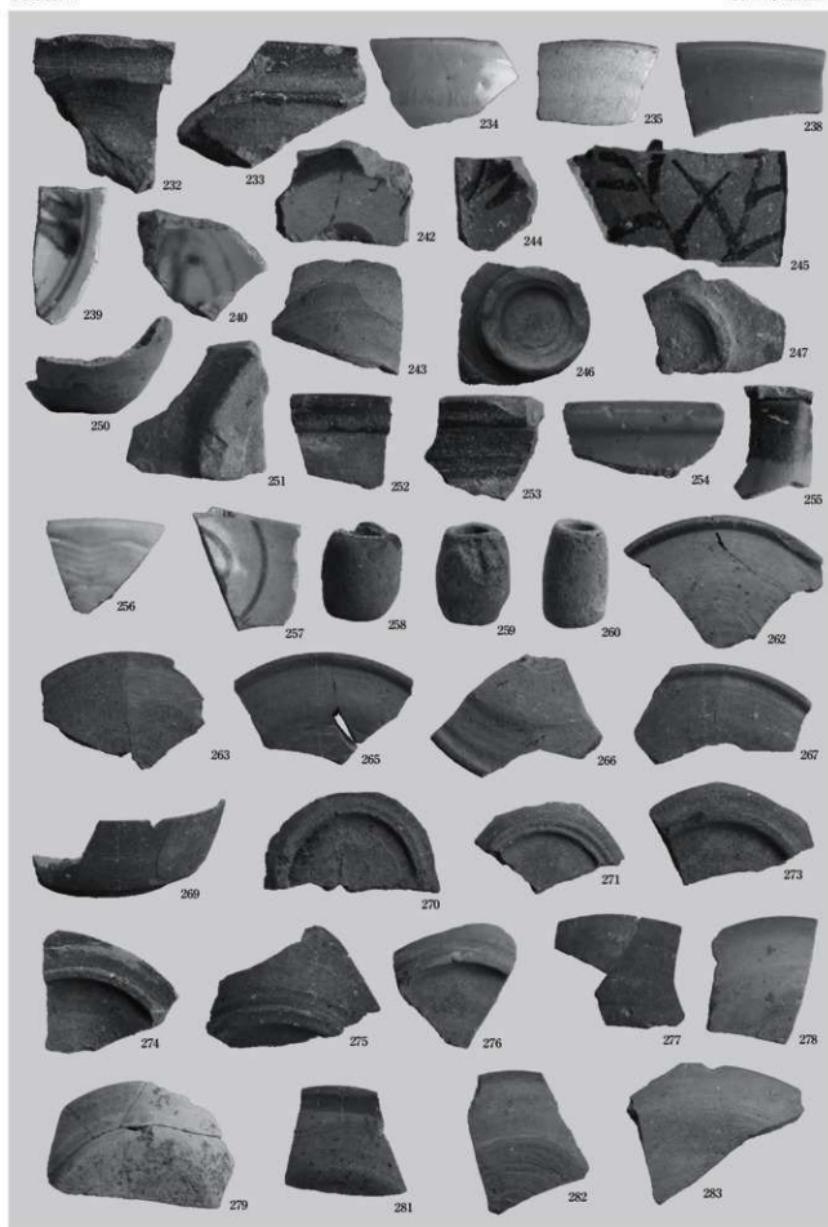
遺物 2

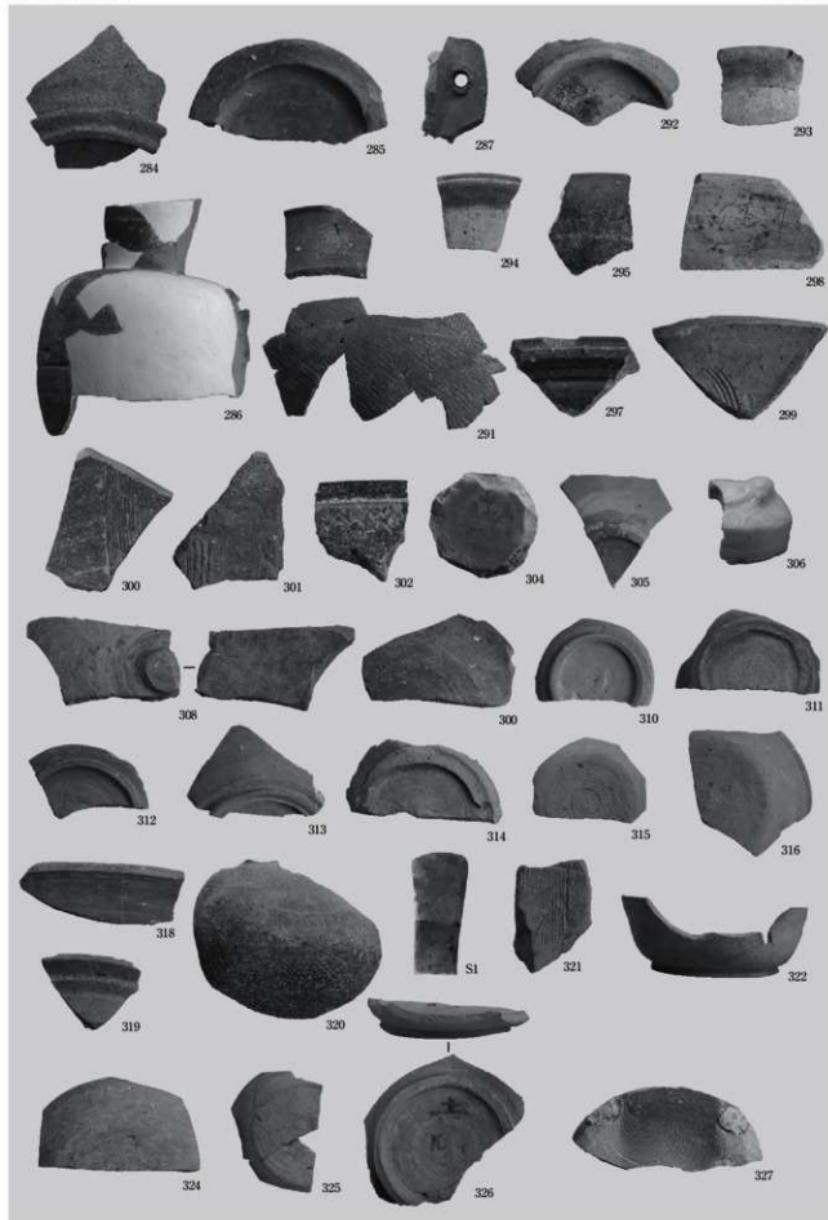


遺物 3

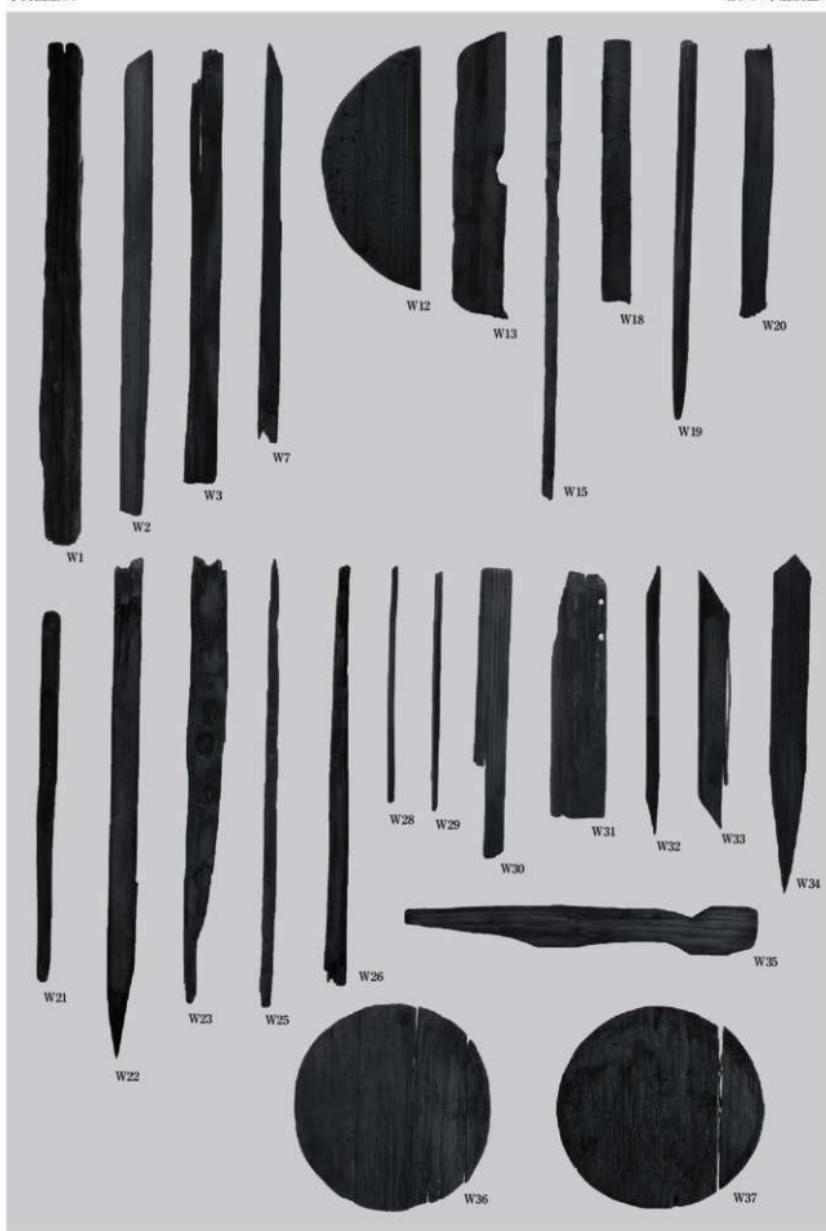




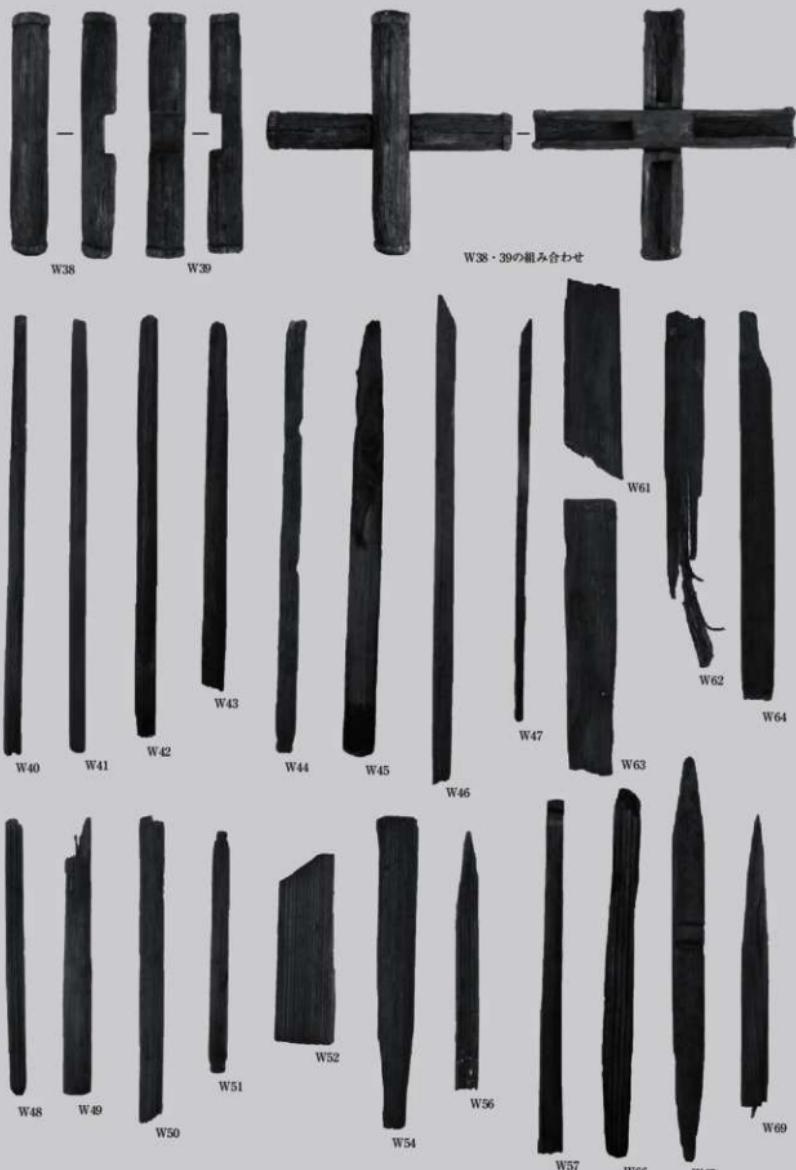


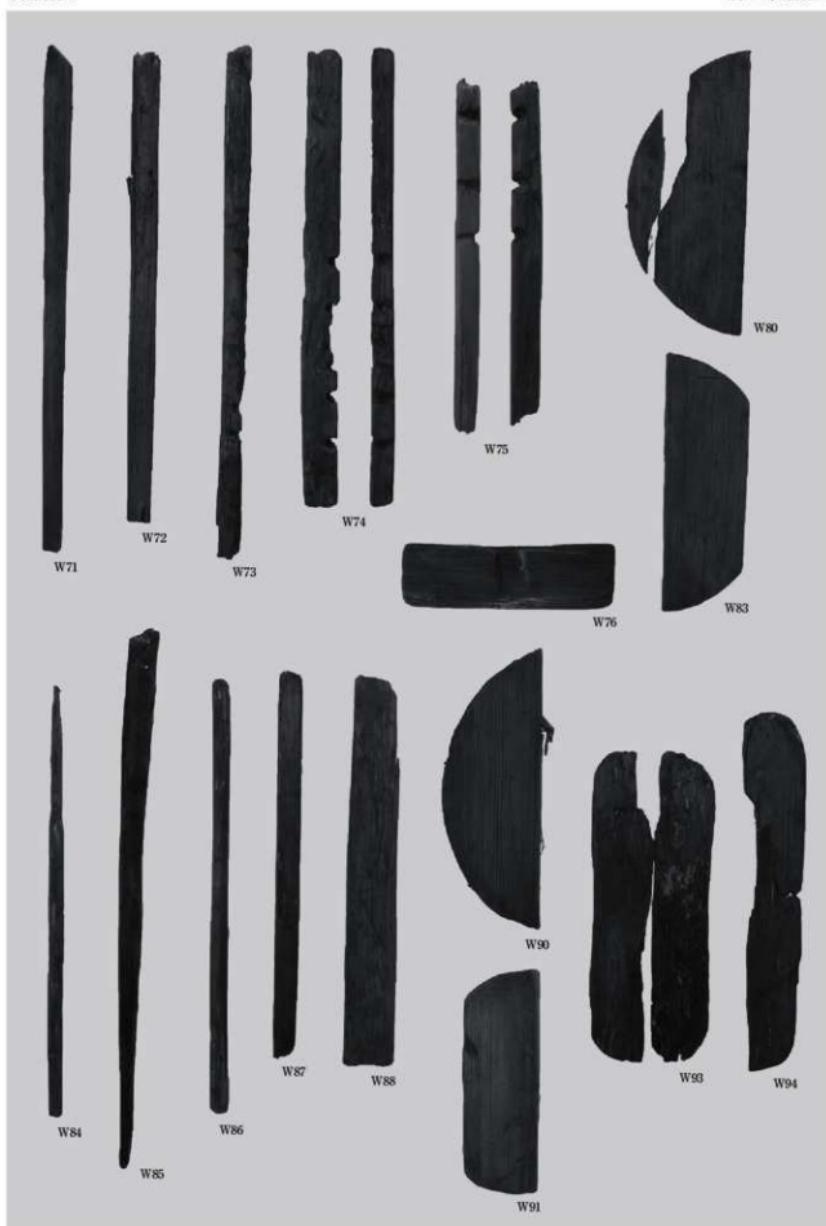


遺物 7



遺物 8





遺物10



調査区全景
(北から)



調査区全景
(南から)



調査区
(南から)



南西区
(北東から)



北区
(南から)

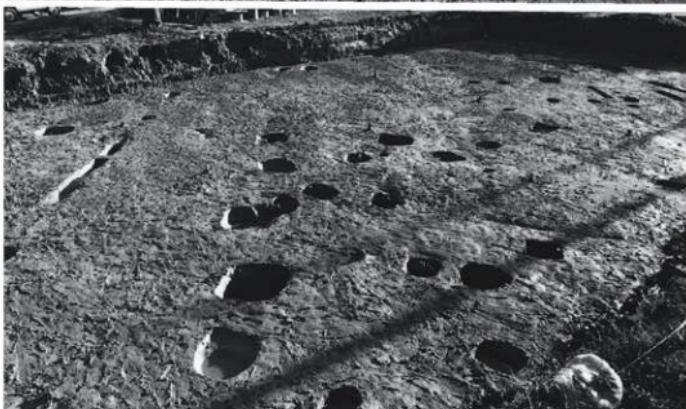


北区
(南西から)

中央区
(1)

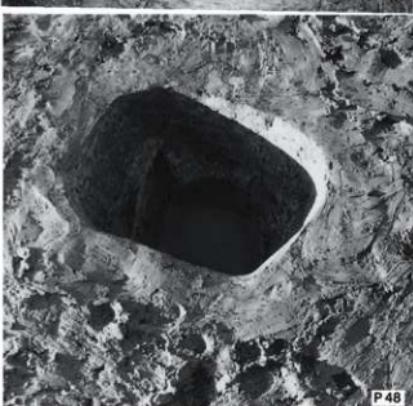
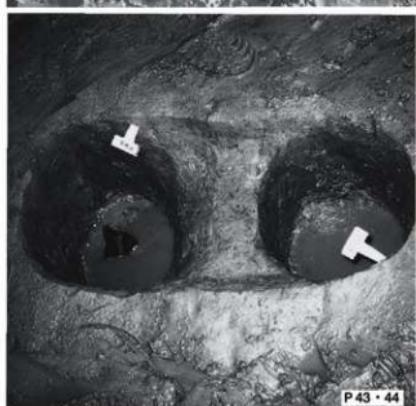
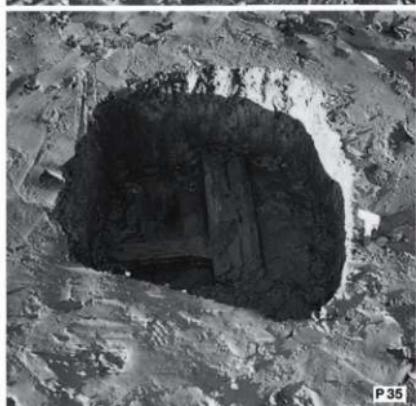
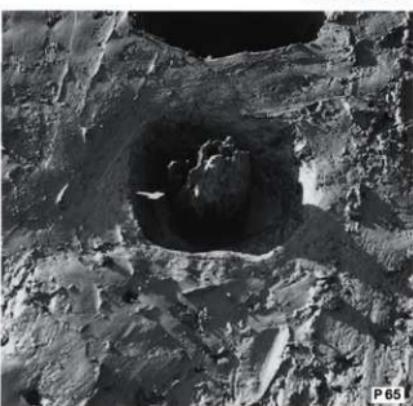
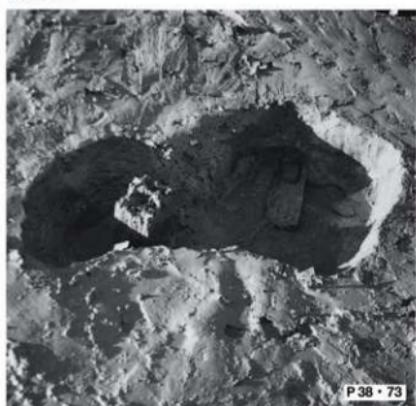


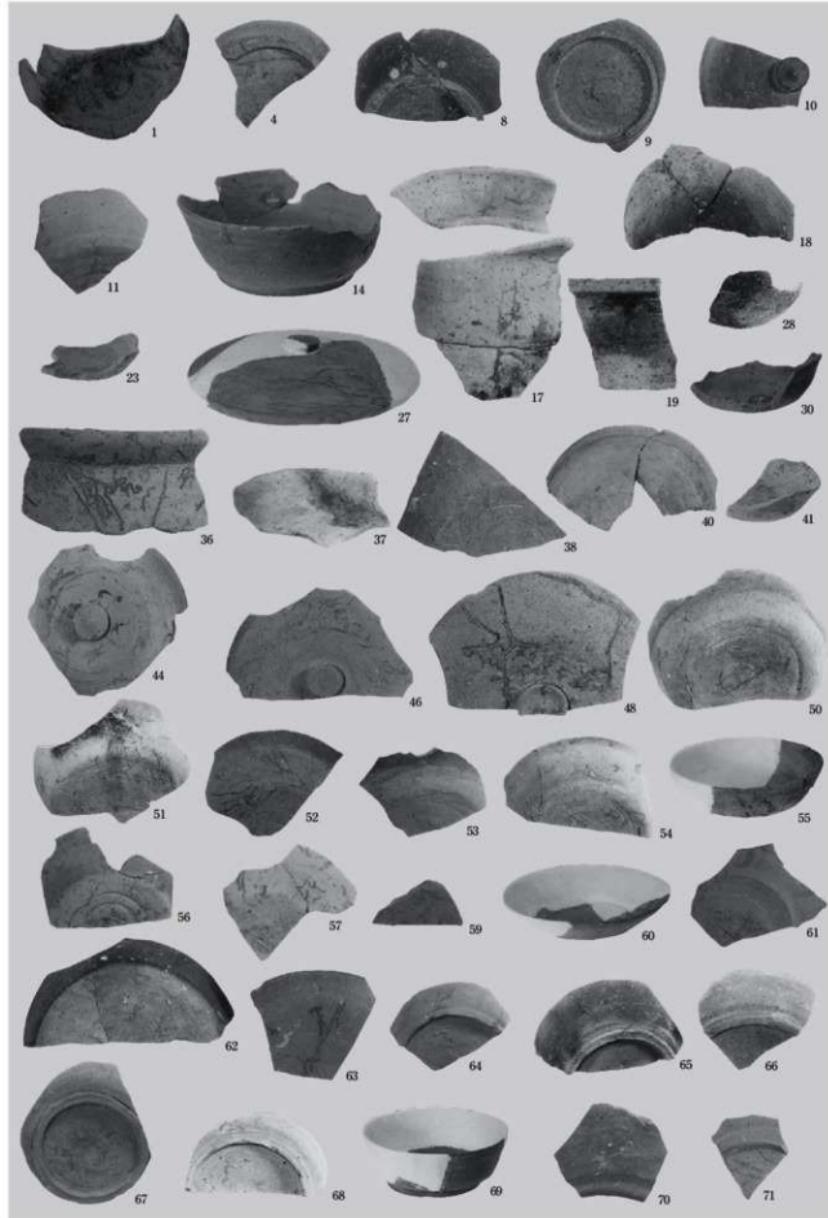
第1・2号掘立柱建物跡



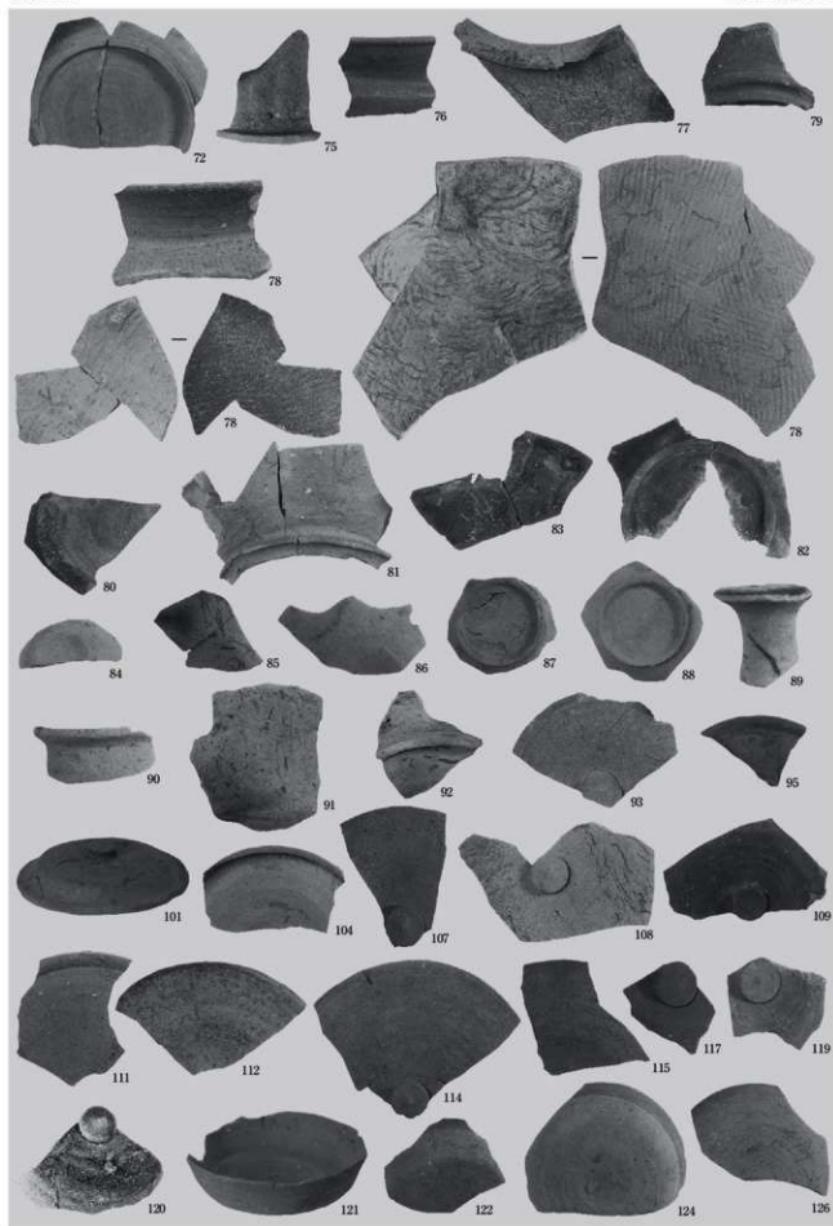
第2号掘立柱建物跡



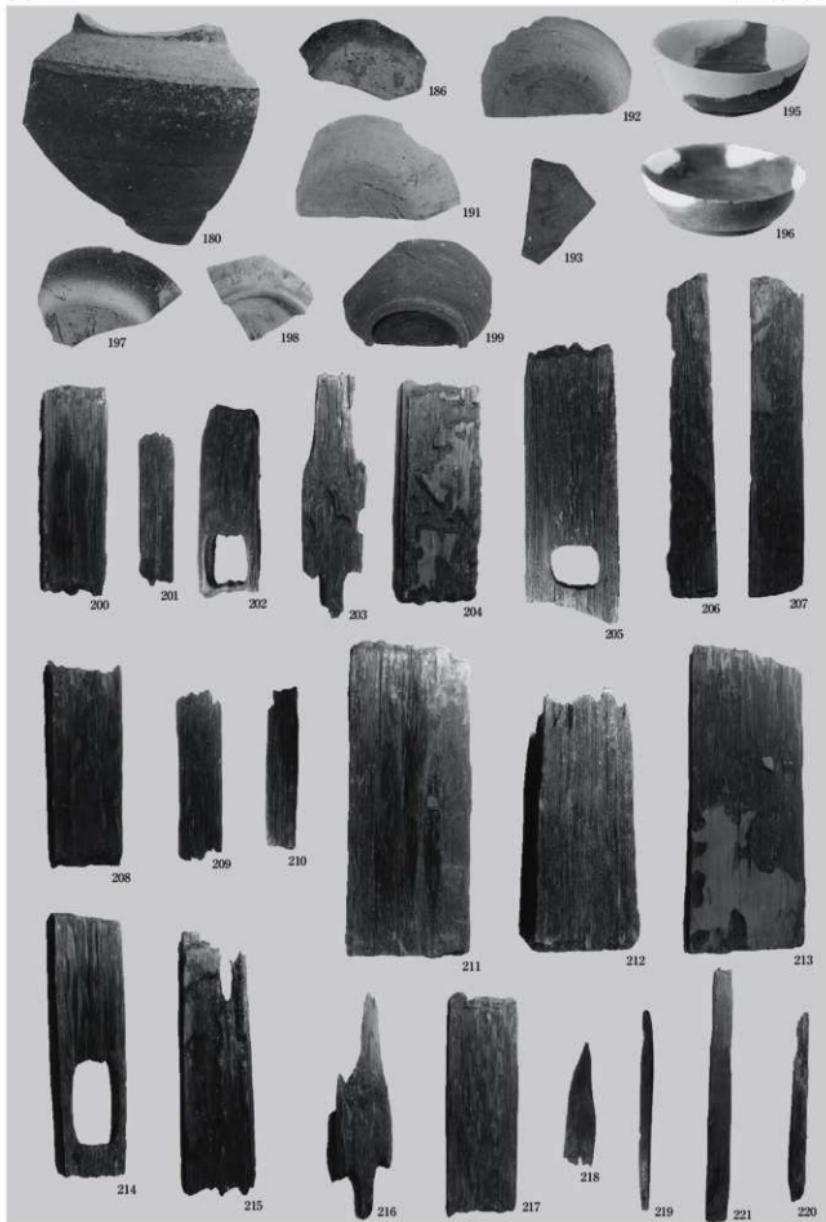




出土遺物 1







緊急地方道路整備工事（332 臨港線）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

金沢市

金石本町遺跡

2009

石川県教育委員会

(財)石川県埋蔵文化財センター

例　　言

- 1 本編は金石本町遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 遺跡の所在地は石川県金沢市金石東地内である。
- 3 調査原因是緊急地方道路整備工事(3.3.2臨港線)であり、同事業を所管する石川県土木部道路整備課が、石川県教育委員会に発掘調査を依頼したものである。
- 4 発掘調査は石川県教育委員会が昭和63(1988)年度から平成20(2008)年度にかけて実施した。
- 5 調査に係る費用は石川県土木部道路整備課が負担した。
- 6 現地調査は昭和63年度に石川県立埋蔵文化財センターが実施した。期間・面積・担当者は下記のとおりである。

期　間　　昭和63年11月25日～12月5日

面　積　　130m²

担当者　　西野秀和（主査）　岡本恭一（主事）

- 7 出土品整理は平成5(1993)年度に実施し、石川県教育委員会が社団法人石川県埋蔵文化財保存協会に委託した。

- 8 報告書の作成は平成19(2007)年度に実施し、石川県教育委員会が財団法人石川県埋蔵文化財センターに委託した。執筆・編集は西野(企画部専門員)が行った。報告書の刊行は平成20年度に実施した。

- 9 調査には下記の機関、個人の協力を得た。

石川県土木部道路整備課、石川県県央土木総合事務所(旧金沢土木事務所)、金沢市教育委員会

- 10 調査に関する記録と出土品は石川県埋蔵文化財センターで保管している。

- 11 本編についての凡例は下記のとおりである。

- (1) 方位は磁北である。
- (2) 水平基準は海拔高であり、T.P.（東京湾平均海拔高）による。
- (3) 遺物実測図の縮尺は1／3を基本とした。
- (4) 遺物番号は挿図と写真で対応する。

目 次

第1章 位置と環境	1
1. 地理的環境	
2. 歴史的環境	
第2章 調査の概要	6
1. 既往の調査	
2. 調査に至る経緯	
3. 調査経過	
4. 調査の概要	
第3章 遺構と遺物	9
第4章 まとめ	12

挿図目次

第1図 金石本町遺跡の位置	1	第4図 遺構配置図（1/200）	9
第2図 周辺の遺跡（1/25,000）	2	第5図 出土遺物実測図（1/3）	10
第3図 金石本町遺跡第4次調査位置図（1/2,000）	8		

表目次

第1表 周辺の遺跡地名表	3
--------------------	---

図版目次

図版1 調査前の状況、南西端の状況、南西端の状況	
図版2 完掘状況（南から）、完掘状況（北から）、北東端の検出状況	
図版3 中央部の検出状況、中央部の検出状況、南西端の検出状況	
図版4 出土遺物	

第1章 位置と環境

1. 地理的環境

金石本町遺跡は石川県金沢市の北西平野部、金石本町・金石東地区に所在する弥生時代後期・古墳時代前葉と奈良・平安時代を盛期とする複合遺跡で、北側で弥生時代が、南側では古代が主体的な分布状況で把握されている。

石川県は日本列島のほぼ中央に位置し、日本海に突出する能登半島とその基部に相当する白山連峰(標高2,702m)に特徴付けられる。北東方向に傾いて、南北に狭長な県域は、南北長約99km、東西幅約100kmを測るもの、富山県と日本海に挟まれた口能登地帯では幅わずかに約8kmにすぎないという地勢が特色である。また、加賀地域の海岸砂丘地形とは一変して岩礁からなる海岸が展開する能登半島は、能登島を浮かべる七尾湾を抱える事から、海岸線の延長が600kmを超えるという複雑な地形も特色として挙げられる。口能登地帯では宝達山(標高637m)が最も高く、奥能登地帯では宝立山・鉢伏山(469m・544m)と比較的低い山で、標高約2~300mの低丘陵が波打つように連なる地形を形成する。奥能登地帯の平地は丘陵の間を小河川が開削した複雑・狭小な谷平地に限られ、河口付近の沖積地とそれにつながる海が奥能登の歴史と文化を規定する大きな要素と見られる。

加賀は岐阜県と福井県との境界に立つ白山を頂点として三角形を呈する地形の中には、北方向に富山県・岐阜県との境となる白山連峰の大門山(1,571m)、医王山などが聳え立ち、砺波丘陵を越えて口能登の宝達山へと連なる。南側は福井県との境となる加越山系が東西方向に延びている。これらの山系から流れ出る中小河川は、おおむね日本海をめざして東から西に流れ、海岸線は日本海の荒波にもまれた砂によって日本有数の海岸砂丘を発達させる。砂丘の背後に低湿地帯と潟が連なり、北には河北潟、南には今江潟、木場潟、柴山潟の加賀三湖が作られる。北加賀には県下最長の河川である手取川(全長77km)が作り上げた扇徳約15kmの手取扇状地が広がり、県下有数の沃野をなす。

金沢市は石川県の南側に位置する城下町で、東の富山県小矢部市、南砺市との境界には、白山山系とその延長である砺波丘陵が連なり、山地が市域の半ばを占める。西部は手取扇状地の扇端部と沖積平野が広がり、北側は河北郡津幡町、内灘町が河北潟を頂点とする形で接し、南側は地形的には大きな変化を持たずに石川郡野々市町、白山市と境界をなし、山地では白山市河内、吉野に接し、市域全体としては東・南側が高く北西方向に低くなる地形である。市域を流れる河川は、県境の白山山系の稜線を分水嶺として南東から北西に走り、河北潟にそぞぐ浅野川・金腐川・森下川は北部を貯流し、潟の放水路である大野川となって日本海に至る。南部は安原川・十人川・伏見川などが沖積平野を潤して日本海に注ぐ。

金沢市は市街地を並行して流れる犀川と浅野川に挟まれた丘陵の小立野台の西端に位置する金沢城を中心として形成され、犀川を越えた南の寺町台と北の卯辰山の間に、城下町の面影を曲りくねった狭い路地と武家屋敷の土塀の連なり、細



第1図 金石本町遺跡の位置



金沢港

金石港

堺区海浜公園



第2図 周辺の遺跡 (1/25,000)

(国土地理院発行の2万5千分の1地形図(金石)を使用)

第1表 周辺の遺跡地名表

番号	遺跡番号	遺跡名	所在地	種別	時代	出土品
1	1282	戸水C遺跡	金沢市戸水町・御供田町	集落跡	縄文～中世	繩文土器・弥生土器・須恵器・土師器
2	1281	無量寺金沢港遺跡	金沢市無量寺	散布地	縄文～古墳	繩文土器・弥生土器・土師器
3	1277	金石北遺跡	金沢市金石北	散布地	不詳	土師器
4	1280	無量寺遺跡	金沢市無量寺	散布地	古墳・中世	土師器・石臼・越前焼・漆器椀
5	1279	無量寺B遺跡	金沢市無量寺	集落跡	古墳	銅鏡・双頭龍文鏡
6	1278	柱遺跡	金沢市桂町	散布地	弥生・古墳・中世	青磁・砥石・珠洲焼・土師器
7	1276	戸水オモテ遺跡	金沢市戸水町	散布地	奈良・平安	土師器・須恵器
8	1275	戸水D遺跡	金沢市戸水町	散布地	奈良・平安	
9	1266	麻田・無量寺遺跡	金沢市麻田・無量寺町	集落跡	弥生・奈良・平安	石獣・弥生土器・須恵器
10	1267	戸田ナベタ遺跡	金沢市麻田	集落跡	奈良・平安	扇形・土師器・須恵器
11	1265	麻田C遺跡	金沢市麻田	散布地	弥生・平安	石獣・扇平片刃石斧・弥生土器
12	1263	麻田B遺跡	金沢市麻田	散布地	弥生・平安	石獣・弥生土器・土師器
13	1264	麻田御台場遺跡	金沢市麻田	御台場	江戸	
14	1261	麻田遺跡	金沢市麻田	集落跡	縄文後期～平安	石獣・円石・繩文土器・土師器
15	1262	麻田大川遺跡	金沢市麻田	散布地	奈良・室町	下駄・中世陶器・須恵器
16	1260	麻田・寺中遺跡	金沢市麻田西・寺中町	散布地	古墳～中世	土師器・須恵器
17	1259	寺中B遺跡	金沢市寺中町	集落跡	縄文後期～平安	打製石斧・石獣・弥生土器
18	1258	寺中遺跡	金沢市寺中町	散布地	弥生中期・後期	石獣・砥石・勾玉・管玉未製品
19	1256	金石本町遺跡	金沢市金石本町	集落跡	弥生・平安	墨香土器・須恵器・土師器
20	1257	寺中御台場遺跡	金沢市寺中町	御台場	江戸	
21	1255	普正寺高島遺跡	金沢市普正寺町	集落跡	古墳後期・中世～近世	鉄鍬・漆器・土製支脚・須恵器
22	1254	普正寺遺跡	金沢市普正寺町	墓地	縄文・室町	普清焼・五輪塔・越前焼・珠洲焼
23	1253	普正寺星野丘遺跡	金沢市普正寺町	散布地	縄文・奈良・平安	石斧・石劍・須恵器
24	1274	戸水B遺跡	金沢市戸水町	散布地	弥生・平安	砥石・化米土・土師器・須恵器
25	1272	藤江C遺跡	金沢市藤江	集落跡	弥生・中世	土師器・須恵器・木器
26	1273	藤江C古墳群	金沢市藤江	古墳	古墳	土師器
27	1271	松村寺の前遺跡	金沢市松村	墳墓	室町	五輪塔
28	1269	松村西の城遺跡	金沢市松村	散布地	古墳・平安	土師器・須恵器
29	1270	松村平田遺跡	金沢市松村	散布地	弥生中期	弥生土器・石斧・石獣
30	1268	觀音堂遺跡	金沢市觀音堂町	散布地	不詳	
31	1097	松村B遺跡	金沢市松村	散布地	縄文・弥生・江戸	繩文土器・石斧・石獣・弥生土器
32	1096	松村A遺跡	金沢市松村	散布地	縄文・古墳・中世	繩文土器・打製石斧・磨製石斧・桃種子
33	1094	佐吉森遺跡	金沢市佐吉森町	集落跡	弥生・平安～近世	弥生土器・土師器・須恵器
34	1038	専光寺海岸遺跡	金沢市専光寺町	散布地	奈良・平安	土師器
35	1102	藤江B遺跡	金沢市藤江	集落跡	弥生～平安	打製石斧・弥生土器・木器・須恵器
36	1101	藤江A遺跡	金沢市藤江	集落跡	奈良・平安	須恵器・土師器
37	1100	出雲いきさまだ遺跡	金沢市出雲町	散布地	平安	須恵器
38	1098	松村高見遺跡	金沢市松村	散布地	弥生・中・後期	石斧・管玉・同未製品・弥生土器
39	1099	板田・示野中遺跡	金沢市板田町・示野中町	集落跡	弥生・平安	弥生土器・土師器・玉類
40	1082	高島遺跡	金沢市高島	集落跡	弥生・古墳	管玉・鍛製工具・弥生土器
41	1084	古カクルビ遺跡	金沢市古カクルビ	集落跡	弥生・平安	銅鏡・石製轆轤車・土師器・須恵器
42	1083	古府B遺跡	金沢市古府	散布地	不詳	
43	1088	北塙遺跡	金沢市北塙町	集落跡	縄文・弥生・平安	繩文土器・弥生土器・須恵器
44	1087	北塙古墳群	金沢市北塙町	古墳	古墳	須恵器
45	1085	おまる塚古墳	金沢市北塙町	古墳	古墳	円墳
46	1086	宇佐神社古墳	金沢市宇佐町	古墳	古墳	前方後円墳か
47	1090	御船前遺跡	金沢市寺光寺町	散布地	不詳	
48	1089	稚日野遺跡	金沢市稚日野町	散布地	縄文・古墳	打製石斧・須恵器・勾玉
49	1091	吉専光寺妙跡遺跡	金沢市吉専光寺町	寺院跡	室町	土師質土器・陶磁器・土鍋
50	1093	専光寺染色团地遺跡	金沢市専光寺町	散布地	古墳	土師器
51	1092	専光寺養魚場遺跡	金沢市専光寺町	散布地	古墳～平安	土師器
52	1045	南塙遺跡	金沢市南塙町	散布地	縄文・古墳	繩文土器・土師器
53	1046	ひわ塚古墳	金沢市南塙町	古墳	古墳	管玉・勾玉・金具
54	1044	上安原緑地遺跡	金沢市上安原町	散布地	弥生・古墳	弥生土器・土師器
55	1047	上安原遺跡	金沢市上安原町	散布地	古墳～平安	土師器・須恵器
56	1043	緑道公園遺跡	金沢市上安原町	散布地	古墳・平安	土師器・須恵器
57	1042	緑道地下水処理場遺跡	金沢市上安原町	散布地	弥生・室町	石獣・磨製石斧・五輪塔・灯明置
58	1040	安原工業団地B遺跡	金沢市下安原町	散布地	弥生・平安	弥生土器・土師器
59	1041	安原工業団地A遺跡	金沢市福井町・打木町	集落跡	弥生・平安	弥生土器・土師器・須恵器

かく配置された用水路などで窺うことができる。

本遺跡は金石往還の終点近くに立地している。金石往還は藩政期から市場街として栄えていた武藏ヶ辻を起点とし、金石港(宮腰湊)までの直線道路である。本遺跡は犀川に合流する木曳川の河岸段丘上を占地しているもので、遺構検出面での標高は約1.5mであった。犀川の流路は上流域で河岸段丘を形成して流れ、市街地では近世以降の河川改修により直線的に変更されているようだが、下流域では洪水ごとに流路が移動し蛇行した痕跡が推測できる。本遺跡は犀川右岸の氾濫原を望む位置にある段丘上に立地している。段丘裾部に水上運送に利用された木曳川が西に流れ、犀川に合流する。

2. 歴史的環境

遺跡周辺は市内においても遺跡の集中する地域で、近年の発掘調査成果から縄文時代後・晩期から中世にかけての各時代の遺跡が間断なく形成され続けてきた考古学的成果が明らかとなってきた。金沢市郊外は昭和40年代の高度成長期を迎えるまでは、一面の水田地帯が広がる牧歌的景観のなかにあったが、北陸高速自動車道の建設を契機として金沢バイパス建設、金沢港建設などの大型事業が次々と進められ、併せて都市計画道路建設、区画整理、学校整備などが実施され、新たな遺跡の発見が相次ぐ状況が常態化していた。

縄文時代の遺跡は市街地を流れる浅野川、犀川の上・中流域の河岸段丘に立地する遺跡に止まらず、手取扇状地と複合する下流域の沖積平野でも次々に遺跡の発見・発掘が報じられている。北陸地域編年の標準遺跡が市街地に数多く知られているのは、地域研究者の弛まぬ現地踏査の賜物である。丘陵内には早期の天池遺跡、前期の中戸遺跡、中期の笠舞遺跡などが挙げられる。沖積平野部では中期の北塙遺跡、後・晩期の中屋遺跡・新保本町チカモリ遺跡などが古くから知られ、多くが土器編年の標識遺跡となった。開発行為に係る調査から中屋サワ遺跡・藤江C遺跡などが知られ、後晩期での平野部への進出が顕著である。

弥生時代での周辺地形は犀川が形成した自然堤防とその背後の低地帯が広がる地勢で、水田耕作によく適した地域として開発が進捗したと想定され、遺跡数の増加で示されている。前期から中期にかけては、遠賀川系土器を出土した戸水C遺跡が嘴矢で、柴山出村式が出土した二ツ屋町遺跡や冬季には日本海の波濤によって遺物包含層が洗われる下安原海岸遺跡、土坑墓群を検出した寺中遺跡などが知られている。下安原海岸遺跡の立地は特徴的で、現況の砂丘下に埋もれた古砂丘の海側に遺跡が形成されている。弥生時代の基盤層はシルト層であるが、その下に堆積する粗砂層とともに弥生時代以前での堆積と見られ、かつて採集された縄文前期土器片の層位に当たるとも推測されている。内灘砂丘ではかって多くの遺物の表探が知られ、新砂丘下で見られるクロガケとの関係が推測してきた。かほく市白尾クロガケ遺跡の調査から、古墳時代後期以降の生活面のあった事が明らかにされたが、縄文・弥生時代での在り方は捉えられていないのが現状である。砂丘地形であるから複雑で短期的な地勢変化が想定され、時代ごとに黒色土の形成を位置付けることは困難と考えられ、クロガケと遺跡の所在は個々の地点での確認が必要とみられる。

弥生中期後半から遺跡数の増加が認められ、後期末葉段階には爆発的とも言える状況で集落が増大し、古墳時代前期段階では一転して激減する様相を示す。畿内第Ⅲ様式期に併行する土器は、本遺跡の東方約0.7kmの畠田遺跡や同方約3.5kmの西念・南新保遺跡などで出土しているが、居住痕跡などの検出は今後の課題である。中期末葉の標識遺跡でもある戸水B遺跡(戸水式)は、本遺跡の東方約2kmの標高約2.5mに立地している。昭和50年に行われた第1次調査で凹線文系土器がまとまる形で出土し、比較的の短期間での消長が推測できる集落と捉えられた。その後の道路建設・区画整理事業などで周溝

を伴う建物跡や土坑・溝等が検出されているが、それぞれが小規模な調査である事から遺跡構造を把握するのには資料不足の状態で、短期間での遺跡廃絶は後続する後期段階では見られない在り方であり注目しなければならない。

後期での遺跡は枚挙の暇がないほどに増大し、数多くの発掘事例が挙げられる。東方に隣接する寺中B遺跡では平地式建物・掘立柱建物や溝などが確認され、東方約0.7kmの畠田遺跡では掘立柱建物・井戸・溝などが検出され良好な土器資料の他に、鎌・鍔・エブリ・弓・弧文板などの多量の木製品やト骨が出土している。また、東北方約3kmに位置する近岡ナカシマ遺跡では掘立柱建物・方形周溝墓・壠・土坑などが検出され、鍬をはじめとする木製品多数の出土がある。後期の中核的集落は、本遺跡から東方約4kmに立地する南新保遺跡群(西念・南新保遺跡、南新保三枚田遺跡、南新保D遺跡)が想定され、大規模な溝や保存状態良好な木製品が大量に出土している。

古墳時代初めの遺跡としては、東方に隣接する畠田・寺中遺跡が挙げられる。古府クルビ式期の方形周溝墓5基・土坑墓14基余りが検出され、周辺に集落域が所在している事が想定されている。また、北東約3kmの戸水C遺跡は古代を盛期とする大遺跡であるが、墳丘を削平され周溝のみとなった前方後方墳3基を含む30基近い方墳を主体とする古墳群が検出され、東方約3kmに位置する藤江C遺跡の平成2年度からの調査でも方墳・前方後方墳が知られている。近年の面的調査からでも北塙古墳群、野々市町御経塚古墳群などの発見と調査が相次ぎ、近世以降の開田によって削平された古墳群が沖積地で数多く展開していた事が発掘により確認され、今後も増加していく事が予測できる。しかし、前期以降の遺跡数は絶対的には減少し、本遺跡から東方約6kmに位置する田中遺跡・沖町遺跡などで集中状況を見るが、本遺跡近辺では散発的である。また、須恵器が登場する5世紀後半が把握できるまでの調査成果には恵まれず、遺跡立地や自然環境の激変などが想定されているが、鉄器の普及に伴う形での低湿地帯から灌漑が行いやすい地域への移転も背景の一つではないかと推定されている。

古代の遺跡は本遺跡をはじめとして、弥生後期に劣らない量の調査例が報告されている。本遺跡の南東約2.5kmの藤江B遺跡では、4間×6間で両庇付きの掘立柱建物跡が検出され、「石田庄」「石田」などの墨書き土器が出土している。さらに、藤江C遺跡では7棟以上の掘立柱建物跡が確認され、桜田・示野中遺跡で「石田」と書かれた墨書き土器の検出から文献資料では確認できない莊園の存在が明らかにされたとも評価されている。また、戸水C遺跡は平安時代前葉を盛期とする大遺跡で、縁釉陶器・灰釉陶器・獸脚付円面鏡・漆紙文書などの特殊遺物や墨書き土器多数が出土している。墨書には「津」と書かれたものがあり、大型掘立柱建物跡の他に多数の掘立柱建物跡や大型井戸跡などの検出から、郡津あるいは国津級の湊に関連する官衙的遺跡との想定が提起されている。さらに、本遺跡についても第5～7次調査を担当した金沢市教育委員会の小西昌志により、大野川に依存する戸水C遺跡・戸水大西遺跡の集団とは区別される犀川流域に拠る官衙級の地域集団が関わる流通基地との性格付けが提起されている。慎重な取り組みが必要と思われる。区画整理および海側幹線建設による畠田・寺中遺跡群の発掘調査では、広大な分布範囲に古代を中心とする遺構が展開しているのが確認されている。金沢北西部が県下でも最も考古学的成果が蓄積されている地域であり、通史的に平野部の開発が記述される地域として注目されている。

中世では、本遺跡の西方約1kmの犀川河口に近い砂丘地内に立地する普正寺遺跡が古くに調査され著名である。1965(昭和40)年に石川考古学研究会によって調査が実施され、旧位置を保っていた五輪塔・宝塔群が検出された。1970年に発刊された報告書では出土遺物の検討報告だけでなく、石造美術や文献史料からの検討が加えられ、学際的研究の成果が示されたと評価されている。遺跡は犀川沿いに約400m、幅約100m程度の広がりを持ち、輸入陶磁器を始めとする多種多様な遺物の出土から、北

加賀における中核的港湾集落に位置付けられている。本遺跡でも少量の中世の陶器・五輪塔などが出土しているものの、遺跡の性格を問うまでには至らない。

第2章 調査の概要

1. 既往の調査

金石東遺跡は金石東地内に所在する弥生時代後期から古墳時代前期を盛期とする遺跡と認識されていた。隣接する金石本町遺跡は金石本町地内に立地する古代を中心とする遺跡であり、二つの遺跡は時期差のある別遺跡と認識されていたが、両遺跡での調査の進展から弥生土器・須恵器の出土が双方で確認され複合した立地状況が推測されて、金石本町遺跡とされた。

第1次調査は1979(昭和54)年に金沢市教育委員会が、金石往還に面した金石東1丁目地内の住宅建設に先立って実施している。調査面積は約50m²と限定されたもので、湧水が激しい事から遺構は土層断面での柱穴に止まる。遺物は弥生土器・須恵器・珠洲焼などで、弥生土器と珠洲焼は磨耗した小片で二次的な流入とされる。須恵器は金沢市の山の手、浅川1号窯跡出土品に類似するとされる。須恵器の中には、墨書き土器1点がある。

第2次調査は臨港線に係るもので、1980(昭和55)年に県立埋蔵文化財センターによって実施されている。調査面積は約1,500m²で、弥生から古墳時代にかけての溝状遺構・土坑・井戸跡・杭列などが検出され、平安時代に属する溝状遺構・柱穴が発見された。出土遺物は弥生土器・土師器・須恵器があり、打製石斧・石鎌・砥石・環状石斧・管玉・削抜式井戸・堅杵などと多様である。

第3次調査は1986(昭和61)年に、臨港線に関わる調査として県立埋蔵文化財センターによって行われた。調査地点は金石往還から南に位置し、木曳川と市道に挟まれた約2,000m²である。地形は旧犀川の小分流と想定される蛇行したクリーク数条と、それらに挟まれている島状平坦地で形成され、平坦地部分に掘立柱建物跡3棟と畑地耕作を想定できる畠状遺構・小溝などが検出された。遺物の多くはクリーク内の覆土からの出土で、奈良時代前半から平安時代前葉までの遺物で占められている。紡錘車・曲物製の小桶・簞串・馬形・火鑄臼・四ツ手網部材・織機の一部・獸骨下顎部・須恵質土錐・縄などが見られ、全体的に祭祀的色彩の濃厚な遺物群で、金石本町遺跡の側面が現われている。

第4次調査は本報告書で記述するもので、1988(昭和63)年の秋に県立埋蔵文化財センターが実施した。

第5次調査は1993(平成5)年に、木曳川改修事業として約1,000m²を金沢市教育委員会が調査を実施している。古墳時代の溝と土坑・古代の掘立柱建物や廐棄土坑や井戸等が検出され、中世の五輪塔や陶器なども出土した。第6次調査は1994(平成6)年に、前年度調査区に隣接する位置で、店舗・駐車場などの建設に先立って約1,100m²の範囲で調査が行われた。古代の掘立柱建物11棟、約100点の墨書き土器が検出された。建物の半分は9世紀前半代の倉庫群とされている。同年に実施された第7次調査は臨港線及び木曳川に面する店舗建設に先立って行われた調査で、第3次調査区に隣接している。発掘調査面積は約2,000m²で、弥生時代の平地式建物や土坑・古代の大型掘立柱建物・横板蒸籠組井戸などが検出された。

第8次調査は1995(平成7)年に、銭五記念館の建設に係る約1,300m²を石川県立埋蔵文化財センターによって発掘が実施されている。遺跡の最も南東に位置している調査区で、古代の河道跡や掘立柱建物跡・土坑などが検出され、木簡や人形、墨書き土器の出土が見られ、本遺跡は時期差を含んで広い範

間に類似する遺構群が展開している様相が明らかとなった。

第9次調査は1996(平成8)年に、住宅建設に伴う約100mの範囲で、金沢市教育委員会によって行われている。遺物を含んだ大溝跡が検出され、先の調査で発見された多数の掘立柱建物群の展開を限る可能性が考えられ、出土した木簡から荷物の搬出入が行われたとの可能性を指摘している。

本遺跡での直近の調査は1996年であるが、1999(平成11)年から2003年まで、本遺跡の東方約500mに展開する畠田・寺中遺跡群では大規模な発掘が本センターによって行われている。また、大徳川改修工事などに係る調査も行われ、特に古代における遺跡の性格付けが地域史を書き換えるまでの展開で提示され、本遺跡の位置付けも深く関わるものと捉えられているようだ。

2. 調査に至る経緯

本調査は金石本町遺跡において第4次調査に相当するもので、昭和63年(1988)、県土幹線軸道路整備および緊急地方道路整備工事に先立ち、二地点の630m²、130m²の範囲で、石川県立埋蔵文化財センターが緊急発掘調査を実施した。

昭和53年(1978)10月、県金沢土木事務所から県教育委員会文化財保護課に、都市計画道路臨港線に関係する埋蔵文化財の分布調査が依頼された。同年11月、金沢市金石東1丁目から無量寺町地内までの約1.3kmの分布調査が実施され、古墳時代から中世までの遺跡が確認され、事業実施前の発掘調査が必要である旨の回答が出された。

翌54年(1979)には、金石往還と交差する北側の金石東遺跡1,500m²の範囲で発掘依頼があり、石川県立埋蔵文化財センターが調査を実施した。当該遺跡に限らず周辺地域では常態である湧水に難渋する調査となつたが、弥生中期～古墳前期の土坑、溝、井戸などと共に多量の遺物が発見された。なお、金石往還から北側地区は金石東遺跡で、その南側は金石本町遺跡として捉えられてきたが、南側地区での調査が進展していくなかで、前者は金石本町遺跡に取り込まれる形で認識されるようになった。盛期は弥生末期と古代と異なる事や空白城が見られる事から別遺跡とも取れ、金石東遺跡は東方に隣接する弥生時代の寺中遺跡との関連が濃厚と推測できる。

昭和56年(1981)には、臨港線の調査の中では最も東に位置する桂遺跡での調査が、1,200m²の範囲で実施された。調査実施地点は低湿地帯の軟弱地盤であり、湧水が激しい事が予測できた事から、安全を確保するため調査区に矢板工事を実施しての調査となつた。調査では弥生時代から中世にかけての遺物が出土したが、遺物で量的に多いのは中世で、遺構の検出で明確なのは木製の壇であった。

昭和61年(1986)、金石往還の南側、木曳川に臨む臨港線道路用地約2,000m²の調査が、県立埋蔵文化財センターによって実施された。古代に所産した掘立柱建物跡、畠状遺構、河道跡などが検出された。河道跡からは舟車・馬形といった祭祀関係の木製品が見られ、本遺跡の性格を考える上で重要な手掛かりが得られた。

昭和63年(1988)に行った臨港線に係る発掘調査は、桂遺跡を含めて第4次調査に当たり、昭和30年(1955)頃に木曳川改修工事によって初めて注意され、昭和54年(1979)に金沢市教育委員会が実施した民間住宅建設に係る調査を金石本町遺跡の第1次調査とするなら、今回の調査は、第4次調査に相当する事となる。

3. 調査経過

昭和63年9月27日付で、金沢土木事務所長から県立埋蔵文化財センター所長宛に、発掘調査依頼が提出され、10月17日から12月5日までの期間、現地調査を実施した(本報告分は11月25日～12月5日)。

依頼箇所は二箇所で、金石往還の北側を金石東遺跡(本報告分)130m²、南地区は金石本町遺跡として届出を行った。調査対象面積は併せて約760m²である。

調査は南側の金石本町遺跡から着手した。調査時期が長雨から時雨にかかる季節であり、表土除去の段階から湧水と軟弱地盤、そして降雨に悩まされる状況であった。金石本町遺跡での作業に目途がついた段階で、金石東遺跡の調査を開始した。調査区周辺での工事は、中央分離帯及び歩道部分の工事も終了しており、調査区は限られた範囲の実施である。調査区は遺跡の北端に相当することから、遺構密度、遺物包含も比較的希薄な状況であった。

遺物整理作業は、現地調査を終えて5年が経過した平成5年2月(1993)に、石川県埋蔵文化財保存協会へ委託して実施した。整理に関わったのは、辻森由美子、黒田和子、戸調かがり、馬場正子で、金石本町遺跡の柱根等の実測トレースは、林茂久、小村祐子、戌亥久美子の協力があった。

報告書の作成は、平成5年度に調査員であった岡本恭一が、金石本町遺跡の本文・挿図・写真図版まで作成していたのであるが、中戸町への埋蔵文化財センターへの移転後に挿図図版などを紛失した。その後、本遺跡を含めて金石本町遺跡の遺構・遺物トレース等を新たに行い、原稿執筆・挿図などを作成した。原稿・図版を作成されていた岡本恭一氏にあらためて不注意をお詫びしたい。

4. 調査の概要

北地点は臨港線の片側車線部での調査となり、幅約6m、長さ約28mの範囲である。盛土層が厚いことから法面に傾斜を付けたために遺構検出の範囲は狭くなっている。幅約5m、長さ約28m、面積は約130m²である。

層序は単純な水平堆積である。表土は約120cmの砂を主体とする盛土層で、その下に青灰色シルト層が約15cmの厚さで見られ、旧の水田耕作土と想定される。若干の遺物が包含されていた。その下に遺物包含層である黒褐色シルト質土層が約15cmの厚さで堆積している。地山としたのは灰褐色砂質土であり、遺構の検出作業及び掘り下げは容易であった。また、水捌けも良好であった。

遺構の配置は疎らで、弥生時代後期の遺物を包含した溝跡が調査区の北東端されたのが明確なもので、他のピット群の性格は不明であり、旧の金石東遺跡での北縁部に相当するものと推定される。



第3図 金石本町遺跡第4次調査位置図(1/2,000)

第3章 遺構と遺物

1. 遺構（第4図、図版1～3）

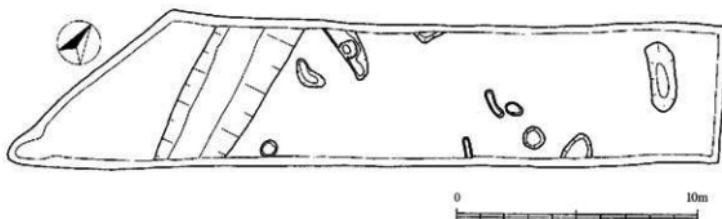
本遺跡で遺構検出面としたのは、灰褐色砂質土層である。重機による上層部の掘削後に調査区壁際に排水用の溝を巡らすことにより水の影響が抑えられ、遺構の検出は容易となった。検出した遺構は溝と土坑などで、性格を明瞭に認識できる遺構は得られなかった。西端部には南北方向に走る溝が見られる。幅260～320cm、深さ30～50cmである。

東端には北西方向に長軸を置く平面長楕円形の土坑が検出された。長さ285cm、幅103cm、深さ約40cmを測る。長軸の北西側は傾斜がやや緩く、底面全体は南東端に寄るような形態となる。調査区西端の溝と土坑との間には、柱穴と想定されるピットなどもあるが、明確な遺構の展開を推測できるものは得られなかった。

各ピット覆土には小片となった弥生土器部品が少量含まれていた。その中から幾つかを図示することができた。包含層においては、越前焼や焼瓦片などと同様に須恵器の出土は僅かに1片だけで、大部分は弥生土器であった。本調査区は弥生時代を中心とする時代と想定できるもので、本遺跡の第2次調査区の時代性格を反映しているものと捉えられる。

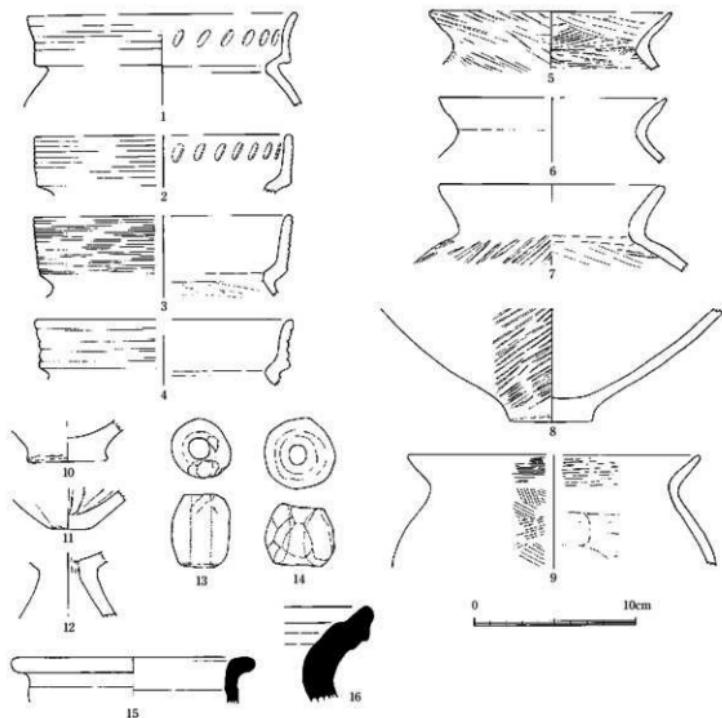
2. 遺物（第5図、図版4）

出土した遺物は整理箱に収納して1箱の半分程度であろうか。大半が包含層から得られた弥生土器で、越前焼などの中世の遺物が少量含まれる。1・3はピット3から出土した壺の口縁である。1は口径約16cmに圓上復元できるもので、口縁端部が外反する成形がなされ、内面に指頭圧痕が斜め方向に規則的に配置されている。頭部以下は削り調整と見られるが、風化の為に判然とはしない。器表の一部に煤の付着が見られ、全体に淡橙色を呈し、焼成は良い。2は内面の指頭圧痕が深い形で遺存し、口縁部が直立する成形となる。外周の凹線は間隔が揃っているもので、浅めのものである。淡黄褐色を呈し、胎土に微砂粒、焼土粒が微量混和される。3は口径を推測できない小片で、直立する口縁に擬凹線が明瞭に遺存している。上半部では擬凹線が重複していることから引き直したものと推測され、工具幅が口縁高さよりも狭いものと推定される。頭部以下の内面にヘラ削り調整の痕跡が明瞭な状態で遺存している。淡橙色を呈し、胎土、焼成共に良好である。4もやはり口径を推定できない小片で、端部が僅かに外反傾向を示す。擬凹線は深くしっかりと巡らされている。明るい褐色を呈し、胎土に定量の微砂粒が混和されている。5～9はくの字状に外傾する口縁を持つもので、5は口径



第4図 遺構配置図 (1/200)

15cmに図上復元できた。口唇端が極めて薄くなる成形が施されるのが特徴的である。内外周共に斜め方向の調整痕が認められる。淡茶褐色を呈し、胎土に多量の微砂粒の混和が見られる。6は小片で、口径は不明である。口唇が尖り、端部で強く外反する成形がなされる。淡灰褐色を呈し、胎土に多量の微砂粒が混和される。7は口径14cmに図上復元できるもので、厚手に成形された口縁部は強く外反して立ち上がる。口縁部は横ナデによって整えられ、頸部以下は敲き痕が明瞭に残る。内面では幅の狭い工具によるナデ調整が施される。明褐色を呈し、胎土に砂粒の混和が多い。8の底部片は色調が暗灰褐色を呈している事から7と同一個体とするには違和感が残るもの、胎土、内外面調整の工具痕などは類似している。器表面の大部分は焼成時の黒紋で覆われていて、一部に煤の付着が認められる。内面は凹凸の目立つ成形で、刷毛ナデによる調整となる。径5cmの底部の面は平滑となっている。9は口縁端部が突線状に外反するような成形がなされるもので、頸部以下には横、斜め方向の刷毛ナデが、内面にはやや弱い削り調整が施されている。器表に煤の付着がある。色調は明茶褐色をなし、胎土に微砂粒の混和が多い。10は8に類似する成形の底部で、径5cmを測る。黒紋が残り、一部は二



第5図 出土遺物実測図 (1/3)

次の火熱による変色も認められる。底面は滑らかな遺存となるのは、8と同様である。11は擬凹線口縁の甕に付く底部と想定されるもので、底径2.5cmを測り、内外面ともに面のある工具による調整痕が明確に遺存している。淡灰褐色を呈し、微砂粒の混和が多い。12は小型の器台で、器表に磨き調整の痕跡が認められる。明灰褐色を呈し、胎土は精良である。甕と器台を図示したにとどまるが、小片となる高坏が認められた。

13・14は完形に近い土鍤である。前者は高さ4.5cm、径3.8cm、穴の径1.3cm、重さ45gを測る。明茶褐色を呈し、胎土、焼成は良好である。体部の一部を欠損している。14は平面形が下膨れ状となるもので、長さ3.8cm、幅4.3cm、貫通する穴は中央が細くなる成形の径0.8cm、重さ42gを測る。色調は茶褐色を呈し、一部に黒紋が見られ、焼成堅緻で遺存状態が極めて良好な完好品である。先の13とは違和感があり、時期差も推測される土鍤である。

15・16は中世以降の陶器である。15は近世に所産した小型甕かと想定される。16は14～15世紀に属する越前焼の甕口縁である。口縁と口頸部に凹線が入る。口縁端は角張った成形がなされ、その下位に幅の狭い凹線が巡る。内外周共に降灰がかかり、胎土は灰色を呈する。図示できない小片で、15世紀代の中国製青磁碗、越前焼の小型甕の体部、いぶし瓦の平瓦が見られる。他には、敲き石が包含層から出土しているが、半欠品である。

第4章 まとめ

本報告の発掘調査地点は、1980(昭和55)年に実施された調査区(第3章報告分)の北側に隣接する地区に相当する。層序は水平堆積の単純なもので、河川などによる擾乱の侵入は認められなかった。遺構の検出面は砂質土で比較的安定した状態にあった。とするのは、同時期に調査を行った金石往還との交差点南側調査区においては、遺構検出面がシルト質土壤であって多量に水分を含んでおり、降雨や湧水などで現場保持が困難な状況となる遺構検出面での違いが大きかったからである。包含層を覆う堆積土の状態に大きな差異が見られないのに、出土遺物に木製品が見かけないことにも表れている。遺跡の立地が、どのような条件から選択されているかを見ていく上で、時代ごとの在り方を注意する必要がある。

検出した遺構はきわめて限定されたものであった。土坑とピット及び溝跡である。溝跡の性格について、遺物による手掛けりは得られなかった。あるいは、第2次調査区につながる可能性も考えられる。また、流路主軸が南北方向となるところから、古代に下る可能性もあるだろう。調査区内北東端で検出した土坑についても、その性格は不明とせざるを得ない。その他の小ピット群においては、覆土に弥生土器の小片が含まれていた事や掘り方の形状から該期の柱穴などの可能性が高いものと推測される。

遺構の性格の推定は難しいが、昭和55年度調査区の発掘成果を考えあわせれば、中心城ではないにしろ縁辺であるとも決めがたい在りようではと思われる。第2次調査区で遺物を多量に含んでいた落ち込みが東西方向で見られるところからは北側に位置するものであり、若干の微高地でもあるところから遺構の展開も予想できると考えられ、調査成果において本調査区が遺跡の縁辺とは断定はでき難いと思われる。

写 真 図 版



調査前の状況



南西端の状況



南西端の状況



完掘状況（南から）



完掘状況（北から）



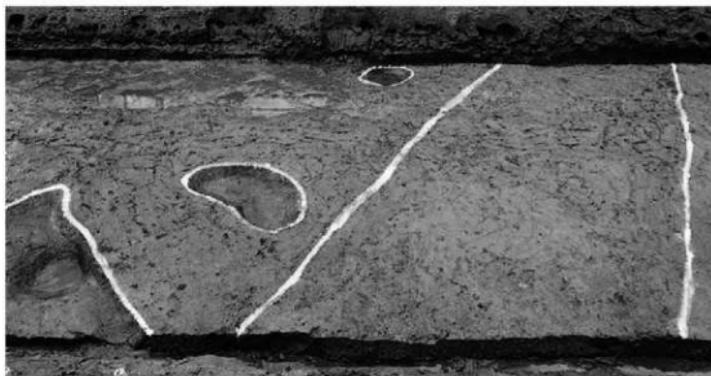
北東端の検出状況



中央部の検出状況



中央部の検出状況



南西端の検出状況



出土遗物

報告書抄録

ふりがな 書名	かなざわし かないわほんまちいせき 金沢市 金石本町遺跡							
副書名	県土幹線軸道路整備工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 緊急地方道路整備工事（3. 3. 2 臨港線）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書							
編著者名	安 英樹 大西 順 西野秀和							
編集機関	財団法人石川県埋蔵文化財センター							
所在地	〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1 TEL (076) 229-4477							
発行機関	石川県教育委員会・財団法人石川県埋蔵文化財センター							
発行年月日	2009年3月31日							
所 収 遺 跡	所在地		コード	北緯(新)	東経(新)	調査期間	調査面積	調査原因
金石本町遺跡	石川県金沢市 金石東 地内、 金石本町地内		市町村 17201	番号 1256	36度35分 55秒	136度35分 ~1112	1,500 m ²	道路建設 (県土幹線) (軸道路整備)
				36度35分 51秒	136度35分 48秒	19860901 ~1223	2,000 m ²	
				36度35分 52秒	136度35分 50秒	19881020 ~1122	630 m ²	
				36度35分 58秒	136度35分 57秒	19881125 ~1205	130 m ²	道路建設 (緊急地方) (道路整備)
所 収 遺 跡 名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	調査原因		
金石本町遺跡	集落	弥生時代中期	建物外周溝、溝、土坑	土器、石製品	遺跡北東部に分布	道路建設 (県土幹線) (軸道路整備)		
	集落	弥生時代後期 ～古墳時代前期	掘立柱建物、建物外周溝、井戸、溝、土坑、流路	土器、土製品、木製品、石製品	遺跡北東部に分布			
	集落	奈良・平安時代	掘立柱建物、櫛列、井戸、溝、土坑、流路	土師器、須恵器、土製品、木製品、石製品	遺跡南西部に分布			
		弥生時代	溝、土坑	土器、土製品		道路建設 (緊急地方) (道路整備)		
要約	遺跡を北東-南西方向に貫くように発掘調査を実施し、北東部と南西部では遺跡の時代や性格が異なることを確認した。北東部は弥生・古墳時代の集落であり、南西部は奈良・平安時代の集落である。PDFあり。							

金沢市 金石本町遺跡
発行日 平成21（2009）年3月31日
発行者 石川県教育委員会
〒920-8575 石川県金沢市輪月1丁目1番地 電話 076-225-1842 (文化財課)
財団法人石川県埋蔵文化財センター
〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1 電話 076-229-4477 E-mail address mail@ishikawa-maibun.or.jp
印刷 ハヤシ印刷紙工株式会社